

沖縄県立博物館紀要

第 23 号

BULLETIN OF

THE OKINAWA PREFECTURAL

MUSEUM

No. 23

1997

目 次

當眞嗣一：いわゆる「土より成るグスク」について —沖縄本島北部のグスクを中心にして—	1
神谷厚昭：沖縄県南風原町黄金森の乱堆積層の化石群集	19
嵩原建二・渡久地政武：沖縄島南部の市街地で繁殖する鳥類	33
前田真之：発見に向かわせる学習活動—博物館資料からの展開—	55
當眞嗣一：具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について	97
萩尾俊章・多良間利絵子：沖縄県立博物館草創期に関するノート	111
佐々木利和・萩尾俊章・與那嶺一子：農商務省より 獨逸宛の沖縄関係物品目録について（下）	178 (22)
當間一郎：舞踊「聟取敵打」について	198 (1)

沖縄県立博物館紀要

第 23 号

沖 縄 県 立 博 物 館

目 次

C O N T E N T S

當眞嗣一：いわゆる「土より成るグスク」について —沖縄本島北部のグスクを中心に—	1
Shiichi TOMA:On Gusuku(Castle),enlarged by cutting a mountain - Especially Gusuku located in northern part of Okinawa main Island -	
神谷厚昭：沖縄県南風原町黄金森の乱堆積層の化石群集	19
Koshio KAMIYA:Fossils from the slumping bed in Kuganimui,Haebaru Town, Okinawa Prefecture.	
嵩原建二・渡久地政武：沖縄島南部の市街地で繁殖する鳥類について	33
Kenji TAKEHARA and Masatake TOGUCHI:Breeding birds on Town area in southern part of Okinawa Island, the Ryukyu Archipelago	
前田真之：発見に向かわせる学習活動－博物館資料からの展開－	55
Masayuki MAEDA:Learning Activity Rediscovering Museum Objects:Development from Museum Objects	
當眞嗣一：具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀錢について	97
Shiichi TOMA:On Chinese old coin, so called Meitosen, excavated from the cave near by Gusichan Gusuku	
萩尾俊章・多良間利絵子：沖縄県立博物館草創期に関するノート	111
Toshiaki HAGIO and Rieko TARAMA:Research Notes on the Beginning of Okinawa Prefectural Museum	
佐々木利和・萩尾俊章・與那嶺一子：農商務省より 独逸宛の沖縄関係物品目録について（下）	178 (22)
Toshikazu SASAKI,Toshiaki HAGIO and Ichiko YONAMINE>List of Materials belonging to Okinawa Prefecture,sent to Germany by the Agriculture Affairs Bureau of Japanese Government	
當間一郎：組踊「賛取敵打」について	198 (1)
Ichiro TOMA:Introduction to Historical Material Concerning the Kumiodori (Okinawan traditional Dance -Drama) of the Mukotori Tekiuchi	

いわゆる「土より成るグスク」について —沖縄本島北部のグスクを中心に—

當眞嗣一
(沖縄県立博物館)

On Gusuku(Castle),enlarged by cutting a mountain

- Especially Gusuku located in northern part of Okinawa main Island -

Shiichi TOMA

(Okinawa prefectural Museum)

1、はじめに

沖縄のグスクの多くは石垣を多用して築城されている。しかし、グスクを実際に踏み歩き、土地に刻まれたその証拠を見て、それを縄張りという観点で押さえるといったいわゆる縄張り調査が進展していくことに伴い、石垣を全く使用しないグスク、あるいは、石垣・土塁・切岸を巧みに併用しながら築造されたグスクなど、多様なグスクの存在が明らかになってきた⁽¹⁾。石垣のないグスクでは、山の傾斜面や頂上部を削平して平場を確保し、山の斜面などを削り出して切岸をつくることで城壁とする。さらに、城外と地続きの地形では堀を掘って独立性を保つことで防御性を高めている⁽²⁾。

これまでグスクを認識する方法として、石垣や考古学上の遺物の有無などを中心に判断することが多かった。しかし、石垣のないグスクや遺物が発見されないグスクも存在することから、今後は、ブッシュをかきわけてグスクの中に入り、土地に刻まれた証拠の中からグスクかどうかを判断することがもとめられている⁽³⁾。

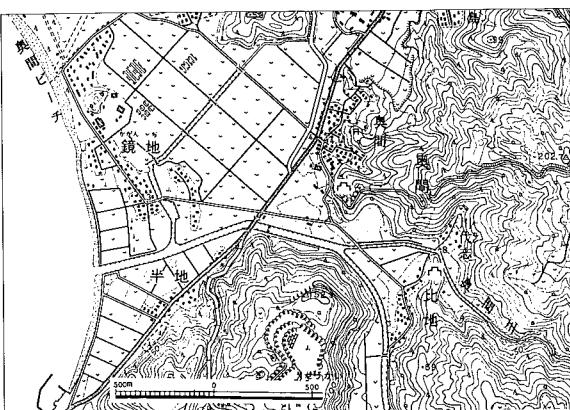
城という字は、その字が示すとおり、土と成の二字からできている。もともと日本では、溝（堀）を掘り、その掘りあげた土を盛って土塁をつくることで防御施設とした。日本全国に3~4万も存在するといわれる中世城館の場合がそれである。私たちは、城というとすぐ天守閣が聳える豪壮華麗な城をイメージしがちであるが、この種の城が出現するのは、中世末から近世初期にかけてであり、それ以前の城はすべて土の城であった。したがって、この沖縄にも土のグスクがあつて当然であり、これまで、土のグスクがよく知られてなかつたのは、石積みグスクが発達していたために、土のグスクについてあまり気が付かなかつただけである。

南西諸島における土のグスクの分布は、奄美大島や沖縄北部、非石灰岩地域で多く見られる。本稿では、とくに沖縄本島北部に見られるいくつかの土のグスクにスポットをあて⁽⁴⁾、その構造がどうなっているかについて考えてみることにする。

2、アマグスク

このゲスクは国頭村字奥間にある。奥間の集落は、国頭村役場のある辺土名から約2km程南にあるが、昔は間切の中心地であり由緒ある古い村里であった。沖縄本島を南北に貫通する国道58号線を境にして東側には集落が展開し、西側には奥間田ーブクと呼ばれる農耕地（最近まで北部屈指の水田地帯であったが現在ではキビ畑に変わっている）

第1図アマグスクとパンギナグスク



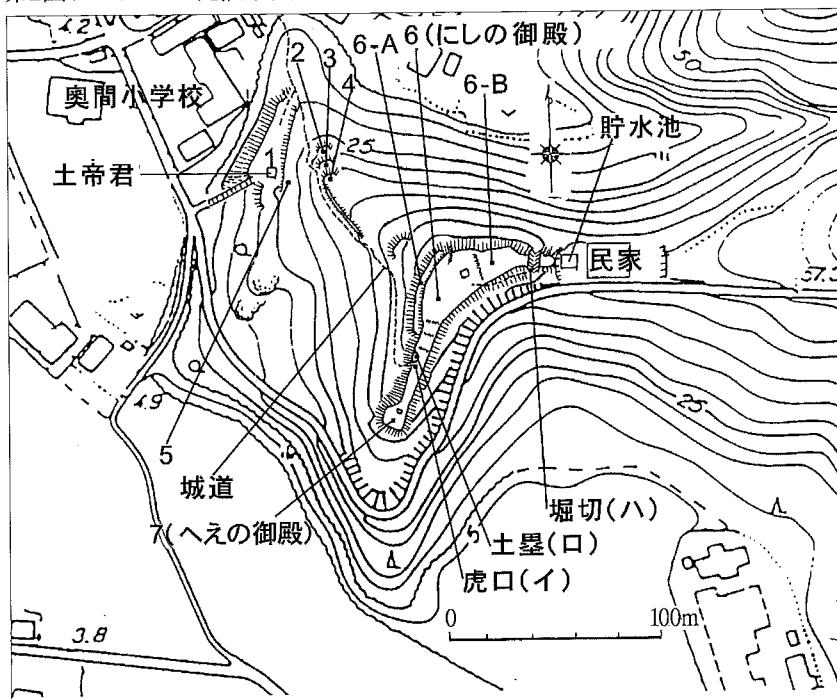
アマグスク（上）パンギナグスクと小玉森（下）

が広がっている。

アマグスクは、奥間集落の南端、小高い丘の上に立地している。ゲスクのピーク部に立つと、北から西にかけて奥間の集落、南側には、比地川と奥間川流域に広がる低地帯（過去水田地帯だったのが、今ではキビ畑に変わっている）を眼下のうちにとらえることができる。比地川は、与那覇岳に源を発し、比地集落の下流で奥間川と合流してやがて東シナ海に注いでいる。

ゲスクと呼ばれる小高い丘は、別名

第2図アマグスク縄張り図



アマンチヂとも称されており、部落発祥の山として住民の信仰の場所になっている。アマンチヂの西寄りには土帝君（方音トーチーク）を祀る宮があり、この宮の北西方向集落内に、琉球王朝第二尚氏の祖尚円王を庇護したというアガリカンジャー（屋号）の住居跡や、アガリカンジャーゆかりの鍛冶道具を祀った拝所等がある。

グスクには、奥間小学校の南に隣接する土帝君の広場を左側に廻り込みながら尾根沿いを登って行く。土帝君の祀られている広場1は、山の斜面を削平してつくられていて、約100m²の広さを有している。この平場は、現在は土帝君を祀るエリアとして活用されているが、土帝君がここに安置されたのは近世以後のことであり⁽⁵⁾、それ以前、つまりグスクが機能していた時代には、この土帝君の広場も曲輪のひとつだった可能性もある。したがって、グスクの城域としては、この土帝君エリアあたりまでを含むと考えたい。

さて、土帝君を祀る広場の北隣にはグスクに通ずる小径が取りつけられ、グスクに通じる城道となる。この城道を山のピーク部に向かって進んで行くと、左手には三つの小さな削平段（2～4）が取りつけられていて城道に登ってくる者に対して横矢を効かす工夫がなされている。右手の方は、約1m程の落差があり、平坦に造成されているが、ブッシュに覆われ詳細は不明である（曲輪5）。この曲輪5の平坦地は、土帝君の直上に位置し、立地的に見ても曲輪だった可能性は高い。しかし、この一帯は後世の改変がかなり進んでおり、畑として造成された平坦地なのか、それとも、もともと曲輪だったものが後世畑として利用されたものなのか判然としない。

等高線に沿うように城道を登って行くと虎口（イ）となり、左に折れて登れば曲輪6、右に折れれば曲輪7となる。6と7の曲輪は、南北に距離をおいて立地し、北側を「にしの御殿」、南側を「へえの御殿」と呼び、二箇所とも住民の信仰の場となっている。

そのうち「にしの御殿」と呼ばれる曲輪6は、標高約50mを測り、約400m²の広さを有していて、西に腰曲輪6-Aが隣接する。曲輪6のやや北寄りにはコンクリート造りの祠が建立されているが、すぐその後方には、約50cmほどの比高差をもって基壇風に造成されたピーク部（6-B）がある。この曲輪6-Bの削平地には主殿があった可能性もある。このピーク部の東側後方に堀切（ハ）が認められる。堀切は、幅約4m、現状の高さ約2mのものである。この堀切は、東に続く尾根からの侵入を防ぐ意図のもとに造られたものであるが、一本の堀切では不完全であり、まだ数本の堀切がこの尾根づたいに存在していた可能性は高い。しかし、現状は、貯水池や民家が建設されたために地形が改変され、確かめ得ないのが残念である。

曲輪6の西側には、約2m幅の細長い腰曲輪6-Aがめぐり、この腰曲輪は虎口（イ）付近で終わっている。主郭部に相当する6、6-A、6-Bの周辺はいずれも切岸になっていて

鋭い斜面を形成している。とくに東側の与那覇岳登山道路に面している部分については急峻さが目立つ。

さて、主郭部への虎口であるが、「にしの御殿」と「はえの御殿」の接続部、瘦せ尾根がさらに細くなる所に開いている。虎口は坂虎口となり、この虎口のすぐ北側には土壘（口）があるため虎口の押さえとして機能する。虎口と主郭部との比高差は約2～3m程あるが、そこに、二段の削平段が置かれているため虎口から侵入してくる敵兵に対して押さえが効くような工夫がなされている。また、これらの削平段や6-Aの腰曲線からは、城道を登って来る敵兵に対して横矢を掛けることもできる。

「はえの御殿」は、約4×6m程の平場になっているが、現在、そこにもコンクリート造の祠が建立されている。周辺は切岸になっていて、外からの侵入を防ぐことができる。この曲輪に望楼を置けば、南に展開する比地の集落や農耕地を眼下に見下ろすことができるため、その方面的動向を捉えるには絶好の場所となる。そのことから考えると、「はえの御殿」は見張のための曲輪だった可能性は高い。



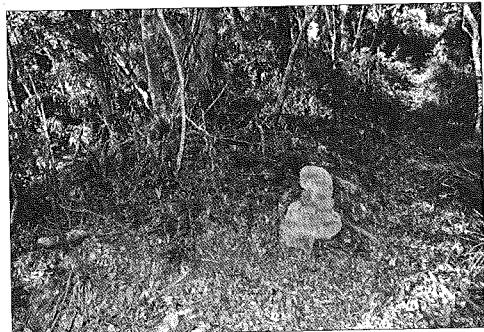
図版1 アマグスク（南より）、手前の川は奥間川



図版2 アマグスクの堀切



図版3 アマグスク虎口



図版4 アマグスク虎口の前にある土壘

以上、述べてきたように、アマグスクはまったく石垣を用いないグスクであり、いわゆる土より成るグスクである。石垣こそないが、堀切・切岸・土壘を巧み使いながら軍事的な防御機能もつ城として普請されていることは、これまで見てきた縄張り構造からも理解されよう。やはり、アマグスクは、地元住民からもグスクと呼ばれているように城として認識できるグスクである。

なお、このグスクからは考古学上の遺物がまだ発見されてないので、年代観については不明である。部落住民の間では、奥間集落はもと「にしの御殿」「はえの御殿」一帯にあったということになっていて、部落の発祥地との関係で伝承されている⁽⁶⁾。軍事的機能を有するグスクが部落の発祥と結びついているところは、他の地域にも見られるところ⁽⁷⁾であり何らかの意味があったのであろう。あるいは、グスクが「村の城」だったということを示唆しているのかも知れないし⁽⁸⁾、その意味について改めて考えてみる必要があるようと思われる。

3、パンギナグスクと小玉森について

パンギナグスクと小玉森は、国頭村字比地の聖なる森として住民の信仰の場所となっている。比地の集落は、沖縄本島の最も高い与那霸岳の西に発する比地川流域に展開する国頭村でも比較的古い集落の一つである。集落は与那霸岳の陵線に連なる丘陵の裾野にへばりつくように立地し、集落の後方、すなわち東の方向に小玉森、北東にパンギナグスクがある。前述したアマグスクとパンギナグスクおよび小玉森との距離は、比地川の流域に広がる沖積平野を挟んでわずか600 mほどである。この間には奥間川が流れている。

さて、小玉森について『沖縄の古代マキヨの研究』を著した稻村賢敷氏は、次の理由により古代部落マキヨの遺跡だと考えている⁽⁹⁾。その理由というのは、小玉森の名称である「コダマ」の「マ」は由来記編者の挿入によるものだから、「小玉森」というのはもともと古代部落名コダ森の名称であろう」ということである⁽¹⁰⁾。

では、具体的に小玉森の縄張り図を見ることにしよう。

小玉森と称される丘には現公民館の前の小径を登って行くが、小径は斜面を切り開いて造られており、幅約1mほどの急勾配の坂道となっている。小径の左側の雑段状になった平坦地には古い屋敷跡が数箇所残っている。これらの屋敷跡をよく見ると、屋敷囲いの石垣や建物の施設などが荒廃したまま部分的に残っており、比較的新しい時代に空屋敷になったことをしめしている。中には今でも屋号を残している屋敷跡がある。

曲がりくねった旧勾配の城道を登って行くと、やがて小玉森の虎口に達する。西面す

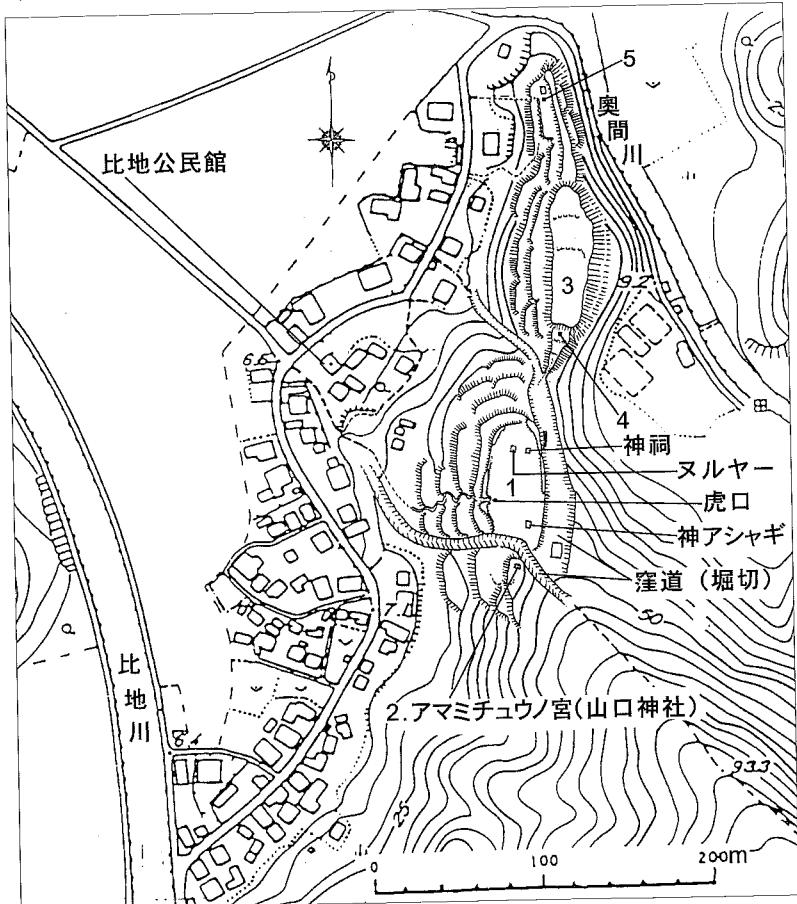
る虎口の両脇にはしっかりした土塁が認められる。虎口の構造は、坂虎口となり、わずかに屈曲し、そのうえ幅も狭まっていてなかなかガードの固い作りになっている。また、虎口を中心とする城壁ラインが矩形にとられ横矢を効かす工夫もされている。

さて、虎口を抜けると主郭にあたる曲輪1に達する。ここは小玉森の中心部にあたり、標高約43mを測る。この曲輪1の面積は、約2300m²程で、その中に神アシャギ、ヌルヤー、神祠などの三つの祭祀場があり、これらの祭祀場を中心に概ね三つの区域に別けられる。南側には神アシャギ、北側にヌルヤーの小祠が建ち、ヌルヤーの東側に神祠がある。神アシャギとヌルヤーの間の中央広場は遊び庭と呼ばれ、その広場を囲んで三つの祠がそれぞれ区域ごとに建立されている。神アシャギは、八本柱の壁のないセメント瓦葺の建物であるが、戦前は木造茅葺の建物だったようである。ヌルヤーと神祠はコンクリート造りの粗末な建物であり戦後になって改築されたものであろう。遊び庭の東側を中心に曲輪の縁辺部には幹廻り数mもある赤木の老木があり、老木の下には石の香炉が

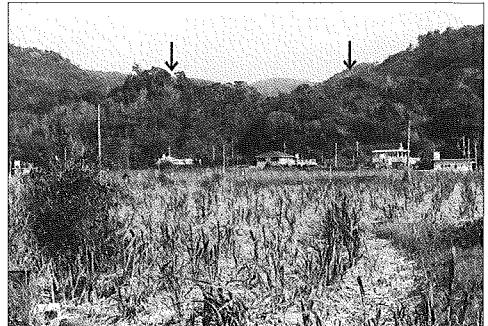
置かれている。稻村氏の調査によると、これらの石の香炉は、集落内各氏族の拝所になっているとのことである。その他に、拝所としては、神アシャギの南に窟道とよばれる空堀を挟んでアマミチュウノ宮(山口神社ともいう)と称されるお宮がある。

ところで、この小玉森を俯瞰して見ると、幅約5m、深さ約3mの窟道と称される空堀によって3つのグループに区画され、そして、堀底

第3図 パンギナグスクと小玉森の縄張図



を通路として3つのグループが連結する構造を取っていることが看取される。空堀の北側は神アシャギ・ヌルヤー・神祠のあるグループAであり、南側はアマミチユウノ宮を中心として、その下に小曲輪群を付属させているグループBである。さらに、グループAの北にはパンギナグスクと称されるグループCがある。



図版5 パンギナグスク 小玉森

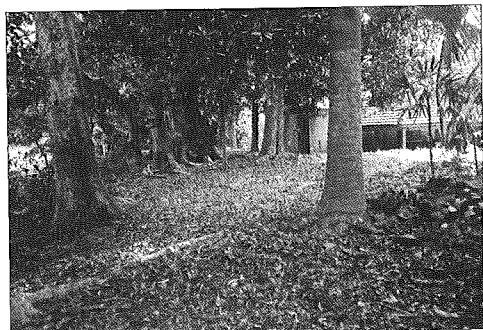
グループAについては、前述したとおり曲

輪1を主郭とするグループである。考古学的な発掘調査が実施されたわけではないが、曲輪1の東縁部に土器や輸入陶磁器、貝殻などを包含する黒色土層の厚い層が認められ、文化層があることがわかる。図版-7に示したのが、この断面から採集した遺物である。これらの遺物包含層の形成などからみて、この曲輪1には明らかに人間が住んだ痕跡を認めることができる。周辺部に土塁を廻し、その下に腰曲輪となる削平段を幾重にも付属せしることによって、外からの侵入者を防ぐことができる。主郭の規模、防御上の機能等から考えると、3つのグループのうちでは、最も中心をなすグループであろう。いま、3つのグループの関係についてみると、グループAをとりまくように南側にグループB、北側にグループCがつくられていて、その先後関係は、グループBとグループCの成立に先立ってグループAが成立していたことが理解されよう。

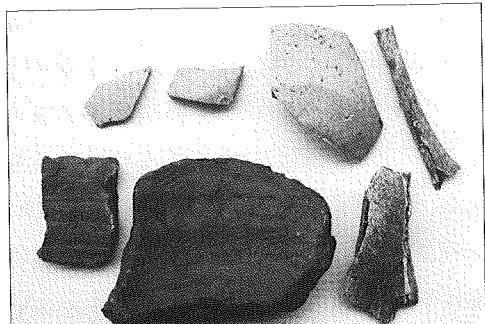
次にグループBとグループCの空間構成について見ることよししよう。

グループBは、アマミチユウノ宮（山口神社）のある曲輪2を中心とする窪道（空堀）の南側にあたる曲輪群である。北は空堀によってグループAと区切られ、南側は約3～4mの比高差をもつ断崖となっているために完全に独立した形をとる。このグループが特徴的なのは、いずれの曲輪も小さく、これら的小規模曲輪群が下の方から雛段状に数段連なっているということである。曲輪から曲輪への通路は特別につくられているわけではなく、下の曲輪を跨いで上の曲輪に登といった構造である。いずれの曲輪にも土塁は認められないが、切岸は高く約3m前後はあると思われる。アマミチユウノ宮の曲輪2は、グループBのなかで最も標高の高い位置に立地し、このグループのなかで最も防御機能の比重が高い曲輪だということがわかる。グループBからグループAに行くには、一旦空堀を出て、堀底を通らなければならぬ仕組みになっている。雛段状の数箇所の曲輪には祠が建立されており、住民の間から信仰されている。

グループCは、パンギナグスクと呼ばれている小高い丘に築かれた曲輪群である。こ



図版6 小玉森の主郭部



図版7 小玉森主郭部から採取された遺物

のグループは、グループAの北にあり、堀切状となった小さな谷間によってグループAとは遮断される。グループCの中心的存在の曲輪は曲輪3である。この曲輪は標高40mのピーク部を削平し、約1000m²程の面積を有する。曲輪の内部は約50cmの段差をもつ3つの削平段によって区分できる。その中でも最も規模の大きい平場には小祠が建立され住民から信仰されている。この曲輪3の南側に小曲輪4があり、曲輪3から出撃するには、この小曲輪4を経由し、そこから窪道の空堀底に進出するようになっている。パンギナグスクの主郭がこの曲輪3であることは、東側が断崖に面し、西側には数段の削平段が連なっていることからも読みとれる。

曲輪3の北側の台地続縁には、約1m程の落差をもって痩せ尾根が走り、その尾根の先端部に曲輪5がある。この曲輪5には石積み基壇が置かれ、その脇にコンクリート造りの祠が建立され信仰されている。この曲輪5は、丘陵部の先端部に立地していて、比地川から分岐する奥間川やその流域に展開する沖積平野を完全に俯瞰できる位置にある。曲輪5には物見櫓が置かれていた可能性は高い。

喜如嘉グスク

喜如嘉グスクは、大宜味村字喜如嘉にあり石垣のないグスクである。標高約95mの小山のピークに築かれていて、喜如嘉の集落からは仰ぎ見るような位置にある。大宜味村教育委員会が発行した遺跡分布調査報告書⁽¹¹⁾には、次のように記されている。

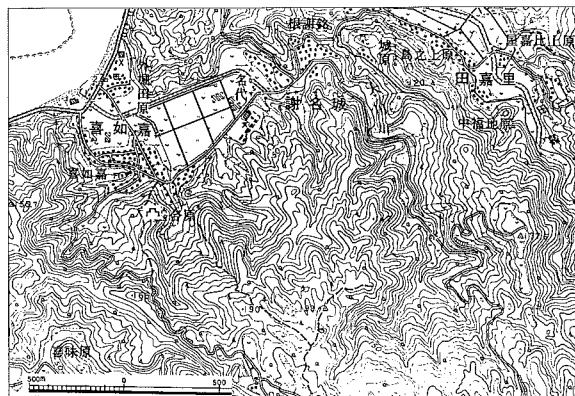
「グシクと呼ばれる一帯は赤土のマージ層で、石墨もなく遺物も全く見あたらない。喜如嘉グシクを語る文献もなく、何時から『グシク』と呼んでいたのか明らかでない。」
たしかに、喜如嘉グスクには、石垣などはまったく見あたらないし、遺物などの散布も確認できない。しかし、グスクと称する小山をよく観察すると、その頂上部は平坦に

削平され、尾根の流れに沿って南北に細長い平場になっていることに気付く。この平場はまさに人為的に削平されたものであり、その外縁部に小曲輪群、すなわち腰曲輪を付属させていることがよくわかる。また、南側の尾根続きを遮断して堀切も認めることができる。では、縄張り図を見ながら喜如嘉グスクの構造を見ていくことにしよう。

喜如嘉グスクの主郭部は曲輪1である。この曲輪は、山のピーク部を利用しており、平坦に造成されている。現在、ブッシュになっていて平坦面を詳細に観察することはできないが、南北を軸とする約2000m²の比較的広い曲輪である。この曲輪の東側は、急な傾斜面になって七滝から延びる幸地川に接している。また、西側は斜面が緩く、そこに腰曲輪が廻る。集落に続く北斜面には、削平段が幾重にも続き、山地特有の耕作地である段々畑と見誤るような状況である。これらの削平段には、実際、近代の耕作や植林にともなうものもあるが、主郭となるピーク部の曲輪との関係あるいは削平段の取りつき方など、諸遺構を総合して判断すると、やはり、その多くが防御された削平地ではないかと思われる。

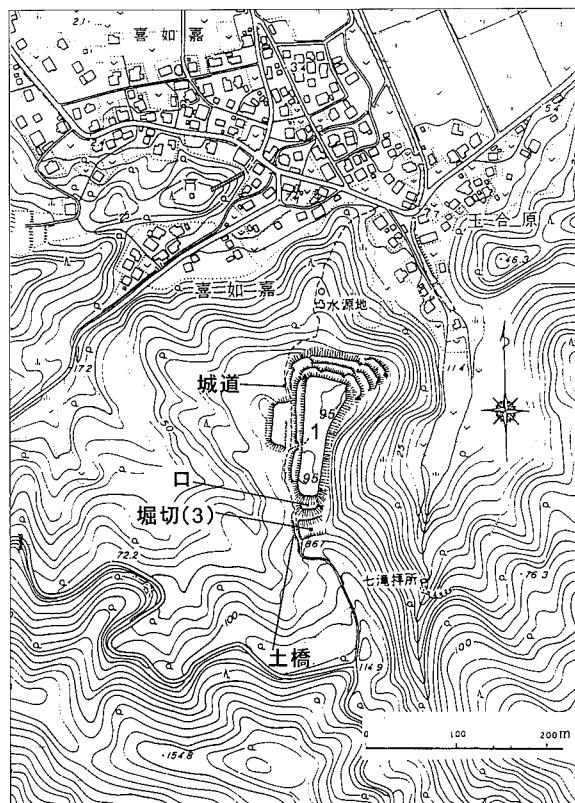
さて、このグスクで注目すべきは、南側の尾根続きを自然地形を利用した堀切状の遺構が見られることである。3がその遺構であるが、現状で見る限り、堀底は箱型となり、幅8m、堀底と曲輪1との高低差は約6～7mもある。堀底の西寄りに土橋が認められ

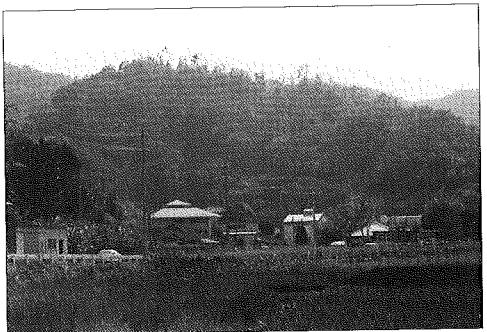
第4図 喜如嘉グスク位置図



喜如嘉グスク

第5図喜如嘉グスク縄張図





図版8 喜如嘉グスク（北から）

る。曲輪1の南側斜面、つまり、堀切から曲輪1に連なる傾斜面に腰曲輪口が取りついている。3の堀切から上がって来る敵兵を迎撃する目的であろう。

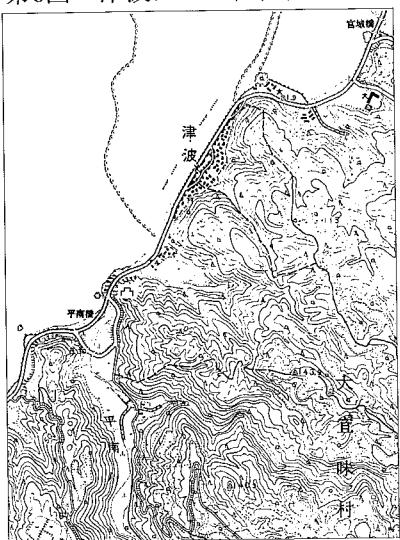
集落からグスクへ行くには、現在の喜如嘉集落のやや東寄りのところに取りついている小さな山道を登って行く。この山道は、グスクの頂上から下りてくる尾根を縦断するようにして進んで行くが、その途中に簡易水道の水源地があり、この水源地をさらに登っていくとやがてグスクに到着する。

グスクの道、つまり城道は、腰曲輪の真下を通る形で取りついているために腰曲輪からの側面観察が可能となり、グスクを目掛けて突進してくる敵に対して防御するのに好都合である。また、城道を登ってくる敵兵に対して横矢を掛けることもできる。さらに、曲輪1の虎口の左右には腰曲輪が置かれ、城内の侵入者に対して相横矢が効くよう工夫されている。

以上、見てきたように、「遺構が何もない」といわれていた喜如嘉グスクではあるが、実際、ブッシュをかきわけてグスクを踏み歩くことで、土地に刻まれた遺構群を読みとることができるのである。

津波グスク

第6図 津波グスク位置図



津波グスク

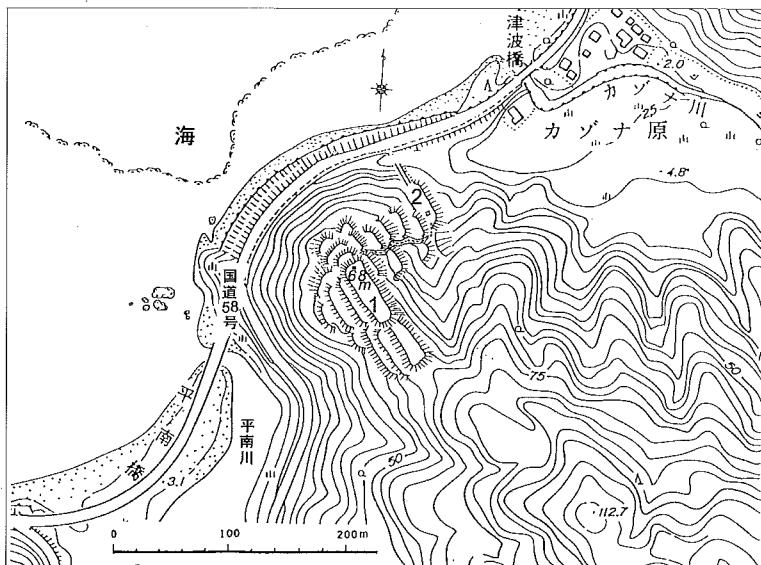
このグスクは、大宜味村字津波の南西を区切る丘陵の先端部、大宜味山塊の支尾根が海に突出するところの山頂部に占地されたものである。グスクの南西方向には平南川が流れ、北東には名前の由来となった津波の集落が立地する。

島袋源一郎が著した「国頭郡志」には、「津波村の始祖、板干瀬大主(イチャヒシフンシー)の居住したところであったと伝えられ、城跡は部落の氏神を祀った御嶽として、部落民が拝んでいるという」⁽¹²⁾と書かれている。

グスクの縄張りは、標高68mのピーカ部を削平して主郭を置き、その東と西に階段状に曲輪を配置する縄

張り構造である。主郭の曲輪1は、約60cm程の段差によって二つに区切られるが、明瞭な仕切りがあるわけではないので、一つの曲輪としてみなしていい。また、この曲輪の軸線は北西から南東を取り、丘陵の尾根に沿った形の略東西に細長い曲輪になっている。さて、この曲輪にも城壁

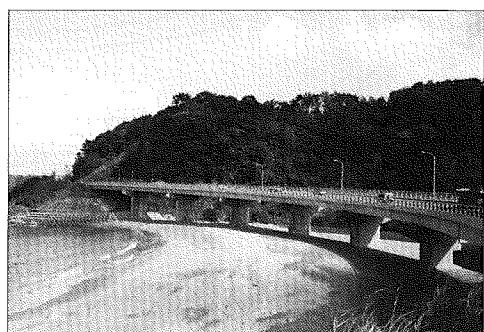
第7図 津波グスク縄張図



としての石垣は見られない。新城徳祐氏は「この城跡は、今では城跡らしい城壁の石垣は残っていないが、おそらくは城跡の下をめぐって造られた海岸の道路工事や護岸工事などのために、城壁の石垣が崩されて使用されたものであろう」と書いているが⁽¹³⁾、実際、どの曲輪を見ても石垣の抜き取り痕は確認されない。したがって、新城氏がいうように石垣がくずされたと見るのはどうかと思う。このグスクはもともと頂上部に築かれた単純な主郭を中心としてその周辺に階段状に曲輪を配置しただけのグスクだったものと思われる。

国道から10m程入ったところにグスクに登る小径が取りついている。この小径を約20m程行くと、幅3~4mの細長い平場となる。この平場には津波部落の漁民が豊漁と航海安全を祈願した祠が建立されており、(曲輪2)、拝所になっている。この拝所の左脇にグスクへの城道が取りついている。城道は、等高線に沿って丘の上に延びており、この城道を睨むように削平段が幾重にも築かれている。城道を登ってくるものに対しての厳重な警戒ぶりが窺える。

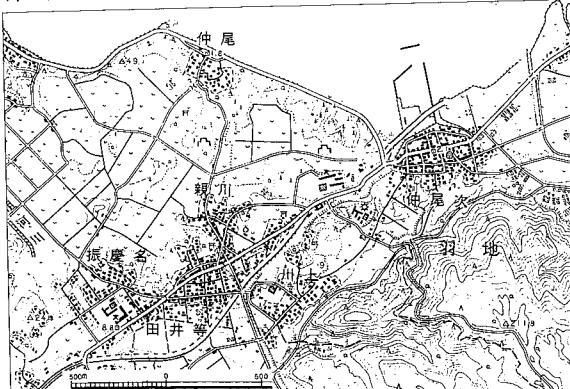
ところで、このグスクの機能についてであるが、北端に向かう旧道筋に立地していて、交通の要衝に築かれていることから考えると、やはり、道筋の押さえとしてのグスクだった



図版9 津波グスク（西から）

可能性は高い⁽¹⁴⁾。このことに関して新城氏は「板千瀬大主は、津波部落の前方にある海岸寄りの丘陵上に城をきずいて、根謝銘城の第一線として、ここに居城して堅く前線を守っていたのであるが、根謝銘城主の大宜味接司と共に、第一尚氏の三山統一後は野に下ったであろうと思われる。」と考察⁽¹⁵⁾している。

第8図 仲尾次上グスクの位置図

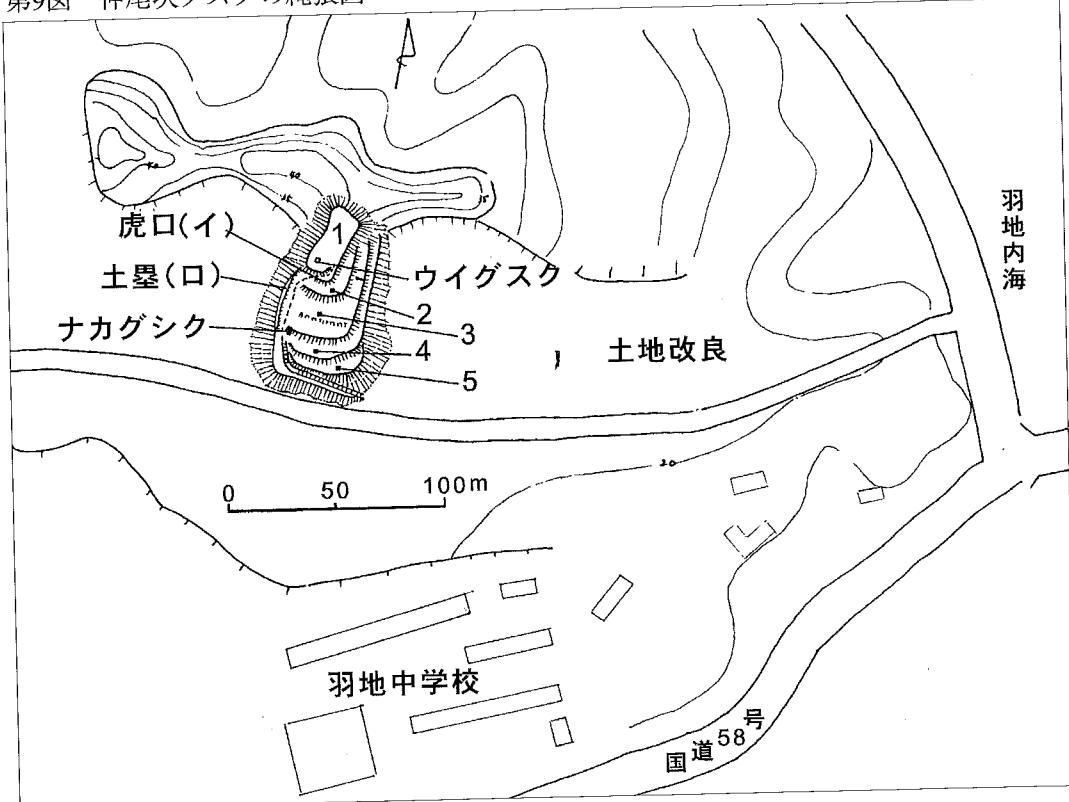


親川ゲスク（左） 仲尾次上ゲスク（右）

仲尾次上グスク

名護市字仲尾次の仲尾次原にあるグスクである。名護市立羽地中学校の北側背後的小高い丘を地元住民は上グシクと呼んでいるが、ここが仲尾次上グスクである。この一帯の旧地形は土地改良事業により大きく改変を受けている。今、新・旧の地図を参考にしつつ

第9図 仲尾次グスクの縄張図

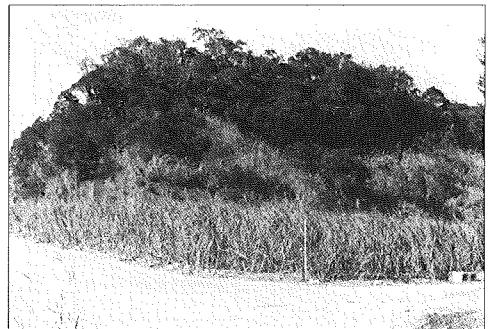


地形を比較すると、標高30mラインより上にあった丘は削られ、マタ⁽¹⁶⁾と呼ばれる小さな谷は埋められて農耕地に生まれ変わっていることがよくわかる。もちろん、仲尾次上グスクについても、標高30m等高線を境にしてそれより下位にあった支尾根や起伏については一様に平坦化されているといった状況である。したがって、グスクの縄張りも現状の地形によって把握する以外ない。そのことを前提に縄張り図を見ていただきたいと思う。

この仲尾次上グスクには、仲尾次の住民の間で古くから信仰されている2箇所の拝所と1箇所の拝泉がある。二箇所の拝所については、ウイグシク・ナカグシクなどと称されてグスクの曲輪内に残っている。拝泉については、曲輪4の西縁部にコンクリート製の円形井戸枠が標示されているのみで、実際に水があるわけではない。現状では、そこに井戸があったのか、あるいは標示だけであるのか判然としない。集落の古老が伝えるところによれば、仲尾次上グスクの方から現在の集落に移動してきたという伝承があり、古集落との関わりで捉えられるグスクである⁽¹⁷⁾。

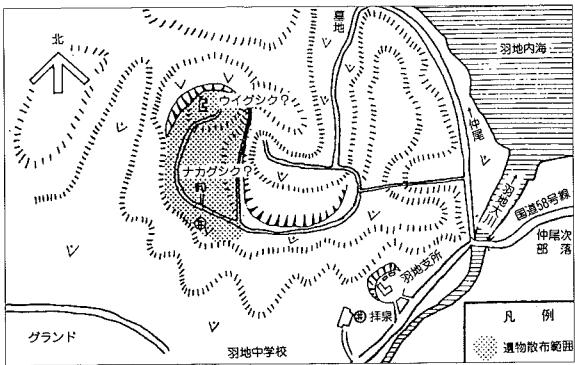
仲尾次上グスクの縄張りは、標高48mを測る丘のピーク部を中心にして、東側と南側に階段状の曲輪群を配置して築かれたもので、石墨を用いない土のグスクである。ピーク部の曲輪1が主郭である。ここからの眺望はよく、羽地内海や屋我地島などが展望でき、とくに、羽地内海に注ぐ羽地大川の河口部あたりから、旧勘定納港にかけての見通しがよく効く位置にある。曲輪の規模は7×20m程の広さで、現在、この曲輪の南西隅に石を組んだ小祠が安置されている。この祠を指標に村人たちはウイグスク（あるいはナカグシクという人もいて、曖昧さがある）と称している。もともとこの曲輪の名称として呼ばれていたのであろう。曲輪1の北は、約4mの断崖をなして落ち、その下にここから派生する支尾根が北にのびている。西側は、土地改良事業によって切り取られ、下の畑との比高差は10m以上もあり、人工的な急勾配の法面になっている。南側と東側は雛段状となって続いているが、そこに小曲輪群が形成されている。

主郭となる曲輪1の虎口は南東隅に開いており（イ）、坂虎口になっている。この虎口を出ると、曲輪2となる。主郭と曲輪2との比高差が約2m程もあるので、虎口をくぐって主郭部へ入ろうとする侵入者は、完全に上から押さえられる恰好となり、虎口の防御は固い。曲輪2の下には曲輪3があるが、この曲輪は東側を廻ったところで、約1



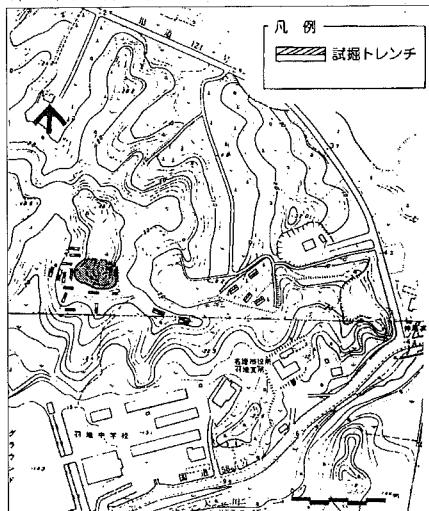
図版10 仲尾次上グスク（東から）

第10図 仲尾次上グスクの遺物散布範囲



『仲尾次上グスク遺跡』名護市教育委員会1988年3月より

第11図 仲尾次上グスクの試掘トレンチ



『仲尾次上グスク遺跡』
名護市教育委員会1988年3月より

m程高くなる。また、南側では、50～60cmの段差で低くなっている。この低くなった平場の北西隅に石を組んで造られた小祠が安置されているが、この祠を指標に地元の人はナカグスクと称しているようである（ウイグスクと言う人もあり、伝承が曖昧）。おそらく、この曲輪3のことをナカグシクといっていた可能性があり、50～60cmの段差のある平坦面にグスク建物があったことも考えられる。曲輪3の下に約1m程下がって曲輪4がある。ここは、標高約40mの等高線ラインで、この曲輪と主郭との比高差は約8mとなる。さらにその下に曲輪5の腰曲輪が廻っている。

曲輪1の西南西の切岸下方には、土壙口が丘の麓に向かって縦にのびている。土地改良事業によって西側の土壙側面が削られているため、全体的な形をつかむことはできないが、旧地形では、この土壙の西側に緩い傾斜面が続いていたためにそこを警戒して築かれた土壙の可能性がある。

さて、このグスクに入るには、現在では、曲輪5の下に取りつけてあるコンクリート造りの階段を登って行くようになっている。しかし、この階段は土地改良事業に伴って取りつけられたものでありもとの形ではない。以前はどのようにして城道が取りついていたのであろうか。地元の人たちに聞いて見ると、コンクリート造りにはなったが、道の取りつき方はほぼ以前のままだということであった。また、名護市教育委員会が行ったグスクの調査報告書にもほぼ今の形で道が主郭の方向に伸びていることがわかる。すると、城道の取りつき方については、侵入してくる敵兵に対して、グスクの曲輪群からたえず右脇腹が狙えるように工夫して置かれていることが看取される。おそらく、グスク内に入ってくる侵入者は、上有る曲輪5や曲輪4から頭上攻撃や側面攻撃にさらされたのであろう。これらの事実から見ても、高い石垣こそな

いが、土を削って曲輪や切岸を設けることで防御を固めており、軍事的な目的で築かれた遺構だということは明白である。

この仲尾次上グスクを含む一帯の土地については、県営仲尾地区土地改良事業地内にあるとの理由で、昭和60年から62年までの3年間にわたって遺跡範囲確認調査が実施されている。その結果について名護市教育委員会から調査報告書⁽¹⁸⁾として刊行されているので、その中から発掘成果について概観してみよう。

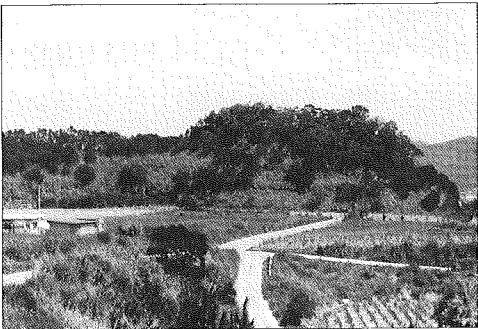
第10図は報告書の掲載された仲尾次上グスクの位置図である。縄張図がないために、曲輪の状況がはっきりしないのは残念であるが、アミのかかった部分が遺物散布範囲だと記されているので、考古学的な調査の結果からは、一応、現状の城域はすべて遺物散布地として見ることができる。発掘調査は、ウイグシク（曲輪1）とナカグシク（曲輪3）の西と南に続く曲輪群（報告書には段々畑としか記載されてなく、曲輪という認識をしていない）に2m幅のトレンチを設定して実施したことになっている（第11図）。発掘の結果、グスク土器、カムイ焼、日本製陶磁器、貿易陶磁器などが出土し、とくに中国産の陶磁器については、「13世紀後半～19世紀までのものが得られており、親川グスクとほぼ同時期の遺跡と捉えられる」と報告されている。なお、貿易陶磁器の分類表については報告書から転載しておく（第1表）。親川グスクは、この仲尾次上グスク

第1表 仲尾次上グスク出土の
貿易陶磁分類表

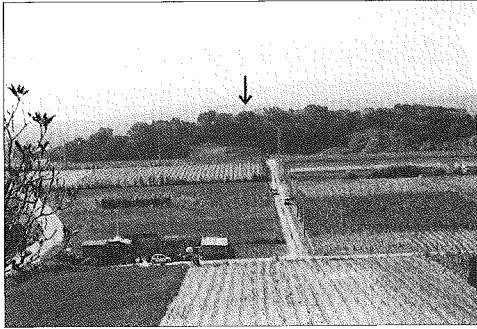
	器種	年代	備考
①	中 国	13C～14C中葉	鶴蓮弁文
②	〃	14C末～15C中葉	口縁部端反り
③	〃	〃	〃
④	〃	14C末～15C	外面ヘラ描文（口縁部の雷文帯か）
⑤	〃	15C後半～16C前半	外面線描刻先蓮弁文
⑥	〃	〃	〃
⑦	〃	〃	〃
⑧	〃	15C後半～16C	〃
⑨	中 国	15C後半～16C	外面線描刻先蓮弁文
⑩ クロム青磁	瀬戸・美濃系	明治以降	
⑪	中 国	15C～16C前半	内面ヘラ描文
⑫ 青磁皿か	〃	〃	稜花形、内面ヘラ描文
⑬	〃	15C末～16C	口縁部端反り
⑭ 小杯	中 国	16Cか	見込蛇ノ目釉ハギ

島袋善弘他「仲尾次上グスク遺跡」『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書』
沖縄県名護市教育委員会 1988年3月より

の西約500 mの至近距離に立地し、この一帯の集落をおさえる拠点的な城として認識できるグスク跡である。その縄張り構造は、一本の大堀切と主郭およびそれに付属する腰曲輪群を有する比較的規模の大きい、いわゆる土のグスクである⁽¹⁹⁾。この親川グスクの周辺には、規模の小さなグスクが南側約600 mの至近距離にデーグスク、仲尾次上グスクが東に、南東側1300mの距離に親グスクの分布が見られる⁽²⁰⁾。おそらく、これらの小規模グスク群は親川グスクを中心としてセットとして存在していた可能性は高い。



図版11 仲尾次上グスク（南から）



図版12 仲尾次上グスクから親川グスクを望む



図版13 仲尾次上グスクの虎口



図版14 仲尾次上グスク主郭にある祠（ウイグスクと呼ばれている）

おわりに

沖縄本島北部には、いわゆる「土より成るグスク」が多いのであるが、今回はそのうち5つのグスクについて述べてきた。これらのグスクを取り上げたのは、別に深い意味があつてのことではない。取り上げた5箇所のグスク全てについて言えることは、遺物が確認されなかつたり、石垣などの遺構が全くないグスクの例として、グスクの性格をめぐる論争のなかでも常に引き合いに出されるグスク群のうちの一つであるということである。本稿では、とくに、この種のグスクを取りあげて個々のグスクの縄張り構造を分析し、防御遺構の整理を行うことで、グスクのもつ軍事的な側面について理解すること

とを目的とした。縄張り調査のなかでどれだけこうした目的を達成できたか、はなはだ疑問であるが、従来のグスク調査では理解できなかったグスクの持つ軍事的な側面について、こうした縄張り調査を通して作成された縄張り図から案外見えてくるのではないだろうか。

今回取り上げたグスクは、石垣や石塁などはないが、自然の山や丘のピーク部と中腹部に防衛された削平地（曲輪）と切岸（城壁）、あるいは堀切などを有している。そのことが、すなわち城であることの証明であるが、なかなか、石垣遺構に馴染んだ私たちにとって理解しにくい面がある。

これまでのように石垣遺構のみのイメージでグスクを捉えていくと、石垣遺構以外の重要な遺構（防衛された削平地や切岸をつくり、あるいは堀切を掘る仕事は大がかりな土木事業であり、進んだ築城技術を要するということについて知る必要がある）を見落とすことになり、グスク全体の縄張り把握の上で不十分な結果を招きかねない。今後のグスク調査では、石垣遺構だけでなく、切岸や土塁、堀切などを利用した曲輪群がないかどうかについても最大の注意が必要だと思われる。こうした精密な縄張り把握を通して投影された縄張り図から、個々の防衛遺構の整理・分析を行うといった基本的な作業こそが、グスク調査をおし進めていく上で最も重要なことだと私には思えるのである。

註

註（1）名護グスク、嘉陽グスク、屋良グスク、喜屋武グスク、幸地グスク、

津記武多グスク、佐敷グスク、宮古島の野城遺跡など。

〃（2）根謝銘グスク、名護グスク、親川グスク等はその典型例である。

〃（3）拙稿『城一城に語らせたい地域の歴史ー』沖縄県立博物館 1992年3月。

〃（4）いわゆる「土より成るグスク」は、とくに鹿児島県奄美群島、沖縄本島北部に多く分布するが、沖縄中・南部の非石灰岩地域にも分布が見られる。

〃（5）1698年、大嶺親方基橋（鄭弘良）が中国から神像を持ち振り、旧小禄村の大嶺に祀らせたと『球陽』に見えているので、実際、いつごろ沖縄に伝來したか不明であるにせよグスク時代までは古くさかのぼることはないであろう。

〃（6）『おきなわ風土記全集』第1巻 国頭郡編 沖縄風土記刊行会 1967年4月。

〃（7）渡名喜島の里遺跡の場合もその例である。

〃（8）藤木久志『雜兵たちの戦場』朝日新聞社 1996年1月。

〃（9）稻村賢敷『沖縄の古代部落マキヨの研究』琉球文教図書株式会社 1968年11月。

- 〃 (10) 前掲書 (9) 321頁
- 〃 (11) 『大宜味村の遺跡-詳細分布調査報告書一』 大宜味村教育委員会 1984年3月。
- 〃 (12) 島袋源一郎『沖縄縣国頭郡志』三版 沖縄出版会 1967年11月。
- 〃 (13) 新城徳祐『沖縄の城跡』 (株) 緑と生活社 1982年8月。
- 〃 (14) 拙稿「歴史の道とグスク」『沖縄県教育委員会文化課紀要』第4号 1987年3月。
- 〃 (15) 前掲書 (13)
- 〃 (16) 山と山に挟まれた小さな谷間をこの地方でマタという。
- 〃 (17) 羽地村誌編集委員会編『羽地村誌』 羽地村役場 1962年8月。
- 〃 (19) 『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書』 名護市
教育委員会1988年3月。
- 〃 (20) 拙稿「グスクの縄張りについて（下）」『沖縄県立博物館紀要』第20号 1994年
3月。
- 〃 (21) 『名護市の遺跡（2）－分布調査報告－』 名護市教育委員会 1982年3月。

沖縄県南風原町黄金森の乱堆積層中の化石群集

神谷厚昭
(沖縄県立博物館)

Fossils from the slummping bed in Kuganimui, Haeburu Town, Okinawa Prefecture.

Koshio KAMIYA

(Okinawa prefectural Museum)

はじめに

調査地の南風原町は沖縄県沖縄島の南部に位置し、島嶼県沖縄で海岸線を持たない数少ない町の1つである。沖縄島の地質は、中部の嘉手納町付近を境に大きく異なり、以北の地域には新生代から中・古生界の各種の地層・岩石類の分布が見られるが、以南には、新生界新第三系の島尻層群と第四系の琉球石灰岩が見られるのみである。そのうち、南風原町には島尻層群の中層にあたる与那原層と琉球石灰岩の那覇石灰岩相当層が分布している。

島尻層群下部層の境界付近に近い中部層下部には、中城砂岩層と呼ばれるスランプ構造が顕著な乱堆積層が見られる(氏家,1988)。この中城砂岩層は、南は豊見城村潮平付近から同村渡橋名、真玉橋、那覇市国場、繁多川、西原町池田、中城村などを通って沖縄市まで延々と続く地層である。この砂岩層と、それに伴うスランピングの発達した泥岩層中には、上記の各地において、沖縄島北部地域に分布する基盤岩類の細礫を多く含むのが観察され、また貝化石をはじめ、有孔虫、炭化木片、サンゴ化石などを産出することが知られている。今回調査の対象となった黄金森地域にも上記以外にサメの歯や同脊椎骨などを含め、多くの化石類が産出している。これらの化石類について研究した結果、黄金森地域の地層の特徴とその堆積環境についてある程度明らかになった。本報告はそれをまとめたものである。

〈謝辞〉本研究にあたり、現地の地質調査で我謝昌一氏と山田真弓氏には多大な援助をいただいた。また、貝化石の同定にあたっては平田義浩氏に、サメ化石の同定については国立科学博物館の上野輝彌博士およびミュージアムパーク茨城県自然博物館の國府田良樹氏にたいへんお世話になった。また、同定に利用したサメの歯化石の一部については、宮城宏之氏に提供いただいた。さらに、南風原町文化センター所員の皆さんには現地の調査にあたり多くの便宜をはかっていただいた。あわせて深く感謝申し上げます。

1. 島尻層群の堆積環境—特に貝化石による考察から—

沖縄島に分布する島尻層群の堆積環境についての本格的な研究は、MacNeil (1960) の巻貝、腕足類の報告にはじまる。その後、数次にわたる天然ガス調査があり、それをまとめる形で福田他 (1970) の報告がある。その後、貝類化石から見た野田 (1976)、小笠原他 (1983)、貝形虫から野原 (1987) などの研究がある (表 1)。

表. 1 島尻層群の堆積環境

	MacNeil (1960)	福田 (1970)	野田 (1976)	小笠原・増田 (1983)	野原 (1987)
知念層	90-180m				上部浅海
新里層	360-720m	200-300m	1000±	500-1000m	下部浅海
与那原層	270-540m			100-200m	半深海
豊見城層					浅 海

表. 1 に見るとおり、各研究者により堆積環境の推定にはばらつきがあるが、貝化石の研究結果から見れば、新里層の堆積環境はより深海の、与那原層の堆積環境がより浅海の環境を示しているといえよう。しかし、野原 (1987) は、島尻層群中に産する貝形虫の詳しい研究により、新里層が与那原層よりもより浅海の環境であったことを指摘している。

小笠原・増田 (1983) は、*Mammilla granosa*, *Lophiotoma leucotropis*, *Makiyamaia coreanica*, *Tucetilla pilsbryi*, *Cryptopecten vesiculosus*, *Ventricoloidea faveolata* などの产出から、与那原層の下部は50-100m程度の深度を推定している。しかし、現在浅海域に生息する *Sinum*, *Lophiotoma*, *Pitar* 属の产出を考えると、浅所から下部浅海域への移動（貝類の落ち込み）や幼貝と成貝の生息域の移動の可能性を示唆している。

また、新里層が500-1000m程度の漸深海域の堆積場であったことは、*Orectospira sikoensis*, *Bathybenbix cf. convexiusculum*, *Profundinassa* 属, *Makiyamaia coreanica*, *Tindaria cf. murrayi* などの产出で推定している。

さらに、新里層の上位に位置する知念層を新里層と一連の堆積物としてとらえ、知念層中上部に产出する化石種が *Turcicula crumpi*, *Guildforia sp.*, *Chlamys*, *Aequipecten*, *Spondylus*, *Plicatula* 属などであることから、MacNeil (1960), 野田 (1977) が指摘しているとおりの上部浅海帯以浅の堆積環境であることを述べている。

島尻層群下部層の豊見城層の堆積環境については貝化石などを利用した詳しい報告はない。野原 (1987) は、前述した貝形虫の研究により、浅海域であったことを推定している。

また、福田（1976）によれば豊見城層には13枚の砂岩層が挟在し、奥武山におけるボーリングの結果、最下部には千枚岩の礫を含む礫岩層の存在が確認されている。

以上のように、貝化石の研究結果からは、島尻層群の堆積は現在の沖縄島中北部に分布する岩石・地層群からなる陸地の周辺に位置した浅海域への堆積（豊見城層）からはじまり、水深50m程度の陸棚上の堆積（与那原層）を経て急激に水深を増し、漸深海帯（新里層）へ変化していったことが推定できる。しかし、貝形虫から見た新里層の堆積の場が浅海域であることの指摘、および新里層に見られるスランピングによって形成された可能性が高い凝灰岩層の存在などの事実を考慮すると、新里層の堆積海域についての考察には浅海域からより深海域への堆積物の移動も含めてさらに詳しい検討が必要である。

2. 黄金森の地質概要

黄金森は南風原町のほぼ中央部の東寄りに位置する標高約85mの丘陵地である。黄金森には泥岩を主とした与那原層下部の地層が分布している。これらの地層は水平方向に層厚が著しく変化し、走向傾斜の変化・層間褶曲・ブロック状偽礫現象などが顕著で典型的なスランプ構造をもった地層群である。南風原陸軍病院24号壕の壁面および字慶原の黄金森総合公園造成地の壁面において細粒砂岩層の作るスランプ構造がよく観察できる。

黄金森の地層群は、上記の特徴が最も顕著に現れる細粒砂岩をはじめ、泥岩および凝灰岩からなる。細粒砂岩と泥岩層には沖縄島北部に分布するチャートの細～中礫をはじめ、炭化木片、サメの歯と同脊柱、有孔虫（オパキュリナ）および多数の貝化石が産出する。これらの事実とスランプ構造の発達することから、与那原層最下部にあたる氏家（1988）の中城砂岩層に対比できる。

細粒砂岩は、一般に風化により黄褐色を呈しているが、しばしば径数cm-数10cmのノジュールを含み、その新鮮な中心核は青灰色を示すことが多い。細粒砂岩には石灰分が多いため、割れ目に沿って鍾乳管（ストロー）が発達していることがある。ちなみに、陸軍病院壕の24号壕での観察では、鍾乳管の長さは1.7～5.8cmの範囲にあり、壕の年代50年から計算すると成長速度は0.34～1.1cm/y.となり、玉泉洞の0.33mm/y.より大きい。泥岩層はよく成層した部分とスランプ褶曲をなす部分が混在する。スランプ構造を示す部分は貝化石を多産し、産出の様子は化石床的である。凝灰岩は偽礫状に分布するのが多く、連続性に乏しいのが特徴である。特に、陸軍病院壕跡の「悲風の丘」付近に分布する凝灰岩は厚さが1m以上あるにもかかわらず横への連続は数10mを越えない。

南風原町に分布する島尻層群はすべて与那原層相当の地層で、氏家（1988）の lower PL1～upper PL1にあたる。全体として、南東に緩く傾斜する単斜構造を示すのは他の地

域と同様であるが、黄金森地域においては中城砂岩層がより上部の地層の上にナッペ状に乗って存在している。つまり、黄金森の中城砂岩層は、一次的な堆積の後に、より上位の泥岩層が堆積する時期に、海底の変動によって移動し、より上位の地層の上に位置を占めたものと推定される。

3. 貝化石について

黄金森の砂岩、泥岩層に産出する貝化石は、今回の調査で同定されたもので、腹足類が25科99種、斧足類が10科13種、掘足類が1科4種である（表2）。

化 石 名	上 部 浅 海					下 部 浅 海			半 深 海		
	5	10	20	30	50	100	200	500	m		
ヤサガタミミエガイ			—								
マルツノガイ		—	—	—							
オキナワニシキヒヨク				—	—						
モグラノテガイ	—	—	—	—	—						
オキナワナサバイ						—	—	—			
コトクサバイ						—	—	—			
シマジリボタル						—	—	—			
オオヤマリュウグウボタル						—	—	—			
ウスイロツメタガイ						—	—	—			
メルビルクダマキ						—	—	—			
テラマチギボシクダマキ						—	—	—			
オオシラスナガイ						—	—	—			

図1 頻出貝類の生息深度

頻出する種は、腹足類で *Enuatica pallida* (Broderip et Sowerby) (ウスイロツメタガイ)、*Benthindsia magnifica okinavia* MacNeil (オキナワナサバイ)、*Phos varicosum* Gould (コトクサバイ)、*Ancilla (T.) chinensis* MacNeil (シマジリボタル)、*Ancilla (Baryspira) oyamai* Shuto (オオヤマリュウグウボタル)、*Gemula (G.) granosa* (Helbing) (ムカシジユズカケクダマキ)、*Daphanella ryukyuensis* MacNeil (リュウキュウフデシャジク)、*Dotomella (Pinotoma) teramachii* Kuroda (テラマチギボシクダマキ)、斧足類で *Striarca (Galactella) scuttilis* (Reeve) (ヤサガタミミエガイ)、*Limoosis Yokoyama* (オオシラスナガイ)、*Annachlamys okinawaensis* Noda (オキナワニシキヒヨク)、*Spiniplicatus muricata* (Sowerby)

表. 2 黄金森産貝化石 (1)

Class. Gastropoda 腹足綱

Orectospiraridae ウラウズカニモリ科

Orectospira shikoensis (Yokoyama) ウラウズカニモリ

Potamididae ウミニナ科

Cerithidae (*Cerithideopsis*) *cingulata* (Gmelin) ヘナタリ

Turritellidae キリガイダマシ科

Turritella (*Kurosoioia*) *Nipponica infralirata* Nagao ホソヒダキリガイダマシ

Naticidae タマガイ科

Eunatida pallida (Broderip et Sowerby) ウスイロタマツメタガイ*Euspira yokoyamai* Kuroda et Habe ヨコヤマオリイレシラタマ*Mammilla yokoyamai* Makino ヨコヤマリスガイ*Tanea sagittata* (Menke) ハギノツユ*Amauroopsis islandica* (Gmelin) ホッキョクタマガイ

Tonnidae ヤツシロガイ科

Tonna melanostoma (Jay) ホロガイ

Cassinae トウカムリガイ科

Morum (*Onimusiro*) cf. M. Watsoni Dance et Emerson ワトソンコエボシガイ

Cymatiidae フジツガイ科

Biplex perca (Perry) マツカワガイ

Bursidae オキニシ科

Bufonariella ranelloides (Reeve) コナルトボラ

Muricidae アクキガイ科

Siratus pliciferoides propinquus (Kuroda et Azuma) セキトリハツキガイ*Pteropurpura* (*P.*) *plorator* (Adams et Reeve) タカノハヨウラク*Pteropurpura* (*P.*) *vespertilio* (Kira) コウモリヨウラクガイ*Pterynotus bibbeyi* Radwin et D. Attilio オナガバショウガイ

Muricidae アクキガイ科

Naquetia cf. *Naquetia annandalei* (Preston) アンナンヒメバショウ (仮名)

Nassariidae オリイレヨフバイ科

Profundinassa babylonica Watson ワタゾゴムシロガイ*Nasaarius metuliformis* MacNeil ホソヌノメヨフバイ

Bussinidae エゾバイ科

Benthindsia magnifica okinavia MacNeil オキナワナサバイ*Phos varicosum* Gould コトクサバイ*Benthindsia magnifica* (Lischk) ナサバイ*Benthindsia takabanaensis* MacNeil タカバナレナサバイ*Phos roseatus* (Hinds) アカトクサバイ (トノトクサバイ)*Buccinaria okinawa* MacNeil*Microfusus whitmorei* MacNeil チヂミナサバイ*Siphonalia* 属

Fasciolariidae イトマキボラ科

Granulifusus Kiranus Shuto キラアラレナガニシ*Pseudolatirus pallidus* Kuroda et Habe シロヒメナガニシモドキ*Fusinus crassiplicatus* Kira フトウネナガニシ*Fusolatirus Coreanicus* (Smith) チョウセンニシ

Olividae マクラガイ科

Ancilla (*T.*) *chinensis* MacNeil シマジリボタル

Olividae マクラガイ科

Ancilla (*Baryspira*) *oyamai* Shuto オオヤマリュウグウボタル*Baryspira utopica* Ninomiya マボロシリュウグウボタル*Baryspira* cf. *Baryspira rubiginosa albocollosa* (Lisch) リュウグウボタルガイ

Mitridae フデガイ科

Mitra (*Fusimitra*) *loochooensis* MacNeil リュウキュウフデガイ*Mitra* (*Vicimitra*) *hilli* (Cernohorsky) アカネフデガイ*Mitra* (*Cancilla*) *yokoyamai* Nomura 1935 ヨコヤマチュウカフデ*Mitra* (*Cancilla*) *yonabaruensis* (MacNeil) ヨナバルイトマキフデ

表. 2 黄金森産貝化石 (2)

Mitridae フデガイ科

Cancilla pia (Dohrn) ツグナイフデ

Cancilla praestantissima (Roeding) ホソイトマキフデ

Vasidae オニコブシガイ科

Afer aff. A. oostinghi (Altena) オースティンテンコロボラ

Cancellariidae コロモガイ科

Nipponaphera pristina (Yokoyama) オキナワコロモガイ

Nipponaphera yonabaruensis MacNeil ヨナバルコロモガイ

Merica (Momoebara) laticosta Okinawana (Noda) オキナワモモエボラ

Turridae クダマキガイ科

Gemmula (G.) granosa (Helbling) ムカシジュズカケクダマキ

Gemmula (G.) congener diomedea Powell ヒメジュズカケクダマキ

Gemmula pulchella (Helbling) ホソジュズカケクダマキ

Gemmula (Gemmula) sp.

Turris crispa crispa (Lamarck) クダボラ

Gemmula (G.) congener cosmoi (Sykes) メルビルクダマキ

Gemmula (G.) kieneri (Doumet) ジュズカケクダマキ

Gemmula (Unedogemmula) unedo (Kiener) ホンカリカネガイ

Gemmula (Gemmula) rarimaculata Kuroda et Oyama トビフクダマキ

Makiyamaia coreanica (Adams et Reeve) チヨウセンイグチ

Makiyamaia okinavensis MacNeil オキナワイグチガイ

Makiyamaia subdedivis (Yokoyama) クチヅノイグチ

Makiyamaia macneili Noda マクニールイグチ

Daphnella ryukyuensis MacNeil リュウキュウフデシャジク

Dotomella (Pinotoma) teramachii Kuroda テラマチギボシクダマキ

Nihonia shimagiriensis MacNeil シマジリイグチガイ

Lophiotoma (Lophioturris) leucotropis (Adams et Reeve) クダマキガイ

Aglaodrillia cf. A. Oyamai Shuto オオヤマヒメクダマキ (仮名)

Lophiotoma (Lophiotoma) notata (Sowerby) コガスリクダマイ

Benthomangilia cosibensis (Yokoyama)

Micantapex (Micantapex) striatuberculata (Yokoyama) キヌシャジク

Micantapex (Parabathytoma) luehdorfi (Lischke) シャジクガイ

Coronasyrinx takabanarensis MacNeil タカバナレクダマキガイ

Crassispira hataii MacNeil ハタイシャジク

Inquistr cf. Inquistr nudivaricosus Kuroda et Oyama オボロモミジボラ

Elaecocyma (Splendrilla) solicitata (Sowerby) モモイロモミジボラ

Lophioturris leucotropis (Adams et Reeve) クダマキガイ

Microdrillia sagamiensis Kuroda et Oyama ツマミシャジク

Maudirillia kachabaruensis MacNeil カチャバルイグチ

Bathytoma sp.

Paradrillia patruelis (Smith) オビヒメシャジクガイ

Paracomitas rodgersi MacNeil ホソイグチガイ

Pingnigemmula okinavensis MacNeil オキナワサイズチクダマキ

Pleurotomolla sp.

Gemmula (Unedogemmula) ina MacNeil ウスカワシャジククダマキ

Thatcheria gradata (Yokoyama) チマキボラ

Gemmula (Gemmula) congener diomedea Powell ヒメジュズカケクダマキ

Gemmula cf. Gemmula granosa (Helbling) ムカシジュズカケクダマキ

Benthovoluta sp.

Conidae イモガイ科

Conus (Pariconus) tuberculosus (Tomlin) ミウライモ

Conus djarianensis MacNeil

Conus yabei Nomura ヤベノイモガイ

Terebridae タケノコガイ科

Terebra (Decorihastula) amoena (Deshayes) ハヤテギリ (キタケノコモドキ)

Terebra (Cinguloterebra) fenestrata (Hinds) ヤスリギリ

Terebra (Granuliterebra) bathyraphe (Smith) イボヒメトクサ

表. 2 黄金森産貝化石 (3)

Epitoniidae	イトカケガイ科
	<i>Cirsotrema plexis</i> (Dall) ホソチリメンイトカケ
Mathildae	タクミニナ科
	<i>Mathilda loochooensis</i> MacNeil リュウキュウタクミニナ
Architectonicidae	クルマガイ科
	<i>Architectonica (Solariaxis) nomurai</i> MacNeil ノムラグルマガイ
Volutidae	ヒタチオビガイ科
	<i>Fulgoraria (Saotomea) delicata</i> (H.C.Fulton) サオトメヒタチオビ

Class. Scaphopoda 掘足綱

Dentaliidae	ツノガイ科
	<i>Fissidentalium (Pictodentalium) vernedei</i> (Sowerby) マルツノガイ
	<i>Fissidentalium (Fissidentalium) yokoyamai</i> (Makiyama) ヤスリツノガイ
	<i>Fissidentalium (Fissidentalium) kawamurai</i> Kuroda et カワムラツノガイ
	<i>Antalis weinkauffi</i> (Dunker) ツノガイ

Class. Bivalvia 二枚貝綱

Arcidae	フネガイ科
	<i>Striarca (Galactella) scuptilis</i> (Reeve) ヤサガタミミエガイ
Glycymerididae	タマキガイ科
	<i>Glycymeris pilshryi</i> (Yokoyama) ピロウドタマキガイ
	<i>Tucetonella hanzawai</i> (Nomura et Zinbo) ハンザワタマキ
Nuculidae	クルミガイ科
	<i>Lamellinucula okutanii</i> Noda オクタニクルミガイ
Limopsidae	オオシラスナガイ科
	<i>Limopsis tokaiensis</i> Yokoyama オオシラスナガイ
	<i>Emploconia</i> sp.
Pteriidae	ウグイスガイ科
	<i>Pintada margaritifera</i> (Linnaeus) クロチョウガイ
Pectinidae	イタヤガイ科
	<i>Nachlamys okinawaensis</i> Noda オキナワニシキヒヨク
	<i>Popeamussium rubrotinctum</i> Oyama オボロツキヒガイ
Plicatulidae	ネズミノテガイ科
	<i>Spiniplicatus muricata</i> (Sowerby) モグラノテガイ
Carditidae	トマヤガイ科
	<i>Glans hirasei</i> Dall ヒラセフミガイ
Vesicomyidae	オトヒメハマグリ科
	<i>Akebiconcha kawamurai</i> Kuroda アケビガイ
Veneridae	マルスダレガイ科
	<i>Venus (Ventricoloidea) foveolata</i> (Sowerby) ピノスモドキ

(モグラノテガイ)、掘足類では *Fissidentalium (Pictodentalium) vernerdei* (Swerby) (マルツノガイ) などである (図1, PLATE 1)。

このうち、*Striarca (Galactella) scuptilis* (Reeve) (ヤサガタミミエガイ) と *Annachlamys okinawaensis* Noda (オキナワニシキヒヨク) は細粒砂岩中に産出し、他は泥岩中に産出する。

表3 貝類の生息深度分布

	潮間帶 潮間帶 ～上 部淺海	上部 淺海	上部淺 海～下 部淺海	下部 淺海	大陸棚 ～ 半深海	半深海
腹足類	2	3	20	21	11	4
掘足類		1	1	2		
斧足類		1	3	2	4	1
合計	2	1	7	25	15	5

産出化石の生息深度は、大きく数m～数10mの潮間帯ないし上部浅海域、数10m～200mの下部浅海域、および200m以深の半深海域の3つに区分が可能である。生息深度の判明している76種の中で、上部浅海域～下部浅海域に生息する種が50種と最も多い(表3)。また、産出頻度の高い種で見ると、ヤサガタミミエガイ、マルツノガイおよびオキナワニシキヒヨクを除くとほとんどが下部浅海域ないし半深海域の種である(図1)。ヤサガタミミエガイとオキナワニシキヒヨクは細粒砂岩のみに産出し、前者は5-15mの生息域をもつ種で、後者は10-50mの生息域をもつ種である。また、マルツノガイは泥岩中に見られ、10-30mの砂泥底の生息環境をもつ種である。¹

産出する全種のうち、500mを越す生息域をもった種は、*Orectospira shikokuensis* (Yokoyama) (ウラウズカニモリ)、*Euspira yokoyamai* Kuroda et Habe (ヨコヤマオリイレシラタマ)、*Gemula (G.)congener diomedea* Powell (ヒメジュズクダマキ)、*Glycymeris pilshryi* (Yokoyama) (ビロウドタマキガイ)、*Akebiconcha kawamurai* Kuroda (アケビガイ) の数種に過ぎない。

以上のような産出化石の種類と、前述のスランプ構造の存在を合わせて黄金森の堆積過程を推定してみると次のようになる。

ヤサガタミミエガイを産出する細粒砂岩は、一次的には数m～10数mの極浅海に堆積したと推定される。また、後述する数cm径の造礁性サンゴの礫塊や炭化木片の存在もその

している。

②スランプ構造の形態は、細粒砂岩と泥岩に顕著な褶曲構造と、細粒砂岩と凝灰岩に見られる偽礫構造である。

③スランプ構造を伴う地層群は地殻変動によって移動し、より新しい地層の上にナッペ構造を形成していると推定される。

④黄金森に産出する貝化石は腹足類が25科99種、斧足類が10科13種、掘足類が1科4種である。

⑤産出貝化石の生息深度は浅海域から半深海域までの各種のものが混在しているが、特に深度50~200mの大陸棚域のものが76種中50種と最も多い。産出頻度の高い12種に限っても同様な傾向が認められる。

⑥ヤサガタミミエガイが細粒砂岩のみに産出することから、細粒砂岩は陸地に近接した極浅海の堆積物であることが推定できる。

⑦黄金森の地層群には貝化石以外に、ホホジロザメなど数種のサメの歯や脊椎骨、炭化木片、オパキュリナ、造礁性サンゴの化石が産出する。

⑧各種の化石、スランプ構造などから推定される黄金森の地層の堆積過程は次ぎのように推定できる。

- a) 陸地に近接する極浅海において細粒砂岩が堆積した（一次的堆積の場）。
- b) 多くの貝化石の産出で代表されるように、大局的には大陸棚が堆積の場となる（二次的堆積の場）。
- c) さらに移動し、大陸斜面的な環境で安定した。

《参考文献》

- 福田 理他(1970): 第五次沖縄天然ガス資源調査・研究概報. 地質調査所月報 21,11号, 627-672.
- 木崎甲子郎編(1985): 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス, 278p.
- MacNeil, F. S., (1960): Tertiary and Gastropoda of Okinawa. U. S. G. S., Prof. Paper 339, 143p.
- 中川久夫・新妻信明・村上道雄・渡辺臣史, (1976): 沖縄県宮古島・久米島の島尻層群の地磁気層序概要. 琉球列島の地質学研究, 1, 55-63.
- 中川久夫(1983): 琉球列島新生代地史の概要. 地質学論集, 22, 67-79.
- Noda,H.(1976): Preliminary notes on the Bathyal moluscan fossils from the Shinzato Formation,

Okinawa-jima, Okinawa Prefecture, Southwestern Japan. Ann. Rep. Inst. Geosci. Univ. Tsukuba, 2, 40-41.

Noda,H.(1980): Molluscan fossils from the Ryukyu Islands, Southwestern Japan. pt. 1. Gastropoda and Pelecypoda from the Shinzato Formation in Southeastern part of Okinawa-jima. Sci. Rep. Inst. Geosci. Univ. Tsukuba, [B], 1, 1-95, pls.1-1 2.

小笠原憲四郎・増田孝一郎(1983): 琉球列島の第三系貝類化石とその古環境. 地質学論集, 22, 95-105.

琉球大学公開講座委員会(1990): 沖縄の自然—地形と地質. 271p.

Tomohide, N.,(1987): Cenozoic Ostracodes of Okinawa-jima. Bull. Coll. Edu., Univ. Ryukyus, 30, 3, 1-105.

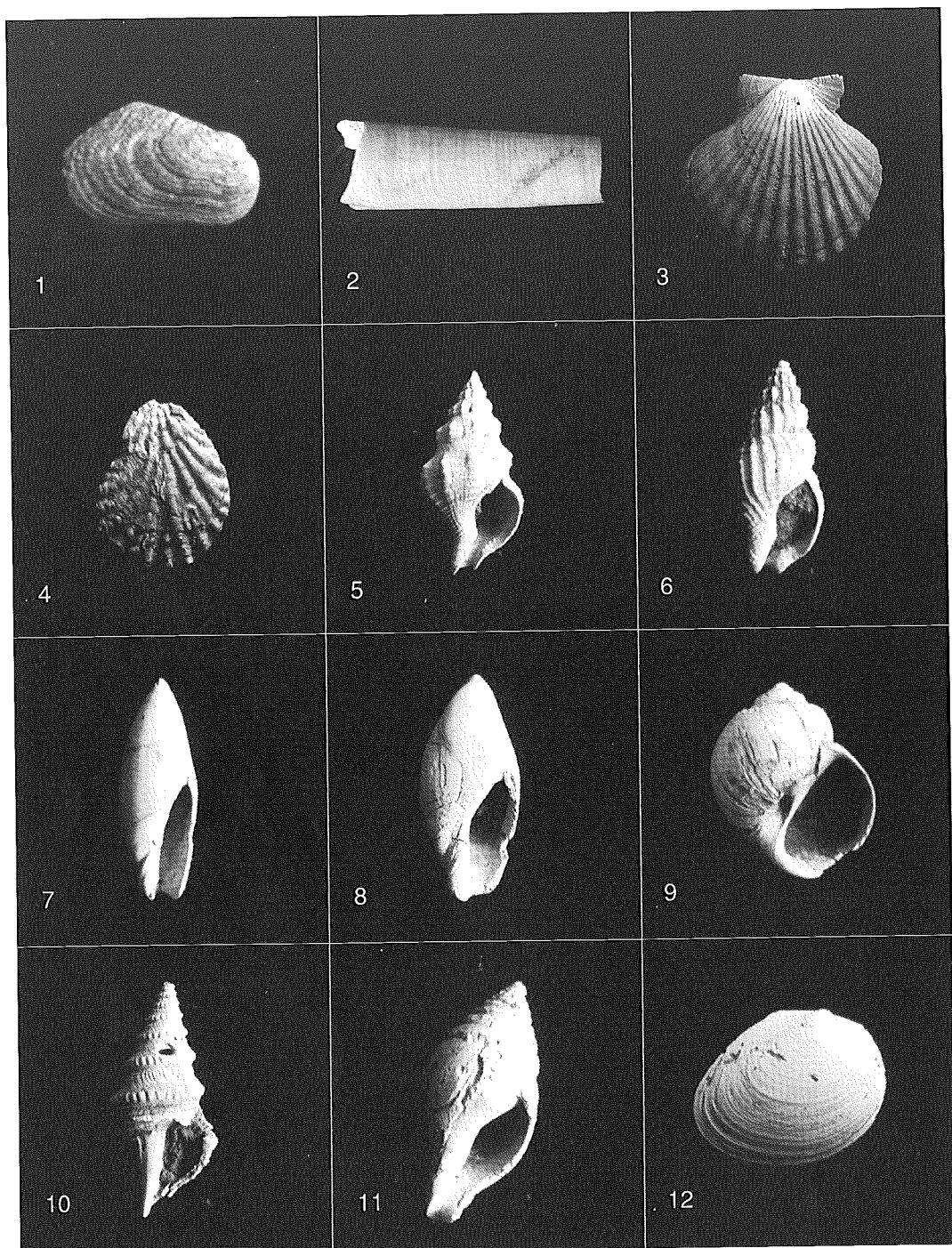
上野輝彌・大城逸朗 (1982) : 沖縄島第三紀島尻層産出のホホジロザメ属とアオザメ属. 沖縄県立博物館, 第8号, 1-7.

Ujiiie,H.(1985): A Standard Late Cenozoic Microbiostratigraphy in Southern Okinawa-jima, Japan. Bull. Natn. Mus., Tokyo, Ser.C, 11, 3, 103-136.

氏家 宏(1986): 琉球弧の海底. 新星図書, 118p.

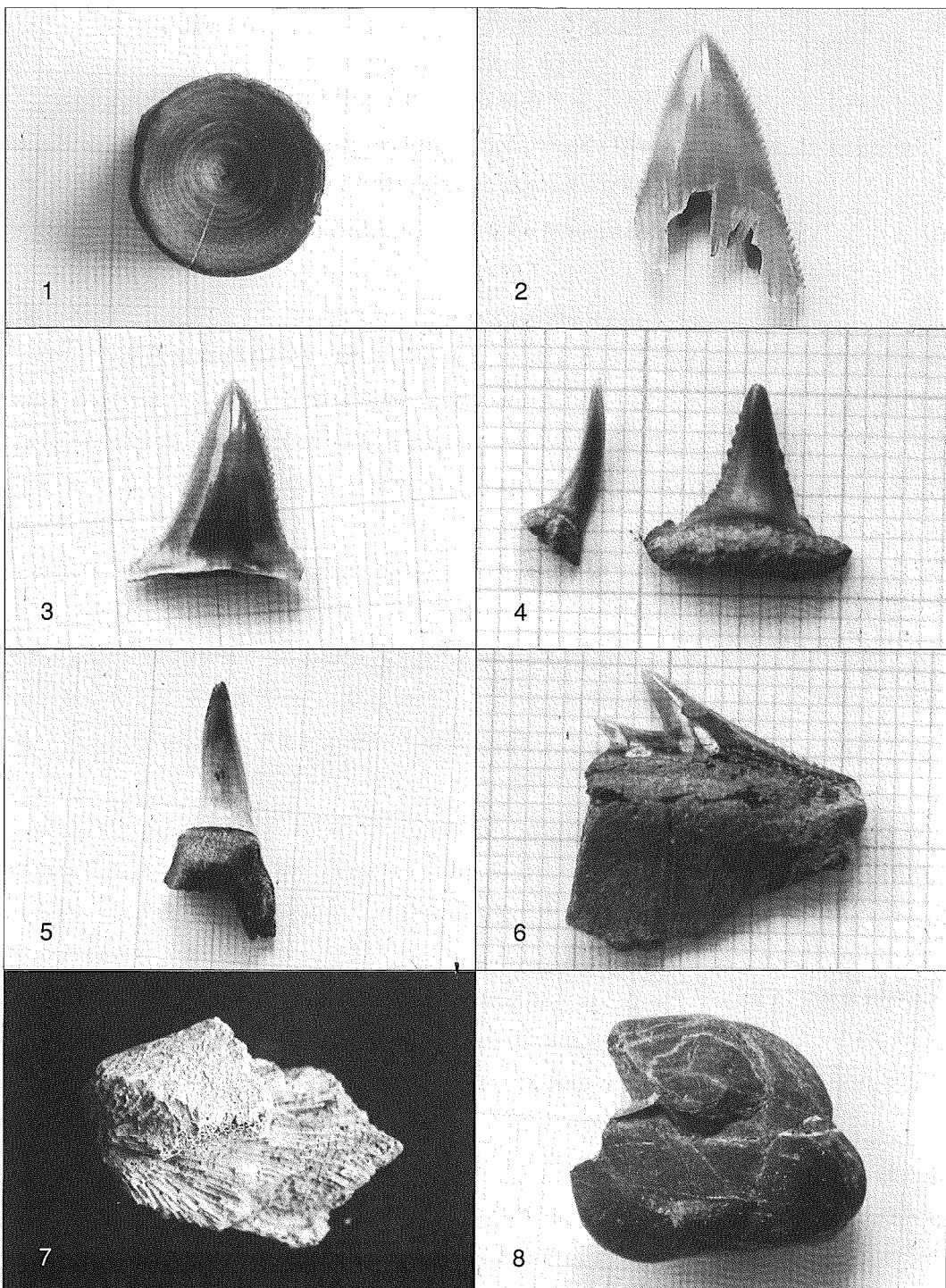
氏家 宏(1988): 浮遊性有孔虫化石分帶に基づく沖縄本島中・南部の地質図(1/50,000)
国建, 那覇.

PLATE 1



1.ヤサガタミミエガイ 2.マルツノガイ 3.オキナワニシキヒヨク 4.モグラノテガイ 5.オキナワナサバイ 6.コトクサバイ 7.シマジリボタル 8.オオヤマリュウグウボタル 9.ウスイロツメタガイ 10.メルビルクダマキ 11.テラマチギボシクダマキ 12.オオシラスナガイ

PLATE 2



1.サメの脊椎骨 2.3.ホホジロザメ 4.ホホジロザメ（左）とミズワニ属（右）
5.ムカシアオザメ 6.カグラザメ属 7.造礁性サンゴ 8.基盤岩の礫

沖縄島南部の市街地で繁殖する鳥類について

嵩原建二・渡久地政武
(沖縄県立博物館・那覇市立城北小学校)

Breeding birds on Town area in southern part of Okinawa Island, the Ryukyu Archipelago

Kenji TAKEHARA and Masatake TOGUCHI

(Okinawa Prefectural Museum · Jyohoku Primary-School of Naha City)

はじめに

本州では本来自然環境の豊かな場所に生息するようなハシブトガラス *Corvus macrohynchas*、チョウゲンボウ *Talco tinnuneulus*、ハクセキレイ *Motacilla alba*、コゲラ *Dendrocopos kizuki*、カワセミ *Alcedo attisbengalensis*などの野鳥が、東京都のような大都市の市街地に適応し、「都市鳥化」して生息していることが知られている（唐沢, 1987・樋口, 1985）。

筆者らは1990年から、沖縄島南部の人口が密集する市街地近くで営巣する鳥類について調査を行ってきた。その結果、本来海岸線の崖地などに生息地をもつイソヒヨドリ *Monticola soritarius* が、海岸線から5—6 kmほども離れたような内陸部の市街地にある高い建物などでも目撃され、「都市鳥化」している様相が確認される。しかも、本種は外灯のある明るい場所では、夜間でも採餌活動をおこなうなど都市環境への適応が見られる。

本種の分布については、最近行われた環境庁（1988）の調査によると、北海道を除き全国的には海岸線で生息確認されているが、福島県や宮城県、千葉県、大阪府、宮崎県、大分県、佐賀県などでは内陸部での生息が観察されおり、海岸地域から内陸部への進出傾向が伺える。さらに、県内ではイソヒヨドリ以外に本来森林地域で生息する小型の猛禽類であるツミ *Accipiter gularis* が市街地で営巣活動をおこなっている例も確認された。

このような県内における「都市鳥化」の例とその生態的な調査研究については、これまでに報告が少ないもの思われる。今回、沖縄島南部の市街地におけるイソヒヨドリの育雛期の餌の種類やツミの営巣状況について、若干の知見が得られたので報告する。

本調査の報告にあたり、調査に協力していただき、かつ調査のまとめに有益な助言をいただいた県立伊良部高校の久貝勝盛氏、県立開邦高校の瀬名波任氏と沖縄県立博物館委託業務職員の玉城政栄氏、さらにゼロの森の会佐藤文保氏と沖縄県立教育センターの上門清春氏に心から感謝申し上げる。

また、県立博物館と崇元寺石門周辺の見取り図作成に協力をいたいた沖縄県立博物館の吉里功氏、那覇市文化課の翁長聰氏に感謝申し上げる。

(I) 調査地及び調査方法

主たる調査地の範囲は図1に示したように、沖縄島南部の那覇市と浦添市の市街地である。なお、詳細な営巣地及び営巣環境、調査方法については、各鳥類によって異なるので、イソヒヨドリ、ツミの個々の鳥類別でまとめて調査概要として示した。

1. イソヒヨドリの営巣地及び調査概要

1-(1). 沖縄県立博物館（那覇市首里大中町）周辺地域

イソヒヨドリが営巣した博物館周辺の環境は、学校や復元された城跡公園、住宅地などが周囲を取り囲んでいる地域である。営巣場所の前面（南側）は、博物館中庭や龍潭（池）の周辺などにアカギ、モモタマナ、ガジマル、デイゴ、ホウオウボク、リュウキュウコクタン、ソテツ、フクギ、リュウキュウマツなどが人為的に植栽され、都市公園としての緑地帯をなしている。したがって、周辺環境としては厳密には住宅や商店街などの密集した市街地と比べ比較的緑の多い地域となっている。

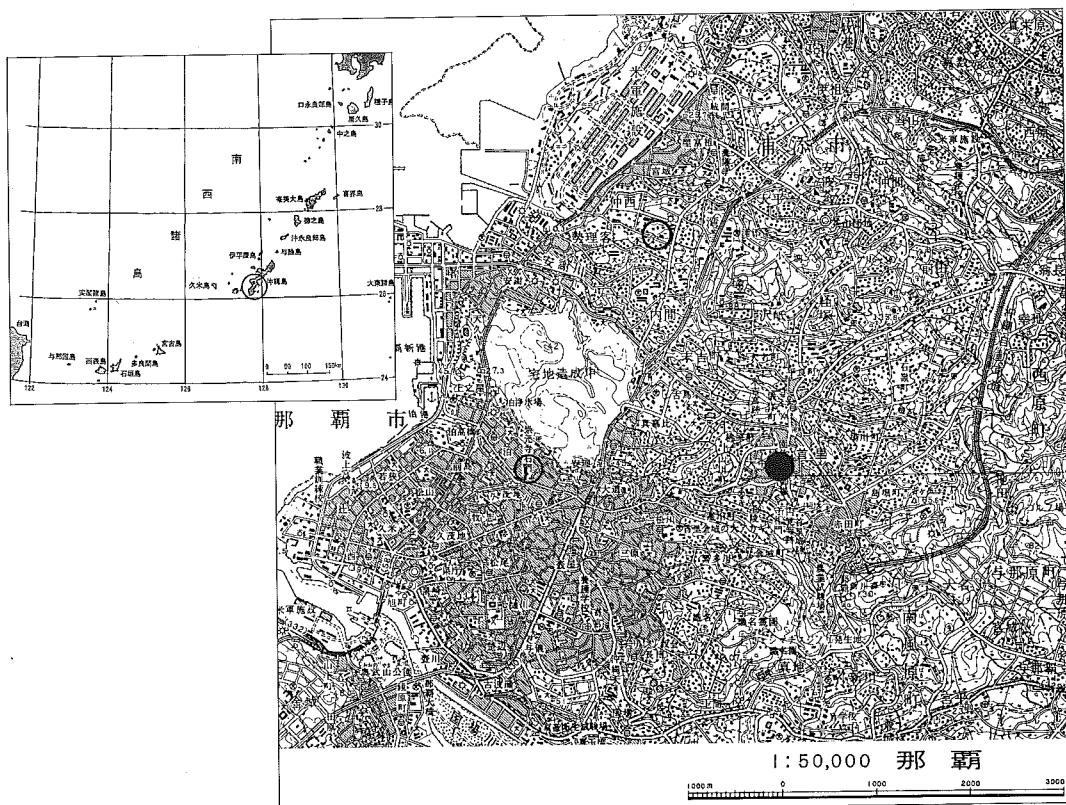


図1. イソヒヨドリおよびツミの営巣確認地

(凡例: ○はツミ, ●はイソヒヨドリの営巣地 地図は国土地理院1/50,000の地形図改変)

イソヒヨドリの営巣調査は、博物館周辺において1993年5月から1996年5月までの期間に、主として営巣および育雛期を中心に行った。また、イソヒヨドリの育雛活動の調査については、1994年4月17日から5月15日まで期間に、博物館で営巣した1番の育雛活動について、10日間および継続観察を行った。

調査方法は、親鳥が巣（雛）に運ぶ餌の種類の確認やそれ以外の生態的行動について、目視及び望遠鏡（フィールドスコープ、20倍）を用いて直接観察を行った。さらに、運ばれた餌の種類を特定するため、可能な限り写真撮影も行い、種の同定に正確さを期すための資料にした。なお、同定された学名の扱いについては、昆虫類は東・金城（1987）と東ら（1987）、クモ類は下謝名（1976）と入木沼（1960）、ハ虫類は中村・上野（1984）、千石（1979）、貝類は知念（1979）、多足類は大嶺ら（1982）にしたがった。また、餌として利用された植物については、その学名の扱いは初島・天野（1967）にしたがった。鳥類については日本野鳥の会編（1982）に準じた。

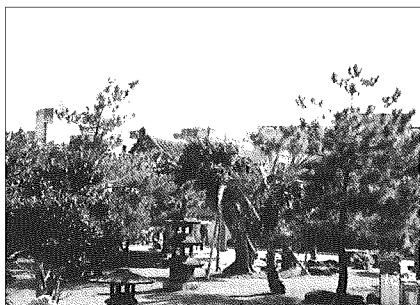


写真1, 営巣地環境（博物館中庭）

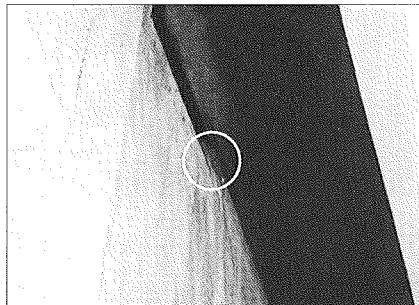


写真2, 営巣場所（博物館建物）

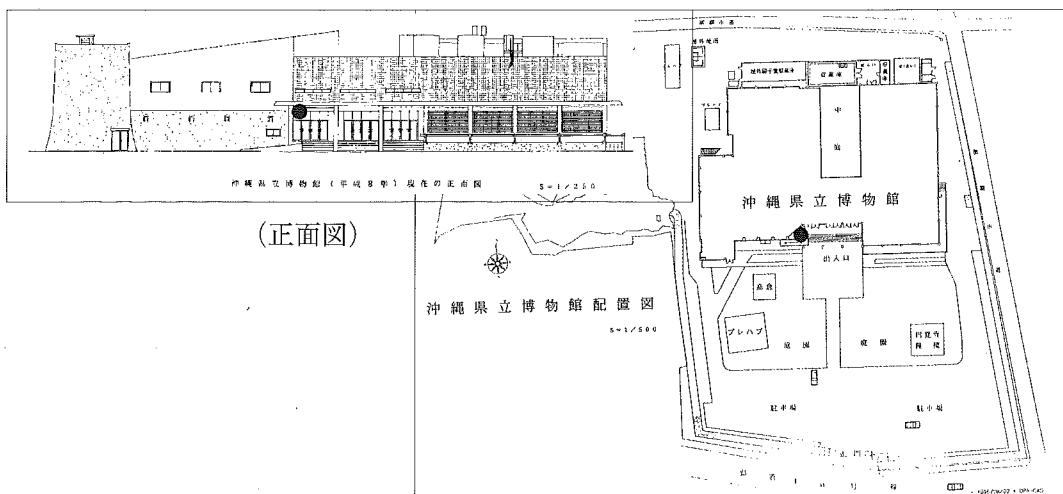


図2, イソヒヨドリの営巣地の見取り図（●が営巣地）

(2) ツミの営巣調査概要

ツミの営巣調査については、1996年7月から8月までの繁殖時期に、図1に示したように、那覇市泊（写真3，4）と浦添市宮城（写真5，6）などで実施した。調査は、営巣環境、営巣木の概要（樹高、胸高直径など）、巣材、餌の種類等について調査票（調査資料1）を作成して行った。また、育雛中の巣については、直接観察を行い、雛の数や餌の種類等の育雛活動を記録した。

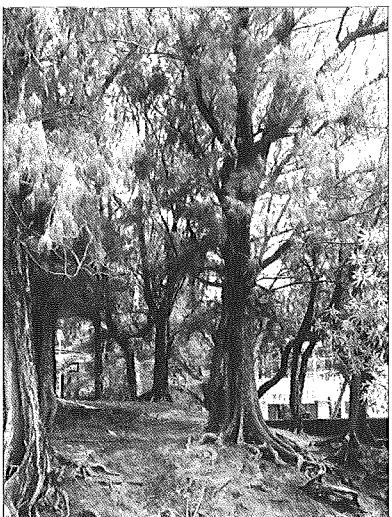


写真3, 調査地環境
(那覇市泊のモクマオウ林)



写真4, 営巣木のアカギ
(那覇市泊旧崇元寺石門)

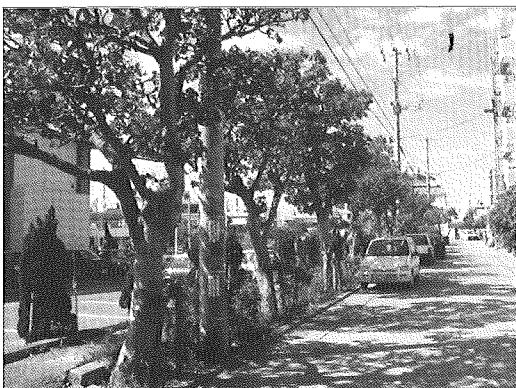


写真5, 調査地環境（デイゴ街路樹）
(浦添市宮城)

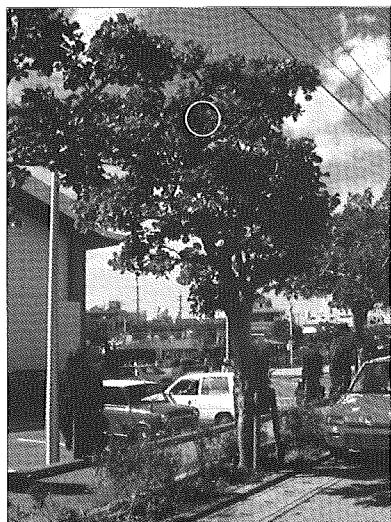


写真6, 営巣木のデイゴ
(浦添市宮城)

(II) 調査の結果と考察

1. イソヒヨドリの営巣および育雛状況

1-(1). 営巣場所と巣材について

営巣の確認場所は、図1・図2に示したように沖縄島南部の那覇市首里大中町に位置する沖縄県立博物館の建物であった。巣の位置は、地上から約3.5mの高さで、博物館正面玄関右のひさし下にあり、奥行きが30cmくらいの細いすき間で棚状になった場所であった。したがって、下方からは直接巣を確認することは出来なかった(写真2)。

本種は本来海岸の崖地の棚などで営巣することが知られているので、ちょうどこの場所が崖地の棚と類似した場所になっていて、営巣場所として選択されたのであろう。

同営巣個所は1993年5月にも使用され、以来1996年5月まで4年間にわたって継続的に使用された。なお、営巣した番は、それぞれ個体識別をしてはいないが、おそらく同一番と思われる。

巣材については、巣立ちが終了してしばらく立った1994年6月26日に巣材を回収し

(写真7)、その検討を行った。その結果、巣材としてはリュウキュウマツ、モクマオウなどの枯れ枝や枯れ葉、コウライシバ、イネ科植物(種不明)の枯れた茎などが認められた。また、タバコの包装紙(ビニル)の断片が1枚確認された。したがって、巣材は博物館中庭や龍潭周辺などから運んできた有り合わせの巣材であることが考えられ、一部人工的な巣材も利用されている。



写真7. イソヒヨドリの巣材

表1. イソヒヨドリの博物館におけるこれまでの営巣記録

営巣確認年月日	孵化日	巣立ち日	クラッチサイズ
1993/5/12	不明	不明	不明
1994/4/17	5/1	5/11から5/12	4
1995/4/25	4/26	5/10	3
1996/4/28	5/3	5/17	3

1-(2). 抱卵期間や孵化時期及びクラッチ・サイズについて

図3に示したように、本番が巣造りを開始したと考えられる時期は、1994年4月初旬であった。当初屋上に巣材運びが観察されたが、結局放棄し、その後4月17日から前年使用した古巣に雌個体の出入りが頻繁に見られた。したがって、この時期に産卵および抱卵に入っているものと考えられた。そして、雛が孵化した時期は、餌運びが初めて目撃された5月1日であろうと推定した。したがって、逆算していくと抱卵期間は13日前後と思われる。本種は一般的に4-6月に淡青色無斑の卵を4-5個産み、雌だけが12-13日間抱卵するとされる（世界文化社編、1984）、今回確認された抱卵期間は大体一致する。また、育雛期間については、5月1日が推定の孵化日と考えられ、5月11日に最初の巣立ち雛の飛び出しが目撃されたのでおおよそ11日間かかったことが確認された。しかし、残りの雛（3羽）が全て巣立ったのは、5月12日の午後であったので、全部の雛が巣立つまで2日間を要していた。その際親鳥が雛を巣外におびきよせる誘い出し行動が5月12日の早朝7時頃観察された（玉城私信）。したがって、育雛期間は11日から12日間であろうと思われた。

巣立雛は風切り羽や尾羽などが延びきらず、飛翔力も十分でなく、直接飛び上るることはなかった。したがって、中庭や花園を歩いて移動したり、枝をよじのぼるように伝っての移動が主体であった。そして、移動した場所でじっとしてて隠れるように、親

からの餌を待っていた。このように育雛後期には、雛は羽が成長して十分に飛翔力がつき、自分で餌が採れるようになるまでは、親鳥と行動を共にしながら餌をもらって成長していくタイプの鳥である。

さらに、クラッチ・サイズについては、5月11日に1個体巣立ち、5月12日の最期の巣立ち時期に目撃された雛の数が、3個体であったので合計4個体と確認された。（写真8）、これも前述した

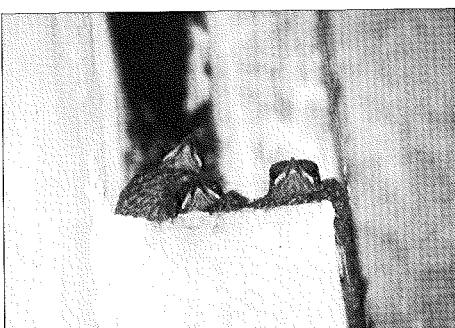


写真8：巣口の雛

ようにその範囲であった。

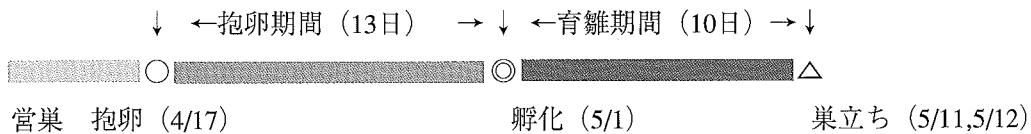


図3 育雛活動のまとめ（1994年4月—5月）

1-(3). 給餌活動と餌の種別について

1994年5月7日には9時間におよぶ定点観察を行い、その後数日間にわたる育雛活動の観察を実施し、育雛期の餌について調査を行った。

その調査の結果、育雛期の餌の種類としては、観察記録をまとめて表4に示した通りである。またその内訳は、図4に示したように昆虫類が全体の60.94%、爬虫類が10.77%、多足類7.81%、植物の果実3.08%、不明16.92%であり、約6割が昆虫類主体の餌であった。さらに後述するように、その後7日間の不定期的な観察結果を加味すると、これらの餌以外にクモ類、パンくず、陸産貝類であるマイマイ類の殻、モリバッタ等が利用されていた。したがって、意外に餌の種類は幅広く、また人工物も利用していることが確認されたので、雑食性の傾向が認められる。

給餌回数については、表4に示したように全体で64回で1時間当たりでは7.11回であつた。また給餌の中で雄は28回（3.1回／hr）、雌は36回（4回／hr）で若干雌が多い傾向が見られた。しかしながら、こうした傾向は育雛期間を全体を行われるかどうかについては観察結果が乏しく詳細に言及できない。なお、嶺井（1994）は同様な調査で雌個体の給餌回数が雄に比べ多くなることを指摘しているので、今回の観察結果はこのことを支持しているものとも思われる。

1-(4). 餌の採餌場所について

捕獲場所の利用については、餌が生息している場所や落ちている場所を推定して、場所利用についての検討を行った。その結果、表4及び図5に示したように、一日の採餌回数64回中、地上採餌と考えられる例が36例（56.25%）で、樹上採餌と考えられる例が9例（14.06%）、地上および樹上が5例（7.81%）、建物内部が3例（4.69%）、不明11例（16.29%）であった。したがって、地上採餌が全体の半分以上を占めていた。これは本地域では餌の主体がムカデ類、トカゲ類、ゴキブリ類、バッタなどの昆虫類と地上性の餌が運ばれ、地上近くでの採餌が行われていることがわかる。本来、海岸の開けた環境に生息する鳥であることから、地上採餌が主体の鳥であろう。

餌として確認された動物は、オンブバッタ、クビキリギス、ヘリグロヒメトカゲ、サツマゴキブリなど大部分が市街地（住宅地）近くの草地や隣接する林及び林縁などに広く生息している種である。また、ガジュマルやパンクズなど木の実や人工物も市街地の人家周辺で得られるものである。したがって、本種が市街地域の環境に適応できる能力として、こうした餌を利用する食性の広さを獲得していることが示唆される。

唐沢（1987）は都市鳥の特徴としてこの食性の広さを指摘しているので、今回の観察はそのことを支持する例であろうと思われる。

なお、本種の食性については、嶺井（1994）によても一部報告され、哺乳類のジャコウネズミや爬虫類のトカゲ科のアオカナヘビなどが利用されることが知られている。本調査地域においてもこれらの種は生息しているものと思われるが、今回その採食確認はなかった。

表4 育雛期の給餌行動の観察記録（集計） （凡例：数字は給餌回数）

調査期日：1994年5月7日，調査場所：沖縄県立博物館，調査時間：8:30—17:30

所要時間：9時間，調査方法：定点観察 天 気：晴

給餌回数：全体64，雄28（43.75%）・雌36（56.25%）

雌雄1時間当たりの給餌：7.11

・餌の種類

- 1) 昆虫類（スズメガ類、バッタ類、カマキリ類など）：39（全体比60.94%）
- 2) 爬虫類（トカゲ類、ヤモリ類）：7（全体比10.77%）
- 3) 多足類（ムカデ類）：5（全体比7.81%）
- 4) 植 物（ガジュマル）：2（全体比3.08%）
- 5) 種類不明：11（全体比16.92%）

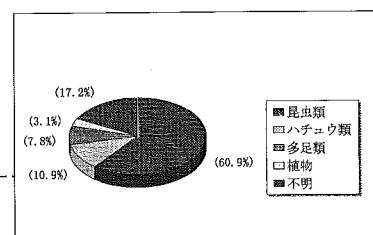


図4.育雛期の餌の種類

・採餌場所の利用

- 1) 地上性の餌：36（56.25%）
- 2) 地上及び樹上：5（7.81%）
- 3) 樹上性の餌：9（14.06%）
- 4) 建 物：3（4.69%）
- 5) 不 明：11（16.92%）

備考：草地は地上として扱った

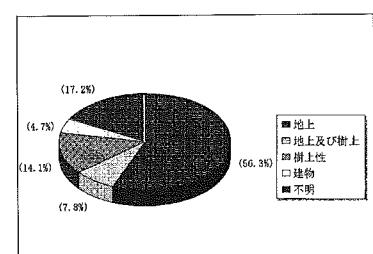


図5.採餌場所の利用頻度

1-(5). 育雛期に給餌された種類数について

育雛期に確認された餌の種類数等については、表5・表6に示した。ここではこれらの餌の種別や生息・分布状況、採餌の仕方などについて種類ごとに概説する。

A) 昆虫類

育雛期の餌の主体を占めた昆虫類では、8科19種の利用が確認された。しかし、同定不明な例もあるので、さらに調査がすすめば餌の種類数は増えることが予想される。

[鱗翅目]

(1)ガ類

ガ類の給餌は種の特定が不明のものも含めると延べ22回あった。その内、延べ9回の給餌でドクガ科のタイワンキドクガ*Euproctis taiwana*、スズメガ科のブドウスズメ*Acomeryx castanea*（写真9）、マイマイガの仲間*Lymantria* sp.（写真10）の幼虫、ハイイロヒトリ*Ceatotus traniens*（写真11）、ヒトリ科のシロスジヒトリモドキ*Asota heliconia*（写真12）、ヒトリモドキ科のモンシロモドキ*Nyctemera adversata*の幼虫、キイロヒトリモ

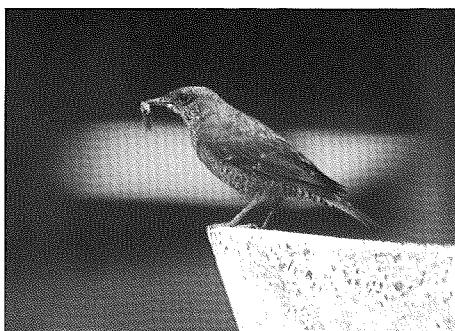


写真9 ブドウスズメ



写真10 マイマイガの一種

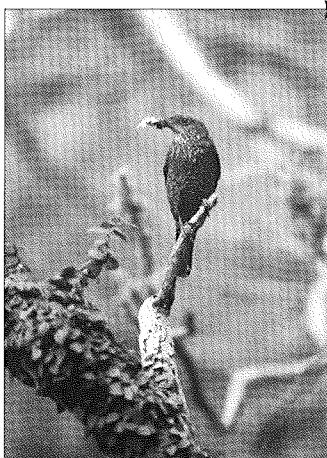


写真11 ハイイロシロヒトリ 写真12 シロスジヒトリモドキ



ドキ *Asota egens* の 3 種と合計 7 種が識別された。これらの昆虫はいずれも山地から低地と広域分布を示すような種類で、県内各地でふつうにみられる。したがって、博物館周辺にも普通に生息していると思われ、これが採食され給餌されている。

また、これら以外のドクガ類の幼虫と思われる黒色有毛の幼虫が 12 回と数多く給餌されたが、種を同定するまでには至らなかったので、今後の継続的な調査が必要であると思われる。

(2) チョウ類

シロチョウ科

青色を呈したシロチョウ科 *Catopsilia* sp. の幼虫（種不明）の 1 種が 1 回給餌された。他にも有毛黒色の幼虫世代を持つ、タテハチョウ科の仲間も採食される可能性がある。

[直翅目]

(1) バッタ類

バッタ類はのべ 9 回給餌され、バッタ科 *Acrida* sp の一種、ショウリヨウバッタ *Acrida turrita* (写真 13)、タイワンハネナガイナゴ *Oxya chinensis*、マダラバッタ *Aiolopus*

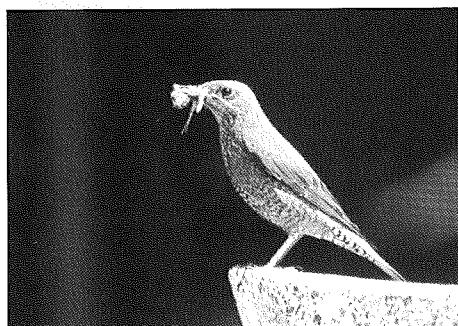


写真13 ショウリヨウバッタ



写真14 マダラバッタ



写真15 クビキリギリス



写真16 オキナワモリバッタ

tamulus (写真14)、オンブバッタ科のオンブバッタ *Atractomorpha lata*、キリギリス科クビキリギス *Euconocephalus thunbergi* (写真15) など7種が識別され、調査日外ではオキナワモリバッタ *Traulia ornata okinawaensis* (写真16) の採餌も確認された。したがって、バッタ類はガ類について採食されることの多い昆虫であった。これらの種はいずれも草原や森林地域の林縁及び林内などに生息する種類であり、地上性及び樹上性の種を問わず幅広く捕獲され利用されている。

(2)コオロギ類 (コウロギ科)

タイワンエンマコオロギ *Teleogryllus occipitalis* (写真17) の給餌が1回確認された。本種は主に農耕地や林縁の地上に生息する種である。

B) その他の昆虫

ア) ゴキブリ類

マダラゴキブリ科のサツマゴキブリ

Opisthoplatia orientalis (写真18) が識別された。本種は地上の朽ち木や枯れ葉の下、石垣の隙間等に生息するゴキブリの仲間で、博物館周辺にも生息している。他にも本種と生息場所が重なり、博物館周辺地域に生息していると見られるゴキブリ科のワモンゴキブリ *Periplaneta americana*やチャバネゴキブリ科のオキナワチャバネゴキブリ *Blattella asahinai*などが利用されることが考えられる。

イ) カマキリ類

ハラビロカマキリ *Hierodula patellifera* (写真19) が確認された。本種は沖縄では最もふつうに見られる樹上性の大型のカマキリである。おそらく、博物館周辺でもふつうに生息していて、採餌されたのであろう。

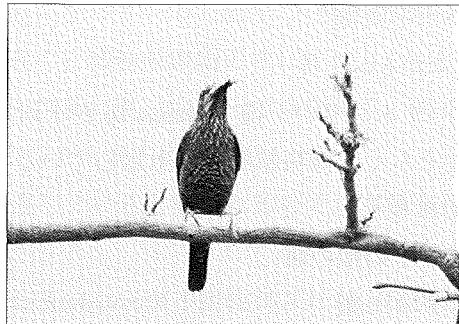


写真17 タイワンエンマコオロギ



写真18 サツマゴキブリ



写真19 ハラビロカマキリ

ウ) 甲虫類

コガネムシ科

ハナムグリの一種 *Protaetia* sp. が 1 回給餌されたが、種を同定することはできなかった。おそらく、博物館周辺に生息しているリュウキュウツヤハナムグリ *Protaetia pryeri pryeri* であろう。

C) その他の餌

ア) クモ類

ヤマシロオニグモ *Neoscona scylla* (写真20) の採餌が確認された。本種は沖縄から北海道まで広く分布し、草原から林縁のかけて径15から25cmの円網をかける中型のクモである。

イ) 爬虫類

ヤモリ科のオンナダケヤモリ *Gehyra mutilata* (写真21) とホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* (写真22)、トカゲ科のヘリグロヒメトカゲ *Ateuchosaurus pellopleurus* (写真23) の 3 種が確認された。

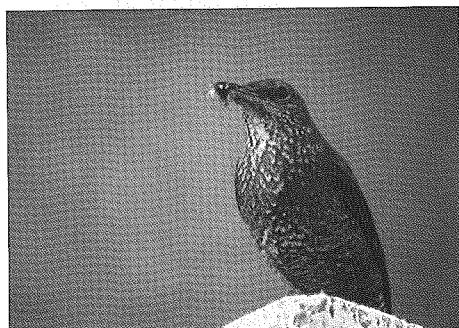


写真20 ヤマシロオニグモ



写真21 オンナダケヤモリ



写真22 ホオグロヤモリ

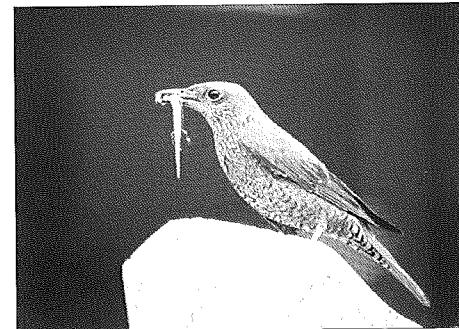


写真23 ヘリグロヒメトカゲ

ヤモリ類は人家の壁や樹上で見られるが、保護色になっているため見つけにくい場合が多い。しかし、イソヒヨドリは飛びながら、巣近くに博物館建物の壁にへばりついた本種を見つけ、嘴で引っ張り落とし、落とした後一目散に餌に向かって飛び降り、餌をついぱむとコンクリート面に何度も叩きつけ、弱めてから巣内に運んだ。

本地域では他にニホンヤモリ *Gekko japonicus* が生息していると思われるので、本種も利用する可能性がある。

トカゲ類ではヘリグロヒメトカゲ *Ateuchosaurus pellopleurus* が4回給餌された。採餌場所は博物館中庭で本種をつかまるとコンリートの面に数回たたきつけ、弱らせてから巣に運んだ。本地域で他にアオカナヘビ *Takydromus smaragdinus* やオキナワトカゲ *Eumeces marginatus marginatus* なども生息していると思われる所以、これらの種も利用することが考えられる。

ウ) 多足類

土壤動物であるオオムカデ科のノコバゼムカデ *Ostostigmus scaber* (写真24) が5回給餌された。本種を巣に運ぶ際には足の大部分を欠落させてから運ばれた例もみられたので、雛が食べやすいように加工する場合もみられた。



写真24 ノコバゼムカデ

エ) 植物

博物館中庭に植栽してあるクワ科のガジュマル *Ficus microcarpa* に熟した果実が着き、これが(写真25) が雛に2回給餌された。なお、ガジュマル以外に筆者らは沖縄島中部読谷村でシマグワの熟果を採餌することを目撃したので、博物館内や龍潭に生えているシマグワの果実も利用されることが考えられる。

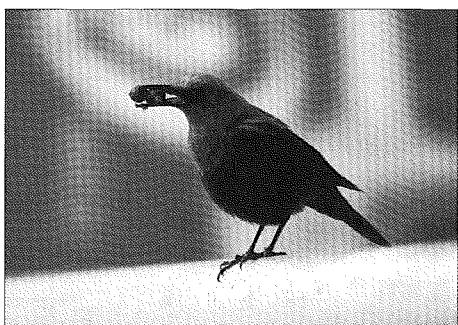


写真25 ガジュマル

オ) 軟体動物

陸産貝類のオナジマイマイ科パンダナマイマイ *Bradybaena circulus* の白色化した殻(死貝)が1回給餌された。本種の殻を利用することは、

雛の骨格形成のためのカルシウム分を補うことが考えられる。

カ) 人工物

中庭や道路に落ちていた思われるパンクズ（写真26）が運ばれた。これは、来館者が捨てたものと思われるが、人工物を利用することは興味深い。



写真26 パンクズ

表5-1 育雛期の餌の種類（育雛期に給餌された昆虫類）

種名	学名	確認回数	採餌（生息）場所
鱗翅目			
(1)ドクガ科	<i>Lymantriidae</i>		
ドクガ類の幼虫	<i>Euproctis</i> sp.	12	草地（地上）
タイワンキドクガ	<i>Euproctis taiwana</i>	1	樹上
(2)ヒトリガ科	<i>Arctiidae</i>		
ハイイロヒトリ	<i>Creatotos traniens</i>	2	草地（地上）
キイロヒトリモドキ	<i>Asota egens</i>	1	樹上
モンシロモドキの幼虫	<i>Nyctemera adversata</i>	1	草地（地上）
(3)ヒトリモドキガ科	<i>Hypsidae</i>		
シロスジヒトリモドキ	<i>Asota heliconia</i>	2	樹上
(4)スズメガ科	<i>Sphingidae</i>		
ブドウスズメガの幼虫	<i>Acomeryx castanea</i>	1	樹上
(5)シロチョウ科	<i>Pieridae</i>		
シロチョウ科の幼虫	<i>Catopsilia</i> sp.	1	草地・樹上
(6)その他のガ類			
マイマイガ類の幼虫	<i>Lymantria</i> sp.	1	樹上
〈直翅目〉			
(1)バッタ科	<i>Acrididae</i>		
バッタ類の一種	<i>Acrida</i> sp.	2	草地（地上）

表5-1 (続き)

種名	学名	確認回数	採餌(生息)場所
ショウリヨウバッタ	<i>Acrida turrita</i>	3	草地(地上)
タイワンハネナガイナゴ	<i>Oxya chinensis</i>	1	草地(地上)
(2)オンブバッタ科	<i>Pyrgomorphidae</i>		
マダラバッタ	<i>Aiolopus tamulus</i>	1	草地(地上)
オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>	1	草地(地上)
(3)キリギリス科	<i>Tettigoniidae</i>		
クビキリギス	<i>Euconocephalus thunbergi</i>	1	草地(地上)
(4)コオロギ科	<i>Gryllidae</i>		
タイワンエンマコオロギ	<i>Teleogryllus occipitalis</i>	1	草地(地上)
〈甲虫目〉			
コガネムシ科	<i>Scarabaeidae</i>		
ハナムグリ類の一種	<i>Protaetia</i> sp.	2	樹上
〈その他の昆虫〉			
(1)マダラゴキブリ科	<i>Epilampridae</i>		
サツマゴキブリ	<i>Opisthoplatia orientalis</i>	4	地上・樹上
(2)カマキリ科	<i>Mantidae</i>		
ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>	1	樹上

表5-2. 育雛期の餌の種類(育雛期に給餌された昆虫類以外の餌)

種名	学名	回数	備考
〈爬虫類〉トカゲ亜目			
(1)トカゲ科	<i>Scindae</i>		
ヘリグロヒメトカゲ	<i>Lygosoma (Ateuchosaurus) pellopleurum</i>	4	地上
(2)ヤモリ科	<i>Gekkoninae</i>		
ホオグロヤモリ	<i>Hemidactylus frenatus</i>	2	建物
オンナダケヤモリ	<i>Gehyra mutilata</i>	1	建物

表5-2 (続き)

<多足類>			
アオムカデ科	Scolopendridae		
ノコバゼムカデ	<i>Otostingmus scaber</i>	5	地上
<植物>			
クワ科	Maraceal		
ガジュマルの果実	<i>Ficus microcarpa</i>	2	地上

表6. 他の観察日で確認されたその他の餌

(1)陸産貝類

オナジマイマイ科	Bradybeanidae
パンダナマイマイ (殻)	<i>Bradybaena circulus</i>

(2)直翅目

バッタ科	Acrididae
オキナワモリバッタ	<i>Traulia ornata okinawaensis</i>

(3)真性蜘蛛類

コガネグモ科	Argiopidae
ヤマシロオニグモ	<i>Neoscona scylla</i>

(4)人工物

パンクズ

2. ツミの営巣状況について

2-(1). ツミの営巣環境について

ツミの営巣場所は、浦添市宮城では、「サンアビリテーズうらそえ」東側道路脇の街路樹に営巣が確認された(写真5,6)

那覇市泊においては図6に示したように、旧崇元寺石門の南側街路樹と石門裏手(北側)の都市公園である崇元寺公園内の2カ所であった。特に旧崇元寺石門前の道路は、県道40号線(通称又吉道路)で3車線の道路が走っており、交通量の多い所である。また、崇元寺公園には12本ほどのモクマオウやガジュマルの大木のほか、モモタマナ(コバティシ)やキヨウチクトウなどが植栽されている人為的な環境である(写真3,4)。

その営巣場所についての調査結果については、表7に示したように、4箇所に営巣が

認められた。営巣環境としては、街路樹に営巣した例が2例、公園木に営巣した例が2例あった。また、営巣した樹種としては、デイゴ、アカギなどの街路樹とモクマオウ(トキワギヨリュウ)の3種であった。いずれの樹種も人為的に植栽される種であった。

営巣木の樹高は、4.9mから20m、胸高直径は30cmから43cmであった。また、巣高は低い場所で3m、高い場所で20mであった。那覇市泊では、営巣木が50m以内に3ヶ所あり、集中的に継続使用している傾向が認められた。

巣材としては、モクマオウ、ガジュマル、ハマイヌビワなどが確認された。これらの種の中で、モクマオウとガジュマルは公園や街路樹としてよく利用される種である。また、ハマイヌビワも沖縄島南部の市街地に残存する林の中で成育する樹種である。

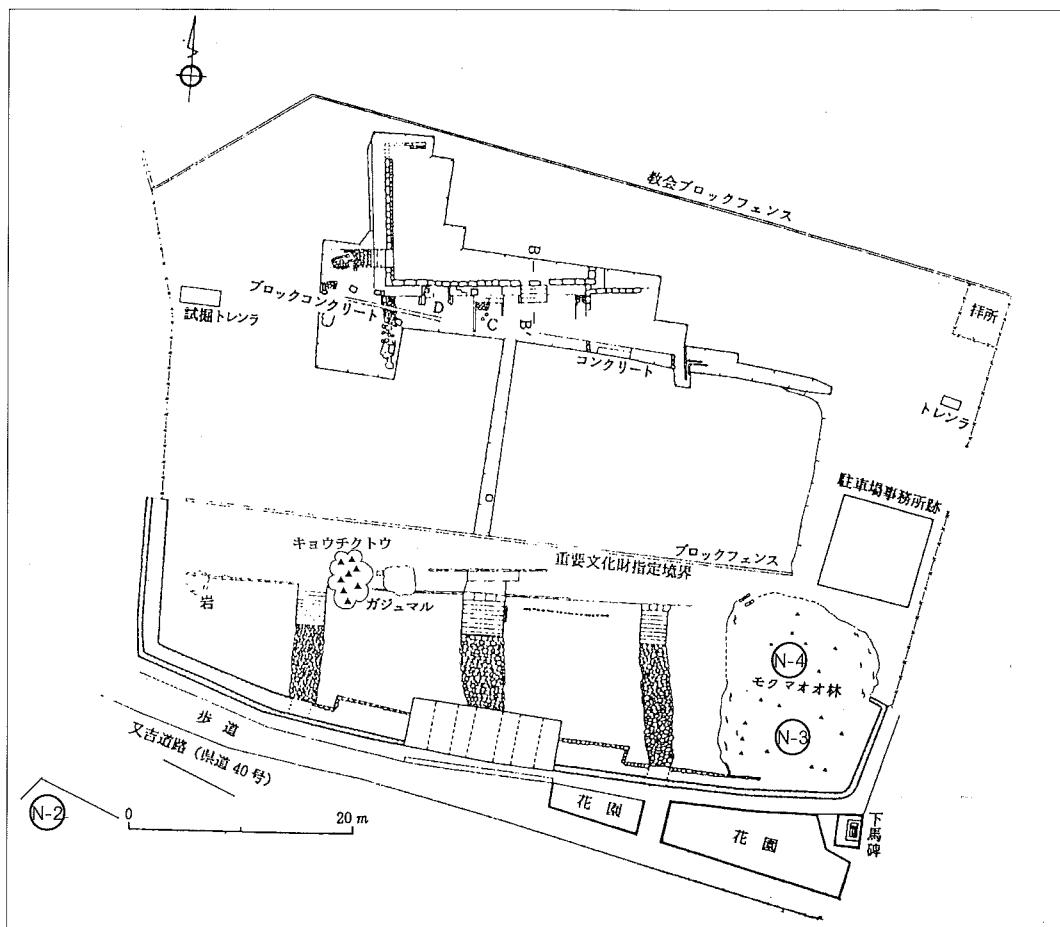


図6. ツミの営巣木の分布（那覇市泊崇元寺石門周辺）
(原図は那覇市教育委員会(1983)を改変)

2 - (2). ツミの育雛状況の観察経過

(イ) 浦添市宮城 (N-1) における育雛状況 (調査資料 (1) 参照)

本営巣地については、地元新聞（琉球新報1996/7/17付け夕刊）に営巣写真が掲載され、都市環境での営巣が7月12日に確認されている。その後、筆者らが追跡調査を行った結果、8月2日までは雛が確認されているが、8月7日の調査では、巣は落下して巣材も散乱し、雛の姿が消失していた。おそらく、ネコによる捕獲か、あるいは人為的な影響が考えられた。

なお、本営巣木（デイゴ）には帰化種のアミハラ *Lonchura punctulata*（調査資料 (1) 参照）の巣も確認されたので、この営巣木は2種の鳥類によって時期的に使いわけが見られた。

(ロ) 那覇市泊 (N-2) における育雛状況

筆者らによって、6月12日に育雛中の巣がアカギで確認された。雛の数は2個体であったが、巣立ち間際の6月22日に雛1個体が落下し、車にひかれて死亡した個体が目撃された。これは営巣木が県道の街路樹として植栽されていたため、雛が落下するとそのまま車道に落下することになるため、市街地でも交通量の多い同場所では、当然雛は車によってひかれてしまう結果となったことが考えられる。都市地域では雛が落下すると、ネコやイヌなどの捕獲も考えられるが、やはり、人間側の脅威も大きいものと思われる。

8月7日の調査では、巣立った残りの亜成鳥1個体がキヨウチクトウのしげみにとまり（写真27）親からの給餌を待っていた。その後、近くのガジュマルに移動し、親からスズメを給餌され、採餌する光景が観察された。なお、それ以後の調査では、親鳥や若鳥の姿を目にすることができなかつた。



写真27 ツミ（亜成鳥）

2 - (3). ツミの都市鳥化について

ツミは通常森林地域に生息するワシタカ類であるが、市街地に進出して営巣している現状が確認されたことは、県内では初めての報告と思われる。

唐沢（1987）によると、本州では同じワシタカ目の鳥類であるチョウゲンボウが山形県米沢市、新潟県長岡市、東京都太田区など都市や人工構築物に繁殖した8例を報告し、その要因としてヒヨドリ、キジバトなどの都市鳥の増加が、その都市鳥を餌とする猛禽

類の都市進出を促進している可能性を指摘している。

那覇市泊のN-2の巣で観察した結果では、雛に運ばれた餌は、スズメ *Passer montanus*、メジロ *Zosterops japonica*、シロガシラ *Pycnonotus sinensis*の3種であった。これらの種は人家近くの生息し、市街地でも見られる種であり、人口25万人の那覇市の市街地や公園緑地などでも普通に生息している種である。したがって、ツミはこれらの種を捕獲給餌することで、かろうじて都市環境に適応して営巣活動を行っていることが考えられる。このことは唐沢（1987）の指摘したチョウゲンボウの例とほぼ同様な適応形態であろうと思われる。

なお、那覇市泊における営巣地は、その北側後背地に米軍の住宅地としての使用されていた天久地域にあたる。この天久地域は1973年に返還合意された後、長い間放置された結果、潜在的な自然植生が回復して、野鳥の種類もツミを含め65種も確認されるなど自然環境が回復してきていた地域であった（嵩原ら、1995）。しかしながら、今日では那覇新都心としての整備が進められ、土地区画整理のための造成工事で再び自然植生が取り払われて草原化し、単純な自然環境になってきている。ここを生活の基盤としていたであろうと思われるツミが周辺地域に分散するように広がり、かろうじて営巣活動を継続していることも考えられる。したがって、この営巣地が今後ともに継続使用されるかどうかについては、今後の詳細な追跡調査が必要であろう。

表7 営巣木の概況

整理番号	所在地	樹種	樹勢	樹高(m)	巣高(m)	胸高直径(cm)	成育環境	巣材等
N-1	浦添市宮城	デイゴ	生木	4.9	3.5	30	街路	モクマオウ ガジュマル ハマイヌビワ
N-2	那覇市泊	アカギ	生木	10.10	8.45	43	街路	モクマオウ ガジュマル
N-3	那覇市泊	モクマオウ	生木	18	12.1	45	公園	モクマオウ ガジュマル
N-4	那覇市泊	モクマオウ	生木	20	12.3	35	公園	モクマオウ ガジュマル

<要約>

1. 1990年から1996年まで沖縄県内における都市鳥に関する調査を行い、イソヒヨドリとツミの市街地における繁殖活動の状況を調査した。
2. イソヒヨドリについては、育雛活動を観察し、育雛期に雛に与える餌として、昆虫類やハ虫類など24種の餌動物とガジュマル1種が餌植物として確認され、さらにパンクズが確認されるなど雑食化の傾向が認められた。
3. ツミについては、沖縄島南部の浦添市と那覇市の市街地における繁殖活動が確認され、都市鳥化している様相が確認された。

<参考文献>

- 東清二・金城政勝・湊和雄・村山望・上杉兼司 1987. 沖縄野外昆虫図鑑第1巻・第2巻
第4巻, 沖縄出版.
- 東清二・金城政勝 1987. 沖縄産昆虫目録, pp.422. 沖縄生物学会.
- 那覇市教育委員会 1983. 崇元寺跡, 範囲確認発掘調査概報, 那覇市文化財調査報告書
第9集.
- 嶺井千夏 1994. イソヒヨドリの子育て行動, 琉球大学理学部卒論, pp28.
- 初島住彦・天野鉄夫 1967. 沖縄植物目録, pp.393. 沖縄生物教育研究会.
- 樋口広芳 1985. 都市化と鳥, 野鳥436:36-39. 日本野鳥の会.
- 唐沢孝一 1987. マン・ウォッチングする都会の野鳥たち, pp.261. 草思社.
- 環境庁編 1988. 第3回自然環境保全基礎調査, 動植物分布調査報告書(鳥類) .pp.270.
日本野鳥の会.
- 大嶺哲雄・中玉利澄男・高嶺英恒 1982. 西表島中央部の土壤動物相, 主としてササ
ラダニ類, ムカデ, ヤスデ類及びアリ類. 沖縄大学紀要第2号(22) 97-139.
- 日本野鳥の会編 1982. フィールドガイド 日本の野鳥, pp.326. 日本野鳥の会.
- 中村健児・上野俊一 1984. 原色日本両生爬虫類図鑑, pp.214. 保育社.
- 知念盛俊 1976. 沖縄の陸産貝類, 沖縄の生物, 沖縄生物教育研究会編
pp.298. 新星図書.
- 嵩原健二・久貝勝盛・瀬名波任 1995. 那覇市天久で観察された鳥類(1),
沖縄県立博物館紀要(21) 79-99.
- 世界文化社編 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類, pp.399. 世界文化社.
- 千石正一編 1979. 原色両生爬虫類図鑑, pp.206. 家の光協会.
- 下謝名松栄 1976. クモ類, 沖縄の生物. 沖縄県生物教育研究会編 169-190. 新星図書.
- 入木沼健夫 1960. 原色日本蜘蛛類大図鑑, pp.206. 保育社.

調査資料 (1)

都市鳥巣木調査用紙

整理番号 N-1 調査月日：1996年 8月 7日 天気： 晴

調査地点：浦添市宮城

(1) 樹種 デイゴ *Erythrina orientalis*

(2) 樹木の状態 生木 枯死木 半枯死木

(3) 樹高 4.9 m

(4) 胸高直径 30 cm

(5) 巢高 3.5 m

(6) 巢材 モクマオウ、ガジュマル、ハマイヌビワ

(7) 成育環境 街路樹

(8) その他（備考） 調査時に巣はすでに落下していた。

アミハラの巣が同じデイゴで見られた。

調査資料 (2)

都市鳥巣木調査用紙

整理番号 N-2 調査月日：1996年 8月 7日 天気： 晴

調査地点：那覇市泊（崇元寺石門周辺）

(1) 樹種 アカギ *Bischofia javanica*

(2) 樹木の状態 生木 枯死木 半枯死木 その他

(3) 樹高 10.10 m

(4) 胸高直径 40 cm

(5) 巢高 8.45 m

(6) 巢材 ガジュマル・モクマオウと思われる。

(7) 成育環境 街路

(8) その他（備考） 巣立った亜成鳥が1羽目撃され、近くのモクマオウの林で、雄雌の成鳥（番）を目撃した。亜成鳥に与えられた餌はスズメであった。

調査資料（3）

都市鳥巣木調査用紙

整理番号 N-3 調査月日：1996年 8月 7日 天気：晴

調査地点：那覇市泊（崇元寺石門周辺）

(1) 樹種 モクマオウ（トキワギヨリュウ） *Casuarina equisetifolia*

(2) 樹木の状態 生木 枯死木 半枯死木 その他

(3) 樹高 18 m

(4) 胸高直径 39 cm

(5) 巣高 12.1 m

(6) 巣材 ガジュマル・モクマオウと思われる。

(7) 成育環境 公園木

(8) その他（備考） 巢立った亜成鳥が1羽目撃され、モクマオウの木立て、雄雌の成鳥（番）を目撃した。亜成鳥に与えられた餌はスズメであった。樹下に落下して、破損したと思われる卵殻が散乱していた。おそらく抱卵失敗と思われた。

調査資料（4）

都市鳥巣木調査用紙

整理番号 N-4 調査月日：1996年 8月 7日 天気：晴

調査地点：那覇市泊（崇元寺石門周辺）

(1) 樹種 モクマオウ（トキワギヨリュウ） *Casuarina equisetifolia*

(2) 樹木の状態 生木 枯死木 半枯死木 その他

(3) 樹高 20 m（推定）

(4) 胸高直径 30.5 cm

(5) 巢高 12.3 m

(6) 巢材 ガジュマル・モクマオウと思われる。

(7) 成育環境 公園木

(8) その他（備考）

発見に向かわせる学習活動：博物館資料からの展開

前田 真之

(沖縄県立博物館)

Learning Activity Rediscovering Museum Objects:development from Museum Objects

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract: Many group tourists come to our museum and they need the help for their study of the museum objects.

we practiced the study plannings how to let them study rediscovering museum objects.

Here I'd like to show the two practices, that are interpretive ways let them study.

The first case is our volunteer's study on religious priestes, called Yokiya Noro.

The second case is study by the student of Ryukyu University.

Finally I conclude that developing the interpretive ways are very important in Japan.

[はじめに]

近年、わが国においても教育普及活動の重要性が指摘されるようになり、さらに生涯学習への高まりを背景に、博物館における学習活動のありかたについても検討する必要が生じてきている。

これまで学習活動の主体というと、小・中・高等学校の児童・生徒がその中心を占めてきたが、最近はその主体が企業であったり、大学、老人会、子供会、学童クラブであったりと広がりを見せてきており、来館者の多様なニーズに対応した多様な学習活動の計画が求められてきている。

沖縄県立博物館では、来館者の多様なニーズに対応する目的からあるいは多くの方々に学習機会を提供する目的から、ボランティア活動事業を平成5年度から導入し、その中で「発見に向かわせる解説」の研修（注1）をボランティアと共に進めてきた。また

ボランティアへの研修の試みをもとに、琉球大学教育学部の田港朝昭先生・里井洋一先生と協力しながら「県立博物館：物をとおして学ぶ」の授業（注2）を計画し、質問づくり→館内の資料を根拠にした仮説づくり→ディスカッションという博物館を拠点にした学習活動を進め、大いに参考になるものがあった。

今回紹介する学習活動の事例は、①ボランティアの解説勉強会で進めてきた「与喜屋ノロ」のケースと、②琉球大学の特別集中講義の際に、鈴木正氣先生・里井洋一先生と協力して進めた「物の観察から『博物館へおいでのよ』を改定しよう。」の二つのケースである。前者の活動は、“見えるものから見えないものへ”をテーマにし、質問づくり→検証（1）：解明部分と未解明部分の整理→検証（2）：歩いて確かめる→まとめという学習活動を進めてきた。

後者の活動は、「物の観察から『博物館へおいでのよ』を改定しよう」をテーマに、個人による疑問づくり→グループ内の疑問づくり→個人による仮説づくり→グループ内の仮説の確認→説得力のある仮説の確定→仮説の検証→ワークシート作成の具体的な提案という学習活動を進めてきた。

この二つのケースを分析しながら、今後博物館においてどのような学習活動を進めていくことが望ましいのか今後のありかたを探るのが、本稿の目的である。

I. ボランティアによる与喜屋ノロの学習

1. 展示を見て質問をつくる：沖縄県立博物館においては、ボランティアの解説勉強会の一環として、これまで“マクドナルドの質問づくり”（注3），“首里那霸港図の屏風”的質問づくり（注4）を行ってきたので、今回の歴史展示室にある与喜屋ノロの写真パネルの学習についても、ボランティアの方たちはある程度見通しが立てられるようになってきている。

これまでの学習活動では、①. 具体的な観察をとおして、観察したものから具体的な質問をつくる。②. 質問の答えを自分たちの力で調べる。③調べて分かったこと、分からぬことを整理し、さらにボランティア内の学習アドバイザーの協力を得ながら次の解明に進むというパターンを踏んできている。

与喜屋ノロに関する今回の学習（1996年3月27日）では、“見えるものから見えないものまで”観察を広げてというテーマで進めてきたが、ボランティアの方たちがどのような質問を作ってきたのか、まず作ったものから紹介していくことにする。

この質問づくりに先だち、ボランティアの方には参考文献を記載した質問づくりの様式を配布し、事前に調べたり、写真パネルを見たりすることも可能な状態にしておいた。

1. ノロが持っている扇の模様には、何か意味があるのか。また王家の印があるのか
2. この扇は、誰がつくったのか。
3. 扇の模様は、地域によって違うのか。
4. ノロのためのかんざしがあったのか。また位によって違っていたのか。
5. 祭事の場合、ノロはかんざしを身に付けていたのか。
6. ノロが頭にかぶっているは何と言うのか。
7. 季節によって、ノロの着物は変わったのか。
8. 中からどんな着物を着ているのか、また素材は何か。
9. 着物の形と着方には、きまりがあるのか、また誰がつくったのか。
10. 玉の大きさや数には、位があり、意味があるのか。
11. 玉の種類は、どうなっているのか。
12. 曲玉のヒスイの産地は、どこか。
13. 曲玉と勾玉とでは、意味が違うのか。
14. 写真の衣装は、どんな時に着るのか。
15. ノロの衣装には、正装があるのか。
16. ぞうりも正装のなかに含まれるのか。またこのぞうりの材料は何か。
17. 祭事の場合には、素足にぞうりをはくのか。
18. このノロは、ハジチをしているのか。
19. このノロは、お化粧をしていたのか。
20. ノロに年齢の条件があったのか。
21. このノロの継承方法は、どうなっていたのか。
22. 祭祀の方法は、時代により変化があったのか。
23. 祭事以外の仕事もしていたのか。
24. 祭事の種類によって、儀式などの方法が違うのか。
25. 祭祀の方法は、地域によって違うのか。

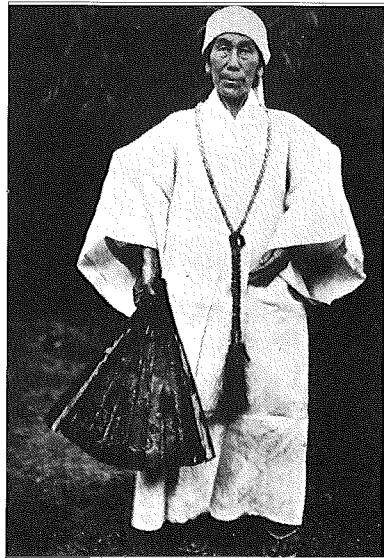


写真1 与喜屋ノロ

26. 祭祀の方法は、沖縄独自のものか。
27. どうして地域の祭祀では、女性だけが神事を扱ったのか。
28. ノロが使用する道具は、一代限りのものか。
29. このノロは、どこの出身か。
30. この写真は、いつ頃のものか。
31. 写真を写した場所は、どこか。
32. この写真は、実物大か否か。
33. 今ノロはいるのか。どこにいるのか。
34. 王府時代のノロと現在のノロとの相違点は何か。
35. ノロが政治と関わりを持ったことがあったのか。
36. ノロに修行が、必要か。
37. 現在のノロの役割は。
38. 神人（カミンチュ）とノロは、同一なのか否か。
39. この写真の人は、何という人。
40. 上からはおっている白い着物は、何というのか。
41. スカートみたいに見えるのは、折り目のせい。それとも袴のように下から着ているものか。
42. この写真を撮影したころのノロの身分は、どうなっていたのか。
43. このノロの名前に、なぜ庵美大島の与喜屋という地名がついているのか。
44. 玉の先についているひものようなものは何か。それには意味があるのか。
45. このノロを現在はだれが継いでいるのか。
46. このノロは、現在の字でいうとどこの字の祭示巳を行っていたのか。
47. このノロが、御願に行った御嶽は、幾つあったのか。また御嶽の名前は何と言っているのか。
48. ノロは、王府時代すべてが辞令書による任命の形をとっていたのか。
49. このノロが任命されたのは、いつか。
50. このノロを任命したのは、誰か。
51. このノロを任命するもとになったという明治14年の役俸規定とは、どんな内容か。
52. このノロは添石に住んでいたが、中城場内や新垣の嶽での祭り事の場合には、どのように移動していたのか。

ここに掲げた質問は、歴史展示室にある「与喜屋ノロ」の写真パネルの前で行ったものであるが、この順番は発表の順番にほぼ沿ったものであるため、ボランティアがどのようなものに先に着目し、発言したのかについても知ることができる。

今回のテーマが、“見えるものから見えないものまで”観察を広げてということになっているので、ボランティアの観察そのものを質問をとおして見ていくことにする。

ボランティアの質問について見ると、与喜屋ノロという具体的な人物について具体的な質問づくりを行ったものは意外に少なく、与喜屋ノロという具体的な人物についての質問には次のようなものがあるくらいである。

6. 頭にかぶっているのは、何というのか。
14. 写真の衣装は、どんな時に着るのか。
29. このノロは、どこの出身か。
30. この写真は、いつ頃のものか。
31. 写真を移した場所は、どこか。
39. この写真の人は、何という人。
43. このノロの名前には、なぜ奄美大島の与喜屋という地名がついているのか。
45. このノロを現在誰が継いでいるのか。
46. このノロは、現在の字でいうとどこの字の祭示巳を行っていたのか。
47. このノロが、御願に行った御嶽は、幾つあったのか。また御嶽の名前は何と言っているのか。
52. このノロは、添石に住んでいたが、中城城内や新垣の嶽での祭り事の場合には、どのように移動していたのか。

上の11の質問をのぞくとノロ一般についての質問が41と多数を占め、具体的な観察をとおして、具体的な質問を作るという点では、不十分さを残していることがわかる。そしてこの質問づくりから見えてくることは、大人の場合“物を直接見る”という活動そのものよりも、自分のこれまでの体験をもとに、自分の頭の中で抽象的に思考したものと写真パネルを関係づけて学習を行っていることが明らかになってくる。この原因としては、ノロに対する既存の知識の少なさが考えられるが、“物の観察をとおして物から学ぶ”ことの重要性は、これからも益々必要になってくると思われる。(注5)

さて、この質問づくりには不十分さがあるものの、この学習活動には次のような点で意義がある。

- ①写真パネルや絵図などには、ボランティアが既存の知識を前提として学習活動に参加できる良さがあり、質問づくりに容易に取り組めること。

②皆が出した質問づくりをとおして、他のボランティアがどのような点に关心を持つてどのような質問を出してきたのか、皆で共有することができること。

③質問づくりをとおして特定の博物館資料に関し視点が明確になり、次の学習活動のイメージが明らかになってくることである。

この質問づくりのあと、次回までに次の参考文献などを参照にして、下調べを行ってくることを申し合わせた。

(参考文献)

宮城栄昌 「沖縄のノロの研究」(吉川弘文館)

宮城栄昌ほか「ノロ調査資料」(ボーダーインク)

鎌倉芳太郎 「沖縄文化の遺宝」(岩波書店)

「琉球国由来記」(『琉球資料叢書1』名取書店)

「よきやのろくもい伝来記」

2. 検証 I (資料等から調べる) : 1996年4月19日の金曜日に2回目の解説勉強会を行った。この日は、自分たちで調べたものを出し合ったり、ボランティア会の学習アドバイザーである宮里朝光さんのアドバイスも受けながら進めていくことになった。質問として出てきたものについては、全て調べてみたが、それらは大別すると①調べて、はっきりしてきたもの、②調べたが、はっきりしなかったものの二つに分けることができる。

<調べて、はっきりしてきたもの>

1. 扇の模様には、意味があるのか。また正家の印があるのか。

(解: 太陽の絵と二羽の鳳凰が描かれている。この鳳凰は稻の種を人間界にもたらしたとされている。裏には月と花が描かれている。)

4. ノロのためのかんざしがあったのか。また位によってかんざしが違っていたのか。

(解: 王府時代に「かんざしの制」ができる。聞得大君は普段は本かんざしとして半月形のかんざしをさすが、大礼のときは竜文黄金かんざしをさす。「沖縄大百科事典」)

5. 祭事の場合、ノロはかんざしを身につけていたのか。

(解: 身についていた。)

6. 頭にかぶっているのは、何というのか。

(解：ミーサージ＜御手拭＞「沖縄文化の遺宝」)

7. 季節によって着物が変わったのか。

(解：中から着る胴衣は、夏は白の上に赤胴衣を、冬は白、赤の上に黄胴衣、綴子胴衣などを重ねる。)

8. 中から、どんな着物を着ているのか。また素材は何か。

(解：ドゥジン＜胴衣＞。女子はカカン＜下裳＞と一組にして着用する。色・生地によって白・赤・水地・紗綾・袷胴衣などがある。「沖縄大百科事典」)

9. 着物の形と着方には、きまりがあるのか、また誰がつくったのか。

(解：きまりがあったと思う。左重ね。)

11. 玉の種類は、どうなっているのか。

(解：玉伽波羅と呼ばれる数珠は、水晶とヒスイからなる。「沖縄文化の遺宝」)

12. 曲玉のヒスイの産地は、どこか。

(解：世界のヒスイの原産地はインドシナ山脈だが、日本では糸魚川周辺あたりになる。芽原一也「ヒスイ文化を読む」新潟日報社)

13. 曲玉と勾玉とでは、意味が違うのか。

(解：玉伽波羅の二個のヒスイのことを曲玉というが、全体については勾玉といっているようである。「(勾玉は) 曲がった玉を中心に、たくさんの水晶の丸玉を連ねたもの」「沖縄大百科事典」)

14. 写真の衣装は、どんなときに着るのか。

(解：ノロの大礼のときの正装である。礼装の際は、裸足である。)

15. ノロの衣装には、正装があるのか。

(解：正装がある。)

16. ぞうりも正装の中に含まれるのか。またこのぞうりの材料は何か。

(解：一概には言えない。久高島では、裸足で行っている。ぞうりの場合は、アダン葉で作られている。)

17. 祭事の場合には、素足にぞうりをはくのか。

(解：一概には言えない。)

20. ノロに年齢の条件が、あったのか。

(解：年齢は、継承の条件にはなっていない。宮城栄昌「沖縄のノロの研究」
174P以下)

21. このノロの継承方法は、どうなっていたのか。

(解：ノロの辞令書によると、地域により継承の方法が異なるようであるが、娘継

ぎの場合は、父系親族内を原則としていたようである。宮城前掲書 176P)

22. 祭祀の方法は、時代により変化があったのか。

(解:変化があった。麦穂祭・麦大祭・田圭払い・稻穂祭・年浴・シヌグ・海神祭など変化があったと思われる。特に島津氏が入ってきてから。)

23. 祭事以外の仕事も行っていたのか。

(解:多くのノロは、普通の百姓と変わらず、自分の畠(ノロクモイ地)を耕していた。しかし労働が提供されることもあった。)

24. 祭事の種類によって、儀式などの方法が異なっていたのか。

(解:それぞれの儀式によって異なる。麦穂祭・麦大祭・畦払い・稻穂祭・年浴・シヌグ・海神祭により異なっていたと思われる。)

25. 祭祀の方法は地域によって違うのか。

(解:違う。)

27. どうして地域の祭祀では、女性だけが神事を扱ったのか。

(解:古来女性が、担ってきた。)

28. ノロが使用する道具は、一代限りのものか。

(解:代々受け継がれてきた。)

29. このノロは、どこの出身か。

(解:中城の添石)

30. この写真は、いつ頃のものか。

(解:昭和2年-1927年に撮影)

32. この写真は、実物大か否か。

(解:実物大ではない。実物よりも大きい。)

33. 今ノロはいるのか。どこにいるのか。!

(解:現在でもいる。ノロの継承方法は地域により違いがある。)

34. 王府時代のノロと現在のノロとの相違点は何か。

(解:王府時代のノロは公儀ノロで辞令書により任命され、土地も与えられた。明治の改革により、ノロの土地は個人名義に登録されてしまった。かつてのような仕事はできなくなり、内容も大きく変わったと思われる。)

35. ノロが政治と関わりを持ったことがあったのか。

(解:君手摺りという神託が、尚清、尚永、尚寧に対してあったといわれているが、やがて政治に影響のないよう1779年地位を世子妃より下位に定めたと言われる。宮城前掲書 148P)

36. ノロには修行が必要か。
(解：修行はあった。)
37. 現在のノロの役割は。
(解：地域全体の祭祀を扱う。地域の私的なことを頼まれることもある。)
38. 神人（カミンチュ）とノロは同一なのか否か。
(解：神人は、村落祭祀の儀礼を執行する者の総称。通常ユタは含まれない。ノロのほかに根神（ニーガン）、撻神（ウッチガミ）、脇神、葉神、ウクディなどがある。)
39. この写真の人は、何という人。、
(解：比嘉カマト)
40. 上からはおっている白い着物は何といいうのか。
(解：ウヒーンス)
41. スカートみたいに見えるのは、折り目のせい、それとも袴のように下から着ているものか。
(解：袴のようなものは、カカン<下裳>と言われる。)
42. この写真を撮影したころのノロの身分は、どうなっていたのか。
(解：明治33年沖縄県知事により任命された琉球王国最後の女神職)
44. 玉の先についているひものようなものは何か。それには意味があるのか。
(解：玉はびるといわれるものの一部と思われる。位により、違ってくるものと思われる。)
45. この（与喜屋）ノロを現在は、誰が継いでいるのか。
(解：次男腹から養子が入り、妻が形式的に祭を行っているにすぎない。「のろ調査資料」85P)
46. このノロは、現在の字でいうと、どこの字の祭祀を行っていたのか。
(解：添石、新垣、泊、照屋、伊舍堂および中城城内)
48. ノロは、王府時代すべてが辞令書による任命の形をとっていたのか。
(解：任命の形を取っていたと思われる。)
49. このノロが任命されたのは、いつか。
(解：明治33年)
50. このノロを任命したのは、誰か。
(解：沖縄県知事奈良原繁)
51. このノロを任命するもとになったという明治14年の役俸規定とは、どんな内容か。

(解：「沖縄県社寺役知役俸飯米等給与ノ件」沖縄県史12巻587P)

<調べたが、はっきりしなかったもの>

2. この扇は、誰がつくったのか。

(解：王府の双紙庫理にある小細工奉行所で作られたと思われる。)

3. 扇の模様は、地域によって違うのか。

(解：琉球王府の支配地域では、共通していたと思われる)

10. 玉の大きさや数には位があり、意味があるのか。

(解：伊平屋、宮古、庵美大島、国頭のノロが使用する水晶玉の数は異なっている。

異なることに意味があるのかについては分からぬ。「沖縄大百科事典」)

18. このノロは、ハジチをしているのか。

(解：年齢からするとハジチをしていると予想されるが、写真では判別しがたい。)

19. このノロは、お化粧をしていたのか。

(解：紅おしろいなどは、していないと思う。)

26. 祭祀の方法は、沖縄独自のものか。

(解：沖縄独自のものである。)

31. 写真を撮した場所は、どこか。

(解：添石のノロ殿内付近で、現在の社会福祉協議会のすぐ裏のあたりと思われる。)

43. このノロの名前には、なぜ奄美大島の与喜屋という地名がついているのか。

(解：よきやは、方言では与座または与謝と言われるが、これと奄美大島の与喜屋とをかけていると中城村史で述べている。おもろそうしにも出てくるが、奄美の与喜屋という地名は不明である。)

47. このノロが、御願に行った御嶽は、幾つあったのか。また御嶽の名前は何と言っているのか。

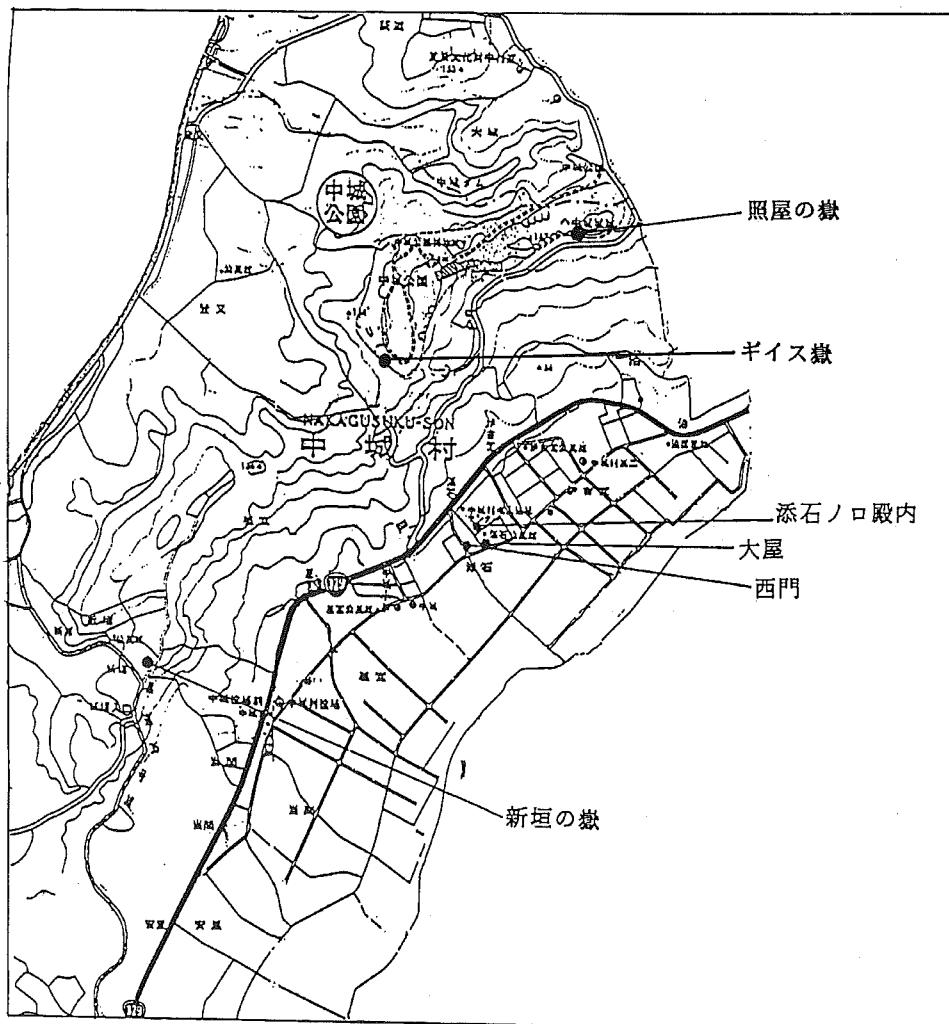
(解：琉球国由来記によると城内に7か所、新垣の嶽を含め3か所、合わせて10か所とある。しかしどの御嶽が城内のどこにあるのか、また新垣の嶽で天次アマタカノ御イベの神を祭るところがどこになるのか分からなかった。)

52. このノロは添石に住んでいたが、中城城内や新垣の嶽での祭りごとの場合には、どのように移動していたのか。

(解：馬で移動したと思われる。1日ですべてを消化したのかは分からぬ。検討の余地あり。)

解説勉強会でお互いに調べていくうちに、ある程度調べがついてきたものと、調べてみたが、はっきり分からぬるものに整理することができた。しかし当初の質問づくりが、与喜屋ノロという具体的な人物に向かうよりも、ノロ一般についてのものが多くなってきたため、調べたものもノロ全般に関するものが増えてきました。

この解説勉強会のあと、31番、43番、47番、52番の分からなかった質問を中心にもう一度調べてみるため、現地研修の計画を組むことになった。



* 第1図：中城城跡周辺地図（この地図は、福岡人文社の「沖縄県広域道路地図」に見学場所を加筆したものである。）

ここに紹介したノロ殿内や御嶽などの分布をとおして与喜屋ノロの行動範囲を考えることができる。

3. 検証II（歩いて確かめる）：1996年5月17日金曜日13時から「与喜屋ノロの拝所を巡る」というテーマで、次の順路でフィールドワークを実施することにした。しかし今回は、時間の制約上、ヨキヤ巫が回ったと琉球国由来記に記されている拝所10か所のうち、照屋の嶽、ギイス嶽（注6）の2か所は除くことにした。

（第1図参照のこと）

- ・添石のノロ殿内跡などを探す。
- ・与喜屋ノロが管轄をしていた添石、泊、照屋、伊舎堂の部落を歩き、部落の位置や距離感をつかむ。
- ・中城城内を回り、琉球国由来記にある「中森ノ御イベ」、「シライ富の御イベ」、「雨乞ノ御イベ」、「小城ノ御イベ」、「ナミナミノ御イベ」、「カワヤグラノ御イベ」、「トモヤグラノ御イベ」、「御當藏火神」を祭る8か所の拝所を確かめる。
- ・新垣の嶽を訪ね、添石、泊、照屋、伊舎堂との地理的なつながりをつかむ。

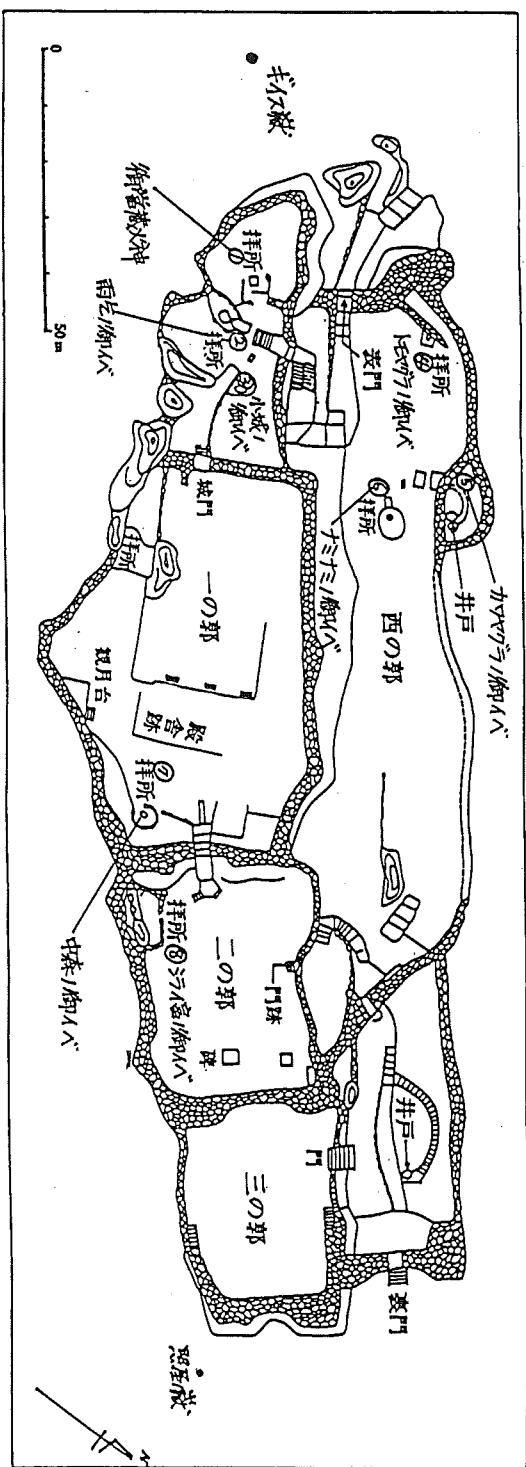
①添石のノロ殿内跡など：国道329号線を西原側から沖縄市方向へ進むと、添石の国道沿い右側に中城村老人福祉センターがある。その正面に向かって、すぐ右端を下に降りて行ったところに添石のノロ殿内があったと聞いて来た。このあたりではなかろうかという話を頼りにその坂道を下っていくと左角に比嘉正徳さんの屋敷がある。その屋敷内を見ると、中に香炉の置かれた小さな建物があることから、ここがノロ殿内跡ではなかろうかと見当をつけた。しかし当日は、比嘉さんがあいにく留守のため詳しいことを聞くことができなかった。後日中城村教育委員会に照会したところ、そこがノロ殿内跡であることが確認できた。

それから坂道をまっすぐ下っていくと、旧道と交錯するところに出る。その左角にある比嘉正育さんの屋敷が、ノロ家と親類関係にあたる元屋で大屋と呼ばれているところである。旧道と交錯したところを右折し、一番目の横筋をさらに右折して右側2番目の比嘉サダさんの家は、西門（イリジョー）と呼ばれ、大屋と並び添石の元屋と言われている。いずれの屋敷内にも離れに小さな建物があるが、沖縄大百科辞典の六月ウマチーの項を見ると「村ではノロ、捷神、根神ら神役が<殿廻り>（祭場の巡拝）をし、それが終わると門中ごとにムートゥヤー（宗家）に集まり、クディの司祭で祖靈を祀る」とあることから推測すると離れの部屋には祖靈が祀られていると思われる。

その後、旧道を経由して伊舎堂、泊の部落を回り、与喜屋ノロの管轄する地域がどのくらいの広がりなのかを歩いて確かめてみた。

中城城跡周辺拝所推定場所

出所：「文化財調査」より



* 第2図：この図は、「文化財調査」の地図に拝所の點を追加したものである。場所の選定は、「よきやのくもい伝承記」をもとに実施。よきやのくもい伝承記では、②南北ノ御内べについては、五門（五折門）の南門の真前、③中森ノ御内べは、番所門より下り見て一番、④カヤマグテノ御内べは北井、⑤ナミナミノ御内べは北井の前、⑥中森ノ御内べは番所くし番門の外とあり、場所の選定が可能。しかし⑦⑧については、中城城跡監査委員会の調査委員である赤坂政臣氏や大城義光氏が推定したものに基づく。この場所の選定については、もう少し検討が必要だと思われる。

②中城城跡の拝所を訪ねる：「琉球国由来記」にある年中祭祀「中城城内之殿」のことを見ると、御殿石階に席を設けて麦穂祭と稻二祭を行うとある。麦穂祭と稻二祭のとき、「ヨキヤ巫ニテ祭祀也」とあるように、旧暦の二月の麦穂祭、五月の稻穂祭、六月の稻大祭のときには、城内ではヨキヤ巫が祭祀を行うことになっている。

さらに照屋村のヨキヤ巫火神や新垣村のウチバラノ殿では稻二祭を、また伊舍堂村の上伊舍堂之殿では麦穂祭と稻二祭を、ヨキヤ巫が行うことになっている。このように見ると、麦穂祭のとき、ヨキヤ巫は中城城内のみならず上伊舍堂之殿も回ることになるし、稻二祭のときにも中城城内のみならず照屋村のヨキヤ巫火神と、新垣村のウチバラノ殿、伊舍堂村の上伊舍堂の殿も回ることになっている。

また城内でイベや火の神を祀る8か所においては、毎年正月十二月に祈願があり、さらに照屋の嶽、ギイス嶽、新垣の嶽のイベもヨキヤ巫が祀ることになっている。

琉球国由来記に記されたことを前提にして、ボランティアが作った質問（すなわち52. このノロは添石に住んでいたが、中城城内や新垣の嶽での祭りごとの場合には、どのように移動していたのか。）を考えてみると、この質問がまんざら的はずれなものではないことが分かってくるし、中城城内を含めたヨキヤ巫の行動範域を念頭において、城内の拝所を見てまわることの重要性が明らかになってくる。

中城城内では、8か所の拝所の場所を回って見ることにした。(第2図参照のこと)

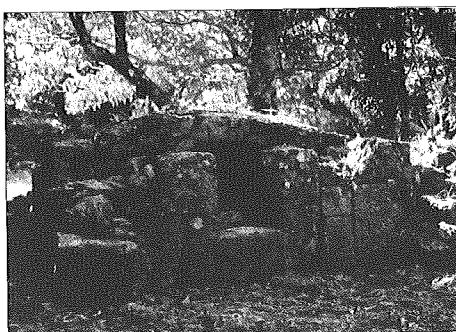


写真2. 御當藏火神 (推定場所)



写真3. 雨乞ノ御イベ (推定場所)



写真4. 小城ノ御イベ (推定場所)



写真5. トモヤグラノ御イベ (推定場所)

この辺りはほとんど遺構が残っていないが、地表部分にわずかにその跡らしい石が見うけられる

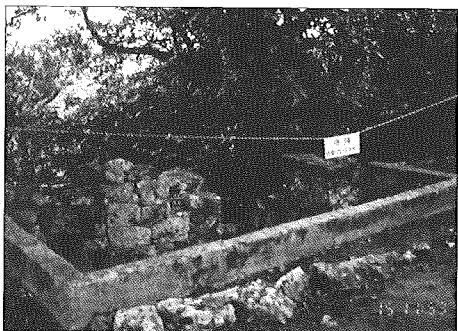


写真6. カワヤグラノ御イベ（推定場所）

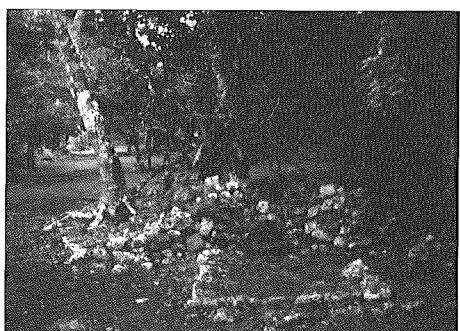


写真7. ナミナミノ御イベ（推定場所）

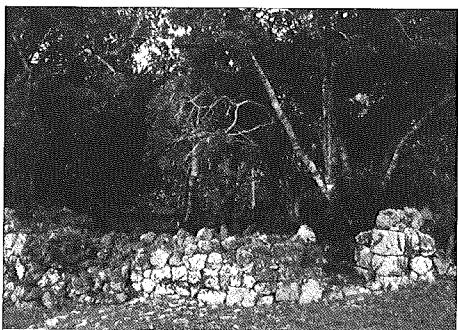


写真8. 中森ノ御イベ（推定場所）

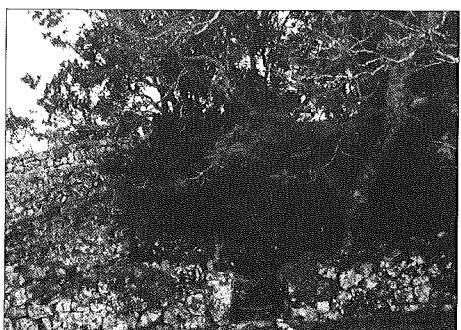


写真9. シライ富ノ御イベ（推定場所）

しかし回ってみて、城郭内のイベや火の神を祀った石囲いや石造りの祠らしきところの場所確認を行ったのだが、琉球国由来記でいうところの8か所がどこなのか特定することができなかつたし、さらにどの拝所にどの神が祭られているのかもはっきりしなかつた。また御當蔵火神については、由来記では巫祟之無シとあるので、城内ではヨキヤ巫が回るところは7か所ということになってくるが、「53. 城内祭祀のときには、この7か所全てをまわったのかな」という質問も出てきた。この後、車で新垣の御嶽に向かう途中、中城から新垣に延びている尾根づたいの道を確かめた。現在、この道は宅地造成などで途切れてしまっているが、かつては首里王府から南・北上原を経由して、新垣の御嶽の東側から中城城につながる東宿であることが確認できたし、与喜屋ノロがこの道を通って、新垣のウチバラノ殿に行った方が、最短距離であることが推測できた。

③新垣の御嶽を訪ねる：中城城跡から車で新垣に向かうには、二つのルートがある。一つは、中城城跡から国道329号線に下り、奥間から県道34号線を上って新垣に行くルートであり、二つ目は県道146号線で北中城の荻堂・登又経由で新垣に行く

ルートである。今回は、後者のルートで新垣の嶺に出発したが、車で行くとこの間の距離が随分長いことに、ボランティアの方たちは気付いた。

新垣から中城につながる東宿から新垣の嶺に登っていくと、足の踏み場もない向う側に殿が見えてきた。(写真10) ここは、琉球国由来記によると新垣のウチバラノ殿と言われているところだと思われる。沖縄大百科事典によると「殿と称するところは主として沖縄本島南部とその周辺離島である。場所は、・・・、その多くは御嶺に近い広場である。・・・殿には石の香炉が置かれ、場所によってはイベ（イビ）が祀られ、あるいはそのそばに地頭火神祠が設けられているところもみられる。祭祀を始めるにあたって、まず召請するする神のいる御嶺に向かって遙拝が行われることによって、その部落の神の御嶺所在地を知ることができる。殿とそこに召請される神とは対応する・・・」(太字は、筆者による。)

ここに記載されたものをもとに殿を見ていくと、まず入り口が二つあることに気付く。それから中に入っていくと、内部の左右に火の神が二体あり、石の香炉も二つある。どうして火の神が二つあるのかについては、地元の人にもうすこし詳しく聞いてみる必要がある。(写真11)

この殿を正面に見ながら左横の方から上に登っていくと、拝所らしきものが少なくとも二つはある。(写真12・13) その一つは、金満ウタキと記したもので、もう一つ

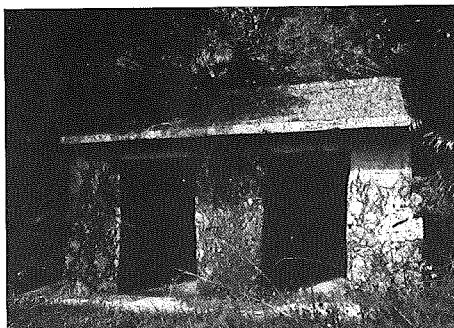


写真10. 新垣の御嶺の殿

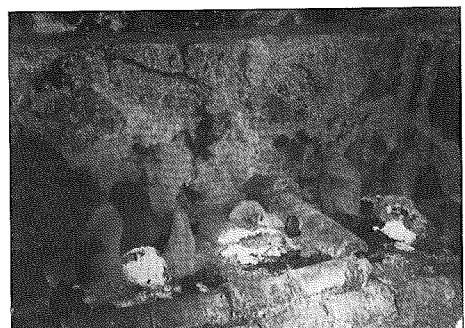


写真11. 新垣の殿の内部

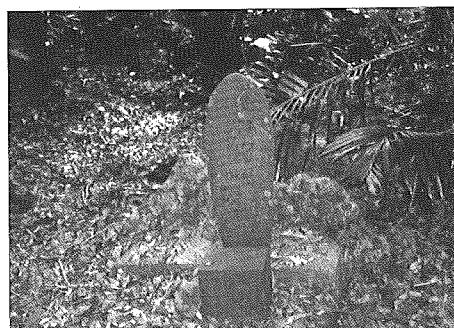


写真12. 新垣の御嶺の拝所



写真13. 新垣の御嶺の拝所

は天継と記したものである。両方とも比較的新しく作られた印象を受けるが、由来記にある神名「アマタカの御イベ」は、もともとこの御嶽内のどの場所に祀られていたのかその日の探索だけでは判断することが困難であった。史料などでは、一見自明のように見えたものでも、実際来てみるとそれでもはつきりしないものが数多くあることをボランティアの方たちは、体感したことと思う。

4. 与喜屋ノロ学習の課題：今回の学習は3回で構成し、①写真パネルを見て質問づくりを行う、②資料から調べて検証を行う、③歩いて確かめる活動を行う、を進めてきた。今回は、“見えるものから見えないものまで観察を広げて”というテーマで、写真パネルの具体的な観察をとおして与喜屋ノロの具体像に迫る学習活動を行うことであった。この中で、幾つかの課題も生じてきているが、学習の中で体験したプラスの側面もあるので紹介しておく。

(プラスの面)

1. 観察の中で、具体的に見ていくことの大切さを痛感したことである。質問づくりを見ると写真パネルから出発するよりも、自分の頭で考えた抽象的な思考が強いことが明らかになっている。写真資料に迫り、与喜屋ノロに関し具体的なイメージ化を図るためにには具体的な質問づくりの必要性を感じたのではなかろうか。具体的な質問は、調べ学習の中でもその本人の問題意識を鮮明にするが、抽象的な質問例えば“祭祀の方法は沖縄独自のものか”などの質問は間口が広く漠然としていて、この後の展開には方法論的な整理が必要になってくる。

2. 質問づくりを文献で調べて分かったつもりのものが、野外踏査に出ていざ調べてみると確定できないものがたくさんあり（例：中城城内の拝所の位置確認、新垣の御嶽の位置確認）、そのことからフィールドワークの必要性を感じたこと。

3. 野外踏査に出て実際に歩いてみたことで、イメージが具体的になってきたものに、“祭祀のときのノロの場所移動などがある。”さらに拝所を回る順路に関する質問なども、この踏査の中から生まれてきている。後の調査で分かった照屋の嶽やギイス嶽までをも見学の中に組み込むことができれば、ノロに関するイメージがより正確さを増したと思われる。

しかしここで得た教訓を生かし、さらに発見に向かわせるためには、次の課題を克服していくことも必要である。

(課題)

1. 野外踏査の成果も踏まえて、新たに何が分かり何が分からなかったのかまとめの

整理を行うことである。例えば後日の調査で分かった太平洋側の城壁下にある照屋の嶽や表門よりはるか南側部分にあるギイス嶽の存在は、ノロの行動範囲を考えるとき、イメージをより具体化させてくれるものと思われる。

2. そして未解明部分の探求のために、次に何をすべきか、またどのような支援を行っていくべきかを明らかにしていくことである。

たとえば与喜屋ノロの場所移動の手段については、久米島のチンバーの記録写真を手がかりにしてみると、中城城内の拝所の位置や正月などの御立願などのときに回る順路、拝所の特定については、「よきやのろくもい伝来記」をもとに分析を試みるとかのアドバイスを送ることが次の支援として考えられうるであろう。例えばシライ富ノ御イベは「番所くし御門の外」、小城ノ御イベは「番所門より下り候て一番」、雨乞ノ御イベは「右同下の御門の真ん前」、カワヤグラノ御イベは「包井」、ナミナミノ御イベは「包井の前」、中森の御イベは「番所くし」とあることから、目安となる番所の場所がはっきりすれば、そこを基準にして場所の推定が可能となってくる。

3. このような手立てを行っても、それでも解明できない部分が出てくることも予想されるが、それは逆に次の学習へのステップに繋っていく側面もあると思われる。
ただ43番の質問に出てきた与喜屋ノロの与喜屋という地名が奄美大島のどこにあるのかについては解明できなかった。

II. 「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習

博物館資料をもとにした「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習は、1996年7月10日に沖縄県立博物館で行われたものである。この授業は、琉球大学教育学部における鈴木正氣先生の集中講義「社会科要説」の授業の一環として行われ、鈴木正氣先生、里井洋一先生と三者による調整のもとで計画を進めた。

1. 学習活動の手順：このテーマで学習を始める前に次のような手順を明らかにした。

◇学習活動は、次のようなワークシートの項目で勧めることにする。

- ①. 物をよくみて疑問に思ったことを下に書こう。
- ②. あなたのグループの人が疑問に思ったことを書こう。

- ③. 上記の疑問にたいする答えを仮説の形で書いてみよう。
- ④. あなたのグループの人が提示した仮説を書こう。
- ⑤. 仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありましたか。
- ⑥. 仮説を勉強するために博物館の中の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館で調べたことを下に書きましょう。
- ⑦. 以上の作業とこの2日間の講義からえた知見にもとづいて、『博物館へおいでよ』の該当部分を改訂して、下記に示せ。

◇学習の対象となる博物館資料を次のように設定し、8グループにより選択をしました。

- ・万国津梁の鐘（ロビー）
- ・港川人（歴史展示室）
- ・進貢船（歴史展示室）
- ・首里那霸港図の屏風（歴史展示室）
- ・江戸上り行列図（歴史展示室）
- ・織物（美術工芸室）
- ・バーキとティール（民俗展示室）
- ・丸木舟とハギ舟（民俗展示室）

2. 学習の様子をワークシートに見る。：それぞれのグループでどのような学習を展開しているのか、グループの中から代表的なものを取り上げ見ていくことにする。
 ＜万国津梁の鐘グループ：グループよりも個人の仮説が調べ学習で影響したケース＞

①物をよくみて疑問におもったことを下に書こう。

	物をよくみて疑問におもったこと
福地さん	<ol style="list-style-type: none"> 1. いろんな字が刻まれているのはなぜか。 2. 万国津梁とはどういう意味か。 3. つり鐘の部分が、龍のようなものには意味があるのか。 4. 花がらの紋章のようなものは何か。 5. 大きさに意味があるのか。 6. どれくらいの重さか

圖師さん	7. 普通の鐘と違つて黒がかっているのはどうしてか。 8. あちこちの破損のあとは 9. 龍のようなものがほられたのは、何の意味があるのか。 10. こんなにおおきいのにどうやってはこばれたのか。どこで作ったのか。
岩谷さん	11. どこでつくられたのか。 12. 何故このような事が鐘に記録されたのか。 13. この鐘に示された貿易の内容は 14. 今の鐘との違い、他地域の鐘との違い 15. ほとんどの鐘がこの年代に鋳造されているのは何故か。
西平さん	16. どこで造られ、どこから産出した材料（鉄）を使用したか。 17. 誰が造ったか。 18. なぜ王の名前は、ほっていないのか。
松林さん	19. イボイボはなぜついているのか。 20. ドラゴンと龍柱のカンケー 21. 書いてある文字は何を意味する。

5名の学生の質問を整理してみると、A. 鐘の形態やその意味に関するもの（1・3・4・5・6・7・8・9・19・21）、B. 製造者・製造方法・原料に関するもの（11・16・17・18）、C. 鐘の運搬に関するもの（10）、D. 銘文の内容に関するもの（2・12）、E. 別の鐘との比較や同時代における鐘の製造を前提にしての質問づくり（7・8・14・15）に分類することができる。ボランティアの質問づくりと比較すると形態に関する具体的なものに目を向けていることが分かる。銘文の内容そのものに関する質問は、少ないものの、他の資料との比較や同時代の鐘の製造に関する認識の上に成り立つ質問づくりも出ていることが分かる。

②あなたのグループの人が疑問に思ったことを書こう。（この内容については①で紹介してあるので省略をすることにする。）

③上記の疑問にたいする答えを仮説の形で書いてみよう。

	答えを仮説の形で書いてみよう。
福地さん	鐘をつくるように命じた尚泰久王は、鐘にいろいろな思いをはせて、とても大きくつくり、その思いを文字に刻んで、それを城につるすことにより王・国の偉大さを表していたのではないか。つり鐘の龍は、首里城の龍柱と同じようにシンボル的な役目をしており、そういう細部にまでこまかく注文をつけて、外国でつくらせたのではないだろうか。
圖師さん	尚泰久王の名が刻まれていないのは、尚泰久王がつくらせたものではなく、沖縄でつくれたものでもなく、誰かのつくれたものをとりよせたか、あるいは日本や中国でつくれたのではないだろうか。そして船で運んだ。 万国津梁の鐘をつくれたのは、当時の中国と日本との関係がうまくいっている状態が永遠につづくよう願ってのことである。

福地さんと圖師さんの仮説を比較してみると、グループで共有した質問のうち両者とも国王の鐘に込められた意図のようなものや製造場所に焦点が当てられていることが分かる。

④あなたのグループの人が提示した仮説を書こう。

- ・どこでつくられたのかというのを日本でつくれたと仮定し、船で運んだとすれば二そうではこんだのではないか。
- ・つりさげるところがきずついてないから、なわでつるしたのだと思う。
- ・鐘に思いをはせ、鐘に王や国の偉大さを表したかった。
- ・龍を注文したのはシンボルであったから。
- ・国の祭事に鳴らした。
- ・砲弾ではなく、破へんがとれてきた。

・尚泰久王の名がないのは、一般的に鋳造されたから。

⑤仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありますか。その理由を書いてみましょう。

仮説 1 「尚泰久王が、万国津梁の鐘をつくらせたのは、当時の中国と日本との関係がうまくいっている状態が、永遠に続くよう願ってのことではないだろうか。そういう意味でも、この鐘には同時期に鋳造された鐘の中でも大きな思いをはせていたのではないか。」

理由 「銘文の意味からもわかるように、この鐘の銘文は琉球国の現在の栄華を鼻高々に記してあり、その栄華がいつまでも続くよう願って、神聖なる鐘に万国津梁の鐘をつくらせたのだと思う。」

仮説 2 「尚泰久王の名が鐘に記されていないのは、同時期に鋳造された他の鐘と同じようにつくられたためで、日本や中国などからとりよせるか、あるいは鋳造する人を呼び沖縄でつくらせたかそこはわからないが多くの梵鐘がその時期につくられたことを表しているのではないだろうか。」

理由 「日本や中国からとりよせる場合、船をつかうということになると、梵鐘の重さに耐えれる船があったかというと疑問であるが、何らかの同じ方法で多くの梵鐘がその時期につくられたのではないかと考えたため。」

仮説 3 「梵鐘は仏教の法具であるから、このころ琉球国に仏教が繁栄したことを表しているのではなかろうか」

理由 「記載なし」

説得力のある仮説とその理由という項目を書いているのは5名のうち2名である。もう一人の仮説は「1. 藤原国善が鐘を造った。」その理由は「鐘にきざんでいた。」「2. 沖縄で造られた。」その理由は「どの本にも尚泰久王の命で鋳造させたとあるから。藤原国善の作とあるから、中国で造ったとは考えられなく、日本か琉球のどちらかになる。日本で造って琉球にはこぶよりも、琉球でつくった方が安全確実だと思う。」「3.

中国産の青銅で造られた。」その理由は「琉球では銅が産出するという事を聞いたことがないから琉球ではない。日本か中国となるが琉球は中華貿易をやっていて、日本よりは中国の方が親しいし、大量に産出する中国の方がやすいのではないかと考えた。」となっている。そのほかのものは、グループでぶつけあった中から出てきた説得力のある仮説よりも、自分のたてた仮説への関心の方が強くなっている。

⑥仮説を検証するために博物館の中の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館等で調べたことを下に書きましょう。

仮説1・2について

- 「……
- ・数多い梵鐘の中でも一つだけ大きわだって大きいこの梵鐘は、高さ154.5cm、口径94cm、重さ約600kgである。これは琉球に限らず中世以前一般の梵鐘からみても大きい。→“思いの大きさがわかる”
 - ・鐘に刻まれている銘文についてみると、独自の文章で記されているのは、この鐘だけである。あとわかっている19口の鐘には<君臣道合 蛮夷不侵>が入っている。」

仮説3について

「銘文のねらいは、王法（政治）と仏法（仏教）を一体にして国を繁栄させることである。それを尚泰久王の政治によって実現するとうたっている。仏教の法具である梵鐘を一つの行政体制の中核をなす殿堂に掛けたのも、王法仏法の融合である。……」

この調べ学習を説得力のあった仮説にしたがって進めるのかそれとも自分の仮説にしたがって進めるのかに分けて考察すると、二名が前者で、残りの三名は後者というふうに分かれている。しかし後者の場合、自分の仮説にしたがってまとめたというよりも、資料からそのまま書いたかたちになっており、仮説と調べたものとの関連性がやや不明な内容となっている。グループ内での話し合いが、やや不十分で、共有部分を十分に持ち合わせることが少なかったことを物語っている。

⑦以上の作業とこの2日間の講義からえた知見にもとづいて、『博物館へおいでよ』の該当部分を改訂して下記に示せ。

この部分について改訂案を提示したのは、五名のうち三名で、残りの二名は万国津梁の鐘の説明ですませている。ここでは福地案と岩谷案の二つを紹介しておく。

(1) 博物館ロビーにある「万国津梁」について

①「万国津梁の鐘」にはどのような特徴があるでしょうか。

- ・大きさはどうですか。
- ・いつ頃、誰によってつくられたのか。
- ・どこにかけられていたのでしょうか。

②鐘を描いてみましょう。

③知識を深めよう。(万国津梁の鐘を祥説)

博物館ロビーにある「万国津梁の鐘」を見てみよう。何がわかる?

*梵鐘の絵と部分の名称を書き、さらに銘文を小学生が分かるよう読み下し文にしてある。

○万国津梁の鐘と博物館にある他の鐘と比較してみよう。(色・形・大きさ等)

違っていたら何故違うかを考えてみよう。

○他の国や日本において違った形式の鐘がないか探してみよう。

ここで紹介した改訂案は、①鐘の形態についての比較検討、②銘文の内容理解という点では、元のものとの違いはない。違いは外国の鐘との比較が加わっているところである。

<江戸上り行列図ほか：グループの仮説が調べ学習で影響したケース>

①物をよく見て疑問に思ったことを下に書こう。

物をよくみて疑問におもったこと	
宇都さん	・楽童子は男か女か
比嘉さん	・ぼうしの色に関係あるのか・
山木戸さん	女の人は、どうしていなかったか ・着物はどうして色がちがうのか。 ・薩摩の役人や人足がどうして多いのか。
安村さん	・女性は行列に連れていけなかつたのか。 ・楽童子は何者か。

	物をよくみて疑問におもったこと
西原さん	<ul style="list-style-type: none"> ・何故日本風の着物でなく、中国風の着物なのか。 ・何故薩摩の多くの役人、人足が行列に参加したのか。 ・何故船で江戸まで行かなかったのか。
屋宣さん	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸上りのとき、めしはどこで食べたのか。 ・服は洗たくしているか。 ・雨がふっても歩いたのか。 ・みこしをかついでいる人は疲れたか。 ・赤いかさみたいなのは何か ・ほうきみたいなのは何か。
當山さん	<ul style="list-style-type: none"> ・中国風の服を着ているのはなぜか。 ・江戸に行くのは、直接行ったのか。ルートは ・中心部の習字しているのは何？ ・江戸上りはなぜ義務？ ・ぼうずがいるのは何？ ・京判升を使用させたのか。
伊波さん	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ中国風の行列なのか ・なぜ300日もかかるのか
伊波さん	<ul style="list-style-type: none"> ・舞楽団でなぜ3人もお茶を？のんでいる人がいるのだろう。 ・なぜ船でいかなかったのだろうか。 ・途中で合流するさつまはんの役人や人足たちの費用も琉球が出ていたのだろう。 ・行列での着物の色は役割ごとに違うのだろうか。またさつまの役人は行列ではどのところにいたのだろう。
辺土名さん	<ul style="list-style-type: none"> ・中国貿易の利益は薩摩に取られていたのに、何故大規模行列ができたのか。 ・滞在中はどこにいたのか。 ・何故ぞうりではなく、皆くつだったのか。

辺土名さん	<ul style="list-style-type: none"> ・何故中国風の行列にわざわざしたのか。 ・楽童子の身分は？男か女か？
小屋敷さん	<ul style="list-style-type: none"> ・出発から帰国まで300日となぜそこまで長い旅となつた？ ・なぜ馬が一頭もない。 ・ひょうたんをつけている人は、なぜ少數か。 ・江戸時代は、かごが主流であるのに、なぜ御輿に乗っているのか。 ・本来警護が目的であるはずのともが、武器らしき武器を携帯していないのはなぜか。 ・数百人も連れていく必要があったのか。 ・服で手を隠すのに意味があるのか
我如古さん	<ul style="list-style-type: none"> ・女の人はどうしていなかったか。 ・どうして中国風の行列をつくったか。 ・薩摩の役人や人足はどうして多かったか。

11名の学生の質問を整理してみると、A. 楽童子の性別を問うもの（1・3・6・733・41）、B. 行列への参列者の服装に関するもの（4・8・17）、C. 薩摩の役人や人足に関するもの（5・9・28・43）、D. 江戸上りのルートや滞在に関するもの（10・18・24・26・30・34）、E. 行列のスタイルに関するもの（23・32）、F. 江戸上り行列図の具体的な観察に関するもの（12・14・15・16・19・21・22・25・31・35・36・37・38・39・40）、G. 江戸上りの役割に関するもの（20）H. 江戸上りの財政的な負担に関するもの（27・29）、I. 江戸上りの観察から連想したこと（11・13）、J. 意味不明（2）に分類することができる。この分類のうちA・B・C・E・Fは、江戸上り行列図等の具体的な観察をもとにしたものであるが、D・G・H・Iは絵そのものの観察から得られる疑問ではなく、絵の観察やそれに関するこれまでの自分の既存の知識と関係づけて初めて成り立つ疑問である。

②あなたのグループの人が疑間に思ったことを下に書こう。（この内容については、①で紹介してあるので省略をする。）

③上記の疑問にたいする答えを仮説の形で書いてみよう。

答えを仮説の形で書いてみよう。	
宇都さん	<ul style="list-style-type: none">・行列の服装：薩摩が自分の勢力が異国にまで及んでいることを示すため。・女は連れて行かなかったか：身のまわりの世話が必要なため連れて行った。
比嘉さん	<ul style="list-style-type: none">・ひょうたんは酒（泡盛）だったので、それを上の人（役人）に捧げる。・当時、女の人は連れて行かなかった。漁師の妻が漁に出かけなかつたことと同じことで危険だったから。・中国風の服装：中国風にしないと、薩摩の人と同じよう分からぬ。はっきりと琉球と薩摩の区別をつけ、身分をつける。
山木戸	<ul style="list-style-type: none">・着物の色によって身分の違いを現しているため。・大名行列と同じで歩いていかなければならなかつたため。・女の人がいないのは、当時男尊女卑の傾向があったため。・琉球の楽器もあるし、中国やその他の国の楽器もあったのでは
安村さん	<ul style="list-style-type: none">・（楽童子の身分）男であり、身分もかなり上の方である。・（船で江戸まで行かなかったのは）当時の船では海は危険であったため。・（薩摩の派遣者がいたのは）琉球の人が逃げ出さないため監視として
西原さん	<ul style="list-style-type: none">・（薩摩の役人の行列への参加）琉球の人日とに、自分達は薩摩に支配されているのだと認識させるため
屋宜さん	<ul style="list-style-type: none">・（なぜ中国風）中国の力は強大だ。その影響はすごい。だからいたるところに中国風が、かかわっている。

屋宜さん	<ul style="list-style-type: none"> (なぜ船で江戸まで行かなかったのか) 船は沈むのがごわいから、歩いた方が良い。 (なんで習字してる) 字は歌、坊主は歌人。 (着物の色はなぜ違う) 琉球人の逃亡を防ぐため
當山さん	<ul style="list-style-type: none"> 中国風なのは、薩摩が自分の権威が中国の及んでいるように見せるため。 船で江戸に行かないのは、通ってくる藩に見せつけるため 着物の差は、身分の差によるものではないか。 薩摩人が多いのは、琉球人が大勢でくるのは大変だから。 楽器は、中国のものも入っていると思う。 みこしに乗っているのは、中国風にするため。 赤い傘は、(目印の) 旗のかわりではないか
伊波さん	<ul style="list-style-type: none"> (中国風の行列) 中国との貿易がさかんな琉球も、幕府の属国だと諸藩に知らせるため (船で江戸に行かないのは) 陸を歩くことによって、その藩のお金を使わせ、大きな勢力をもたせないようにするため。 (薩摩の役人や人足) 一応、琉球は薩摩の領土なので、その領主である薩摩の役人もついていかなければならなかつた。
辺土名さん	<ul style="list-style-type: none"> (中国風の行列) 日本の支配力が異国にまで及んでいることを見せつけるため。 (楽童子の身分・性別) 士族。(歌舞伎の女形のように男だったのではないか。) (薩摩の役人の付き添い) 実質的に薩摩の支配下にあることを示すため (行列に女性の参加者はいたのか) いたと思う。身の回りの世話など (着物の色の違い) 身分を表している。 (何ゆえ直接船で江戸まで行かなかったのか) 船旅は危険だし、より多くの人に見せたいから。

小屋敷さん	<ul style="list-style-type: none"> なぜ中国風の格好をしているのかは、もしこれを意図的とみなすならば、幕府が諸藩、民に幕府の権威、勢力は他国にも及んでいることを示したかったから。 (なぜ船で行かなかったか) 薩摩藩の強制 (かごでなく、なぜみこしか) これは見せびらかす、“さらし”の意味が込められている。
我如古さん	<ul style="list-style-type: none"> (薩摩の役人や人足) 薩摩の役人が多いのは盜賊から身を守るために琉球の人が逃げないようにするため。 (着物の色の違い) 着物の色のちがいは身分の差を表す。 (なぜ船でそのまま江戸まで行かなかったのか) 船を使わないので、琉球にお金をつかわせ、勢力をもたせないため

このグループの一人一人の仮説を見ると、楽童子の性別を問うもの、行列への参列者の服装に関するもの、行列のスタイルに関するもの、江戸上りのルートや滞在に関するもの、薩摩の役人や人足に関するものが、ほぼその中心を占めている。グループの人が疑問に思ったことを書き記す中でそれぞれの疑問部分が共有され、それに対応した形の仮説設定がそれぞれの部分で進んで行ったことがうかがえ、グループ学習がうまくいくていることが伝わってくる。

④あなたのグループの人が提示した仮説を書こう。

このグループのそれぞれがまとめたものは、話し合いによる共有でほぼ同じ内容になっている。ここでは、宇都さんが、まとめたものを代表という形で紹介する。

(行列の服装) 薩摩の権威が他国に及んでいることを見せるため。

(船でいかない) 行列で薩摩の力をを見せつけるため。

(着物の色の違い) 身分の差によるもの

(着物が古い) それしかないから

(かごじゃなくてみこし) 薩摩が自分の勢力は異国にまで及んでいることを示すため

(女は連れて行かなかったのか) 身の回りの世話が必要なため連れて行った。

(楽童子は男か女か) 馬に乗っているから男

(楽器) 琉球のもの、中国風。

⑤仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありましたか。その理由を書いてみましょう。

仮説 1 (行列の服装は) 薩摩の権威が他国に及んでいることを見せるため

理由 「わざわざ中国風の服装をさせることはないし、大勢の薩摩の人足や役人を連れてまでの行列をつくって行く必要もないと思う。」

仮説 2 書道をしている人が歌を詠んでいるというのは、説得力があると思う。

理由 「茶道と共に、坊主人のを歌人と仮定すると、その場面によく合うのである。」

仮説 3 舞楽団で使っている楽器は、中国伝来の琉球のもの

理由 「その当時、琉球は中国の影響をとても受けていたため、楽器などもその影響を引きずっているのではないか」

仮説 4 陸路なのは、金を使わせて琉球が勢力をつけさせないように

理由 明記せず

仮説 5 「かごではなくみこしなのは、琉球の使者をさらしものにするため」

理由 「やはり琉球は島津の配下なのだというのを知らせるため」

仮説 6 (楽童子は) 士族で男ではないだろうか。当時歌舞伎の女形のように芸をするのは男でそれも公式の場でも通用するような芸の持ち主なら、教養を身に付けた人物であろうと推測される。このことから士族であろうと思われる。

理由 「当時の風潮まで考えられているから」

仮説 7 「(薩摩の役人や人足が付添っていたのは) 盗賊などから行列を守り、なおかつ琉球人が逃げないように。形式的には幕府の支配下となっていても、実質的には薩摩の支配下にあることを示すため。」

理由 「琉球人が逃げないようにというのを考えつかなかった。確かに逃げられて、薩摩の仕打ちを口外されたら困るだろうということを考えたら納得した。」

ここに紹介したものは、11名それぞれが書いたものをまとめたものである。仮説1に触れたものは6名、仮説2は2名、仮説3は1名、仮説4は1名、仮説5は1名、仮説6は3名、仮説7は1名となっている。行列の服装をとおして、その背後にあるものへの関心がグループ内ではかなり強かったことが明らかになっている。

⑥仮説を検証するために博物館の中の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館等で調べたことを下に書きましょう。

仮説1について（安村さん）

「風俗・言語・習慣は本土人と同一視してはならない」という指示が琉球使節が出発する以前に島津から出ていた。すなわち異国的情体を奨励して上洛せしめたのであった。六代将軍家宣の承統を慶賀する琉球使節の上洛の前年（宝永六年）には風俗をはじめとして、道中の宿幕も繻珍などで中国風にするようにとの詳細な令達を下した。

このために琉使一行の江戸参府時の行列の役名もすべて中国式に、正使、副使、贊議官、楽正などと中国名で訓ませていた。このように異国的情調を存分に鼓吹させて登城し、さらにこの行列の前後は薩摩役人警固しながら参府していた。これは琉球使節の往来に際して、島津氏が自己の権勢を誇示したものであった。いわゆる海外の一小王国を自らが統治しているという事実をわが国内の諸侯の誇示したのであった。また対幕政策においても・・・自己の外様大名としての立場を少しでも軽くするためにも、この忠誠心の發揮はこの上なく有効なものであった。」（『近世薩琉関係史の研究』）

仮説2についての調べなし

仮説3について（山木戸さん）

「使者の行列の服装、これに伴う奏楽はすべて中国風であり、異国の行列として人々は目を見はり、耳をそばだてた。行進中の奏楽は路次樂といい、銅羅、両班、哨吶、喇口八、銅角、鼓から成っていた。音楽器と打楽器の編成で、日本人の耳には珍しかった。江戸に在府中には、城内で將軍以下重臣の前で演奏もあった。座樂という。その曲目は太平調、桃花源、不老仙、楊香、寿星老、万歳樂など完全に中国風のもので、楽器もまた中国のものそのままだが、三線、四線、長線、三味線、の加わる点に特色が見える。踊りも行われ、網打踊、打組踊、御代台口説、四つ竹踊などがあり、唐踊には打花踊、和番、風箏記などが演じられた。こうして琉球の使節団のすべては、中国文化そのものとして日本に映じていた。」（『江戸時代図史 南島編』）

仮説4について（辺土名さん）

「江戸上りのルートは、まず大阪まで船で行き、大阪から陸路で江戸に向かう。目的はやはり、異国を支配下においていることをしらしめるため。」

仮説5についての調べなし

仮説6について（伊波さん）

「樂童子の服装については『これ大方美少年なり、十四歳より十六歳まで唐織のかぎりなき美服を着す』と記してある。このことから樂童子は男である。」

仮説7についての調べなし

ここに紹介したものは、仮説について図書館などで調べたものである。この中で仮説1について調べたものは7名、仮説2はなし、仮説3は5名、仮説4は4名、仮説5はなし仮説6は5名、仮説7はなしとなっている。このグループが図書館で調べたものは、説得力のある仮説に関連するものが多く、その中でも行列の服装や樂童子、楽器への関心が高くなっている。この結果はグループ内での議論が割と活発に行われ、その中で説得力をもった仮説に基づく形で調べ学習が展開していったと思われる。

⑦以上の作業とこの2日間の講義からえた地見に基づいて、『博物館へおいでよ』の該

当部分を改定して下記に示せ。

ここでは、2名の改訂案を紹介する。

比嘉案：観察したものから、その社会的な事象の意味にまで理解を広げさせようとしたもの

～江戸上りについて～<改訂版>

江戸上りとは何のことだろう？それは薩摩藩（島津氏）に支配された琉球王国が国王が代わるたびにその即位を感謝する使節として謝恩使を、江戸の將軍が代わるたびにこれを祝う使節として慶賀使をつかわすことがならわしになっていました。これらのことと江戸上りといいます。

Q 1. 江戸上りの時の
は琉球人の服装は、どん
のな感じの服でしょう。

Q 2. 服の中に手を入れて
いる人がいますが、それは
どのような国の人と似てい
ますか。

Q 3. 茶会の時の樂器
どこでつじゅられたも
かな？

*ヒント：どこかの国の服と似ている。

Q 4. さてこの問題を考えたら、次はなぜ江戸上りの行列で琉球人はこのような服装をしていたのだろう。自分なりに考えてみよう。

山木戸案：まず観察を先にもってくるのか、それとも調べさせてから観察させるか、ワークシート作成上の基本論点を含むもの。

13江戸上りとは何かな？



(改訂の理由)

なぜこの部分を改訂したのか：最初の問題は「①次の琉球楽器の中から 図の中にあるものを選んで○をつけよ。」だったが、これでは予想される子供の反応が 単純すぎたので、まず実際史料等で名前を知り、そしてその楽器の名前の特徴などから図がないような場合でも選択できるようにする。

山木戸さんのワークシート作成には積極的なものを感じるが、次のような点で検討を要する。

- ・観察を行う前に調べることを優先させたほうがよいのか：博物館で大切なことは物からスタートされることであるが、観察以前に調べ学習をとり入れることにより、観察への接近に各人の差が影響してこないか。
- ・ワークシートにある楽器の図と展示資料を比べ、展示資料に出てくる楽器を細かく観察させることの方が、むしろ次の学習へのステップにつながるのではないだろうか。

2. 教師側が提供したワークシートの有効性：共有部分の創出をどのようにしかけるか。

今回受講生が使用したワークシートは、琉球大学教育学部の里井先生が打ち合わせをもとに作成したものである。このワークシートを使って学習を開いてみて、この

ワークシートの果たした役割についても述べておく必要がある。

このワークシートは7項目からなり、大きく分けると①疑問の記録（1と2）、②仮説の記録（3と4と5）、③仮説の検証（6）、④具体的な提言：ワークシートの改訂（7）で構成されている。

この中で、集団学習において有効であったのは、疑問の記録と仮説の記録である。疑問の記録は、個人の疑問（1）とグループの人が疑問に思ったこと（2）の二つで構成され、グループの他のメンバーがどのような視点からどのような疑問を抱いているのか情報の共有が行われるようになっている。さらに仮説の記録は、個人の仮説（3）、グループの仮説（4）、説得力のある仮説（5）の三つで構成され、グループのディスカッションを媒介に何を検証すればよいのか共有部分をもとに検証の方向に向かうようになっている。疑問と仮説におけるグループを意識したこの方法が、博物館資料に関するグループ学習のステップになりうることは間違いない。

3. 万国津梁の鐘グループと江戸上りグループの学習の違いは何か：ディスカッションによる共有部分創出の役割

同じワークシートを使って博物館学習を進めたにも拘らず、万国津梁の鐘を学習の対象としたグループと江戸上りを学習の対象としたグループとでその後の学習の展開に違いが見られるので、もう一度両グループの違いを整理し、その上で検討してみることにする。

	万国津梁グループ	江戸上りグループ
①物を良く見て思ったこと。	鐘の形態やその意味に関するものが多く、それに製造者・製造方法・原料に関するもの、別の鐘との比較や同時代における鐘の製造を前提にした疑問、銘文の内容に関するもの、鐘の運搬に関するものの順となっている。	江戸上り行列図の具体的な観察に関するものが圧倒的に多く、次に楽童子の性別・江戸上りのルートや滞在に関するもの、薩摩の役人や人足、行列への参列者の服装、行列のスタイル、江戸上りの財政的な負担の順となっている。

	万国津梁グループ	江戸上りグループ
④あなたのグループの人が提示した仮説	7つの仮説	8仮説
⑤仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありましたか。	<p>説得力のある仮説とその理由を書いているのは5名中2名のみ。説得力のある仮説としては3つ挙げている。</p> <p>仮説1.尚泰久王が、万国津梁の鐘をつくらせたのは当時の中中国と日本との関係がうまくいっている状態が、永遠に続くよう願ってのことではないだろうか。そういう意味でも、この鐘には同時期に鋳造された鐘の中でも大きな思いをはせていたのではないか。</p> <p>仮説2.尚泰久王の名が鐘に記されていないのは、同時期に鋳造された他の鐘とおなじようにつくられたためで、日本や中国などからとりよせるか、あるいは鋳造する人を呼び沖縄でつだうか。当時歌舞伎の女形のようくらせたかそこはわからないがに芸をするのは男でそれも公式の場多くの梵鐘がその時期につくらでも通用するような芸の持ち主なら、れたのではないだろうか。</p>	<p>説得力のある仮説とその理由について11名全員が書いている。</p> <p>仮説1.(行列の服装は)、薩摩の権威が他国に及んでいることを見せるため。</p> <p>仮説2.書道をしている人が歌を詠んでいるというのは、説得力があると思う。</p> <p>仮説3.舞楽図で使っている楽器は中國伝来の琉球のもの</p> <p>仮説4.陸路なのは、金を使わせて琉球が勢力をつけさせないように。</p> <p>仮説5.かごではなくみこしなのは、琉球の使者をさらしものにするため。</p> <p>仮説6.(樂童子は)士族は男ではないか。当時歌舞伎の女形のようくらせたかそこはわからないがに芸をするのは男でそれも公式の場多くの梵鐘がその時期につくらでも通用するような芸の持ち主なら、教養を身に付けた人物であろうと推測される。このことから士族であると思われる。</p>

	万国津梁グループ	江戸上りグループ
	<p>仮説3.梵鐘は仏教の法具であるから、このころ琉球国に仏教が繁栄したことを表しているのではなかろうか。</p> <p>仮説4.藤原国善が鐘を造った。</p> <p>仮説5.沖縄で鐘が造られた。</p>	<p>仮説7.琉球人が逃げないようにとうのは考えつかなかった。逃げられて薩摩の仕打ちを口外されたら困だろうということを考えたら納得した。</p>
⑥仮説を検証するため博物館の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館などで調べたことをもとに書きましょう。	⑦で紹介した説得力のある仮説に関して調べたものは二名。残り3名は、それと関わりのないものを調べている。	仮説1について調べたもの7名、仮説3は5名、仮説4は4名、仮説6は5名となっている。仮説2・5・7は調べたものなし。

上の表で両グループのメンバーが何を調べたのか比べて見ていくと、説得力のある仮説とそれほど関連させずに学習を進めていったのが万国津梁の鐘グループだとすると、江戸上りグループは説得力のある仮説と関連して学習を進めている。

この違いが、一体どうして起きたのか考えてみると、対象となる博物館資料の持つ役割も無視しえないが、一番大きな影響を持ったのはグループによるディスカッションと思われる。今回8グループの学習すべてに付き添って見学することはできなかったが各グループにおける集団学習においてはディスカッションによる共有部分の創出が、その後の展開に影響をしていると思われる。

しかし今回は8グループのうち2グループのみの考察にとどまったので、何を調べたかについては対象の問題が大きく影響したのかそれともディスカッションの問題が影響したのか、その結論については今後も再検討を要するであろう。またこの8グループの中で、丸木船とハギ舟を対象としたグループは、具体的な観察の面で興味深い点を含ん

でいたが、今回は紙面の都合で紹介することができなかった。それから首里那覇港図の屏風を学習の対象としたグループについては、観察の対象そのものの広さからくる問題点も生じており、何に焦点をしづらせて学習を深めさせるのか別の課題も存することを付記しておく。

III. 発見に向かわせる学習活動をどう展開していくのか

今回紹介した二つの事例すなわちボランティアによる与喜屋ノロの学習と「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習から、どのようなことを結論として導きだすことができるのかが最後の課題である。

先述したように、ボランティアによる与喜屋ノロの学習においては、“見えるものから見えないものまで観察を広げて”というテーマで、写真パネルの観察をもとにした質問づくり→検証Ⅰ：解明部分と未解明部分の整理→検証Ⅱ、歩いて確かめる→まとめという学習活動を行った。また「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習では観察をもとにした個人の疑問づくり→グループ間の疑問の共有→個人の仮説づくり→グループの仮説の共有→説得力のある仮説の確定→ワークシート作成の具体的な提案を行う学習を行ってきた。この両者から何を学ぶことができたのかここで結論を述べることにする。

1. 博物館資料そのものに目をむけるよう具体的に観察する方法を学ばせる。
今回の二つの学習に共通するねらいは、博物館資料そのものに目をむけ具体的に観察する方法を学ばせることであった。

しかし実際に学習を進めてみると、ボランティアが観察をして作った質問づくりには与喜屋ノロに関する具体的な質問もあるものの、ノロ一般に関する質問が多く、“物を直接見る活動”そのものよりも、自分のこれまでの体験をもとに、自分の頭の中で抽象的に思考したものと写真パネルとを関係づけて学習を行っていることがはっきりしている。このように抽象的に思考した中から生まれてきた一般的な質問づくりは新たな次の発見には結びつきにくいが、ノロ一般と具体的な存在としての与喜屋ノロとをつなぐ働きをしており、ノロという言葉を初めて聞くような学習者にとってはレディネスとしての役割を果たしていると思われる。

一方学生のグループを見ると、万国津梁グループ、江戸上りグループのいづれも具体的な観察をもとにしたものが多く、ボランティアグループとは違った結果を示している。

2. 観察から得られた具体的な質問づくりが、新たな発見に結びつくことを理解させる。与喜屋ノロの写真パネルを見ての質問づくりをみると、「このノロは、どこの出身か」とか「この写真の人は何という人。」とか「写真を移した場所はどこか」といった具体的な質問がある。このような質問には、それを調べるうちに展示室だけでは分からぬ次の方向へ学習が発展する要素が含まれており、この学習を計画した館側の 枠を越えて、新しい発見につながる可能性もある。

例えば神

奈川県にある平塚市博物館では、昭和62年度から「相模川を歩く会」を実施してきたが、この活動を続けていくうちに参加者は、館側が考えていた以上に様々な学習上の発見を体験し、やがて1994年には職員と参加者が共同で「相模川事典」を世に出すまでにいたり、現在では「古代遺跡を探す会」の活動にもその経験 が生かされるようになってきている。

我々はどのような質問づくりから、新たな発見に結びつく活動が生まれてくるのかこれからも検討を積み重ねていく必要があると思われる。

3. グループによる博物館学習においては、ディスカッション等による共有部分の創出が必要である。

ここで用いている共有部分という聞き慣れない言葉について初めに説明をしておく必要がある。二つの学習活動をもとにして言うならば、与喜屋ノロの学習においては、一人一人の作った質問づくりの発表を指しており、ワークシートづくりの学習においてはグループの質問づくり、グループの仮説づくり、説得力のある仮説づくりを指している。つまり自分の考えと他人の考えを突き合わせることにより、自分とは異なる視点や考え方のことを共通理解することである。とりわけ後者の学習活動においては、説得力のある仮説であるか否かについて判断するには、お互いのディスカッションを媒介としなければならず、共有部分の創出にあたっては、ディスカッションが大きな役割をもっている。ワークシートづくりにおける万国津梁グループと江戸上りグループが、どの仮説の検証を調べようとしたのかをみるとグループ内におけるディスカッションの成否が影響を及ぼしているように思われる。

4. 歩いて確かめる学習は、博物館資料からの展開を深化させる。

二つの学習活動はいづれも博物館資料を出発点とするが、歩いて確かめる活動はそれぞれの認識を深める働きをしている。

例えばボランティアの学習では、質問づくりを文献で調べて分かったつもりのものが、

野外踏査に出ていざ調べてみると確定できないものがあったことである（例：中城城内の拝所の位置確認など）。また野外踏査に出て実際に歩いてみたことでイメージが具体的になり、“祭祀のときのノロの場所移動”から“拝所を回る順番は”という順路に関する質問が生まれたりしている。

ワークシート作成の学習においては、進貢船のグループが歴史展示室にある進貢船の構造を調べるため、企画展示室側にあった馬艦船と比較しながら観察や調べ学習を行っている。文献資料のみならず歩いて確かめることの重要性にも気付かせ、博物館資料からの展開については、いろんな方法があることを理解させることも大切である。

[脚注]

- 注1 研修の内容については、前田真之「インタープリテイションとボランティアガイド」（『沖縄県立博物館紀要』第20号）を参照のこと。
- 注2 授業の展開については、前田真之「発見に向かわせる解説：物から学ぶ」（『沖縄県立博物館紀要』第21号）を参照のこと
- 注3 首里那覇港図の屏風の質問づくりについては、前掲20号論文54p～57p、60p～62pを参照のこと
- 注4 前掲20号論文62p～63p
- 注5 John H. Falk and Lyn D. Dierking, *The Museum Experience*, Whalesback books, at 76p～77p (1992)
アメリカに於いて長年博物館来館者の行動分析を行ってきたジョン・H・フォークとリュン・D・ディーアーキング氏によれば、「来館者は博物館資料を見て、『それは何？』『どこから来たもの？』『どれだけの値打ち？』『新しいとき、どのように見えたの？』と問い合わせる。しかし「この仕掛けが歴史の進路をどのように変えたの？」とか『この絵画が、なぜ抽象絵画において画期的だと言われたの？』とか『これらの事例は、いかなる形で慣性保存の法則を示しているのか』と問い合わせることはまずない。我々は、来館者が大人であれ子供であれ、展示を抽象的に見るよりも具体的なレベルで見ていることを議論すべきであった。」（太字は筆者による）と指摘している。
- しかし今回のボランティアの質問づくりについては、一般的抽象的な質問もかなりあり、ジョン・H・フォークなどの指摘するものとは、やや違った傾向を示している。この原因については、別に検討を要する課題であることを付記しておく。
- 注6 琉球国由来記にも登場してくる照屋の嶽、ギイス嶽のうち後者はこれまでほきりしなかったが、中城城跡整備計画の関係者が、地元関係者や研究者の協力を得て行った最近の調査で、場所の確定が行われている。中城城跡の南東にあ

る古墓群の中にある。

注7 平塚市博物館が、「相模川を歩く会」の活動の集大成として1994年に発刊している。平塚市博物館の学芸員も、この会の活動が館側の予想を越えて発展するとは思っていなかったようである。ここにおける活動も、発見に向かわせる学習活動の一つとして検討に値する。

注8 「平塚市遺跡分布調査報告 1」(『自然と文化』1994年17号)

具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について

當眞 翔一
(沖縄県立博物館)

On Chinese old coin, so called Meitosen, excavated from the cave
near by Gusichan Gusuku
Shiichi TOMA

(Okinawa Prefectural Museum)

1、はじめに

1995年10月、読谷村で古物商を営む西銘悦子氏から、「米国人の知人が明刀銭らしい遺物を洞穴内から発見し所有している」との情報が筆者のもとに寄せられた。早速、西銘氏を介してその米国人と会い、発見した明刀銭を見せてもらうことにした。第1図(図版-7)がこの明刀銭であり、これから紹介する標品である。

発見者は、在沖米軍を退役したDave D. Davenport という元軍人である。筆者は、氏の案内により発見場所の実地踏査を行うと同時に発見した時の状況を聞くことができた。

明刀銭が発見された場所は、沖縄県島尻郡具志頭村大字具志頭小字須武座原にある琉球石灰岩の洞穴内である。

Dave D. Davenport 氏とともに発見した場所を踏査しながら、現場の確認調査を行うとともに、遺物に付着している石灰分の検証等をおこなったところ、本標品について信頼できる資料だと思われたのでここに報告しておくことにする。

2、発見から今日までの経緯と発見された明刀銭の状況について

Dave D. Davenport 氏が明刀銭を発見したのは1992年の1月頃である。

氏の話では、当時、友人数人と連れ立って沖縄戦の際の戦争遺留品を探す目的でこの洞穴に入り、金属探知機を使いながら遺留品探しをしているとき洞穴の奥壁付近で金属反応があったので約10~20cm程掘り下げたところ明刀銭が発見されたといっている。その時には標品のもつ学問的意義や価値についてよく知らなかったが、大事な遺物だと思ってそのまま保管していたのだという。

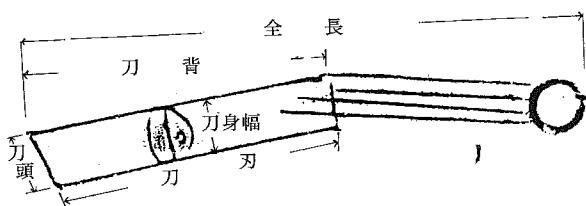
ところで、Dave D. Davenport 氏は、いわゆる文化財のコレクターではない。また、考古学の研究者でもなければ、遺跡から発掘される遺物に対して興味をもって調べている人でもない。事実、明刀銭についての知識もそう深くないようである。氏は、十数年前に在沖米軍の兵隊として来沖し、沖縄戦の状況などを知るうち戦争遺留品や戦跡等に興

味をもつようになったという。そして、沖縄の人と結婚して退役後もそのまま留まり、戦争に関する遺物を收拾しながら戦争博物館をボランティアで運営している。浦添市城間の在沖米軍基地内にある戦争博物館（註1）は、兵舎を利用した小さな展示場であるが、氏によって運営・管理されており、そこには沖縄戦の際の戦争遺留品が所狭しと展示されている。今度の発見は、そもそも戦争遺物の收拾目的だったのが偶然にこの明刀銭を洞穴の中から発掘することになったわけである。

発見された明刀銭は、青銅製品独特の青錆が全体を覆い、刀柄の中央部に僅かな撓みが認められるものの完形品であり、保存状態はきわめて良好である。よく観察すると、刀身の表と裏面に白色の物質が部分的に付着しており、裏面の銭文にも擦傷痕が僅かに認められた。発見者に聞いて見ると、白色物質については「石灰分が付着していた跡」だといい、裏面については、「文字らしいのが見えたのでそれを鮮明にするために擦った傷痕」だという弁であった（註2）。

洞穴から掘り出した時には、表・裏面ともに石灰分が付着していたとのことであるが、筆者が見たときにはすでに石灰分は落とされており、きれいな状態でクリーニングが行われた後であった。それでも、刀身の僅かな凹みや、特に刀頭の先端部分をルーペで観察すると、そこにはまだ石灰分が付着し（註3）、洞穴内から採集されたものだとという痕跡を明瞭に残していることがわかった（図版-6）。

各部分の名称については下図とおり仮称することにした。その法量については、全長
明刀銭各部の名称



13.2cm、刀身の幅1.0cm、刀身の厚み0.6cm、刀背の長さ7.5 cm、刀刃の長さ7.2 cm、刀頭1.7 cm、また、重量は16.2 gである（第1表）。

なお、後述する明刀銭の分類では、刀身表面の字体が㊃とあらわしたもので、刀身が、柄との接続部のところから内側に折れ曲がった形をしていて、裏面には㊃に似た数字らしいのが鋲出されていることから第3類に分類されるものである。城岳貝塚から出土した明刀銭に法量とともに類似する標品である（第1表の法量を参照）。

第1表 沖縄県発見明刀銭の法量

挿 図	標 品	全 長 cm	刀 身 幅 cm	刀 身 厚 cm	刀 背 長 cm	刀 刃 長 cm	刀 頭 幅 cm	重 量 g
第1図 図版-7	具志頭城北東崖下洞穴資料	13.2	1.0	0.6	7.5	7.2	1.7	16.2
第2図 図版-8	城岳資料	13.0	1.5	0.6	7.4	7.1	1.6	

本資料については、発見者のDave D. Davenport 氏より、遺失物法に基づいて、1995年10月4日付で埋蔵文化財発見届が那覇警察署長宛提出されている。なお、現物については、氏の了解を得て沖縄県立博物館が所蔵している。

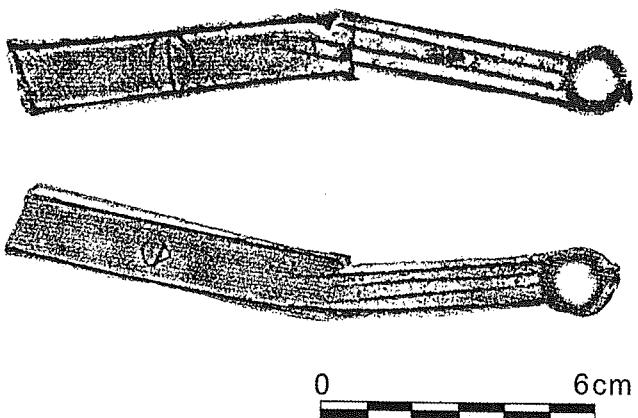
3、明刀銭の発見された場所について

具志頭村は沖縄本島南端近くの農村で、那覇市より南へ約15km、北緯26度7分、東経127度45分に位置し、村の約82%が琉球石灰岩によって覆われた地域である。地形的には海岸線に平行して険しい石灰岩堤が走り、いたるところに石灰岩洞穴が発達している。石灰岩堤が卓越する地域には古い時代の村落や遺跡が数多く分布する（註4）。

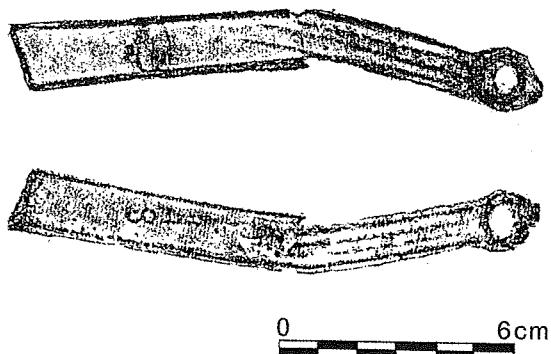
沖縄戦では激しい戦火にさらされ、現在、沖縄戦跡国定公園の一角を占めている。

明刀銭が発見された場所は、具志頭村の大字具志頭小字須武座原にある洞穴内である。この洞穴は、具志頭城の北東部崖下に形成された自然洞穴であって、標高約35mの段丘上に立地している。洞穴の道

第1図 具志頭城北東崖下洞穴資料



第2図 城岳資料



第3図 具志頭城北東崖下洞穴の位置

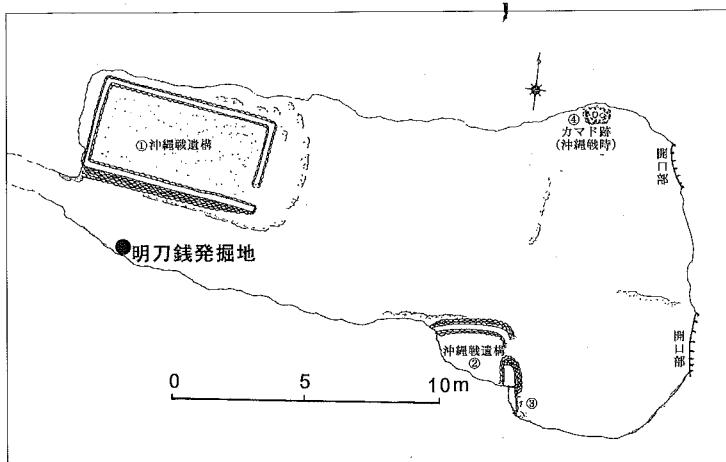


順は、具志頭集落の東南を海の方向へとのびる村道を下って行くと、やがて海の見える下り坂にさしかかる。その坂を右に廻り込みながらさらに海の方へと下っていくと道の右手（南側）に具志頭城の切り立つ断崖が見える。洞穴はその断崖の中腹部に開口し、主洞がちょうど具志頭城真下に位置する恰好となる（第3図）。

洞穴の間口は幅170cm、高さ150cmの半円形状になっていて、北東に面して開口している。洞穴入口の前には洞穴口を塞ぐようにして大岩があるために北風を遮り古代の人々が住居するに恰好の場所だったと思われる。洞穴北側の眼下には、白水川の河口が広がっており、かつては入江だったらしく古い時代には貿易港として利用されたことが具志頭村史等には見えている（註5）。現在、この白水川の河口部にはクルマエビの養殖場が操業している。

第4図は洞穴内部の概略図である。この図でもわかるとおり、洞穴内は沖縄戦のときに大きく攪乱を受けており、今でも洞内に石積みの戦争遺構が残されている（註6）。①の遺構は 6×3 mの長方形をした石積みで、内側床面には珊瑚砂利が敷詰められている。沖縄戦の遺構であることは確実であるが、何の目的で作られたものか定かでない。この石積み遺構の南側の洞壁側で明刀銭は発掘された（●印）。②は入口近くの壁よりに積まれた石積遺構であるが、周囲を石で囲み、東側の一方だけが開き石積み壁の部屋になっている。何の目的で作られた定かでない。この石積みの左側には墓の入口に類似する構築物があり（③）、現在、花や線香などが置かれていて信仰する人がいるようである（註7）。これらの石積みは全て、石組みの状態がしっかりとしており比較的新しい時代に作られた構築物と思われる。また、北側の壁側には沖縄戦時のカマドが認められる（④）。このカマドの東側約3mのところにも開口部が認められるが、よく見ると、

第4図 洞穴の内部



岩の割れ肌が新しく、近年になって開けられた開口部であることがわかる。おそらく沖縄戦の時か、あるいは遺骨收拾の際に開けられたものであろう。主洞の入口はもともと北東側に1か所だけ開いていたものと思われる。

4、明刀錢が発見された場所と周辺の先史時代の遺跡との関係について

明刀錢が発見された状況については前述したとおりであるが、ここでもう少し発見した時の状況を記しておくことにしよう。

本標品が発見された地点は、洞穴の開口部から22m奥に入ったところの壁側である。発掘者のDave D. Davenport 氏は、この地点において、金属探知機に反応があったので発掘を行ったと証言している。そして、およそ10~20cm程掘り返したところで標品が出土したともいっている。そのことからすると、標品は明らかに地中に埋蔵されていたもので、表面採集品ではなかったということになる。Dave D. Davenport 氏に案内されて現地を確認したところ、氏の証言を裏付けるかのように、実際、現地には30×20cm程の窪みができていて掘られた形跡があり、発見された地点を容易に確認することができた(図版-5)。以上のことから、この地点で明刀錢が発掘されたことは、証言どおり事実だと思われる。

ところで、この地点で確実に明刀錢が掘り出されたとしても、なお、明刀錢の出土に関して若干の不安材料が残る。それは、発掘地点の周辺や洞穴内が沖縄戦において大きな攪乱を受けたということである。この洞穴は日本軍の陣地壕として使用され、洞穴内に戦争時の構築物がある。当然、この時に、洞穴内は大きな改変を受けたであろうし、また、数百人の人々が戦時中出入りしていたという事実もあることから外部から持ち込まれたことも考えられる。しかし、戦時中という厳しい状況の中ではたしてこの種の遺物が持ち込まれる可能性があったかどうか。

さて、次に周辺の遺跡の状況について述べることにしよう。

この洞穴の上部、つまり、洞穴が開口する崖の上の台地は具志頭城が立地し、現在でも城壁等の石垣遺構がよく残されている。具志頭城は、14~15世紀の貿易陶磁器が出土するグスク跡で、伝承によれば、具志頭一帯を支配した具志頭按司代々の居城だといわれている(註8)。この遺跡からは、貿易陶磁器をはじめとしてグスク時代の土器および具志頭城式土器と称される「くびれ平底」の器形を有する土器が出土し、南部のグスクの中でも比較的著名なグスクとして知られている。ところが、近年の発掘調査でこの台地には、グスクだけでなく、縄文後期及び縄文晚期の遺跡も複合して立地していることが判明した(註9)。

1982年に実施されたグスク中央部にある展望台を建設する際の緊急調査では次のことが明らかになっている(註10)。層序は、1層が表土層、2層が小石が少量混ざる黒褐色土層、3層が礫が多量に混ざる黒褐色土層、4層が礫混じりの茶褐色土層であった。1層と2層はグスク時代の遺物包含層であるが、3・4層は縄文後・晚期の層で、伊

波・荻堂式土器から宇佐浜式土器までを出土する層である。このような層序形成の状況からすると、具志頭城の文化層は、単純にグスク時代の遺跡だけでなく、下層には縄文後・晩期の文化層が包含されていることがわかる。

では、洞穴内の状況はどうだろうか。つまり、洞穴遺跡かどうかということであるが、今回、電灯の明かりだけをたよりに調査した結果では、遺物包含層等を確認することはできなかった。しかし、貝殻や石器片、時期不明の小さい土器片等が僅かに採集できたことから遺跡の可能性もあり、本格的な発掘調査がまたれるところである。

ところで、本洞穴は、地形的に見ると古代人が生活する場として好条件の立地をしていたものと思われる。たとえば、洞穴そのものは、高い天井のホールがあり、洞穴内の床面も一様に平らになっていて、湿度も一定している。また、目の前には大きな川と入江があり、リーフの発達した海岸を控えている。これらの条件を備えた石灰岩洞穴はこの付近にはそう多くはない。したがって、明刀銭を包含する文化層の可能性もあり、この洞穴の保存措置と同時に本格的な調査が是非必要である。

この洞穴の西南西約400 mの海岸段丘下には、463点の中国貨銭が発見されたウフブリ下洞穴遺跡が知られている（第3図）。この遺跡は、1972年に中学生によって発見され、その後、1981年に遺跡の確認調査が実施された（註11）。

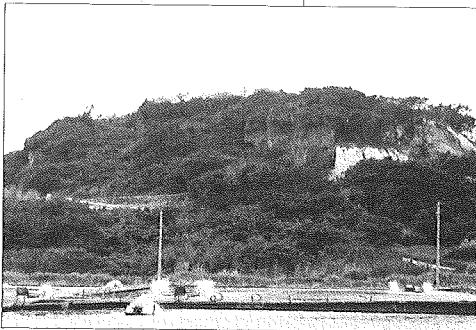
遺跡は幅約2m、高さ約90cm、奥行き約3m程の小さな洞穴である。1981年の発掘時には、洞穴内全域に中国銭

ウフブリ下洞穴遺跡出土の中国銭一覧表

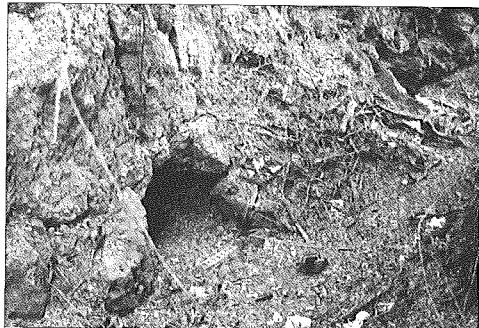
貨幣名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
	開元通寶	宗通元寶	至道元寶	祥符通寶	天聖元寶	皇祐通寶	嘉祐通寶	熙寧元寶	元豐通寶	元祐通寶	紹聖通寶	元符通寶	聖宋元寶	大觀通寶	政和通寶	大定通寶	大中通寶	供武通寶	永樂通寶	不明銭	無文銭	破片	合計		
数量	3	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	2	1	1	296	63	17	43	17	463
備考	唐高祖 武德四年	北宋太祖 興國二年	北宋太宗 至五年	北宋真宗 大中祥符二年	北宋仁宗 天聖元年	北宋神宗 熙寧元年	北宋元祐二年	元豐八年	元祐八年	紹聖元年	元符元年	建中靖国元年	北宋徽宗 大觀元年	政和元年	大定十八年	大定十九年	至大三年	至生二一年	洪武元年	明成宗 永樂六年	明太祖 洪武元年	明太祖 永樂六年	西曆一四〇八年	内破片17点	
備考	西暦 六二一年	西暦 九六八年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年		

（『具志頭村の遺跡』沖縄県具志頭村教育委員会 1986年3月より掲載）

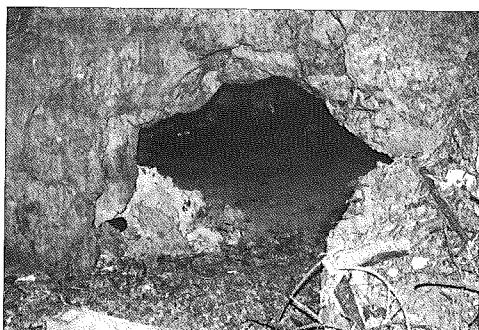
が散らばっていたということであるが、発掘を担当した人の所見では、もともと洞穴の奥に埋蔵されていたのが、「後世なんらかの理由によって散乱したものと考えられる」としている（註12）。いま、このウフブリ下洞穴遺跡で出土した貨銭を記すと左の一覧表のとおりとなる。



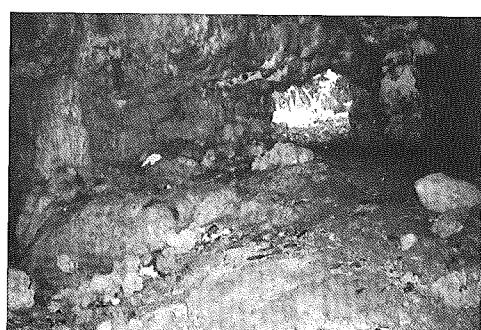
図版-1 洞穴の位置（上の台地は具志頭城）



図版-2 洞穴の開口部



図版-3 洞穴の口から内部を見る



図版-4 洞穴内の状況

5、明刀銭とその分布について

明刀銭・めいとうせんと読む。中国の戦国時代（紀元前403～221）に、おもに燕の国で流通した貨幣とされ、刀子の形をして刀身の表面に「明」の字が鋳出されていることからそう呼ばれている（註13）。中国の戦国時代は、日本の縄文後期から弥生の初頭に比定され、沖縄の土器形式としては伊波・藪堂式土器・大山式土器・室川式土器・室川上層式土器・宇座浜式・仲原式土器あたりまでを含む時期となる。

明刀銭に似て刀子の形をした貨幣は刀貨と呼び、種類としては15種前後あるとされ、形状や錢文から、古刀、尖首刀、明刀、直刀の四種類に大別されるようである（註14）。その内の明刀が明刀銭にあたる。『世界考古学体系第6巻』のなかで、金閥恕氏は次の三類に分けている（註15）。

第一類は、表面に鋳出された明の字体が彌のようになっているものである。刀背が弧状となり、刀刃の方が湾曲している。裏面には地名を記したものが多く、地名と出土地などからの検討によれば、齊、趙の国等で鋳造されたものと考えられている。

第二類は、表面に鋳出された明の字体が彌のようになっているものである。第一類に

似て刀背が弧状で刀刃の方は湾曲しているが、裏面は地名ではなく、数字やその他の記号が見られる。

第三類は、表面の字体が㊀のようになっているもので、その多くは、刀身が柄との接続部のところから内側に折れ曲がった形をしているという特徴をもつ。刀刃は幅が一様であり、柄に鋳出された二状の突線文は刀身部にとおり刀背に達している。裏面は第二類に類似して数字やその他の記号が鋳出されている。

以上であるが、その出土地域を見ると、第一類が前述したように齊と趙の国を中心としたごく限られた地域に分布している。第二類と第三類は、河北省北部から遼寧省、朝鮮半島あたりまで広範囲に分布域が広がっているようである。後述する城岳貝塚出土の明刀錢は第三類であることから遠く海を渡って沖縄まで分布していることになる。また、今回発見された明刀錢も第三類に属するものである。

なお、明刀錢の出土地については、これまで、高橋建自氏（註16）、関野雄氏（註17）、李進熙氏（註18）、西谷正氏（註19）、高宮廣衛氏（註20）、小田富士男氏（註21）等によってとりあげられてきたが、近年、上村俊雄氏によってこれらの資料が集成され明刀錢出土地名表が作成されている（註22）。いま、上村氏の作成された表を掲げて参考に資することにする。

明刀錢出土地

I 中国

1. 北京付所	明刀錢
2. 河北省何間県	明刀錢
3. 河北省易県	明刀錢
4. 河北省灤平	明刀錢・鉄斧
5. 遼寧省貔子窩高麗寒	明刀錢・鉄斧・鉄鑿・鉄鎌・鉄庖丁・鉄鋤・ 鉄鋤・鉄槍・半両錢・一化錢
6. 遼寧省大嶺屯城址	明刀錢・鉄斧・鉄槍・貨錢
7. 遼寧省營城子	明刀錢
8. 遼寧省旅順市牧羊城址	明刀錢・鉄斧・鉄刀子・鉄鎌・半両錢・五銖錢・大泉 五十・明刀円錢・一化錢
9. 遼寧省遼陽太子河付近	明刀錢
10. 遼寧省熊岳城	明刀錢
11. 遼寧省大石橋東方盤龍山	明刀錢

II 朝鮮半島

1. 平安北道寧辺郡悟里面細竹里	明刀錢・鉄器ほか
2. 平安北道鉄山郡登串	明刀錢
3. 平安北道鉄山郡榎島里	明刀錢

4. 平安北道救陽郡南薪覗面都館里	明刀錢
5. 平安北道東倉面梨川里	明刀錢
6. 平安南道德川郡青松里	明刀錢・布錢・鉄器
7. 平安南道寧遠郡溫和面溫陽里	明刀錢
8. 慈江道江界市	明刀錢
9. 慈江道慈城郡西海里	明刀錢・一化錢・半兩錢
10. 慈江道渭原郡龍淵洞	明刀錢・銅鑄・鉄斧・鉄錐・鉄庖丁・鉄鋤・鉄鍬 鉄鉢・鉄鎌
11. 慈江道前川郡前川面仲岩洞	明刀錢
12. 慈江道前川郡吉祥里	明刀錢
13. 慈江道前川郡化京面吉多洞麻仙站	明刀錢
14. 伝平安南道大同江面	明刀錢
15. 伝全羅南道康津郡	明刀錢
16. 伝全羅南道務安郡	明刀錢
III 日本	
1. 沖縄県那覇市城岳貝塚	明刀錢
2. 佐賀県唐津市	明刀錢
3. 広島県三原市	明刀錢

上村俊雄「沖縄出土の明刀錢について」『鹿大史学』第39号1991年による。

6、城岳貝塚出土の明刀錢について

沖縄県で発見された明刀錢は、今回のものを含めてこれで二枚発見されたことになる。全国的にみても日本本土での発見例がないので（註23）、沖縄県だけで二枚発見されたということはやはり特筆されなければならないだろう。

大正12年（1923）に城岳貝塚で発見された明刀錢については、現在、東京大学考古学研究室に所蔵（以下、本稿では「城岳資料」と呼ぶこととする）されているが、1992年に沖縄県立博物館で開催された『琉球王国展』の際、発見地沖縄県で初めて県民に公開されることになった（註24）。その際、筆者は、展示担当者として実物資料を直接手にとって観察する機会にめぐまれた。次に、その時のメモをたよりに城岳貝塚出土の明刀錢について述べることにする。

第2図（図版-8）の資料が城岳資料である。この資料を入れた箱の中には、遺物の登録番号と見られる「標・g 262 東京大学文学部列品室」というシールの貼られた遺物カードが付けられており、次のようなメモが5行にわたって記されていた。

大正十二年九月

沖縄県那覇市外

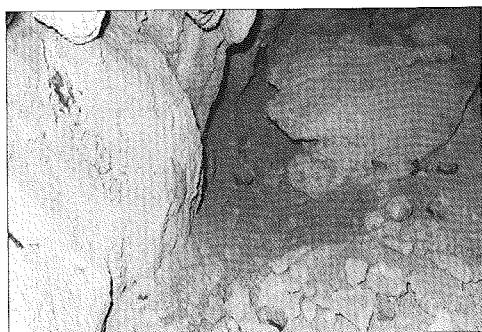
城岳（之貝塚）蹟ヨリ発掘ス

島尻郡眞和志村ニアリ（第二中季隣）

発掘者 権山資隆氏

標品は、非常に保存状態がよいものであり、青銅製品特有の青錆が全体を被っているものの付着物や傷一つない完形品である。部分名称によって法量を記すと第1表のとおりとなる。

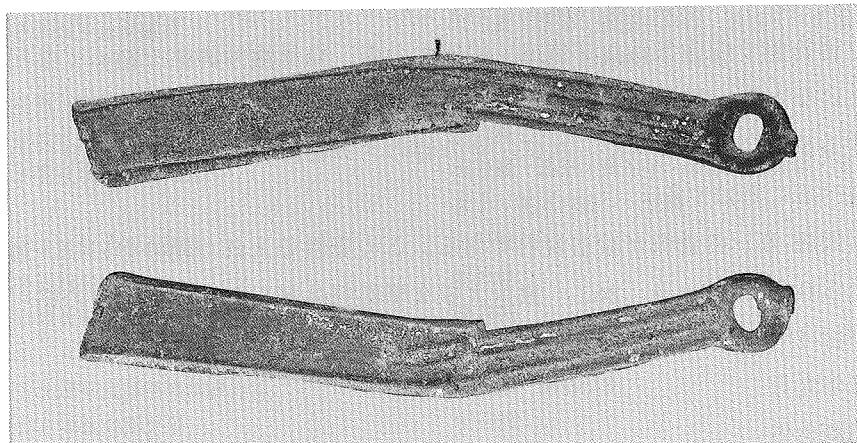
城岳資料は、那覇市の城岳貝塚で、当時那覇商業学校の生徒であった権山資隆他3人によって地表下約一尺の地中から発掘されたもので、翌、大正13年(1924)、橋本増吉によって学界に報告され、話題を呼んだ明刀錢である（註25）。その後、この明刀錢は原田淑人の希望により、当時の東京帝国大学文学部考古学研究室に寄贈され、現在にいたっている。



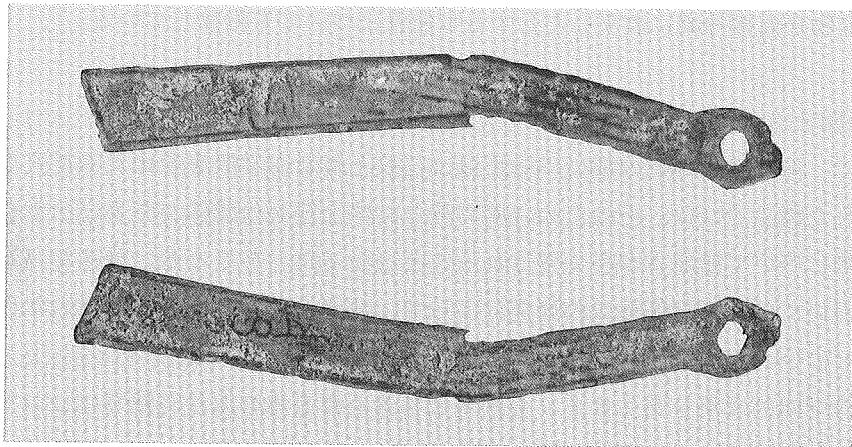
図版-5 明刀錢が発掘された地点
(掘り返された跡がある)



図版-6 刀頭に石灰分が付着した状態



図版-7 具志頭城北東崖下洞穴資料（沖縄県立博物館蔵）



図版-8 城岳資料（東京大学考古学研究室蔵）

さて、城岳資料が発掘された城岳貝塚であるが、この貝塚は、現在の県立那覇高等学校の南側約150 mに位置し、標高約32mからなる石灰岩の小丘上に立地している。戦後、採石や遊園地造成工事、あるいは那覇市の中央部に近い市街地ということもあって、現在では壊滅状態にあり、貝層の所在もはっきりしない状態である（註26）。

昭和2年（1927）に小牧実繁によって発掘調査が行われ、その時の調査成果が『人類学雑誌』第42巻第8号に報告（註27）されている。明刀錢が発見されたのは、小牧の調査から4年前にさかのぼる。発掘された当時の状況について橋本増吉は、樺山資隆から直接聞き取った話として、次のように記している。「城岳貝塚を発掘し、直径約4,5尺の穴を穿ち、深さ約2尺にして岩石に達したそうであるが、その穿穴の側壁にて表面より約1尺の所より口絵所載の明刀を発掘したのであり、同時にその穿穴地点より石鏃数個、石製の玉十数個を発掘したそうであるけれども、今は皆散逸せりとのこと」（註28）。

では、城岳貝塚とは一体何時頃の遺跡であろうか。これまでの研究では、大山式期に後続する代表的な遺跡とみなされてきた。ところが、近年、城岳貝塚から出土する土器等を検討した高宮廣衛氏は、城岳貝塚の時期を縄文後・晩期の複合遺跡であるとし、さらに明刀錢の時期についても、「縄文晩期土器との関連で捉えられるべきもの」としている。また、共伴する土器形式としては、「九州系晩期土器との関係が最も有力であろう」と考え、明刀錢の渡来経路についても、これらの九州晩期系土器とともに「九州方面からもたらされたものであろう」という見解をとっている（註29）。ところが、とくに最近、高宮氏は、沖縄の砂丘遺跡から出土する開元通宝等を検討する過程で、これら

の大陸系文物が直接沖縄に渡来したとする可能性についても指摘している。

7、おわりに

ところで、沖縄発見の明刀錢については、二枚とも考古学研究者による正式な発掘調査で得られた標品ではある。そのため、明刀錢と共伴土器との関係、および出土した文化層の時期等について疑問点が多く残されることになった。ところが、前述したように城岳資料については、高宮廣衛氏の研究によって、共伴土器との関係、渡来の年代観、渡来経路などについて、やっと一つの見通しが立てらるようになってきた。

高宮氏の学問的成果を踏まえて、今回発見された明刀錢の埋没時期等について、洞穴周辺の遺跡との関係でその感想を述べることにしよう。

今回の明刀錢は洞穴内で発見されている。洞穴の中は、頻繁に人が入るところでないので後世何らかの形でまぎれこんだとする確立は、地上の貝塚等よりはかなり低いといえよう。ただ、この洞穴の場合は沖縄戦の際、陣地壕構築による攪乱や沢山の兵隊たちが入り込めていたこともあり、その点では多くの問題点を残している。

明刀錢が発見された洞穴の上の台地上は、前述したように具志頭城が上層に乗り、その下層には伊波・荻堂期の縄文後期から弥生初頭までを含む文化層が確認されている。つまり、沖縄先史時代の前期IV・V、および後期IVからグスク時代にかけての遺跡であり、複合遺跡である。そのことから、洞穴内の明刀錢についても洞穴上の遺跡形成時に渡来した可能性はきわめて高い。では、この時期は一体何時かというと、高宮廣衛氏によって検討された城岳資料の年代観の時期が一つの目安となろう。

とはいっても、実際、洞穴内を発掘した結果ではないのであくまで一つの目安にしか過ぎない。今後、この洞穴内に学問的なメスが入れられることを期待しつつ稿をとじることにする。

本稿を作成するにあたって、明刀錢発見者のDave D. Davenport 氏と紹介者の西銘悦子氏、伊藤勝一氏には、多忙のところわざわざ現地まで行って発見時の状況を教えていただくとともに、資料の提供をいただきました。また、高宮廣衛、嵩元政秀、上村俊雄の諸先生方には明刀錢についていろいろと教えていただきました。本稿については先生方の御論文におうところが大きい。なお、城岳貝塚出土の明刀錢の使用については、東京大学文学部考古学研究室のご承諾を得ることができました。紙面をかりて感謝申し上げます。

註

- 註1 『BATTLE OKINAWA MUSEUM』という。浦添市字城間間のキンブキンザー内の兵舎の中にある戦争に関する小さな博物館。
- 註2 発掘した際、標品にはかなりの石灰分が付着していたとのこと。また、字らしいのが見えるということで裏面を擦ったということである。
- 註3 この石灰分の付着は、洞穴内から出土したという証拠となる。
- 註4 『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会 1986年3月。
- 註5 『具志頭村史』具志頭村史発刊委員会 1961年6月。
- 註6 この一帯の洞穴のほとんどが日本軍の陣地壕として使用されていて、洞穴の中にはその当時の遺構が残されている。
- 註7 沖縄戦の際の遺構を後世になって墓として利用したのか定かでない。このように洞穴内に墓があるのはめずらしい。
- 註8 前掲書5
- 註9 前掲書4
- 註10 前掲書4
- 註11 前掲書4
- 註12 前掲書4
- 註13 関野雄「明刀錢」『日本考古学辞典』日本考古学協会編 東京堂出版 1962年。
- 註14 金関恕「刀貨」『世界考古学体系』第6巻 平凡社 1958年。
- 註15 前掲書14
- 註16 高橋建自「太古に於ける支那文化の伝来」『古墳と古代文化』雄山閣 1922年。
- 註17 関野雄「漢初の文化における戦国的要素について」『中国考古学研究』東京大学出版会 1956年。
- 註18 李進熙「戦後の朝鮮考古学の発展—初期金属文化期—」『考古学雑誌』第45巻第1号 1959年。
- 註19 西谷正「朝鮮におけるいわゆる土壙墓と初期金属について」『考古学研究』第13巻第2号 1966年。
- 註20 高宮廣衛「城嶽と明刀錢」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集同朋社出版 1987年。
- 註21 小田富士男・韓炳三編『日韓交渉の考古学 弥生時代編』六興出版 1991年。
- 註22 上村俊雄「沖縄出土の明刀錢について」『鹿大史学』第39号 1991年。

- 註23 城岳貝塚出土の明刀錢以外に、佐賀県唐津市と広島県三原市でも出土したと伝えられているが、その状況がはっきりしない。また、日比野丈夫氏は『新版考古学講座第9巻特論<中>』の「古錢」の項で、「もちろん明刀は日本内地で発掘されたことはない」と述べている。
- 註24 琉球王国展は、沖縄県立博物館主催で1992年10月27日～12月20日まで開催された。その時の図録が『琉球王国－大交易時代とグスク－』沖縄県立博物館 1992年として発刊されている。
- 註25 橋本増吉「沖縄県那覇市外城岳貝塚出土の明刀錢に就て」『史学』第7巻第2号 1928年。
- 註26 『那覇市の遺跡』那覇市教育委員会 1982年。
- 註27 小牧實繁「那覇市外城岳貝塚発掘報告」『人類学雑誌』第42巻第8号 1927年。
- 註28 前掲書25
- 註29 高宮廣衛「沖縄本島発見の明刀錢について」『第三回中琉歴史関係国際学術會議論文集』中琉文化経済協会 1991年。

沖縄県立博物館草創期に関するノート

萩尾 俊章・多良間利絵子

(沖縄県立博物館・沖縄県立博物館)

Research Notes on the Beginning of Okinawa Prefectural Museum

Toshiaki HAGIO and Rieko TARAMA

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

沖縄県立博物館は1996年（平成8年）4月24日に創立50周年の記念すべき日を迎えた。戦後の博物館創設は、沖縄戦によって破壊、散逸した文化財を、県民の手によって収集することから始まった。終戦直後に人々の生活が復興するのと並行して進められた点は堂目に値すべきことでもある。

沖縄県立博物館50周年事業の一環として『沖縄県立博物館50年史』（以下、50年史と略す）が1996年12月6日に刊行された。50年史編集委員会により様々な意見が提起され、内容は充実したものとなった。ただ、50年史の紙幅の制限、また資料の調査と編集期間が比較的短かったことなど、編集が終わった段階で資料が十分に取り込めなかったり、補足調査が不十分なところや解説ができなかったり、あるいは一部に誤植があつたりもした。

ここでは、50年史では十分に収録できなかった沖縄県立博物館草創期に関する資料を補足的に記録しておきたい。というのも博物館の草創期にあたる東恩納博物館、沖縄郷土博物館については、記録らしき資料は現在皆無に等しい。当博物館には『博物館沿革史』という永久保存の公文書綴が保管されている。この文書は主として首里の郷土博物館や首里博物館にかかる書類で、東恩納博物館に関するものは皆無に等しい。また、初期の首里市立郷土博物館（1954年以前）には活動記録や日誌的なものはない。したがって、博物館草創期の活動状況や職員の構成などは関係者への聞き取りなくては把握できないのが現状である。しかも、当時の職員や関係者は多くが物故者かあるいは高齢者になりつつあり、当時の仔細な状況も聞き取りが難しくなりつつある。当博物館にかかわった職員として、ここでなるべく多くの情報を掲載し、後顧の資料となることを期して記述した。

内容については適宜、萩尾俊章と多良間利絵子が分担して執筆した。

1 設立草創期の記録

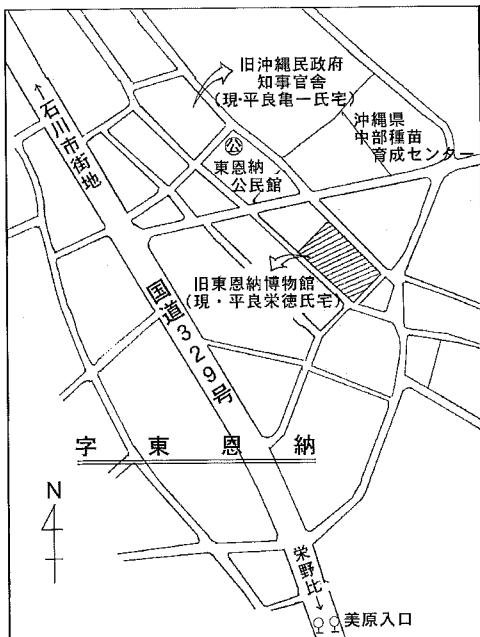
(1) 石川市の沖縄陳列館・東恩納博物館の時代

沖縄県立博物館の創設は周知のように石川市に開設された沖縄陳列館、のちの東恩納博物館を嚆矢とする。東恩納博物館は米国海軍軍政府の創設になるものである。また、少し遅れて開館した首里の沖縄郷土博物館は市の文化部により開設された点で対照的なスタートであった。

沖縄陳列館は石川市字東恩納33番地の平良栄徳氏の住宅を利用して創設された。平良氏の家屋敷は戦後間もない頃から7年間にわたり博物館に使用された。現在、家屋敷は博物館撤収後ほぼそのままの状態であり、井戸や庭園の一部が残っている。

沖縄県教育委員会編の『沖縄県史料戦後1 沖縄諮詢会記録』(1986年)には、草創期の博物館（東恩納博物館）に関する記録がみえる。創設時の状況を把握する意味で、博物館に関する部分を摘記しておきたい。

1945年9月26日の諮詢会協議会における市行政機構の協議事項では、各部に属する課や職務内容が話し合われている。軍政府からは「仏像は教育部に」という一言がでている。これは東恩納博物館に展示されていた金武の觀音堂の仏像のことであろうか。それとも教育部に所管された仏像が別にあったのか、その点は不明である。



旧東恩納博物館位置図



現在の平良栄徳氏の住宅
(旧東恩納博物館)

1945年9月27日の市長会における協議事項では教育部長の山城篤男委員から「中央に文教部と文化部とあり。文教部は学校、図書館、博物館」とあり、博物館は文教部の管轄であった。

琉球政府編の『琉球史料 第10集』において、終戦直後の文化部の変遷に関する項目がある。文化部は1945年8月20日の諮詢会の創設とともに設立された。軍政府文化部長はハンナ少佐、民政府文化部長は当山正堅であった。博物館は文化部の中に博物館課が置かれていた。「1945年ハンナ文教局部長のもとに博物館が東恩納に設立され、沖縄の美術工芸品を収集陳列するとともに、各地区的史蹟名勝の調査保存に務め、英文『沖縄歴史』並に『沖縄文化写真』を印刷作成し、博物館参観の都度米軍将兵に有料配布し、沖縄の文化紹介をなし、また美術部員の作による日本画、洋画を通じて沖縄の風物史蹟、名勝その他を紹介した」という。また、文化部の事務分掌として、博物館課は「東恩納ニ於ケル沖縄博物館並ニ其ノ所属建物庭園及陳列物其他凡テ軍政府ノ許可スル沖縄文化展覧会ノ経営維持」と位置づけられた。

文中の英文「沖縄歴史」と「沖縄文化写真」は、現在博物館の手元になく、どのようなパンフレットだったのかわからないのは残念である。小規模な博物館だったとはいえ、パンフの作成や絵画展の開催など、ハンナ少佐を中心に、米国軍人への沖縄文化の普及的な試みが行われていた。

1945年11月24日の諮詢会協議会では食糧、文化財などについて話し合われた。総務部長又吉康和委員は「委員長、松岡幹事、護得久、山城、當山の諸委員にお願ひしたいが、崇元寺、玉御殿、ハンタ山の赤木、円覚寺、首里城等の古跡を諮詢会で保存会を設け軍政府に願って保存をして置いたら如何かと思ひますが」と発言したのに対し、山城委員は「ハンナ大尉は古跡の破壊されるのを怖れ金武寺の仏像や首里から鐘を持って来て東恩納の博物館に保存して居る」と回答し、又吉委員は「其場に残されるものは残して置いた方がよいではないですか」と反論している。

こうした話し合いはあったものの、放生池石橋のように実質的には現地での保存が難しく、博物館において保管されたものが多い。

1945年12月24日の軍民協議会ではとくに博物館について協議されている。少々長くなるが、東恩納博物館の初期の様子がよくわかるので、そのまま抜粋しておきたい。

軍政府「来週糸数氏の所へ行くが其時持って行って見せたい（絵筆を）。今日沖縄に来ている米兵の印象では首里那覇等の都会地や旧跡がなくて貧弱な所であると云う感じに打たれている居る。故に沖縄の認識を深めるために何かを講じたい。今は軍関係の者

しか居ないが将来は米国の政治家や市民等が来るが彼等の人々に認識を深めなければならぬ。其方法として二つの案を有つて居る。

(1) は教学部（文教部）の建物と博物館を造つたが、其建物や庭を作らしたのは其の一つである。

(2) 博物館と庭は未完成だが之を完成させ、又沖縄の工芸品も加へたい。

博物館が完成した時には其外に沖縄を紹介するものはないから之を以て沖縄の文化の形を整へて昔の文化を認識し又教育して行きたい。庭及建物も不完成とは思ふが沖縄文化を知らすには已むを得ないだろう。博物館に来て米兵が始めて庭や庭内にある池を見て認識を高めつつある。海軍の高級将校が博物館を見たが沖縄文化に対して印象を深めた。之が完成した時は多くの人々に見せたい。米兵としては沖縄の将来について如何にすべきかと云う関心は持つて居ない。沖縄の将来について関心を持つ人々は佐官将官以上の高級将校や貴衆両院の人々である。斯る高級将校や貴衆両院等の偉い人々は博物館で長時間ゆっくりとして観察する事は出来ない。故にムーレー大佐の官邸に沖縄の認識を深める方法を講じなければならない。ハナ（HANNA）と私（ワッキンス少佐）が軍政府の付近に沖縄の建物を見出した。柱はマキ、壁、天井等は杉材で造つてあるがあちこち被害があるが之を修理させて居る。庭も建物とバランスの取れるようである。ムーレー大佐の屏風は彼が持帰へるのではないから文化を物語る材料になる。其外指物、編物、提灯の如き類等もやって行きたいから暗示を与へて貰いたい。斯る物は博物館の帳簿に記録して置いて之を米国に持ち帰へるのではない。博物館は主として米兵に観覧させ、ムーレー官邸は高級将校等に紹介したい。仲宗根、又吉、當山の諸委員等は沖縄は食料等も不充分であるのに何で斯ることに力を入れられるだろうと考へられるかも知れない。博物館及ムーレー大佐の邸宅の計画は軍政府の命令でもなく、軍政府でやれと云う事でもない之はハンナ大尉と私（ワッキンス少佐）との考へでやって居るものである。ハナ大尉と私（ワッキンス少佐）は日本及支那の文化の程度も知っている。沖縄の文化的程度も知らしめたい。沖縄の文化も此程度あったものだと知らしめたいのである。

博物館とムーレー大佐官邸と中城城跡はあるが其外にはないものであるか。

又吉委員「首里城の絵を私が所持して居るから他日御覧に入れたい。早稲田大学の田辺氏が首里城及沖縄の民家の有名な家の写真を持って居る。」

仲宗根委員「戦前の沖縄の文化、風俗、生活等を絵画にして博物館に備へたい。」

比嘉委員「日本全国に県と比例して沖縄は国宝指定の多かった所であったから之も付加すると尚沖縄の文化が分かると思ふが。」

軍政府「當山文化部長にやって貰いたい。文化を物語る文化史を設けたい。沖縄の文化

を求める本を調べたい。尚沖縄にないものは日本にでも求めたい。沖縄に関する著書を調べて貰いたい。」

又吉委員「現に調査しつつあります。」

以上、とくに諮詢会の会議録から抜粋したが、ここではハンナ少佐とワトキンス少佐の博物館への思い入れがよく表れている。

博物館の創設に尽力したハンナ少佐は沖縄文化のよき理解者であった。ハンナ少佐は1945年から1946年まで沖縄の米国海軍軍政府教育部長として、灰じんの中から復興していく教育文化の再建に力を注いだ。ハンナ氏は東洋歴史を専攻し、東洋通の文化研究者であった。首里城が破壊されたことを惜しみ、「気の毒だ」ともらしていたという。また、自分自身でジープをはしらせ、各地を廻って瓦のかけら、彫刻の一片に至るまで遺跡や文化財を探し出し、東恩納の博物館を整備した。沖縄文化をこよなく愛し、島袋全発氏の協力と大城皓也氏の装丁で1946年に「ショート ヒストリー オブ オキナワ (Short History of OKINAWA 「沖縄小歴史」) というパンフレットを発行しているが、博物館には当該資料は現存しない。この序文で「沖縄人は現在諸君からみれば戦争に叩かれたみすぼらしい服装でボロ家に住む民族だと思うだろうが、否だ。沖縄人はかつて美しい文化を持っていたのだ」と述べ、沖縄文化への深い愛着の念を披露している。

こうした背景の中で博物館は設立された。東恩納博物館は「博物館は主として米兵に観覧させ、ムーレー官邸は高級将校等に紹介したい」とあるように、ムーレー大佐の官邸も博物館的な展示がおこなわれたと思える記述があり、しかも東恩納博物館とムーレー官邸で、観覧の米人対象者を弁別しようとしていた。ただ、ムーレー官邸の展示内容については現在の資料では明らかではない。

さて、<ハンナ博士と沖縄>と題した座談会の内容が新聞に掲載されている。新聞社は不明だが、1955年11月9日から11月15日までの5回にわたる連載記事である。座談会の出席者は山城篤男（文教部長）、城間朝教（文教部員）、島袋俊一（文教学校長）、翁長俊朗（外語学校長）、中山盛茂（文教部員）、比嘉徳太郎（文教部員）、外間政章（外語学校職員）、野崎真一（文教部員）、大城皓也（文教部員）、山元恵一（文教部員）、島袋光裕（文教部員）、大嶺薰（文教部員）の各氏である。（ ）の役職は当時の役職である。5回目の連載記事の「戦後沖縄文化の再興をめぐって」という座談会では、大嶺薰氏の談がある。

「ハンナさんが博物館をつくりたいが、やってくれとたのまれたので私も引き受けて一緒につくった」と語る。「大体ハンナさんの考え方としては沖縄の一千年の文化財がこ

とごとく灰じんに帰して全くみる形もなくなっている。これでは南方の非文化民族と何ら変わることろがないのでハンナさんが古文化財を収集して博物館をつくろうというわけで45年の8月から事業に着手した。近づきになった最初の動機は私が尚順男爵邸にあった月見灯ろうや雪見灯ろうを説明、片足のかけたシーサーをセメントで修理して土とカンダバーの葉でねたところうまく出来たのが私がとくに可愛いがられたはじめである」と語っている。

この点からわかるように、博物館として事業に着手したのが1945年8月であった。また、12月24日の会議で「博物館と庭は未完成だが之を完成させ」とあるように、この時点では博物館としての見学に供せられる状態ではまだなかったことがうかがえる。

当初はハンナ少佐が博物館運営にタッチしたが、民政府移管後は大嶺薰氏の手に委ねられた。その後の職員構成は『沖縄県立博物館50年史』の佐次田トミさんの聞き取り原稿に記されているが、佐次田さんの直接の前任者は石川市伊波在住の仲本美代子さんであったこと、また仲本さんが結婚して渡米したために佐次田さんが後任となったことを、ここで補足しておきたい。

『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』にも、その後の博物館関係の記事がみえる。1946年10月25日の定例部長会議では、民政府移転後の処理問題とともに、博物館の議事もでている。當山正堅文化部長は「博物館は東恩納に留りたい。首里の博物館も経営することになって居る」と語っている。軍政府が知念に移転するとともに、沖縄民政府も移転を促されたが、博物館はこの時点で石川市東恩納に留まることを希望したことがうかがえる。

1947年2月20日の軍民連絡会議では東恩納博物館の家の所有者について議事がある。志喜屋孝信知事は「東恩納に所有主の分かった家を博物館として使用して居るが之は如何するか。個人の家を公共物に使用してよいか如何か」と述べ、これに対して軍政府は「軍から公共物に使用してよいとあつたら使用出来る。所有主が分かつたら外に家を作つて元の所有主に返してよい。平和会議以前といえども其れが本体である」と回答している。東恩納博物館の建物所有者が平良栄徳氏であることは判明し、返還する話題ものぼつたようであるが、実際に本人に返還されるのは、だいぶん後になってからで、東恩納博物館が首里博物館と合併する1953年5月のことである。

1948年2月27日の軍民連絡会議に、軍政府「東恩納の平良為一氏（知事官舎跡）家に誰が大嶺氏を住まはしたか。ストワート氏（文教部長）が聞いて居たが」に対して、志喜屋知事「該家は諮詢会堂、知事官舎—博物館と経て来て大嶺氏は当山文化部長が住まはした」とある。このことからすれば、東恩納の平良為一氏の家は知事官舎として使用

後は、一時博物館として利用されていたかのようであるが、確認の必要がある。

さらに、『沖縄県史料 戦後3 沖縄民政府記録2』には次ような記事がみえる。

1949年5月20日の部長会議で、山城文教部長「博物館の個人のもの又は寺のものは返還したい。博物館観覧料を取つたら如何」と提起され、議事が認められている。博物館所蔵の資料で、一部は個人や寺に返還されたものがあるようである。東恩納博物館の展示にみられる仏像の類は金武の寺からのもという記事が先にあったが、これらは現博物館ではなく、金武の觀音堂に返還されたということなのか。この点については追跡調査が必要である。ここでいう博物館とは観覧料徵収の件からも東恩納博物館についてであると考えられる。

また、1947年9月の新事業の計画という書類綴には、官房長宛「沖文第八号 1947年9月26日 沖縄文化部長 印」の中に「将来の事業計画・方針等について」がある。

8月28日付知第115号を以て御照会の標記の件につきまして、別紙の通り回報申上げます。一、実施不能の件とその理由として、首里博物館移転改築の件（目下工務部長の手元に於て準備中）、東恩納博物館敷地の花樹園化する件（予算不足並労務不足の為進捗せず）とある。二、実施及遂行せる事業として、首里博物館の管理・移管（1946年10月首里市より民政府へ移管す）とある。三、将来の新事業として、那覇市に沖縄民族博物館の建設、日本に散在する沖縄文化資料、古美術工芸品の蒐集、古墳調査、史蹟・名勝の調査（観光ルートの作製）、民政府構内に小博物館の設置などがあがっている。

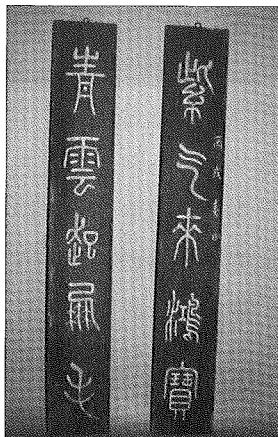
この中で、首里博物館の移転改築がすでに計画として早くからあったこと、並びに日本本土での沖縄関係の文化財収集が民政府においても計画されていたことがわかる。後述の首里博物館の文化財キャラバンは文化部における後押しもあったと考えれる。

嘉陽安春著『沖縄民政府 一つの時代の軌跡』にはハンナ少佐とワトキンス少佐が諮詢会発足直後、諮詢会に対し、博物館の建設を提案し、海軍軍政府と諮詢会の協力により、東恩納博物館が誕生したとある。博物館として利用された民家と庭園に言及して、庭園が「金環園」と称されていたことがわかる。博物館の収蔵品に「金環園扁額」があるが、これは東恩納博物館の庭園の命名に由来する扁額と考えられる。

また、東恩納博物館の写真には2枚の聯が展示室に掛けられているのがみえる。「紫氣來鴻宝（紫氣は鴻宝より来る）」「青雲起鳳毛（青雲は鳳毛より起こる）」という漢詩の聯である。当初これは大嶺薰氏が書した聯とされていた。しかし、これは「沖縄県立博物館50年の歩み」展で、新城栄徳氏のご指摘により、書家の屋部憲氏（1894～1952年。雅号：金燈）の手によることが判明した。さらに、後述する「沖縄郷土博物館」の看板も同氏の手によるものである。



「金環園」扁額



東恩納博物館の聯



「沖縄郷土博物館」看板

(2) 首里市立郷土博物館の時代

首里市立郷土博物館の創設は豊平良顕氏や上間正諭氏を中心とした首里市文化部の活動の成果によるものである。この点については、上間氏が『30周年記念誌』に記録している。ただ、創設当時の博物館の呼称にどうも曖昧な点があったため、補足の聞き取りを行った。豊平良顕氏はすでに他界されているので、当時の様子を聞くことはかなわなかったため、上間正諭氏にお話を伺った。

上間氏によると、「あれは全市民の力でできたものであった」と語る。戦前は「文化」という言葉は一般の人々はほとんど用いなかつたが、当時はお年寄りまでが「文化」という言葉を口にしたという。豊平さんや上間さんは「文化部のおじさん」と呼ばれていた。

首里中学校の運動場ではドラム缶などを使って仮設の舞台を造り、文化部主催の芝居、女子コーラスから組踊まで開催した。また、豊平と上間の両氏は石川市まで行き、大嶺政寛氏や大城皓也氏などの絵を借りてきた。工務部長の金城田光氏のはからいで建ててもらった20～30坪のトタンブキの会場に展示した。場所は現在の汀良公民館の一角あたりである。

博物館の創設はこうした全体の文化運動の中で行われたものである。当時の職員は豊平良顕、上間正諭、事務補助の豊原澄子、労務の2人の5名体制であった。当初、豊平氏は記念運動場あたりを博物館の敷地として目をつけていた。同氏は歴史博物館なども構想として考えていたという。

創設された汀良町の博物館は首里市立の郷土博物館という運営形態であったが、通常

は「郷土博物館」と称していた。当時の看板は、小学校の校長経験者で、古典音楽にも造詣が深かった与那覇政牛氏（1895～1972）に書が達筆であったので依頼して、板に横書きで「郷土博物館」と墨書したものであった。博物館の庭で墨書しているのを覚えていいるという。同氏によると、「沖縄郷土博物館」（縦書き）の看板ははっきりわからないが、この看板は屋部憲氏（1894～1952）と原田館長が親しくしていたので、後に変えたものかも知れないという。

以上のことと総合すると、当時の博物館は搖籃期ということもあり、正確な名称の統一はなされておらず、“郷土博物館”的愛称のもとに、当初は「郷土博物館」の看板、その後沖縄民政府立首里博物館の頃は「沖縄郷土博物館」の看板が掲げられたが、“首里博物館”的呼称も一方で定着していったと推察される。この看板は琉球政府発足（1952年）後、1955年に「琉球政府立博物館」と改称されるまで用いられたと考えられる。

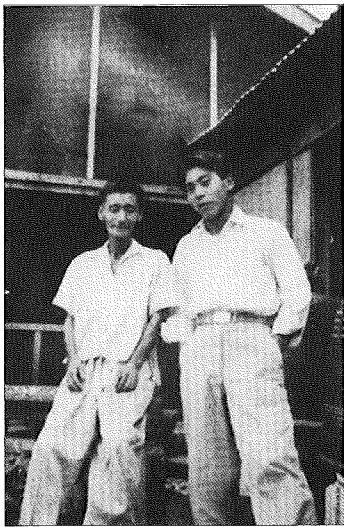
さて、仲本正真氏（大正4年生）は博物館の初期に勤務した方である。1996年6月21日に当博物館で、当時のメモを見ながら語って頂いたことを以下に追記しておきたい。

1948年10月11日、12日に履歴書を提出し、その後採用になった。当時は原田貞吉館長、野崎真美、大浜用光、伊芸オト各氏の5名の職員であった。本人はそれから1950年3月末まで約1年6ヶ月汀良町の博物館に在職した。

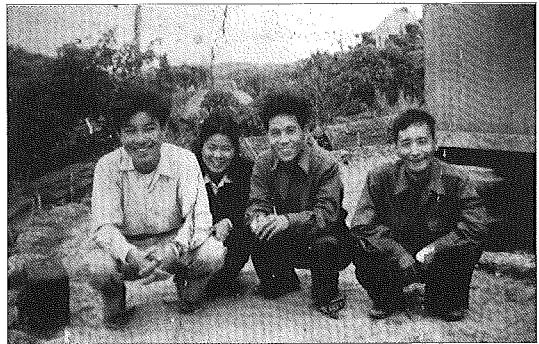
原田館長は豊平良顕氏が新聞社（沖縄タイムス社）を設立するために退職した後の後任として赴任したが、前職は国頭区裁判所判事で、裁判官であった。鹿児島県出身で、小学校2年の頃には沖縄県庁の門番をしたという。裁判所に給仕で勤めるようになった。16才で俳人として金賞をもらう。現在、御遺族は埼玉県に在住という。

仲本氏は1948年11月17日当時には460円の月給で、手取りは400円であった。12月31日に392円の給料を支給された。これらの金額は、当時の芋の130斤の値段に相当したという。当初の仕事は石垣を積んだり、庭に花を咲かせるために、あちこちを廻って花の苗を植える作業をした。そのような作業の傍ら、同年の11月25日から28日にかけては首里市の産業振興展（会場は首里中学校）に博物館の資料を出品した。12月19日は首里市の移動3周年の記念行事があり、仮装行列などが催され大変賑わった。当日は、中国人やロサンゼルスの県人2世なども絶えず博物館に足を運んでいた。

その頃の勤務体制は、朝8時頃出勤し5時までの勤務時間であった。博物館は毎日開館し、職員は交替して休みを取っていた。午前、午後の交替で組むこともあった。いずれにしても、周1日は休日が取れるように配慮されていた。来館者が多いのはやはり日曜日であった。



首里博物館時代の職員①
野崎真美（左）、徳山盛喜の両氏



首里博物館時代の職員②
左から、吉田朝啓、安里伊集子、
外間正幸、野崎真美の各氏

1948年12月21日には、「博物館復興資金募金興業」の計画をするため、館長・大城・仲本が山田・高江洲両氏に相談にいくが、二人は糸満に出張中で会えず。

1949年2月11日に仲本氏は2月から3倍の増俸になる。家族手当200円（B円）であった。また、この頃から配給品が5～6倍に値上げになったという。

1949年5月12日には月給は税引きで1,194円であった。その頃の米の1ヵ月の配給は2斗7升6合で、572円の相場であった。

1949年5月19日博物館が軍予算に編入される。民政府の成人教育課（安里源秀、仲里金雄氏らが職員）の管轄ではあったが、予算は軍政府管理となる。

10月19日博物館の移転についての話のために図書館の城間チョウビン氏が来館する。当時、文化財の資料を集めるのにも様々な情報を収集して、「どこに何があるか」聞いて廻ったりした。放生橋の石彫も民間の家にあったものを収集した。円覚寺の総門は火災にはあわずに壊れたが、それらの残骸は人々が家に持ち帰って家造りに使用したりしたという。

琉球政府編の『琉球史料 第10集』には首里博物館の行事日記が掲載されている。これは当時職員だった仲本氏が書き残した貴重な日誌である。本資料は当館の『博物館沿革史』（1954年以前）に綴られているべきであるが、これについて原資料は遺憾ながら残されない。50年史には紙幅の都合などもあり採録できなかったが、当時の貴重な情報を含んでいるため、ここで再度掲載しておきたい。

首里博物館

1949年

1月

自22日 名護ハイスクールに於いて当館移動

至24日 博物館開催、出品点数23点。一般の好評を博したり

8日 弁ヶ岳方面へ蒐集を行う。墓庭に遺棄せられたる蓮華院系統高僧の骨壺3個、瓢箪型鉢釉花瓶1個を蒐集す

2月

浦添世衰へ視察並蒐集へ。英祖王の墓には大石棺3個、尚寧王の墓には大石棺1個、小石棺2個あり、300年乃至600年前の作としてその手法、技術 彫刻等素晴らしいものあり、然るに、蓋にある獅子その他花鳥等の彫刻を学童等が破損持去りたるらしき形跡あり、将来右記の石棺は博物館に移動保存する必要ありと認める。今にしてその仮放置するに於ては優秀完全なる石造美術品を破滅喪失するに至らんことを憂う

4月

4日 ライカム勤務ブレイク氏の夫人日本民芸協会長柳宗悦氏の紹介により又吉副知事島袋官房長、比嘉渉外局長同道して来館将来博物館、図書館の復興、整備につき協力し度旨申述べらる

17日 来島中の青山学院大学教授比屋根安定氏は沖縄キリスト教同志会主事岩原繁勝氏帶同米館、在日沖縄人が郷土の文化問題につき多大の関心を持っており、在日沖縄文化協会に於いては沖縄の史料、美術品等の蒐集に力を注いでおり、終戦前後の博物館の状況、将来の運営、希望等を知り度旨話さる

5月

本月は特に遠足季節にて学校、青年団体並に外人家族の観覧が多く、高学年生並に青年団員に対しては、その希望により館長から琉球文化に関する啓蒙的な講演をなしており、これら青少年の郷土認識に些か益するところあるかと思われる

8月

最近の注目すべき傾向として絵画、彫刻、陶器、漆器、音楽等の専門家が研究資料を求めての来館及び初中学校生徒の社会科の一課題としての団体見学、その他各新聞記者の来館が特に多くなって來たことである。これは社会の博物館に対する関心と認識が深くなりつつある徵と見るべく、館員もこれら沖縄文化の研究と向上に努力される方に対しては特別の便宜を図り、尚社会科学習の生徒の郷土に

対する認識を一層深めるよう努めている次第である

- 15日 沖縄青年連合会より副会長米須氏等来館同会発行の雑誌に沖縄歴史に関心して寄稿方依頼があった

9月

- 10日 文教部図書編輯官城間正雄氏沖縄歴史編纂につき懇談並に次史料を求むるため来館

- 11日 第一航空隊教育係長フランク氏並にサイモニック氏山城文教部長の案内にて来館
同氏は目下沖縄歴史、風俗、伝説などの研究をなされて居る由にて、3時間余に亘り収蔵品の研究並びに撮影をされた

- 14日 館長午前10時より外国語学校首里分校に於いて「琉球の文学」について講演、午後7時より外国語学校に於いて「古琉球の海外発展」について講演

10月

- 11日 館長、民政府に於いて開催の名勝史蹟保存対策懇談会へ出席。野崎美術官首里市池端区に出張し、世持橋の石欄羽目2個を蒐集す

- 23日 当博物館の現在の敷地は狭隘にして、交通の便も悪く早急に移転の必要があり、原田館長、仲本秘書官は敷地選択のため尚家跡、その他を視察

- 24日 原田館長は午後より成人教育課長安里源秀氏、同視学官仲里金雄氏、建築技師仲座久雄氏等と共に史跡視察のため浦添世衰へ出張。石棺（330年前のもの）の破片6個蒐集

自25日 原田館長は蒐集並に講演のため与那城村伊計島へ主張。伊計城趾より古陶器

至28日（香炉）及古支那青磁破片を蒐集

31日 美術家協会屋部憲氏博物館の移転問題等につき懇談のための来館

11月

9日 成人教育課仲里視学館、建築技師仲座久雄氏史跡保存会常任委員会開催につき打合せのため来館

10日 沖縄タイムス主事史蹟保存会常任委員豊平良顕氏、成人教育課仲里、佐久川視学官史蹟保存会常任委員会開催につき打合せのため来館

19日 志喜屋沖縄知事来館視察

赤絵酒家、赤絵対瓶各1個購入、戦後初めての優秀品

22日 首里市桃原区松島朝信氏より豊見城殿内の家紋入白灰釉香炉1個（大型）購入

27日 上間朝久氏李朝鉄絵瓢箪型徳利1個寄託出品（古朝鮮陶器）同氏より古琉球赤絵茶碗1個購入

12月

- 4日 胡差高校喜名分校の歴史担当教師宇根信一氏沖縄歴史の教材を求めて来館。午後
仲里視学学官、原田館長、仲本秘書官は博物館移転予定地として軍政府に申請す
べき旧沖縄師範学校体育館跡を実地測量す
- 9日 博物館移転促進につき懇談のため名渡山画伯来館
- 10日 博物館移転促進につき懇談のため美術協会屋部氏来館
- 15日 午後2時より博物館に於いて史蹟保存会の事業運営並に博物館、図書館の移転問
題打合せのため首里近在の史蹟保存会常任委員及び幹事参集、委員会を催す
- 27日 原田館長及仲本秘書官は民政府に於いて開かれる史蹟保存会常任委員会に出席

1950年

1月

- 14日 午後1時より博物館事務室に於いて史蹟保存会常務委員会開催（観光地となるべ
き史蹟名勝施設の復興問題につき協議）
- 15日 原田館長仲本秘書官は首里市役所に於ける史蹟保存会小委員会に出席（首里関係
史蹟名勝復興につき協議）
- 17日 原田館長、仲本秘書官は観光地となるべき史蹟名勝視察のため安里成人教育課長
外3名と国頭、中頭へ出張
- 20日 原田館長は午後2時より首里市役所に於いて開催の首里市観光地復興委員会へ出
席

3月

- 1日 原田館長、仲本秘書官は民政府会議室に於いて開催される史蹟保存会常務委員会
へ出席
- 28日 ハワイよりの観光団46名来館、原田館長は民政府の委嘱を受け観光団の史蹟名所
観光旅行の説明係として中頭、国頭出張

4月

- 6日 米国ワシントン大学人類学部助教授アーレン・スミス氏及同夫人は又吉副知事、
山田有幹氏の案内にて来館
- 9日 首里氏当蔵区1班175号我謝幸正氏は首里城下円鑑池より拾得した掛鈴1個（日本年
号「明和9年」—西暦紀1772年に該当—と刻まれている）を寄贈
- 18日 原田館長は伊江氏の通報により首里城趾より発掘された古石碑を見分したが、そ

れは 112 年前に来島した支那冊封副使高人鑑の筆（「玉漱」）であることがわかつた

博物館に収蔵の必要があると思料する

5月

16日 仲里成人教育課長経由佐々木辰雄氏より 3 百年前の首里、那覇鳥瞰図1、那覇福州間航海5体図1、寄贈

19日 桑江良慶氏より旧藩時代に於ける冠婚葬祭に関する典礼記寄贈

7月

2日 琉球文化研究会主催尚巴志玉陵調査（佐敷村）始まる

15日 首里市復興祭のため紅型図録展示会を市役所にて開催。観覧者約1万人に及ぶ

8月

7日 国王歴代一覧表作製

12日 首里市大中区佐久川寛貞氏より円覚寺方丈鬼瓦の寄贈を受く

26日 紅型研究家城間栄喜氏鳳凰図案研究のため来館

9月

12日 額、大皿1個購入。東京沖縄文化協会より「紅型図録」「琉球の建築」寄贈受く

10月

1日 本日より4日間首里文化財保存会主催の芸術祭に出品、移動展覧会開催

4日 芸術祭終了、観覧人4千人

14日 午前中館長は職員2名と共に那覇高校社会科展に出品並に協力のため出張。本日より3日間

16日 那覇高校社会科展終了、3日間の観覧人6千人

23日 泊エンジニア部隊通訳山口栄一は部隊内の米人に沖縄文化を紹介するため資料蒐集に来館

26日 博物館の現状並に将来の復旧に付、海外の同胞に訴える趣意書作製提出

31日 館長並に外間秘書官は親泊政博氏の将来に係る日本に於ける「沖縄財團」寄贈の紅型型紙13枚、刳舟模型1個、宮古上布裂帳、青貝御椀1個外4点を民政府にて受領

11月

11日 台風襲来、台風の予報を受けるや直に全員にて応急対策をなす。午後より風速烈しくなるも丘の台上にあっては如何ともし難く対策のすべなきままに左の如く被害を蒙る

1、屋根東側角のトタン剥奪され、そのため窓に掛る円覚寺欄間彫刻大額落下し陳列せる所品の獅子破損、尚、薄板製陳列台2台破損（カンバス窓3枚吹飛び、読谷テーサージ2枚紛失）

1、博物館正面の石彫刻を置ける台地の落盤より石彫刻地盤と共に約3米の穴に落下す

1、館長住居の宿直室の茅屋根の総茅飛散する

12月

2日 東京沖縄財団理事、親泊氏郷土古文化財に関する在郷入との今後の連絡並に後援を依頼す

29日 3ヵ年計画博物館施設費作製のため職務会開催す

1951年

1月

26日 明日より開催さる首里高等学校展覧会に移動展を開催すべく、陶器類の整備をなし、なお民間所の紅型、織物の優秀品数10点を陳列す

27日 展覧会午前9時開催さる。当館移動展の陶器、漆器、織物を陳列せる部屋は第1会場に当り、ビートラー少将婦人、セフワード佐をはじめ米国人、日本人多数の観覧人あり、観覧人約3千人

28日 昨日より観覧人多し。部屋の設備良きため陳列品は今迄になき見栄を感じしめ、観覧人をひきつける。観覧人約1万人

2月

23日 沖縄織物会社豊見本盛信氏は読谷花織タオルの作製を企図し、見本見学のため来館。大平窯業合資会社代表社員、木村昌宣氏は琉球古瓦の研究資料を求めて来館

3月

12日 2月12日より7日迄琉球大学に於いて開催されたる情報教育会議にて博物館関係委員会に於いて提案せる「文化財保護法」再検討のため軍通訳官安里氏玉木社会教育課指導官来館、合同会議の後成存を得る

4月

13日 琉球大学照屋教授は在米米人宣教師ブルー氏よりの要求により琉球古代人の使用せる用具類につき研究のため来館

15日 米軍雇用日本土建業者顧問木村香氏来館日本に紹介すべく博物館の撮影をなす。木村氏は着任以来在琉日本土建業者に首里博物館の紹介に勤め数度に亘り日本

土建技術者を引率し来る

- 28日 紅型研究家城間栄喜氏来館、紅型型紙の作製について館員と共に研究す。なお最近作製せる風呂敷等を参考品をして持参し、化学染料に依る紅型の現代化せる色彩等につき実物研究をなす

5月

- 22日 那覇情報会館にて開催さる西郷遺品展並に琉球文化に紅型図録並に紅型風呂敷、テーブル掛け等を出品す
- 30日 米軍政府官府勤務L・S・Hawcach氏琉球歴史研究のため来館、殊に工芸文化に於いては写真や実物を参照しつつ詳しく説明す。館長北部地区の講演を終り、牡丹唐獅子模様古紅型引幕1枚蒐集帰館す

6月

- 6日 南部地区社会教育幹部指導講習会が那覇情報会館にて開催され、館長講師として講演す。同時に当館より陶器、紅型、紅型図録、宮古上布、写真帳、其他優秀品を出品し講習員の観覧に供す
- 12日 館長、外間秘書官午後より崎山区墓地徳村家の、石棺、首里城趾の碑文（飛泉玉漱）運搬準備をなす
- 13日 午後より当館の主催に依る文化研究会を情報会館にて開催。文化研究員幹部13人集会後3時間に亘り今後の文化財保存会の発展について検討。なお博物館改築等の打合せも行われた
- 20日 館長は文化財保存会副会長屋部憲氏と共に博物館建築、文化財問題について中央政府並に群島政府知事訪問

7月

- 12日 館長は漢那憲英氏より那覇安慶田家墓の厨子甕の鑑定を依頼され、館員と共に同地へ赴く。後辻原墓地一帯の厨子甕の調査をなす
- 18日 館長は那覇の旧家安慶田、嘉手川両家の依頼により午前8時館員と共に辻原墓地へ趣き安慶田家、厨子甕3個（乾隆年代）外4点を博物館へ搬入す
- 22日 安慶田家墓地より厨子甕コバルト釉塗（乾隆年代）2個を蒐集す
- 31日 博物館建築問題並に文化財保存問題協議会を当館にて開催す
群島知事文教部長、首里市長、各新聞社関係、文化財委員等出席両問題の討議をなす

8月

- 7日 早朝館長は自動車を交渉し館員と共に辻原墓地に蒐集、残置の厨子甕全部（13個）を運搬す。午前中、年代順に土器、康熙、雍正、乾隆、嘉慶、道光、咸豐、大正、昭和、に亘る24個の厨子甕を整備配列す
午後3時群島知事は新首席民政官チャップマン大佐を案内当館を視察す
- 25日 館長崇元寺復旧座談会録音のため民政府情報係へ出席
- 30日 来月6日より情報会館にて開催さる文化財展覧会に備えて本日より館員全員にて出品物の整備を始む

9月

- 4日 ブラジル日本新聞社長仲真美登利氏来館館長博物館の現状を説明の後、同氏より海外に紹介せしむべく博物館の沿革、収蔵品一覧表、観覧人員、統計表等最近作製の資料パンフレットを提出す。5日展覧会出品物の整理完了し、本日館員全員にて情報会館へ運搬、陳列をなす
- 6日 崇元寺石門起工式が午後2時より行われ終了後文化展覧会開催さる。当館よりの出品物は陶器、織物、紅型等総数39点におよぶ。開催前館長はルイス准将に陳列品の説明をなす
- 8日 3日間に亘って行われた展覧会は多大の効果を納め本日午後4時半盛況裡に終了す。
- 23日 米国スタンホーツ大学教授ゼイムス・L・ティグナー氏は琉球新報社長又吉康和の案内にて来館、館長一時間余に亘り沖縄古代美術の説明をなす。当館を去るにあたりサイン帳に「沖縄の将来の発展は、沖縄人の誠意と勇気によって得られる」との言葉を残す

10月

- 16日 日本より派遣され、目下沖縄視察中の桜田、関両氏民俗学者は琉球古文化視察のため来館。18日桜田、関、島袋全発、豊平良顕氏等を招待し、文化懇談会を実施

11月

- 9日 3時55分ビートラ副長官は米軍隨行員22名、比嘉中央政府首席、平良群島知事、山城副知事、当間那霸市長外新聞記者11名と共に到着。館員全員にて出迎、館長約15分間陳列品の説明をなし、後茶菓子を呈し、副長官婦人へ新紅型風呂敷1枚贈呈す

- 20日 新築博物館敷地の整地本日午前中にて完成す

12月

- 21日 沖縄興行会社の映画「よみがえる沖縄」撮影本日より開始、館外の石造彫刻、辻

原墓地群、厨子甕の撮影をなす

- 23日 真和志中校に於いて産業復興共進会展覧会開催さる。当館より紅型15点、織物10点、陶器13点、漆器5点、石造彫刻3個、その他参考品数10点陳列す。知事を始め群島政府職員各学校団体見学者、地方よりの観覧人多數あり、約3千に及ぶ
- 24日 世持橋の海洋石彫、円覚寺の海洋木彫刻は琉球建築に依る当時の写真と対照。観衆の最も注目する所となる
- 25日 本日最終日はクリスマスに當り、内外の観覧者最も多く約7千に達す。午後5時盛況裡に終了す

東恩納博物館

1949年

9月

- 8日 沖縄産業視察のため来島中の米国スタンホーダ大学教授ジョンソン氏、ミラー軍政官、スケアリー司法部長は志喜屋知事、又吉副知事、比嘉渉外部長と共に午前9時半来館。沖縄の文化財の片鱗を館長提出の戦前の写真を対照しつつ鑑賞す。特にジョンソン氏は古美術品陶器類に対しては相当の見識あり、日本語を以て詳細に説明を聽取された。引続き別館金環園に立寄り暫時休憩。沖縄産の御茶を喫しつつ現スタンホーダ大学の政治部教授ワットキンス氏が海軍軍政府時代政治部長として沖縄に於いて活躍されし当館を物語り親友ワットキンス氏を記念すべき金環園の保存あるに感激され一同満悦裡に懇談12時半退園、館長も石川市役所迄隨行した

11月

- 23日 大島博物館主事文英吉氏来館、琉球古代文化と大島のあり方に就いて相互の意見交換をなす

1950年

2月

- 23日 館長、首里工務部出張所前に古い磁盤放置しあるを探し出し現場を調査す。円覚寺本堂の蓮弁彫刻礎盤3個首里城正殿礎盤3個あるを認め、後日博物館へ移管方を交渉す。なお円覚寺並に首里城の掘り返し跡より古瓦片及古陶片を採集帰館す

3月

- 28日 絵画の特別展示を計画（ハワイ観光団歓迎のため）越來より大嶺政寛氏画6点、

山里栄吉氏画5点、普天間より山田真山氏画2点を借用臨時陳列をなす

30日 ハワイ観光団来館、博物館入口の線路一面に歓迎塔を建て絵画の特別展をなし粗茶の準備をなす

4月

24日 民政府創立4周年記念資料展

30日 大宜味村根路銘区敬老会60才以上の男女61名外視察員と共に来館、館長残れる沖縄文化財に対し説明をなせば感泣するもの多し

5月

13日 館長文化研究会の浦添世衰墓踏査研究座談会出席のため民政府へ

24日 館長、美里村知花の知花城趾並に鬼大城の墓碑調査へ

6月

24日 沖縄文化研究会

26日 館長史蹟調査のため具志川村へ

27日 館長、勝連城趾を調査し勝連村平安名旧部落に至り古陶油壺（口疵）2個を探す
なお旧家中村家の系図並に遺物を調べて帰る

7月

2日 館長、沖縄文化研究会員と共に佐敷村の佐敷世衰鯫川大主墓調査に出張す

8月

14日 明日の石川警察署落成祝展示会の歴史資料作成終了提出す。資料、沖縄歴史の概要と琉球王統記、琉球王朝時代の政庁組織、中央政庁と地方政府当時の法制と司法機関に就いて、東恩納番所並に仲泊番所の沿革、その他ポスター

29日 首里芸能祭出品物借受のため首里博物館長原田貞吉氏、画家名渡山愛順氏外2名
来館衣類10点漆器陶器類10点貸与す；

10月

1日 首里芸能祭本日より開催館長美術工芸館の説明応援をなす

日誌最後の東恩納博物館の行事日記は仲本氏が記録したものかどうか明かではない。
しかし、これらの日記を読むと、文化財の収集がその都度ことある毎におこなわれていたのがわかる。

1949年5月の日誌にある「本月は特に遠足季節にて学校、青年団体並に外人家族の観覧が多く、高学年生並に青年団員に対しては、その希望により館長から琉球文化に関する

る啓蒙的な講演をなしており、これら青少年の郷土認識に些か益するところあるかと思われる」という記事は、博物館の教育普及的な活動の萌芽として興味深い対応である。現在、博物館では団体対応でオリエンテーションを行うのは一般的であるが、戦後間もないこの頃から見学に際しての講演を組んでいる点は特記されるべきことである。

一方、同年8月にある日誌「最近の注目すべき傾向として絵画、彫刻、陶器、漆器、音楽等の専門家が研究資料を求めての来館及び初中学校生徒の社会科の一課題としての団体見学、その他各新聞記者の来館が特に多くなって来たことである。これは社会の博物館に対する関心と認識が深くなりつつある徴と見るべく、館員もこれら沖縄文化の研究と向上に努力される方に対しては特別の便宜を図り、尚社会科学習の生徒の郷土に対する認識を一層深めるよう努めている次第である」という点も注目される。社会科学習の一環としての博物館利用がこの頃から取り組まれていたこと、また研究者や新聞社などが一定の目的をもって調査や取材で博物館を利用し始めている動向を指摘できる。

また、この頃には展示会が種々の形態で開催された。多くは各種の記念行事や展覧会にあわせた移動展である。首里博物館に関しては、名護ハイスクールにおける移動展、首里市復興祭のため紅型図録展示会（市役所）開催、首里文化財保存会主催の芸術祭移動展覧会、那覇高校社会科展に出品並に協力、首里高等学校展覧会に移動展、那覇情報会館にて開催さる西郷遺品展並に琉球文化、南部地区社会教育幹部指導講習会（那覇情報会館）への出品、崇元寺石門起工式後の文化展覧会、真和志中校における産業復興共通会展覧会などである。東恩納博物館においては、民政府創立4周年記念資料展、石川警察署落成祝展示会などへの出品や展示資料作成である。このような展覧会は当時人気があったようで、観覧者が6千人とか1万人と、戦後の生活復興期の中、想像以上の活気がある展覧会だったことがうかがえる。

なお、東恩納博物館では、博物館において特別な展示を企画したことが知れる。1950年3月の日誌に「絵画の特別展示を計画（ハワイ観光団歓迎のため）越来より大嶺政寛氏画6点、山里栄吉氏画5点、普天間おり山田真山氏画2点を借用臨時陳列をなす。」という部分である。ミニ企画ではあるが粋なはからいである。

さらに、首里博物館と東恩納博物館が資料の借用交流をおこなったことがわかる。東恩納博物館の日誌の1950年8月29日で「首里芸能祭出品物借受のため首里博物館長原田貞吉氏、画家名渡山愛順氏外2名來館衣類10点漆器陶器類10点貸与す」とあることから、首里博物館への資料貸し出しがおこなわれた。

首里博物館は、建物の老朽化、敷地の狭隘等によりはやくから移転計画がすすめられていた。1949年4月の日誌に「ブレイク氏夫人、日本民芸協会会长柳宗悦氏、又吉副知

事、島袋官房長、比嘉涉外局長等と将来の博物館の復興、整備につき協力し度旨申し述べられる」と、また同年12月の日誌以降には「博物館移転促進懇談のため○○氏来館」と数回あることから、開館草創から敷地の狭さや交通の便の悪さなど多くの問題を抱えていたことがうかがえる。

さらに、博物館資料のためだけの文化財収集だけではなく、各地域に残された史蹟保存の調査にも出かけたりしている。1949年10月の日誌には「・・・史蹟視察のため浦添世衰へ出張。石棺（330年前のもの）の破片6個蒐集」、同年12月の日誌には「史蹟保存会の委員会をもつ」など、戦災を幸いにも免れた史蹟の保存、管理にも積極的に協力していることがわかる。

余談であるが、首里博物館の日誌から読み取れるように、博物館のそばには原田貞吉館長の自宅もあった。そのため、人によっては原田氏の個人の私設博物館と受け取った人もいたようである。

ここで、「琉球史料 第十集」に掲載されている当時の博物館への入館者統計の記録を紹介しておきたい。別表1～3がそれである。

首里博物館の観覧人員一覧表より、1945年4月から1951年10月（およそ7年間）まで、総計観覧人員は約91,266名（表の総計数の合計）である。その内訳を見てみると、外国人に比べて沖縄人の入館者数が多く、その中でも成人男女を押さえて、学生の数が圧倒的に多いことがわかる。

戦後、荒れ果てた沖縄において文化や伝統を肌で感じることのできる博物館は、当時何も無かった学生達にとって最良の学習の場を提供したと思う。学生達はここで、失った文化遺産の尊さや重要性等を再認識し、沖縄の文化を誇り自信へつながっていっただろう。

一方、東恩納博物館は資料として記載されている内、1945年度の1カ年しか観覧人員の統計表しかないのが残念である。この少ない資料から言えることは、沖縄人の観覧人よりも米人の数が上回っていることである。そもそも、東恩納博物館は米国人の軍属を中心に、沖縄文化の素晴らしさを理解してもらう意図もあり、建てられた博物館でもあった。そのことから、この結果は納得できる統計表である。

このように東恩納博物館と首里博物館では入館者の内容に大きな相違がみられた。入館者数の総数は首里博物館が多い。しかも入館者の多くが沖縄の地元の人々である。一方、東恩納博物館は米国人がかなり多い割合で観覧している。この点は当時の職員の佐市次田トミさんが語っているように、米国人がよく訪れたことがわかる。また、入館者自体の統計の取り方が米国人、フィリピン人、中国人などに分けられ当時の時代背景をよく物語っている。

表—1 自1949年至1950年3月 東恩納博物館

1年間參觀人員表

月 国	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	各月平均
米人	635	786	877	637	248	406	349	478	488	741	843	754	7248	604
比島人	161	126	98	54	47	39	26	62	80	135	173	106	1107	92
中国人	17	37	11	0	2	0	0	4	0	0	0	0	71	6
沖繩民	785	702	498	128	126	254	193	330	348	529	773	1153	5819	483
計	1598	1651	1484	819	423	699	568	883	916	1405	1789	2013	14245	1185

表—2 1950年觀覽人員表 首里博物館

月別 国別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
外米人	210	174	62	145	88	53	42	53	83	142	77	89	1218
国比島人	8	6	9	3	0	5	5	0	0	0	0	0	36
人其他	15	0	0	0	3	3	3	3	7	2	5	44	85
計	233	180	71	148	91	61	50	56	90	144	82	133	1339
沖成人(男)	600	246	231	373	295	294	4424	580	510	3260	461	352	11626
繩成人(女)	203	53	90	220	184	88	3401	461	286	3125	344	214	8669
人学生	961	614	1857	1415	2591	497	3674	755	532	4308	874	365	18443
計	1764	913	2178	2008	3070	879	11499	1796	1328	10693	1679	931	38738
総計	1997	1093	2249	2156	3161	940	11549	1852	1418	10837	1761	1064	10077

表—3 1951年觀覽人員表 首里博物館

月別 国別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
外米人	86	122	39	34	42	52	50	6	70	69			483
国日本人	46	76	62	18	17	65	66	22	54	27			426
人計	144	198	7101	52	59	117	116	28	124	96			909
沖成人(男)	486	5766	324	318	417	328	493	372	919	313			9423
繩成人(女)	176	4350	130	204	173	237	260	306	611	262			6447
人学生	449	4700	326	297	2034	371	1145	297	730	440			10349
計	1111	14816	780	819	2624	936	1898	975	2260	1015			26219
総計	1125	15014	881	871	2683	1053	2014	1003	2384	1111			27128

2 初期の文化財の収集状況

博物館草創期の文化財の収集については沖縄県立博物館『30周年記念誌』(1976)で詳しく語られている部分もある。また、今回の50年史でも追加補充して初期の収集状況や活動について記述した。しかし、それに関連して、初期の個々の資料の収集先やその背景となると、ほとんどわからないのが現状である。その一例をあげてみたい。

1953年6月、原田貞吉館長は本土から文化財約80点を収集して帰沖している。これは最初の日本本土での文化財収集活動であるが、博物館の記録では東京や京都各地で収集されたというが、それ以上はっきりしたことはわからない。この時期の収蔵品台帳(1953年6月～7月)を開くと、京都からの寄贈であれば兄弟である永田万蔵及び永田七郎両氏(住所未記載)からの、紅型や織物、ティサジの寄贈品と考えられる。ただこれらと関係しそうなものを含めても30数点である。他は購入として、花生・茶家・徳利などの陶器、琉球人行列などの文書絵図類、紅型や絣着物、螺鈿文庫などが入っている。このようなものを含めると80点近くにはなりそうである。しかし、はっきりした内容は不明である。また、購入についてはその相手先は不明である。

永田万蔵氏のコレクションについては50年史編集の過程で、その所在がわかり連絡がとれたこと也有って、京都の呉服商「えりまん」を経営された人物であることがわかった。兄弟で経営し、末弟の永田七郎氏が沖縄に興味を持ち、戦前何回か来沖して手に入れた資料であることが判明した。すでにお孫さんの代になっているが、その手元には琉球政府比嘉秀平主席からの感謝状が残されていた。

このように、初期の収集活動については当時の記録が残されていないことから、当館の収蔵品台帳にも各種の情報が記載されていないものが多い。当時の収集活動としてみれば、記録を十分に残せるような体制ではなかったと考えられ、この点はいたしかたないと思われる。そこで、ここではいくばくでかでも当館の「収蔵品台帳」や関連資料、とくに新聞記事から、資料の収集先の状況や旧所蔵者の背景、その入手経路、もしくはその発見経緯などについて記録にとどめておきたい。

1952年から1954年にかけては戦災からまぬかれた八重山からの資料収集が積極的におこなわれたという。中国冊封使からの書軸、紅型の舞台幕、風呂敷や衣裳などの染織資料、陶器類が目だつ。台帳を見ると、収集相手先に崎原当好、宮良当勝、稻村賢敷、上勢頭享、東江太吉、森田孫栄、村山信好氏らの名前がみえる。収集・購入者は原田館長である。当時の新聞記事(新聞社・年月日不詳)によると、「在伯の仲尾権四郎氏(羽地出身)から南米時事新報社長仲間美登里氏を通じ沖縄民芸研究に使って貰いたいと日本円20万円を贈ってきたので八重山の大浜永三氏他諸氏の援助のもと各旧家を訪問、宮

良当智、同当勝、崎原当好の三氏らの斡旋で沖縄、朝鮮、南方、日本伊万里等の漆器、陶器、掛軸など104点の寄贈または譲受け持ち帰った」という。当時の資料の収集の背景には、在伯の仲尾権四郎氏から当時20万円という多額の寄付金を受けたことにあつた。この件については、「文化財蒐集計画に付いて陳情」(1952年)書に簡単に記されているのみであるが、仲尾氏の寄付は、戦後の沖縄復興期における海外移民の人からの文化的な支援として特筆されるべきである。収集された資料は崇元寺の日琉会館で「古文化財の展示会」として観覽に供せられた。

1955年11月に、山里永吉館長が本土から文化財140点を収集している。この時の主な収集先は台帳からすると、奈良、京都、東京であったようだ。奈良県の黒田壺中氏から多くの陶磁器、また京都市の西村千之助氏から花織ティサジや着物、絣着物や紅型着物、同じく京都の中川伊作氏から東京の伊藤裁子氏から紅型風呂敷、黒朝衣、漆器の御供飯などの提供をうけ、購入している。

さらに、翌年56年11月同じく山里館長が本土から文化財50点を収集し帰沖した。この時も京都と東京が主な収集先である。京都の中川伊作氏、東京の伊江朝助氏、財団法人啓明会（東京？）などから書画や漆器、陶磁器、紅型型紙などを購入している。

この山里館長の本土での収集活動は多くが購入をしているものであり、予算をたてて計画購入したと考えられる。この点は50年史に所収した「文化財蒐集計画に付いて陳情」(1952年)をみれば明らかのように、1952年頃から蒐集のために予算獲得の要請が行われていた。

30年史には「1958年5月、外間正幸主事が本土から文化財115点を収集購入して帰る」とある。この時の収集はどのような経緯であったのであろうか。1958年5月7日付の琉球新報では外間正幸氏が本土で文化財を収集したときことが記されている。この時は紅型織物や「舞楽図（琉球人舞楽絵巻物）」、琉球漆器、玩具など貴重な資料を収集している。この時の収集品は京都の版画家中川伊作、東京の日比谷高校教諭の我部政達、仲原善忠、高島屋美術部長中井敬助氏他の沖縄関係の篤志家の所蔵品であった。舞楽図は沖縄タイムス1958年5月15日付の新聞記事では仲原善忠氏蔵となっているが、琉球新報の同日記事では東京の某氏からの譲渡となっている。ただ、収蔵品台帳では千葉県在住の人物からの購入であり、諸般の事情があったようで確認の作業は必要である。

郷土玩具の寄贈は日比谷高校で美術を担当していた我部政達氏が収集したものである。我部氏（神奈川県大磯山王町1801）は那覇出身で、教鞭のかたわら東洋の民芸品、玩具の収集をじいていた。寄贈の資料は所蔵の一部で、唐船、サバニ模型、手まり、「シシ舞」や「チンチン馬」などがある。また、紅型には絹地に浅黄を染めた風呂敷や



外間正幸氏の文化財収集
(1958)



外間氏の文化財収集キャラバン
(1961)

トンパン（トゥンピヤン）朱綾絹縞衣裳など、さらに工芸品としては櫛箱、かつら箱、御供飯などがある。これらはいずれも大正13年に東京美術校の卒業製作のために帰郷、その後沖縄師範に奉職していた4年間に集めたものの一部である。戦時中はこれだけは残しておきたいと、防空壕に入れた大部分が全滅した中でこれだけが幸い残ったという。その頃の博物館には琉球の玩具はなく、戦前の民俗資料として貴重な寄贈であったことがわかる。

これらの文化財収集は外間氏が4月4日に那覇を出発し、鹿児島、熊本、福岡、岡山、京都、奈良、名古屋各地の博物館を視察し、同時に沖縄関連の文化財を収集している。その後、東京の文化財を購入して陶器、漆器、織物、染物、書画など約100点余りを携えて5月19日に帰島した。45日間にわたる長期間の収集旅行であった。この収集は原田貞吉、山里永吉両館長が各地を廻った時に、譲り受けたいと打診してあったもので、その仲介役として文部省の森政三氏が協力している。

1959年6月、外間正幸主事が本土から文化財89点を収集して帰る。これらは東京都内で収集されたもので、外国船のジャクソン号で運ばれた。文化財は紅型衣裳11点、紅型風呂敷11点、琉球織物2点、芭蕉布1点、かすり1点、陶磁器6点、手さじ類11点、紅型型紙20点などがあった。

大津久之介（元大阪商船沖縄支店長）、森政三（文部省技官）両氏の寄贈品をはじめ、東京沖縄県人会長の神山政良氏所蔵の尚泰王の遺品があった。神山氏のそれは尚泰王の遺品のフィーターと、同氏の妻八重子さんが尚泰王の六女であったことから、嫁入り道具の一つだった尚家紋入りの漆器枕である。フィーターは紫地の緞子に、王族でなければ使用できなかった金色の龍文様が刺繡されたものである。中国の清朝から尚泰王に贈

られたもので、神山氏にとっては一対の漆器枕とともに、昭和14年に病没した八重子夫人の形見として愛着のこもる品であった。同氏は「いろいろ思いのこもるものではあるが、私有するより郷土のお役に立つことにでもなれば」と語っている。

博物館の収蔵資料は、単に博物館資料としての側面のみならず、収蔵される以前の人々の愛用のものがあり、さまざまな意味をもつ資料でもある。博物館の展示においては展示ストーリーの展開による制限もあるが、元の所有者の「顔」がみえるような展示も必要であるように思われる。最低限、寄贈品には提供者の氏名は記すべきだと考える。それが博物館へ個人愛用の資料を寄贈していただいた方々へ、常に感謝の意を表す唯一の手段だと思われる。寄贈後、数年してあるいは子どもの代になって博物館を訪れ、もし展示されているときに、寄贈者名があるのとないのでは、博物館の対応として格段の違いがあるのは否めない。旧所有者の「人となり」がみえる展示は一つの方向性を与えると思われる。

この年の購入資料に「琉球樂童子白馬乗之図」がある。台帳上は沖縄財團からの購入となっているが、購入の契機になったのは東恩納寛惇氏（当時、拓殖大教授）が東京の古書店（骨董屋）で発見したものである。その連絡を受けた博物館が発注して買い受けたものである。東恩納教授は戦前、沖縄郷土博物館に三線「江戸与那」を寄贈されたことでも知られるが、戦後は仲村渠致元作の「魚絵大皿（線彫染付魚文皿）」や田名宗経作の印籠などを惜しみもなく寄贈している人物でもある。同資料は尚典侯が生前愛用した逸品で、その次男尚旦氏が教授に贈ったものである。また、印籠は若狭町の旧家安里家から東恩納家に移された貴重な資料である。樂童子の絵図も、表にはみえないが、東恩納氏のすばやい行動があったればこそ収集できたものである。

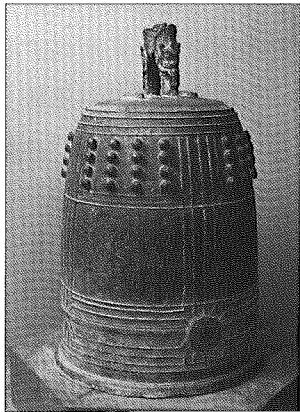
1961年3月、外間正幸主事が本土から文化財41点を収集して帰っている。この時には尚典侯の三男尚旦氏から寄贈・譲渡品が15点ある。この中には尚育王の書軸が含まれていた。琉球新報の1961年3月20日付の記事には、尚旦氏の夫人美津子さんの話として「主人が生前から沖縄にかえしたいと気についていたのですから」とあり、故人の意志であったことがわかる。ただ、当館の台帳には資料の提供者として神山政良氏の名があり、同氏が資料の一部を仲介した可能性がある。

また、鎌倉芳太郎氏からの寄贈・譲渡品が11点ある。円覚寺大雄殿壁画模写と写真、琉球陶磁工芸伝統表、貝摺奉行所絵師筆漆工品下図、安国山樹花木記碑拓本、瓦奉行焼物主取辞令書、大島祝女服装図、同治御冠船御座構図、御冠船図、田名宗経筆画、トキ双紙などがある。このうちのトキ双紙は、鎌倉氏が戦前の来沖中に、中城村熱田の小橋川善安さんの家にあったものを写しとった資料である。

以上、1950年代から60年代初めにかけての、博物館創立初期の文化財の収集状況や背景について補足を試みた。



中山王府の印



旧天尊殿鐘

最後に、収蔵品の中のいくつかを題材として、資料に関する関連情報として記載されるべきであるが、台帳などに一部洩れている貴重な情報を新聞記事から抜粋しておきたい。資料は歴史資料のみに限定した。

『おもろさうし』の紙質について、1965年1月28日の新聞記事には、『おもろさうし』の紙質は芭蕉紙であることが報道されている。鑑定者は島根県出身の安部栄四郎氏（当時62歳）である。同氏は首里山川に残る昔の紙漉き場を訪ねている。首里山川町の紙漉き場は代々喜瀬家が継いでいたようで、分家の喜瀬乗秀さんの話として、芭蕉紙は芭蕉の葉の上に石灰を積んで発酵させてつくったことが紹介されている。安部氏によると、『おもろさうし』の全22巻と『混効験集』2巻は芭蕉紙であるという。

当館所蔵の「中山王府の印」はどこからの寄贈なのか台帳にはみえない。1960年7月7日付の琉球新報で、この印の発見経緯が記されている。この印は奈良県の生駒山麓に住んでいた岡部次郎氏（当時94歳）が所有していたものである。岡部氏は福岡県出身で、戦前は大阪府枚岡市額田町で眼科医として開業していた人である。骨董品として保存していて、戦後は生駒山麓に住むようになり、そこで沖縄出身の上江洲栄信氏（当時73歳）と知り合いになる。上江洲氏の熱意により岡部氏は印の寄贈を考えたという。

また、旧天尊殿鐘は与那城村字平安座27番地の前森カマドさんが兄の前森朝明さん（当時米国に滞在中）から預かっていたものである。この梵鐘は戦時中、米軍が与那城村平安座に持ち込んできたのを前森朝明さんが譲り受けた。一時は部落の時報用に使っていたという。朝明さんが渡米したときに姉のカマドさんに預けてあった。最近、朝明さんから手紙が来て「博物館に寄付するように」と伝言されたことが経緯である。

資料は3件のみを掲げたが、自分自身担当として単に知らなかつたこともやや恥ずかしい気もするが、台帳の上で情報の積み上げがないのはこれも問題である。博物館資料の収集はその時点で、旧所蔵者からなるべく多くの情報を得ておく必要があるし、購入の場合でも可能な限りは追跡しておくべきだと考える。また、その後の専門家による鑑定などによる見解も蓄積されるべきである。とくに論文などで活字にならない場合はなおさらである。収蔵資料の関連情報をいかに集積していくかは、学芸員が日常業務一環として行うのと平行して、そのシステムなど、さらに今後考えていくべき課題がある。

おわりに

以上、沖縄県立博物館の草創期に関する記録を補完しながら、不完全な形ではあるが備忘録としてまとめてみた。

「50年史」編集を通して博物館のこれまでの流れを学べたことは、私にとって良い機会でした。博物館の変遷だけでも、多くの事柄があり大勢の人々が関わっている。博物館は現在の首里大中町（中城御殿）に落ち着くまで数回の移転を重ねてきた。その間には、博物館の名称も何度も変わっている。この変遷だけをとっても、博物館の50年という歴史のおもさを感じることができる。普段なら滅多に聞くことの出来ない諸先輩方の体験談や苦労話、また影ながら博物館を支えてきた人々の思いなど、日頃なかなか表に出にくい人々の話も聞く機会が持てたことは大変興味深いことであった。

この「50年史」編集を振り替えてみると、一言では言い尽くせないほどのものを得たというのが正直な感想である。学芸員を志す者の一人として、50年という節目である記念事業を手伝えたこと大変嬉しく思う。（多良間）

上述のような博物館の草創期に関する記録をまとめながら、博物館で「通常の業務をいかに記録していくか」というのは非常に大切なことであるように思われた。これは博物館としての「情報の共有化」の作業でもある。「情報の共有化」はとくに総合博物館では不可欠なことである。その意味でも今後に課せられた課題は大きいものがある。

博物館職員として資料の収集や保管・保存に関わりながらも、個人的には十分に既述のような情報記載をできていない点を反省してもいる。通常業務に追われながらの仕事で、どれだけ収蔵庫に入って、資料と、向き合いどれだけその整理にいそしむ時間が確保できているか、自問自答する毎日もある。50年史の編集事業に携わりながら、自己

の博物館人、学芸員としての再認識をさせられた思いである。(萩尾)

最後に、50年史の資料調査などで、お世話になった外間正幸元館長、上間正諭氏、仲本正真氏、佐次田トミさん、石川市歴史民俗資料館の宮里実雄氏などに感謝申し上げます。

【参考文献】

沖縄県教育委員会『沖縄県史料戦後1 沖縄諮詢会記録』1986年

沖縄県教育委員会『沖縄県史料戦後2 沖縄民政府記録 1』1988年

沖縄県教育委員会『沖縄県史料戦後3 沖縄民政府記録 2』1990年

琉球政府文教局編『琉球史料 第10集 文化編2』1964年

那覇市企画都市史編集室『那覇市史 戦後新聞集成1 資料篇 第3巻3』1978年

嘉陽安春『沖縄民政府 一つの時代の軌跡』1986年

沖縄県立博物館『沖縄県立博物館50年史』1996年

沖縄県立博物館『30周年記念誌』1976年

史料紹介 (Introduction to Historical Material)

組踊「智取敵打」じのぐれ

(Concerning the Kumiodori (Okinawan traditional Dance-Drama) of the Mukotori Tekiuchi)

當間 一郎

(沖縄県立博物館)

Ichiro TOMA

(Okinawa Prefectural Museum)

この組踊は、田代安定扣稿本組踊集一冊の一つ『沖縄小説集』に収められた一番で、他に「探義傳敵打」「大浦敵打」がはいっている。なお、もう一冊は『沖縄組踊集 即チ沖縄歴史小説集』といふ、「孝女布晒」「貞孝婦人」「孝行の巻」「森川の子」「女物狂」の五番が収録されている。

「田代安定扣稿」の「扣稿 (ハハハラフ)」とは、「控えの稿」「写しの原稿」「副本」という意味で、田代安定が、古い組踊写本から書き写したものである。『沖縄組踊集 即チ沖縄歴史小説集』のとびらに「田代安定扣書 寫シ 組踊集」と記されてるので、田代安定が沖縄調査の際に、或る元本からの書き写した『組踊集』一冊であることはまちがいない。

この扣稿本は、一冊になっているが、元本がこの通りであつたのか、あるいは一冊であつたかは現在のところ判然としない。ただ、この扣稿本一冊のめざらしことは、他

の組踊写本が、敵討 (打) 物と世話物、崩れ物が分類されずに取りまぜて書きつづられているのに対して、田代扣稿本は、敵討 (打) 物を『沖縄小説集』として一冊にまとめ、世話物を『沖縄組踊集 即チ沖縄歴史小説集』として収録していくことである。もともと、これら二冊の八番 (敵討物三番、世話物五番) が一冊になっていたのを、書き写す際に内容によって分類したのか、興味深い。

田代安定 (一八五七～一九二八) は、鹿児島市加治屋町に士族の子として生まれ、同地の私塾「柴田塾」で、フランス語や博物学を学んだ。そして一八七四年に上京し、内務省御雇・博物館掛となつたが、母の死で鹿児島へもどり、県勧業課陸産係になつた。田代は、国の農商務省から派遣されて、沖縄へ一八八二年、一八八五年、一八八七年の三回来島した。主なる用務は、マラリア撲滅のための規那樹 (キニーネを取る) の試植であつた。その間、沖縄本島で

の調査、宮古・八重山での人種、民俗調査をやり、貴重な史料(資)料を書写し、収集している。それらを紹介すると、第一回目の報告書として、『沖縄県下先島廻覧意見書』があり、第二回目は、八重山に十ヶ月間滞在した関係で、『八重山群島急務意見書』『八重山群島物産繁殖ノ目途』、第三回目は、『八重山住民ノ言葉及び宗教』を報告している。他に、『沖縄今帰仁城旧事記』『琉球国衣服制度記』『海南諸島单語篇』『沖縄島国頭地方旧慣問答書第一冊』『沖縄島附属伊江島取調書二冊』『沖縄島恩納間切取調書旧慣問答第三冊』『名護間切取調書』『久志地方旧慣問答書第四冊』『沖縄島大宜味地方旧慣問答書第五冊』『沖縄島国頭地方金武間切各村取調問答録第六冊 田代安定輯』『沖縄島中城間切取調問答録第七冊』等、多くの写本がある。なお、田代安定の論文や調査報告等は、当時の『東京人類学雑誌』に掲載されている。一八九五年以降は台湾に移り住む。享年七〇歳。田代の研究成果の一部は、一九四五年に長谷部言人校訂で、『沖縄結縄考』一冊が発行されている。組踊集二冊については、私の方で翻刻して、内容紹介をして、公刊したいと考えている。

さて、この「聟取敵打」は、伊波普猷著『校註琉球戯曲集』の「凡例に」に、「婿入敵討」と記されている。「聟取」が「婿入」となつて表記が異なつてゐるが、内容はおそら

く同一のものと思われる。他の写本類にも見出すことができない。現段階では、この田代安定扣稿本にのみ収録された、めずらしい組踊といえよう。県内の村踊りでは、これまでに演じられた形跡はない。しかし、大正五年五月二七日付の琉球新報の広告を見ると、中座で「婿入敵討」が外題にあるので、上演されたことはまちがいないが、たしかめようがない。

作者や創作年代も現在のところ定かでない。田代が扣稿本(副本)をつくったのが、一八八五年(明治十八)の二度目か、一八八七年(明治二十)の三度目の沖縄調査だと推定しても、これらの年代からそんなにさかのぼらない頃の創作ではなかろうかと思つてゐる。今後、究明されるであろうが、多くの組踊を読み、興味をもつた者が、苦労の末にまとめあげた作品にちがいない。

まず、最初に登場人物を紹介しておく。

- (1) 虎松 南山の分かれの台峯按司の嫡子(若按司)。父(按司)と母(をなぢやら)は、内間赤鬼の火攻めにあい、焼け死ぬ。姉の乙鶴と逃げのびて、父のいとこ玉森按司のところに身をよせて、敵打の機会を待つ。
- (2) 乙鶴 台峯按司の娘。弟(若按司)と共に、火攻めの中をにげのび、玉森按司のところに身をよせる。

(3) 玉森按司　台峯按司のいとこで、若按司・虎松と姉・乙鶴をかくまうが、内間赤鬼が部下を使つて、二人を引き渡すようにいわれる。玉森は、使者を客屋に休ませて、側近を呼び集めて相談する。乙鶴を、をなぢやら(妻)にほしいという内間赤鬼に、儀式をして正式にさしあげたいので、しばらく時間がほしいと、使者に伝えさせる。

配である。乙鶴をわが妻にし、虎松に領地を与えて、独立させる旨を、隠れている玉森按司のもとへ、使者をたてる。

(9) 阿波茶　内間赤鬼の家臣。内間の使者として、根路銘を指名する。

(10) 毛利　内間の家臣。内間赤鬼の家臣。内間の夢見の悪さをなぐさめる。接司の城へ乗り込み、判断をせまる。

(11) 根路銘　内間の家臣。内間赤鬼の家臣。内間の夢見の悪さをなぐさめる。接司の城へ乗り込み、判断をせまる。

(4) 系数の子　玉森按司の家臣。

(5) 崎元大主

玉森按司の家臣。

(6) をなぢやら　玉森按司の妻。赤鬼のたくらみを、周到なる計画であたれば、首を取ることは、まちがいないと乙鶴を励ます。

(7) 間の者兩人(まつあい、三良ひい)　玉森按司の掃除當。明日の内間赤鬼の聟入のお祝いのため、掃除に行くことを語り、乙鶴と赤鬼の結婚が、ただならぬことを語る。

(8) 内間赤鬼　台峯按司やをなぢやらを火攻めで殺し、台峯の世の主となる。毎日遊びほうけて、何不自由もないが、気がかりなのは台峯按司の若按司虎松と姉乙鶴のことである。二人は、智勇兼揃つて、長刀の秘伝、兵法の奥義をきわめているので、そのままにしては心

の命令で玉森按司のところへついた根路銘は、赤鬼が若按

司を按司の後継者に、乙鶴ををなぢやら（妻）にとりたてたい旨を伝える。玉森は、根路銘等を客屋に休ませ、乙鶴、崎元、をなぢやら等に意見をきく。玉森は、姉弟のとりたてに喜ぶ意を示し、とくに乙鶴ををなぢやらにして下さるなら、正式に送り出したいので、吉田まで待つてくれるよう、使いの根路銘に伝える。根路銘は、もつともなことだと言つて戻る。

第四段は、根路銘、内間赤鬼の出。根路銘は戻り、玉森が御礼式をおこなつて、乙鶴を婦（よめ）に出したいといふことばを報告する。赤鬼は、わが意を得たりと、大いに気をよくする。そして酒宴を催させる。しかし、夕べ見た夢がよくないといい、占ないをさせた。第五段は、間の者（まつあい、三良ひい）の出。まつあいは、乙鶴と内間赤鬼の結婚が、ただごとでないことを語る。

第六段は、乙鶴の出羽。乙鶴、父母の敵打の前に、武芸を披露する。玉森は、乙鶴の技に自信をおぼえる。第七段は、内間赤鬼、玉森の出。内間はお式のため、乙鶴方へ出むく。玉森は、一行を迎えて、にぎにぎしく式をはじめ、酒宴を催す。内間は大いに飲み、酔う。第八段は、敵打。内間赤鬼等が酔つていろいろを、玉森等はとりおさえて、首尾よく討ちとる。

使用されている音楽は、第一段に「さん山ぶし」「子持

ぶし」「長金武ぶし」の三曲。第五段に「早つくたんぶし」、第七段に「かんちやいぶし」「世榮りぶし」「ちるりんぶし」の三曲。第八段に「よしやいなう節」があつて、各場面をもりあげている。

前述したように、大正五年五月二七日に、中座の芝居で役者たちによつて上演されているが、その時は、どの台本を使つたかは、現段階ではわからない。この田代安定扣稿本の他に、台本はあつて、舞台にかかつたのである。その台本が出れば、この写本と比較しておもしろいかも知れぬ。以下、翻刻した台本を紹介する。

虎を乞ひて
身を賣つて
人を殺す者
一
事れぬのうぢにひづり乞ひんき
やまの命、豈率はれ候日の、虎
ましの雨乞ひ候。極口乞へまことに
りてあり。且ち虎が色紅く。且
て、諸多の軍士も赤了けり。且
て、紅色青色不と若き。故名之曰

居る。と云ふ事だ。
あつて、或ひ火燒死の如く
倒れたり。而れに神社の
前。礼拝する風貌と角力士
の如き。或ひは、又年老の者
の如き。形相なども少く見えて
居た。而して、落葉の落葉たる歩
みが、落葉と並んで、白頭の翁
の如き。

命たゞよきだ

豈れどもかわゆ

あざむるをみらは

かくとす。雪舟の行通

浮遊する神之体を知らぬ

事

ほの時物

但西ノ秀才佛珠巻と云ふ

浮游

あくと
汗が止まらない。
汗が止まらない。あくの感覚
まるで死んで居るかの如く
此ちへある。死んだら死んだ。
死んだら死んだ。死んだ。
死んだら死んだ。
死んだら死んだ。
死んだら死んだ。
死んだら死んだ。
死んだら死んだ。
死んだら死んだ。

聾取敵打

らば、神ミ仏け揃て見守やい給り
此の時ねる 但物ノ音して仏神靈を顯し給つ

虎松乙鶴出羽さん山ぶし

○あさましや式人あたし世に残て哀れ此のうちミムとか
しんき

乙鶴

一 哀れしりみやうりなま出る式人や、南山の分り台峯
の按司の嫡子虎まつ姉乙鶴よ、按司そへが事と去る三
日に、内間赤鬼が悪欲ややまん、抜打の軍火責よや
りば、二所の親や御臣下と共に、城元よ枕やめーと
ないめしやうち、あわれ此の式人焼死のちはやたす、
天の御助に神の引合に、乱軍の中ん兎に角にしのぢ、
こままでや逃てこままでやきやすが便るものはなちけ
ふ三日なれば、心くらやめにないはて、行ん

子持ぶし

○つらさ身受て喰るもの喰はん、歩む道柴の露ともろと
もに、日影け待間の命たらとめば

乙鶴

一 足本んつまで歩てあよまらん、しばしこまなかい休め
ほしやの、あ、たうとー、台峯の御運まだ残て居

乙鶴

一 あ、たうとー、夢とみは実ニ御神顯れて御言葉のあ
もの美すずりのあとて、暫ハしてやりともて休て居て
からや、敵に追付れ大事あらんしよもの、急ぎ起立い
急ぎ馳飛い、按司そへが御従玉森の按司便て、時節待
受て敵よ打んでやり、空に物音のあんとみば頓て雲に
飛乗い消て拝まらん、あ、こまに足よとて油断しちか
らや、一大事の沙汰に及はづたいもの、足まろひしち
んつまころび歩で、仰事併に玉森の城に夜昼よかけて
とまいて行ん

道行長金武ぶし

○神の御助に頼も道さとて、おてる露涙ん押払いー、
今と玉森のしるに着る

乙鶴

一 頼も城元やなまと着る片時も急ぎ御取次すらに

内間赤鬼

一 出様来る者や上下んとよも内間赤鬼、舞常の此の世界

や夢の間よやれバ天のばてまてん地の底んくゝて、わ

ぢよしち浮世樂すらんともて、台峯の按司ん命計てか

らに今や台峯の世の主と名乗て、けふや那霸遊び明日

や首里遊び、わが伝に暮ちわが自由に遊て、此の天の

下やわか伝とやすが、壱ツ念願の行つかんあすや、台

峯のなし子嫡子虎まつと娘乙鶴が事ど氣量から姿世界

に立抜て、智勇兼揃て長刀の秘伝、兵法の奥分さとて

居んてやり女身の童子只ならんものよ、あゝ此の女引

取やいわが側になさは、此の世界に思ひ残る事ないら

ん、朝夕此の事と気に係て居たる聞ば嬉しさやあの式

人が事ど玉森の按司便て隠れてる段ん世間取沙汰よけ

ふと我身聞る、あゝわか願の叶て我が願の懸て若か乙

鶴よわか側になしやい、しなさけの御縁重ての先や、

のよて跡反ち我身に弓引る此の上の望やまたとないん

あれは、先づ急ぎ此の事の計よすらに、やあ阿波茶毛

利多津村根路銘の子

阿波茶

一 あゝみしやへる事、是の事やいひん油断しやならん、
やあ根路銘の子、肝要の御使者いやより外に仕立部や
居らん、肝の根よ潜みをかん富り

根路銘

一 あゝ難有さ御受けたやびる、されいかな玉森がやから
るものやてん、言こと葉に応し探廻し、御受しめよ
すや手の内とやゝへる

〔供〕

一 ふう

〔内間赤鬼〕

一 やあ台峯のなし子虎まつと乙鶴が、跡方ん見らん朝夕

此の事に気よしゆたん氣障よしゆたん、聞ば嬉しさや
玉森の按司便て隠りやい居んてしらしへのあればやあ
阿波茶毛利、急ぎ玉森に使者よつかはしやい、先づあ
の按司に向て談合の趣意や、科や按司主人が身の上に
あて、あれば、虎まつが事や按司の跡継ち、取位ん付
て島知行ん吳ゆん、また娘乙鶴やわが側になしやいを
なぢやらに立ておの崇めしよもの引渡ち給ふりてや
り、若しをれこれんならぬをの涯や、直ニ大軍押寄て
からにあとなし子武人引取の上に、按司始め余多御万
人の間切、只並切に切殺ち捨んてやり、使者よ立てた
らばいかによたしやあるか

内間

一 やあ根路銘の子、今的事やれば誇らしやとあよるい、
語らハん先きに合点だうやすが、幾重も返事返答探廻
しぐ、向ふをて付す要目所る

同人
一 御門番衆御取次しやへら

御門番

一 たるがやよら

根路銘

一 あ、みしやる事、先方に応し受返答おの心得しきよて

御腰引ことやいひん御氣支よみせうな

根路銘
一 台峯の世の主内間大主の使根路銘の子が、よしれやい
居る段をんにゆけて給り

按司

一 たう／＼急き打立る用意すれよ

取次

一 御逢よみしやんありにいり召しより

根路銘

一 御礼

根路銘

一 たう／＼御暇よしやへら
但し両方引ク

根路銘

一 たう／＼玉森の城元や今と着る、先づ門番に取次よす
らに

根路銘

一 内間大主の使によしりやい居やべすや、台峯の按司と
氣任しに暮ち、段々の悪行驕りものやとて、島国のみに打ち果ちあすが、嫡子虎まつと娘乙鶴と、按司加那志頼て隠りやい居んてやり先づ罪科や按司そへが身の上にあれバ、根葉までん苅てや義理の道立ん、肝苦しやあれば嫡子虎まつや、按司のあと繼ち取位んつけ、島知行んとらちおの素立しよん、また姉乙鶴や、

大主の側に御素立よ召しよちおなぢやらんしよもの急
ぎ此の二人、渡ち給りてやりの使たやへる、若しをれ

これん御にゆきてならんおの涯や、直に大軍責下る積
ん、おの時御乞悔益やまたないらん、あゝやくみさと
あすが先々御思案御返答拝みにやへら

玉森

一 やあ根路銘の子、直に御返答差つまで居もの暫バし客
屋に休そくよされ、

一 やあ乙鶴よ、赤鬼が使にいやと虎まつがこまに逃忍て
隠れやい居る段、委細聞及て引渡すてやり、慈悲の道
勝て談合の趣意や、虎まつか事や按司そへか跡継ち、
取位ん付て島知行ん吳ん、いや、赤鬼か側になちをち
や（ら）んしよんてやり、また引渡す事のならんどん
あらは、大軍下さゝんしよもの、よしあしの返答すら
てやり、欲惡の内間から使のつちをすか、いつれ肝つ
くち考えて見りよ

根路銘

一 拝ん留やて

乙鶴

一 やあ按司加那志、わすた身の故に美をんぢよの企に、
御難儀よ掛よすや道ならんあもの、とてん手に渡て打
死よすらば、美おんぢよの企にさひんないんあれば、
たう／＼御暇よしやへらよろち給り

玉森

一 やあ崎元の大主、内間からの使只ならん事よ、虎まつ
と乙鶴急ぎ呼よ

玉森

一 やあ乙鶴よ、事急ぎするな事荒くするな、克々思案題

目やあらに

崎元

一 御礼

崎元

一 やあ思ないの前よ、打死よてすんちやんならん道よ、

得と肝いして、御思案第一やあやびらに

乙鶴

一 やあ按司加那志、なまの御事のある事や我身の、兼て
からいひんしらんあやへたん、あ、御恩たうとさや美

拝とすてやひら

玉森

一 い、是に思付る事のまたあしや、色欲の赤鬼今的事あ
れば、先つ虎まつと乙鶴や、引よ渡しよする引よ取ら
しゆすか、乙鶴か事とおなちやらにされる仰事てやり
直に引渡ちおなぢやらにてや義理の道立ん、面目う
んないらん恥ならんしよもの先つ媒を立ておれーの
礼式、結構にしちゆて婦よ送よすと、ひとの道さらめ
人の道たいもの、よかる日よ選てまさる日よ選て、も
く入の段使よ上げよもの、此様大主に美をんによきて
呉りてやり、返言よしちよて心よるこばち、心をて付
て聟入の式に、計事廻らしやい四方から囲て、生取よ
さんしゆすか此の計り事やちやかやよら

おなちやら

一 やあ乙鶴よいかな赤鬼か巧ミンざやてん、なまの御事
に洩やまたならん、首よ打取す疑やないらん、いひん
この事に気支するな

玉森

一 やあ乙鶴よ、細々の談合や先つあとの事、たうー内
にいようり

同人

一 やあ供のちや、内間からの使へ急ぎ呼よ

供

一 拝ん留やびて

崎元

一 あ、今の御計や人の及はらん、いかな赤鬼が器量勇力
の、人勝りやてんあれや一方に、色欲に迷てこまの百
巧ミ、たくて居る事や夢程んしらん、青縄の内に首よ
入よすや、語らはん先に合点とや、べいる、あ、誠台
嶺の御連さらめ

玉森

一 やあ根路銘の子、大主の仰す御慈悲御情や、虎まつと
乙鶴ん難有さしち居れば、直に手に渡ち送る筈やすが、
乙鶴が事とおなちやらんされる仰す事やれば直にうし

やけてや、義理の道立んないんあれば、先つ媒を立て

をりこれの礼しち、結構にしちよて婦よ送よすと、人

の道さらめひとの道たいもの、よかる日よ選て勝る日

よ選て、聟入の段此月の内に、使よ上けよもの此の様

大主にお返事されり

根路銘

一 あゝなまの仰事御尤至極、御互の御果報よい事たや
びる

玉森

一 やあ根路銘の子、是れ〳〵書翰上で給り

根路銘

一 先づ御暇よしやびら

玉森

一 宜敷御取成し御願とやたる

根路銘

一 され〳〵根路銘の子なまと行来へる

赤鬼

根路銘

一 やあ大主、玉森の按司と御威勢に恐れ、平に降伏仰す
事体に、口のない事に御受しち居すが、此にまた壱ツ
願のあやびすや、御慈悲御情の仰事やれば、直に引烈
れておかむ筈ですが、婚礼や人道おひいものやは媒
を立ており〳〵御礼式おこなての上に婦よ送すと、義
理の道たいもの人の道やれば、先つ此の月の内によか
る日よ選て、聟入よしよんてやりのご返答たやへる、
是れ〳〵御書翰だやへる

赤鬼

一 あゝしたり〳〵、願事叶て思た事懸て、なまからの先
や高枕すけて、楽に樂重ね、暮す留ば、やあ〳〵けふ
ふこらしや、物にたとられミ、内に入り互に祝ひ遊ば

内間

根路銘

一 みせる事けふや御祝しやへら

一 今と行来るい、待兼て居たん

一 やあ〜阿波茶毛利多津村根路銘の子出様れ〜

同人

一 やあ〜玉森の使に明日のよかる日に、聟入よしゆん
てやりの手紙来て居すが、兼てからの手組差支やない
らに

毛利

一 あゝ此やよい事たやへる、おれ〜の御手組差支やな
ひやへらん

内間

一 やあ〜、よい事や目の前引寄てをすが、夕見ちやる
夢に加籠の鳥やすか、加籠をかき破てわ身に飛ひ懸て、
きがよしよんてやり醒て今迄ん、胸さゝよあれば気障
よしち居ん得と肝居て占なやい見りよ

多津村

一 され夢や空なしもの筋替なでど、様々の夢ん美見かけ
やへる御氣支の事やいひんあやへらん

間の者兩人

一 此の式人や、御掃除當とやすが、明日内間大主聟入の
御祝儀のあて御御掃除の勤み仰すされて御通り筋草払
に行ん

まつあい

一 はい言る内はちちやい、是れから是れんかい急ぎ始め
らう

三良

一 あんさう

兩人

一 さつさ

但ひら草踊する

早つくたんぶし

○御祝ひすて事二なんと働らちんいひんいとゝやびめあ
すやはてん

三良ひい

一 はいまつあひい、くわちいの事おもらい仕口んしよる
事なんいらん、只一氣張に目見せうん仕取て、はあ、

ていはどくせ、先つあす入やがな多葉粉つけらう

まつ

一 いやい三良ひい、此の御聟入やふんの御もく入むてと
おもたうるい

三良

一 のかまつあひい、聟入に替る事のあみ、御玄館からい
よすと、上御中門からいよすとの替とやるい、

まつ

一 あは（）ハおかしものどやる、いや、もつとし
らんあたみたう話ハ聞け、あの御聟てすや、御主人の

御従、台峯の按司の大敵内間赤鬼どやる、此の赤鬼

まつ

一 あ、是事や、そつとんしらんたさあいや三良あひいこ
ちに犯ち、おの上にこぞの三月にや、台嶺の城に軍押
寄せて、火バあ（）く付て、御城焼崩、按司んおな
ぢやらん御万人んともにかいはうかつて、はあ（）痛
しい事、やすが、御娘乙鶴ど若按司虎まつ抱ち逃忍て
御主人の所に隠りていまいる段聞付て、二所戸渡ち給
り（）なんどんせへ虎まつや按司の跡継ち、取位ん付

て島知行ん吳よん、また乙鶴やうり程のよひかあけ芙蓉の色遠山の眉柳の腰ひたいくいたいしどんちや打向る方、島国んなひく丈の人やて、あつたあがあちよん、ちやんないやさんかんて此の事思らい、ちやかな恋しくなよさあやて乙鶴や側になち、おなちやらんされんでんち、使の来んだあ、御主のごたうる、もの考の深さる人の此れやありがたい事やすが、直におしやけてや、節義の立んこと何日御にびち日選の段、使へ上げて御礼式事御済の上におなちやらになしゆんていちやん、だあ色欲の赤鬼やにいびちの事ばかいとおもたる、抜打の事やそつとん知ん、やかて打殺さりうんておもらい、人の上んてん思いらん、肝くれしややとうつさる

まつ

三良
一 あんさうや

乙鶴

て手事にて手並ある

乙鶴は令旗を以指令する事

一 我身や台峯のなし子乙鶴よ、悪欲な内間こまに釣寄て、
拔打に討る御計よやすが、此様敵打に我身おくやて
ん、よその手に借てやへならんあとて太刀や長刀に鎧
り鎧の外に数々の武芸戦の秘伝我か側の者に委細こま
に、習わしやいあもの指南しち置ん、急ぎ此の事
やあたにおんにゆけて御直御見分めしよらちの上に美
よんちこと受て、美よんちもひて敵よ討取よる計よす

但此時内に入る

玉森

一 やあ乙鶴よ、おなく身の習の嗜なたる手並、急ぎ振立
よ見ふしやあもの

乙鶴

一 やあ接司添前、待兼る月日明日が日になどんやくめさ

よあてん美よんにゆかて給り、親の敵打や御手からん
事に、我身に引受て討よとやへらに先つ指南しち置る

手並御見かけら

但此の時乙鶴内に入り女生四人長刀を持ち乙鶴ハ右
之手に令旗を持ち左の手に太刀を提げ留太鼓にて出

玉森

一 あ、寄妙～おなご身の習のなまの嗜やむかしからな
まに沙汰ん聞ん敵よ討取よす疑やなひらん

供申

一 あ、御指南の程関心たやへる

玉森

一 たう～内に入り互に手組すれよ

供申

一 拝ん留やびて

内間

供申

一 され御出立御時分たやびる

内間

一 さあ～急が～

道行かんちやいふし

○けふのよかる日や天気晴渡て、押風んすたしや野山石
原ん、只足に任ち頼も玉森に、肝急ぎ歩てなまとつき
やる

供

一 され〜玉森の城に着へたん、あり〜御目懸り美御
向へたやへる

但此の時女生兩人木馬のた繩を取り若衆兩人大鼓を
打ち男壺人傘を差し迎に出ル皆ミだう〜の声を呼
べ候而内に入ル左候而聾ハ梯懸り亭主ハ左の出口の
双方より出座に烈り

内間

一 やあ按司添前、願た事供に美にゆかい召よち、あ、難
有さ美拝たやへる

玉森

一 やあ大主なまらの先や御縁引やはれは、互に肝合ち、
いち足ん事や壺人足い〜互いに補のとて浮世渡す
と道やあやびらに

内間

同人

一 やあ〜急ぎ御式始りよ

世榮りぶし

○けふのよかる日に御式はしめとて、明日の勝る日やよ
くの御祝はい

但此時若衆壺人瓶取同壺人御台直しニ而御酌の取替
ある

玉森

一 やあ阿波茶毛利、けふからの先や御氣支んないらん余
り大屈大粧よたるものやあ崎元の大主ありにんぢうが
達ん壺ツ呑い遊び

阿波茶毛利

一 今的事やは誇らしやとあゆる、やあ按司添前、世間
豊めかそ此の内間上や飛鳥ん打向かる方や島国んなひ
く勢またたいもの今からの先や御氣支んないらん、樂
んらく選て夢の間の浮世、心安す〜と遊びしやべら

玉森

一 あ、此の上の嬉しや御互の御果報とやよる

一 拝ん留やひて

り／＼

内間

一 いゝ氣支んするな快か呑い遊び

ちるれんふし

○浮世とよみれす赤鬼よやてん加籠の鳥こころ飛のな

よめ

崎元

一 あれにんぢ御祝しやへら

内間赤鬼

玉森

一 やあ／＼童子のきや御酌取て揚り

一 あ、美さ／＼またん呑ん

内間

一 たう／＼近く寄り

阿波茶

一 あ、一大事な事、され／＼時分たやへる御戻よ召より

内間

女兩人

一 やくみさよあてん壱ツ揚けやへら

一 いや／＼かもらん／＼遊び／＼

内間

一 あ、常やどく呑ん我身とまたやすが、けふのふくらし
や壱ツのまに

一 やあ／＼さまだけやあらに

但此の時手にて押へ帰し央にて打殺す

内間

一 いい童子酌取の美さなれふちんよたしや、たう／＼踊

乙鶴

一 いや逃がさん

内間

一 やあ、一大事な事へ、いきやしちやる事が

ものにたとらん、ゑいいやか孝心の深さある故に
誠観音の御助とやよる

玉森

一 やあへ内に居るもの出様り

崎本

一 あ、召しやる事、あすへ敵打よ取召しよち、扱て
く御果報よい事たやへる

乙鶴

一 やあへ悪欲なやからけふや思しよめ

内間

一 あ、偽の巧め夢程んしらんたうへかゝよらばかゝり

乙鶴

一 たうへけふの誇らしや物にたとられめ、内にんぢ踊

切殺ちとらさ

但此の時乙鶴長刀を提げ立向へ余の人ハ太刀提げ助
立しご鶴内間兩人捨余合戦候處内間手弱くなり舞台
にて切り殺さる

よしやいなう節

○かた(ち) 打取たるけふの誇らしやや過し一所ん嬉
しやみせへら

乙鶴

一 やあ按司そへ前御計の事に敵打済ち過し式所ん嬉
しや召ら

玉森

一 やあ乙鶴よ朝夕忘りらん敵ん討済ちけふの誇らしや、

農商務省より獨逸宛の沖縄関係物品目録について (ト)

佐々木利和

(東京国立博物館)

萩尾 俊章

(沖縄県立博物館)

與那嶺一子

(沖縄県立博物館)

List of Materials belonging to Okinawa Prefecture, sent to Germany

by the Agriculture Affairs Bureau of Japanese Government

Toshikazu SASAKI

(Tokyo National Museum)

Toshiaki Hagio

(Okinawa Prefectural Museum)

Ichiko YONAMINE

(Okinawa Prefectural Museum)

沖縄関係物品目録に関する付記

萩尾 俊章

農商務省よりの沖縄関係物品目録は、一八八一年（明治十五）十二月から一八八四年（明治十七）十月までの博物局と沖縄県の往復事務書簡である。一八七九年（明治十二）の琉球処分からはまだ間もない時期である。

本稿所収の往復文書からわかる通り、この間に沖縄県令は三人が交替している。上杉茂憲（一八四四～一九一九）は米沢藩出身の第二代沖縄県令である。一八八一年五月十八日に沖縄県令判事に任命された。一八八三年四月に元老院に転じるまでの約二年間県令として在職し、沖縄本島各地や宮古・八重山の民情視察をおこない、県費留学生を派遣するなど開明的な県政を試みたことで知られている。岩村通俊（一八四〇～一九一五）は土佐藩出身の第三代沖縄県令である。一八八三年に岩村は政府の地方巡察政策の一環として、宮古・八重山を網羅した民情視察をおこなった。その後、上杉の後任として約八ヶ月間県令職にあつた。彼の県政は旧慣温存にあり、旧藩支配層の優遇措置をはかることに主眼があつた。さらに、西村捨三（一八四三～一九〇八）は、彦根藩出身の第四代の沖縄県令である。琉球処分当時（一八七九年）は内務省で琉球関係事務を担当していた。一八八三年十一月二十一日に沖縄県の県令兼務を命じられ、一八八六年三月まで在任した。在職中は岩村の旧慣温存政策を踏襲しながらも、県政の基盤整備に尽力している。以上のように、ドイツへの物品目録の作成と物品採集は旧慣温存と県政改革というあわただしい動きの時代におこなわれた。

ドイツ日本研究所のハンス・オイルシュレーダー氏は「ヨーロッパにおける沖縄関係コレクションの歴史と現状」（『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展』所収）と題する小論で、ヨーロッパの博物館が所蔵する琉球・沖縄関係のコレクションを紹介している。沖縄の博物館・美術館関係者にとつては貴重な報告である。その中で、ベルリン国立民族学博物館が所蔵する琉球関係コレクションは、一八八四年に東京駐日ドイツ領事館を通じて、日本政府に体系的な琉球関係コレクションの収集を依頼して、購入したものであることを概観した。購入総数は五四三点に上るが、今大戦で行方不明になつたものがあり、現存するのは衣類六点、ハチマチ五点、道具類のモデル八点、織物・染物の切れ地や反物三二点などという。この収集が体系的に行われているために、同氏は収集者が田代安定や笛森儀助等の早期の沖縄研究者ではないかと推定した。しかし、佐々木利和氏が指摘したように、本史料から採集者は沖縄県の官吏であつたと考えられる。

田代安定は一八八二年（明治十五）四月に、規那樹の植樹に関する調査のため農商務省より沖縄出張命令をうけている。この出張はドイツから物品採集の依頼が来る八ヵ月前のことである。この時、運よく参事院議尾崎三郎に会つて、宮古・八重山への巡査に同行している。尾崎の明治一五年の「琉球行」という史料では、那霸滞在中の七月二十三日に田代が尾崎を訪ねている。田代は八重山へ渡るのに難渋していたようで、尾崎の日誌には「田代安定來ル同人ハ本県地方キナ樹培植ノ為メニ來ルト云植物學専務ナリ琉球島ニハ良材ナシ八重山島ニハ必ス良材アラン然レ共先島出張ノ許可アラス甚遺憾ナリ云々余之ヲ懲憲シ先島ニ航渡セシメントス旅費ノ如キハ余之ヲ弁セん云々」とある。こうして、西原農事試験場温室に育養中の規那樹を携えて八重山諸島に植樹することができた。この時に田代はその後の研究テーマの一つとなる結縄（わら算）に出会っている。出張後は帰京し、農商務省で在勤している。次に再度来沖するのは、一八八五年六月のことである。沖縄関係資料の採集はすでに終了した後である。農商務省より沖縄出張命令をうけ、二度目の八重山調査を敢行している。この際は沖縄県六等属兼任の身分でもあつた。以上のように、田代がドイツからの物品目録の作成や採集などに直接的に関わった機会や形跡は今のところみつからない。なお、笹森儀助が郷土青森にあって事実上公職を捨てたのは一八九〇年（明治二十三）九月である。そして、明治二十六年五月十日弘前を旅立ち、南島を踏査し帰郷したのは同年の十一月八日のことである。明治十五年といえば、中津軽郡郡長として開拓の準備をしていた常盤野に農牧社を設立しその經營に当たつていた頃である。したがつて、当時は笹森が沖縄に関係する以前であり、当該琉球コレクションの収集に関与したことは考えられない。

田代安定や笹森儀助が関わった形跡がないとすれば、採集目録の作成や物品収集は本史料から推定できるように、沖縄県の官吏によって進められたと考えるのが妥当であろう。その沖縄県官吏が具体的にどのような人物であつたかは不明である。往復文書には幾人かの人物名がみえる。大書記官森長義は明治十六年五月には大書記官兼判事である。明治廿年五月二日をもつて沖縄県書記官から秋田県書記官に転任している。明治十七年六月三十日付の文書によれば、八等属野村道安、御用掛本村朝昭両名が採集物品の送付のために上京している。この両名が実務的な担当者であつたかどうかは明らかではない。属官の掘右江門の名や、物品の提供者として那霸東村十四番地第二号の宮城仁王の名がみえる。これらの人物については今後追跡調査の必要性がある。本件の物品目録の採集枠組みの対照表を示したのが表一一である。おおよそ是提起された分類表に従つて目録が作成されているが、一部項目の組み替えもみられる。とりわけ第二の衣裳関係では身分別と男女に分けた収集がなされ注目される。この点は

後述されるので詳細は譲るが、王子按司、親方、親雲上、里之主筑登之、平民に分けてさらにこれを男女別に示している。また、織物関係も当初の予算物品目録では「織物」と「染料」に分けられていたが、清算物品目録では織物のタイプ別に細分類して整理し、染料具は一括して提示している。これと関連して、第三では身分別にハチマチと簪が採集されている点も特記できる。これらは浦添市美術館で開催された「世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展」で展示された。第四の粧飾物関係では「膚割器機械」として「針」を挙げある。これは東京国立博物館にも所蔵されている「針突」の道具と考えられる。また、図録「世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展」には、ベルリン国立民族学博物館所蔵で、オットー・ワールブルクが一八八八年に那覇で収集した道具が出品された。また、その後の「人体の局部を変形したる見本」としてあげられている絵図はハジチの絵図と想像される。第九の「本國固有の技術に係る物品」では「芭蕉紙」が採用されている点も採集の視点として摘記できるものである。第十の「文字見本及び元質」に関連して、「文字に代用せる書図の類」として結縄の類があげられているが、実際の目録では結縄はみられない。ここでも、もし田代安定が関係しているのであれば、結縄すなわち「わらざん」が収集されているはずであるが、目録からは洩れている。第十四の宗教・信仰関係の用具や衣服などについては、当初の予算物品目録では「僧侶及び宮司衣佛具樂器」として紫衣、法冠、烏帽子他があげられているが、清算物品目録では「神官僧侶及びノロクモイ衣服着用雛形並神仏」の内容に、「ノロクモイ」としてノロ関係の資料が追加されている。

なお、清算目録の最後にある絵図面類四十枚はドイツ側からの依頼で物品の運搬に不便なるものとして絵図を指定していた。図録「世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展」に掲載されている「進貢船の図」と「楷船の図」はこの中に含まれていたと思われる。

以上のように、ドイツ希望物品目録、沖縄側の予算物品目録と実際の清算物品目録の間には、採集が行われる段階での、実情に合わせての項目の検討が行われた形跡がある。

さて、ここにあげられている採集物品の代価は当時の物価を考える上で興味深い。この代価は当時の価格と比較するとどうであろうか。清算物品目録では、大麦ないし小麦は一合一錢である。沖縄県甲第拾壹号・明治十六年麦石代相場では、麦壹石二付金七円六拾七錢五厘（普通値段）、麦壹石二付金七円四拾八錢（安値段）があり、これを一合あたりに換算すると、七〇八厘程度となる。また、明治十六年の官衙備品・消耗品調査表には、一部参考となるものがある。この単価は（）の中に記した。棕櫚箒一本は式拾四錢（十五錢）、算盤一個は三拾錢（十一錢四厘）、尺度一本は五錢（八錢七厘）、茶碗一枚四錢（一錢）、鋏は拾

弐銭（四銭八厘）である。清算目録の代価は高いともいえるが、目録名からは実物資料の内容がわからず、収集にともなう経費や品質の上下があり速断はできない。

最後に、採集洩れとして遅れて到着した物品がある。桑布、白酌、蜜林酌など九点である。依頼の物品はドイツへすでに発送済みのため、これらは東京国立博物館に収蔵されることになった。掲載の写真がそれである。現在では入手が難しいものがあり、きわめて貴重な資料である。これらの県内輸送には沖縄開運会社があたっている。社長は林次郎左衛門で、同氏他に二名の社員で経営されており、明治十六年に神戸鹿児島大島間郵便業務を申請し、事業の拡張をおこなっている。事業拡大のために汽船大有丸を所有し、さらに汽船寧靜丸を購入している。那覇—東京間は京都名産会社が輸送を請け負っている。

【参考文献】

- ドイツ日本研究所『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展』一九九二年
- 琉球政府『沖縄県史 第十三巻資料編三』（沖縄県関係各公文書二）一九六六年
- 沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料 近代三 尾崎三良・岩村通俊 沖縄関係史料』一九八〇年
- 沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料 近代四 上杉県令沖縄関係史料』一九八三年
- 田代安定『沖縄結縄考』一九七七年
- 笠森儀助『南嶋探検』一九八三年
- 『新沖縄文学 沖縄研究の先人たち』七七七号 一九七七年

表一 物品目録の採集枠組みの対照表

ドイツ希望物品目録		採集予算目録	清算物品目録
第一 食物見本、調味物、飲物、刺激剤 貯蔵物品、調理・餐用器具他		食物の部 調味物の部 飲物の部 調理器具の部 餐用器具の部	食物の部 調味物の部 飲物の部 調理器具の部 餐用器具の部
第二 男女衣服 等級を示す衣服 祭服宴席 着用衣服		男女及び等級を示す処の衣服類 王子按司男の部 同女子の部 親方並申口男の部 同女子の部 親雲上男の部 同女の部 平民男の部 同女の部	男女及び等級を示す処の衣服類 王子按司男の部 同女子の部 親方男の部 同女の部 親雲上男の部 同女の部 平民男の部 同女の部
織物、織維質、染料物製造用機械		里之主筑登之男の部 同女の部 平民男の部 同女の部	里之主筑登之男の部 同女子の部 平民男の部 同女の部
第三 人体の装飾、等級を示すべき標章 臨時着用の装飾、神符札	等級を示す標章 但男子の部	織物の部 工芸課 染料物の部 工芸課 人体を清潔になす粧飾物、人体を変形すべき 物品、皮膚爪歯等染料物、膚割器機械他	衣服着用雑形の部 (本国固有織物の部)
第四 人体を清潔になす粧飾物、人体を変形すべき 物品、皮膚爪歯等染料物、膚割器機械他	同女子の部 臨時着用の装飾	人体を清潔になす粧飾物 皮膚爪染料物 膚割器機械 人体の局部を変形したる見本	等級を示す標章但男子の部 同女子の部 臨時着用の装飾
第五 住家模造雑形	住家模造雑形写真	住家模造雑形写真	人体を清潔になす粧飾物 皮膚爪染料物 膚割器機械 人体の局部を変形したる見本
第六 家具類	家具類	家具類	住家模造雑形写真
第七 獣獵器械	獣獵器械	獣獵器械	住家模造雑形写真
第八 農具及び牧養器械他	農具	農具	住家模造雑形写真
第九 本國固有の技術に係る物品他	本國固有の技術に係る物品 陶器 (見出しなし)	本國固有の技術に係る物品 (見出しなし)	農具
第十 文字見本及び元質、詩歌、諺語他	(見出しなし)	(見出しなし)	農具
第十一 国境を記する器械、度量衡、算具他			農具
第十二 楽器類	樂器類 芸術課	樂器類	農具
第十三 嬉戯に使用せる器具、玩物	玩物	樂器類	農具
第十四 宗教、魔術、神器、僧侶の表号他	僧侶及び宮司衣佛具樂器	僧侶及び宮司衣佛具樂器	農具

沖縄関係物品目録における染織資料について

與那嶺一子

琉球王国の解体と第二次大戦という二つの大きな歴史的な事柄は、実物の染織資料と文献資料の多くを失うという結果を招き冲縄の染織はもとより、歴史、文化における数々の疑問点をますます複雑なものにしている。特に廃藩置県以後は近代化の名の元に、これまでの習俗が急速に変化したために、衣生活における「誰が」「いつ」「どのように」という基本的な点と、技術史的側面が曖昧なままで未だ明確にされていない。

農商務省を通してドイツに送られた資料は、琉球王国のいわゆる名品ではなく、学術研究を目的として民俗的な視点から収集されたものである。本資料の「目録」部分からは、明治十七年当時における沖縄の状況を明らかにする次のような手がかりが得られる。

目録は「ドイツから希望された物品目録」と「予算目録」、「清算目録」に分かれている。希望された物品と「清算目録」を照らし合わせてみると、どの資料が購入段階で削除されたかが分かつてくる。(詳細は萩尾の「沖縄関係物品目録に関する付記」を参照) また、「見積価格」と「清算価格」には若干の違いが見られ、実際には安価であつたものや反対に高価となる資料もある、さらに、物品の価格からは、当時の価値観等も推察される。

このようにしてドイツへ送られた資料は、二つの大戦を経過してなお、その一部がドイツに現存している。それについて、ヨーゼフ・クライナー博士(前ドイツ日本研究所所長)が一九八三年～一九八六年までの三年間調査を行なつており、「ヨーロッパに見る琉球の文化財」の一つとして一九九一年に開催された那覇市政七十周年記念企画「歴史をひらく 琉球文化秘宝展」記念講演(九月二八日／主催：那覇市・琉球放送・沖縄三越)で報告している。また一九九二年九月浦添市美術館で開催された「世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展」の際にはこの目録に記載されている染織資料の内二十六点が一般公開された。

清算された染織資料は①男女及び等級を示す處の衣服類、②本國固有の織物、③等級を示す標章に分けて収集されている。男女及び等級を示す衣服類は、王子按司の部、親方の部、親雲上の部、里之子筑登之部、平民の部に分かれ、それぞれの階級の男女の衣装が収集されている。階級別に分けた後、第一号、第二号と小分類でまとめられ、上衣から帯に加えて下着まで含まっている。しかし、小分類は衣装一揃えを意味するものではない。第一号を例にとっても分かるように下着(胴衣袴のこと)や

帶を二種類含むものもあれば、下着類を含まないものもある。これらの衣装がどのように着装されたかについては、残されている実物資料や衣服に関する文献資料、絵画資料等を参照することも含め今後の課題である。

「本國固有の織物」には、上布、紬織物、芭蕉布、花蔵織、羅織（紹織）、羅トン織（ロートン織か）、花織など、現在も伝統的に織られている織物に加え、蘆薈布や桐板布など、現在その技法が跡絶えたものも含まれている。また、興味深いことに、それぞれの糸も採集の対象とされている。

芭蕉布の価格を見ると、一反壱円五拾錢のものから六円八拾錢のものまであり、庶民から王侯士族までといわれた芭蕉布の多様さを裏づけている。

清算目録の最後に追加された資料が九点記載されているが、これらの資料はドイツへは送られず、上野の博物局（現在の東京国立博物館）に残されたままである。その内、湿気を払うものとして病人が着用したといわれる「桑布」とその「樹皮」、「経糸」がある。桑布は幅三十八センチで、一センチ間の経緯の織密度は、経十本で緯七本である。経糸、緯糸共に撚りによつて繋がれている。また、布には「水納嶋十三番地平民狩俣栄助妻カナ」と墨書による銘書きがある。桑糸は撚糸されており、目録から糸だと推察される。桑から糸を取る方法は既に技法が跡絶えており、これらの資料がその存在を示す唯一の資料である。今後、資料の復元や、技法の再現に際して貴重な資料となる。

この清算目録と実物資料については、一九八四年と一九八六年の二回に渡り大城志津子氏（一九八九年没／沖縄県立芸術大学教授）が確認調査を行なつていて、第一回の調査後、記憶をたどつて復元した花倉織が目録番号「第二号イ号 羅色衣」で、第七回個展（一九八六年）で発表現存資料についてのメモ書きと調査ノートの一部を残し、結果をまとめる前に他界している。

一九九二年に祝嶺恭子氏（沖縄県立芸術大学教授）がこれららの資料について再調査を行い、「琉球王朝時代の染織の調査研究－ベルリン民俗学博物館所蔵のコレクションを中心にして－」（『沖縄県立芸術大学紀要 第三号』一九九五年）と題する論文に中間的報告として、全資料の技法・素材・糸の状態・採寸・制作地、年代・布幅・織密度についてのデータを掲載している。

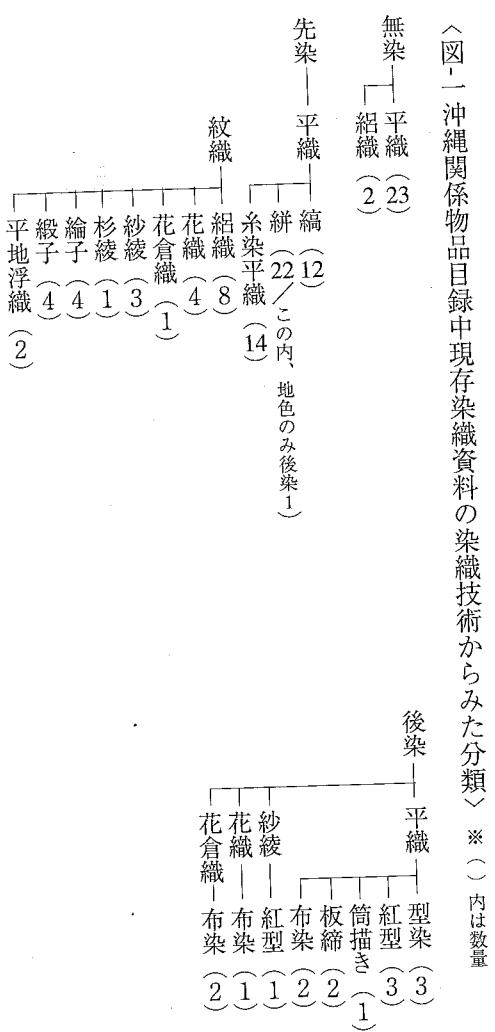
大城、祝嶺両氏の調査の結果は、「清算目録」の中で現存する資料として「別表一」のような形でまとめられる。「現名称」は祝嶺氏が付したものである。「祝嶺調査」は先の論文中の「ベルリン民族学博物館資料調査の一覧表」より素材・技法・備考のみを抜き出した。番号6658, 6741は大城メモに記載されていたもので、祝嶺氏の調査結果には含まれていない。

現存染織資料一一七点（6658, 6741を含む）の内訳は、用途でみると、衣装六九点、冠・頭巾類九点、反物あるいは布製三六点、手巾、風呂敷、蚊帳等三点となる。冠・頭巾等を含む装束資料の内、四六点が男性用、三〇点が女性用である。

染織技術の面からみると、次の図のように分類された。花倉織は花織と紹織で一つの布をなすものとみなした。また、格子と絣、経縞と絣等、絣を伴う資料は全て「絣」として分類した。「縞」には経縞、格子縞が含まれる。

「花織」は首里で主に織られていた両面浮花織（首里花織）のこと、現在、読谷山花織と呼ばれている衣装または布や、縫取織による花織ティサジが、このコレクションには所集されていない。祝嶺氏の調査から、絣の資料の内十点が絵図式（絵絣と類似の技法）と呼ばれる技法によることや、内一点は白地の絣布を織った後で地染めを行なつたことが分かつている。

今後、ドイツ、東京に残されたこれらの資料の詳細が、染織技法はもとより、仕立や着装法などの服飾的側面からも調査されることは、今後の課題であり、様々な疑問の解明への大きなステップとなることと思われる。

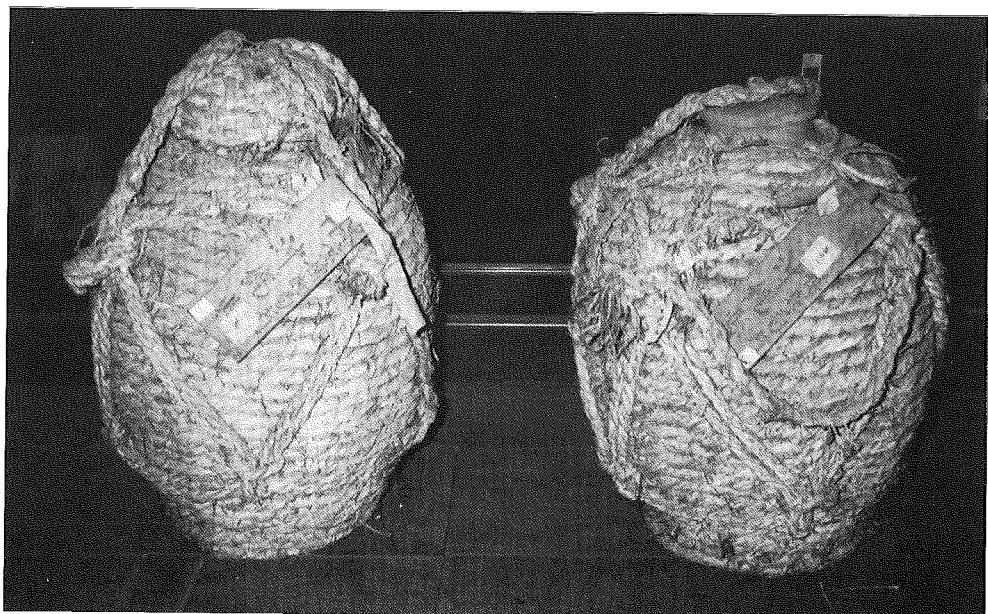


表一 沖縄関係物品目録より現存する染織資料

目録番号	目録名	番号	大城メモ	現名称(初領付)	祝儀調査	備考
第一号イ号	緑色朝衣	6653	白糸・蒼色	芭蕉萌黄色地平織朝衣	綿・芭蕉/平織・後染	王子按司男ノ部
第一号ハ号	花錦縫合	6658	中国産・裏色地縫子			ク
第一号ニ号	縫子柄衣袴	6657b		深浅地妙縫縫子袴	綿/藍染・表縫子織・裏縫綾	ク
第一号ト号	金糸綾子細帯	6660		錯青絹地翁縮鶯松桜寿波模様菱形縫子刺繡入り衣裳	綿・金糸・綾子	ク
第二号イ号	羅色衣	6645	紺浅地花絞織	深浅地絞織衣	綿/藍染・絞織・花織	ク
第二号ロ号	菊地京晒色衣	6646	和風仕立	絹青色地翁縮鶯松桜寿波模様菱形縫子刺繡入り衣裳	綿/藍染・絞織・絞縫子	ク
第二号ハ号	花絞織色衣	6647	綾糸・ミジ	絶縁絞地妙縫縫子袴	綿・絞縫子/藍染・花織	ク
第三号ハ号	絞綾柄袴衣袴	6652	ミージ縫子・裏は同色無地	絹浅地妙縫縫子衣袴	綿/藍染・表縫子・裏縫子織	ク
第四号イ号	白糸ヤヌミ染	6666	紺は真縫袖、灰色は白糸、裏は藍染木綿	絹絞袖刺繡地ヤヌミ織衣裳	絹木綿・絞縫袖/平織・竹は紺	ク
第四号ハ号	白糸ムダ綾	6663	木綿藍染格子・裏向色木綿	絹綾地格子平綾物衣裳	木綿(手筋糸)/藍染・平綾	ク
第四号ニ号	木綿綾衣袴	6654a	二領・木綿綾衣	木綿白地平綾	木綿(手筋糸)/平綾	ク
ク	木綿綾衣袴	6654b		木綿白地平綾衣	木綿(手筋糸)/平綾	ク
第四号ホ号	木綿廣袖下着	6665		木綿白地平綾下着	木綿(手筋糸)/平綾	ク
第五号イ号	組綾組上布袴子	6668	宮古上布・巾43cm~45cm	苧麻地絞縫夏次裳	苧麻/平綾/宮古上布・田無	ク
第五号ロ号	絶質捨下着	6669	苧麻	麻無地平綾男物下着	苧麻/平綾	ク
第六号ロ号	花綾縫合	6671	縫子	絹紫透花綾縫縫子真綿入り拾衣裳	綿/紅花染・縫子	王子按司女ノ部
第六号ハ号	砂綾付付合	6672	水色地型付・桜・雀・楓・薄物の綿	紺沙綾水色地楓笙付後型拾衣裳	木綿/藍染・紺綾・紅型	ク
第六号ホ号	白砂綾綾衣	6674	薄物の組	綿白無地・綾衣	綿/平綾	ク
第六号ニ号	木綿綾	6675		木綿白地綾布下裙	木綿/平綾	ク
第六号ト号	木綿綾	6676		木綿白地平綾袴	木綿(手筋糸)/平綾	ク
第七号イ号	手縫合	6677	絹地手縫・絹糸・簪木綿・裏木綿・縫ニ種ムディニ種	絹地手縫拾衣裳	絹・縫木綿(手筋糸)/平綾	ク
第七号ロ号	木綿形付小袖	6678	枝垂桜・裏は別子(牡丹と竹垣)・同色別柄	絹花色地絞り枝垂桜模様紅型拾綿	木綿/紅型	ク
第七号ニ号	木綿形付単小袖	6680		紺白地絞竹梅綾彌模様紅型拾綿	木綿(手筋糸)/紅型	ク
第八号ホ号	綾子	6681	裏縫子	絹地雲龍模様入・縫子冬着(フタタ)	綿/綾子	ク
第八号イ号	赤芋摩子	6682	八重山上布・苧麻	苧麻桃色地絞縫緋平綾衣裳	苧麻/紅花染・絞縫・地色は後染	ク
第八号ロ号	羅形付綾衣	6683	八重山寺宇・掛衿付き襦袢	綿絞織花色地絞稻妻に流水桜模様小鳥飛揚紅型綾衣	綿/絞織・紅型	ク
第八号ハ号	板占綾衣	6684	綾編	綿絞織朱色地麻の葉紫杏に花鳥模様板縫綾衣	綿/板縫	ク
第八号ニ号	組占布裙	6685		苧麻白無地平綾下裙	苧麻/平綾	ク
第八号ホ号	組上布綾衣袴	6686a-1	他三枚・八重山苧麻	苧麻白地無地平綾綾衣	苧麻/平綾	ク
ク	組上布綾衣袴	6686a-2	ク	苧麻白無地平綾綾衣	苧麻/平綾	ク
ク	組上布綾衣袴	6686b-1	ク	麻無地平綾	麻/平綾	ク
ク	組上布綾衣袴	6686b-2	ク	苧麻白地平綾袴	苧麻/平綾	ク
第九号ロ号	白糸藍芭蕉小袖	6688	朱綾・芭蕉・組織・女打掛	芭蕉朱絆絞織組夏衣裳	芭蕉/組織	ク
第十号ロ号	巴子色衣	6690	絹地・杉絞織・裏色地縫子	ウール・藍染・杉絞織	親方男ノ部	
第十号イ号	南京町南北色	6696	絹地芭蕉	芭蕉白絆絞子綾衣裳	芭蕉/藍染・絞織	ク
第十号ロ号	白糸羅織縫子	6697		?白無地平綾衣裳	苧麻/平綾	ク
第十号ノ号	白組上布綾衣袴	6698a	他二領・絹柄板・縫糸糸	苧麻白無地平綾衣裳	苧麻/平綾	ク
ク	白組上布綾衣袴	6698b		麻/平綾	麻/平綾	ク
ク	白組上布綾衣袴	6698b-2		苧麻白無地平綾	苧麻/平綾	ク
第十一号ニ号	白組上布慶袖下着	6699	桐板	麻白無地平綾下着	麻/平綾	ク
第十二号ロ号	手縫合	6701	裏赤木綿・絹赤茶糸糸・緋水色木綿・黒絞	絹地手縫半縫拾衣裳	木綿・生綿/格子織・韓絣	親方女ノ部
第十三号イ号	白糸絞色衣	6702	茶色地・絹糸糸・絞織・裏木綿・表と同色	絹茶色地平綾拾衣裳	絹生綿・薄手筋糸の綿/平綾	親雲上男ノ部
第十三号ロ号	白糸縫合	6703	木綿藍染(表裏)	綿絞地格子平綾衣裳	木綿/藍染	ク
第十三号ノ号	組卓縫	6704	木綿格子・縫子	綿絞地格子縫縫平綾衣裳	木綿/藍染・平綾	ク
第十三号ニ号	綾子大帯	6706		綿絞地雲龍模様綾子大帯	綿/藍染・綾子	ク
第十四号イ号	白糸花織色衣	6707	朝衣・花襷(絹が表)・カーキ色	芭蕉ねづけ茶地絞浮花織朝衣	芭蕉/首里花襷・後染	ク
第十四号ロ号	羅絞縫子	6708	鼠地絞織・朝衣	絹絞縫板絞地絞縫縫朝衣	絹絞縫板/產生葉染・組織	ク
第十五号イ号	白糸花縫合	6709	絹糸糸韓縫・裏・裏木綿	絹縫韓木綿絞地絞縫朝衣	絹縫韓木綿(手筋糸)/藍染・首里花襷	親雲上女ノ部
第十六号イ号	絞縫	6712	宮古上布	苧麻絞地絞縫平綾衣裳	苧麻/藍染・絞縫	ク
第十六号ロ号	芭蕉絞地小袖	6713	女打掛・土族	芭蕉絞地絞縫平綾衣裳	芭蕉/藍染・平綾	ク
第十七号イ号	天青色朝衣	6714		芭蕉絞地平綾朝衣	芭蕉/藍染・平綾	里之子筑登之男ノ部
第十七号ロ号	木綿色衣	6715	茶地	木綿赤地平綾拾衣裳	木綿(手筋糸)/泥染・平綾	ク
第十七号ニ号	桐板羅縫縫子	6717		桐板深浅地絞縫朝衣	桐板/藍染・組織	ク
第十七号ホ号	芭蕉絞地縫子	6718		芭蕉絞地絞縫朝衣	芭蕉/藍染・組織	ク
第十七号ノ号	小倉縫絞帯	6719		綿茶色絞縫平綾帶	木綿/平綾	ク
第十八号イ号	水色朝衣	6720	絹縫余縫芭蕉	芭蕉浅平綾朝衣	綿芭蕉・芭蕉/藍染・平綾	平民男ノ部
第十八号ロ号	木綿馬掛	6722	裏浅地木綿	綿黒平綾フィーター(馬乗用)	綿/平綾	ク
第十八号ホ号	色衣縫子	6724	苧寮深浅地絞平綾衣裳	苧麻/平綾・藍染・後染	ク	
第十八号ノ号	絞縫縫子	6725	芭蕉(木鳥)・絞灰色・綾白糸	芭蕉絞地絞縫平綾衣裳	芭蕉・綿(桐版)/平綾	ク
第十八号リ号	砂綾大帯	6728		綿絞地絞縫男物帯	綿/紗綾	ク
第十八号ヌ号	木綿大帯	6729		ウール平綾組帯	ウール/平綾・変化組織	ク
第十八号ル号	木綿組帯	6730		綿絞地平綾組帯	綿(糸は輸人物)/平綾	ク

目録番号	目録名称	番号	大城メモ	現名称(祝讃付)	祝讃調査	備考
第十九号口号	木綿形付袴	6732	夷漢同布(紅型)	綿深淺地平織頭衣	綿/平織	平民女ノ袴
第十九号八号	木綿繡造柄衣	6733	水色地・裏木綿	綿花色地絹綾模様縫拾衣裳	綿/型染(二枚重)	ク
第十九号六号	赤芋襷子	6735	苧麻黄色地・八重山	苧麻黃地平織衣裳	苧麻/平織	ク
第十九号八号	形付椎子	6736	桐板	苧麻地あらえ紋型付夏衣裳	苧麻/型染	ク
第十九号七号	萌泡羽衣	6738	水色地・白系	苧麻深浅地平織胸衣	苧麻/平織	ク
第十九号九号	芭蕉小菖	6739		芭蕉地絹縫平織夏衣裳	芭蕉・青い緋は綿/平織・藍染	ク
第十九号又号	芭蕉鶴	6740		芭蕉無地平織袴	芭蕉/平織	ク
第一号一號	絹地絹上布	6741	官古・黒朝衣			本國固有織物ノ部
第一号八号	全	6743	絹地絹	苧麻絹地絹縫平織夏用反物	苧麻/絹縫(絵図様)	ク
第一号二号	全	6744	絹地絹	苧麻絹地絹縫平織反物	苧麻/絹縫(絵図様)	ク
第二号口号	絹縫組上布	6748	桐板上布・苧麻八重山	苧麻絹地絹縫平織布裂	苧麻/絹縫(絵図様)	ク
第二号二号	全	6750	苧麻八重山・桐板	苧麻絹地絹縫平織反物	苧麻/後染	ク
第二号六号	全	6751	花倉織・白糸ミジ色	芭蕉白地絹格子綿平織反物	芭蕉・格子綿	ク
第二号八号	全	6752	白糸格子	苧麻白地絹縫の巾織反物	芭糸/絹縫(絵図様)	ク
第二号十号	赤絹金	6753		芭蕉無地花織反物	芭蕉/花織	ク
第二号二号	白仝	6754	芭蕉花織	桐板絹地絹縫平織反物	桐板(手筋糸)/絹縫	ク
第三号口号	絹袖	6756	久米鳥袖・瀧	芭蕉無地平織反物	芭蕉・後染	ク
第四号一号	練蕉布	6761		芭蕉無地平織反物	芭蕉/絹織	ク
第四号口号	全	6762	芭蕉絹織(本局)	芭蕉無地絹縫反物	芭蕉・絹縫は綿/絹織	ク
第四号八号	全	6763	湖地絹織芭蕉・大きな禿	芭蕉無地絹縫反物	麻/絹縫(絹縫/絵図様)	ク
第四号六号	芭蕉布	6765	桐板白地絹縫	麻白地絹縫律縫平織衣裳	桐板/花織・後染	ク
第四号八号	花織緑布	6766		麻浅地花織反物	芭蕉/花織	ク
第四号ト号	芭蕉布	6767		芭蕉青地芭蕉絹縫平織布	芭蕉・綿は芭蕉/絹縫	ク
第四号四号	桐板布	6768	芭蕉	絹芭蕉絹桐板地平織	絹芭蕉・綿地版/平織	ク
第四号四号	全	6769	芭蕉	桐板赤茶絹格子綿平織	桐板/格子綿	ク
第四号二号	全	6770	桐板格子綿	桐板白地格子綿(絹縫)平織反物	桐板/花絹・格子(絹縫/絵図様)	ク
第五号一號	木綿布	6772		綿手筋糸白地平織	木綿(手筋糸)/平織	ク
第五号口号	白糸布	6773	灰色絹糸綿木綿・ヤシラミ織	綿生絹地ヤシラミ織反物	木綿・生糸/平織	ク
第五号八号	全	6774	絹木綿・青ムディ(箱白と木綿綴)	綿絹地白糸平織	木綿・綿と糸の空糸/平織	ク
第五号二号	花織	6775	白地花織・絹縫	絹絹地木綿手筋糸薄茶花織布	絹絹地木綿手筋糸(絹縫)/花織	ク
第五号八号	木綿布	6778	絹地綾	木綿綾地中平織反物	木綿・絹縫に絹縫(手筋糸)・藍染	ク
第六号	芭蕉布	6789		芭蕉格子綿布	芭蕉・格子綿	ク
ク	芭蕉布	6790	本鳥	芭蕉無地花織反物	絹芭蕉/平織	ク
ク	芭蕉布	6791	絹絹・苧麻	芭蕉絹縫平織反物	芭蕉/絹縫	ク
ク	芭蕉布	6792	芭蕉・裏木綿	芭蕉絹縫平織反物	芭蕉・白糸は木綿/絹縫に絹縫	ク
ク	芭蕉布	6793	絹芭蕉	芭蕉絹縫平織反物	芭蕉/絹縫	ク
ク	芭蕉布	6794	芭蕉	芭蕉地絹縫平織	芭蕉・青と白は木綿/絹縫	ク
ク	芭蕉布	6797	絹絹・苧麻	絹縫絹芭蕉地絹縫絹縫反物	絹縫絹芭蕉/絹縫	ク
ク	芭蕉布	6799	芭蕉	芭蕉無地平織反物	絹芭蕉/平織	ク
ク	芭蕉布	6800	絹絹綿浜色白糸	芭蕉絹地絹縫平織布	芭蕉・白糸は木綿/絹縫に絹縫	ク
第七号二号	桐地ガスリ布	6783	木綿	木綿絹地絹縫平織反物	木綿/藍染・絹縫	ク
第七号二号	鼠布	6786	ゴージャー、絹	木綿金色地絹縫平織反物	木綿/絹(絹縫/絵図様)	ク
第七号二号	白地カスリ布	6787		綿白地絹縫平織反物	木綿/絹(絹縫/絵図様)	ク
第三	赤地五色浮縫冠	6823		綿子赤地五色浮縫冠	綿/絹浮縫	等級ヲ示標準男子ノ部
ク	紫地五色浮縫冠	6824		綿子紫地五色浮縫冠	綿/絹浮縫	ク
ク	黄冠	6826		綿黄色地絹糸冠	綿/絹糸	ク
ク	赤八巻	6828		綿朱地絹手平織冠	綿/平織	ク
ク	全	6829		綿朱地薄手平織冠	綿/平織	ク
ク	手拭	6858	花葉手巾・八重山の麻、絞りではない	李麻紅花地絹縫平綾ティーサージ	苧麻/板綿/花染ティーサージ	臨時着用ノ芸術
第四	カシレー	6862		綿白色組紐カシレー	綿/組物	人体ヲ清潔ニス芸術
ク	頭巾	6863	ニーセー以下頭巾	金糸入り綿子紋綿帽子	綿/綿子	ク
ク	紺巾	6864		綿絹こげ茶地平織百姓用の頭巾(マンサージ)	綿絹/平織	ク
ク	女巾頭	6865		木綿絹地平織布	綿/藍染・平織	ク
第六	風呂敷	6954		苧麻絹地菖蒲筒風呂敷	苧麻/荷物	家具類
ク	蚊帳	6956		苧麻絹地平織	苧麻/平織	ク

※番号は、ベルリン民族学博物館の所蔵番号である



密林酌（左）、白酌（右）（東京国立博物館蔵）



桑糸（東京国立博物館蔵）



桑布（東京国立博物館蔵）

物品目録及
精算書

第一号

食物ノ部

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	金八厘
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全八厘
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢貳厘
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	壹合	全壹錢

金一千四百九拾円貳拾七錢五厘	獨乙ノ部
一金千三百拾五円八拾壹錢	内訳
金貳拾円拾九錢五厘	物品購求費
金四拾九円六拾錢	諸雇費
金貳拾八円〇五錢	荷造費
金七拾四円八拾錢	運送費
金壹円八拾貳錢	全
但シ東京本石町運送問屋ヨリ 上野博物局迄	

一白大豆	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
一唐豆	全	白子豆	一本大豆	一下大豆	一菜種子	一芥子	一辛子	一唐芋	一唐芋	一唐芋	一唐芋	一唐芋	一唐芋	一唐芋
一海馬	全	海馬	伊良部鰻	乾鮒	干冰魚	薇葛	蘇鉄葛	唐芋粕	田芋	里芋	唐芋葛	カヤ芋	唐芋葛	唐芋葛
一鰯	全	鰯	鹽豚	木カラギ	椎茸	モーピ	一角侯	白菜	紫苔	瀬洲苔	青苔	マカイ醤	シユク醤物	黃醬物
一豚油	全	豚油	塩豚	塩	全	半斤	四拾目	武拾目	武拾目	五合	全	壹升	全	全
一海	壹升	斤四拾目	金五拾錢	全九錢	全拾七錢	全三拾武錢	全五錢	全三拾錢	全	全	全	五合	全	壹升
一														
一縮緬海鼠	全	壹錢	全壹錢	全壹錢六厘	全壹錢	全壹錢	全壹錢	金四厘	金四厘	全壹錢	全壹錢	全壹錢	全壹錢	全壹錢
一干鰯	壹升	六錢	六錢	六厘	六厘	六厘	六厘	八厘	八厘	壹升	壹升	壹升	壹升	壹升
一漬屋久具	全	紅貝	紅貝	アザ貝	アザ貝	アザ貝	アザ貝	サタヘ	サタヘ	入壺共	入壺共	入壺共	入壺共	入壺共
一全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
一全	武枚	六六	六六	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢	拾八錢
一金	壹升	六錢	六錢	六厘	六厘	六厘	六厘	壹升	壹升	壹升	壹升	壹升	壹升	壹升
一壹	全	五拾三錢	五拾六錢	五拾六錢	五拾八錢	五拾八錢	五拾八錢	三拾貳錢	三拾貳錢	三拾貳錢	三拾貳錢	三拾貳錢	三拾貳錢	三拾貳錢
一														
一														
一														

調味物ノ部

一 麥銘 入壺共	一 砂糖 拾六斤
一 泡盛酒	一 杵酒

飲物ノ部

一 芋燒酎	一 伊江酒	一 醉	一 醬油
三舛	全	全	壹舛

一 壱舛	金壹円五拾四錢
全	全壹円貳拾錢
全	全四拾貳錢
全	全六拾錢
全	全三錢
全	全貳拾錢

一 酒甌

一 カン甌
一 摺子木
一 ワンブー

一 桶甌

一 摺鉢
一 摺子木
一 ワンブー

一 壱個

全 壴 全 全 全 全 全 全

全壹円八拾四錢
全三拾錢

全七拾錢
全壹錢四厘
全貳錢五厘
全貳錢

餐用器具ノ部

一 真塗飯椀	一 全汁椀	一 全小平	一 全大平	一 沈金吸物椀	一 筷寒	一 菜皿	一 小皿	一 丼大小	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋	一 鍋
一 壴具	一 全	一 全	一 全	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具	一 壴具
一 金貳拾錢	一 金貳拾錢	一 金貳拾錢	一 金貳拾錢	一 金三拾五錢四厘	一 全拾八錢	一 全拾錢													
一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢	一 全貳錢				

全貳円六拾四錢	全九拾三錢	全貳錢																	
---------	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

一 猫足膳全吸物膳	一 蓋マカイ	一 壱枚	全六拾九錢
一 本膳	一 大形葫蘆	一 全	全五拾壹錢
一 八寸膳	一 水瓶 錫	一 全	全六拾錢
一 看鉢	一 茶コボシ 全	一 全	全八拾錢
一 茶碗	一 杯洗 全	一 全	全八拾錢
一 茶家	一 茶壺 全 家共	一 壱對	全壹圓五拾錢
一 酎家	一 茶匙 全 上戸共	一 壱	全壹圓五拾四錢
一 居瓶	一 藤盆 貳個	一 壱枚	全三圓九拾五錢
一 黒木箸	一 杯急須	一 壱個	全壹圓五拾八錢
一 湯次	一 東道益	一 壱枚	全壹圓六拾錢
一 初立	一 薄茶々碗	一 壱個	全壹圓七拾錢
一 四方盆	一 吞口	一 壱枚	全拾六錢
一 貝摺菓子皿	一 錫急須	一 壱個	全拾五錢
一 方盆	一 角寶藏	一 壱枚	全拾五錢
一 錫鶴瓶	一 茶庫	一 壴	全拾五錢
一 盃	一 一人弁當箱	一 壴	全拾五錢
一 アン瓶	一 朱塗全	一 壴	全九錢五厘
一 桶子皿		一 壴	全九錢四錢
一 椰子		一 壴	全九拾錢
一 茶盆		一 壴	全九拾錢
一 茶請盆		一 壴	全九拾錢
一 瓦蓋		一 壴	全九拾錢
一 瓦組		一 壴	全九拾錢

一木小皿
一立盃 蓋共

全九錢
全壹円弐拾錢

口号 萌地京晒色衣
八号 花藏織色衣
二号 縮緬桐衣袴
末号 白晒桐衣袴

全五円
全五円五拾錢
全九円弐拾錢
全三円四拾錢

第二

男女及ヒ等級ヲ示ス處ノ衣服類

王子按司男ノ部

第一号

内

イ号

綠色朝衣

口号

綸子袴色衣

八号

花縮緬袴

二号

綸子桐衣袴

亦号

白紗桐衣袴

八号

金入錦大帶

ト号

金入緞子細帶

第一号

内

羅色衣

金九円

第三号

内

イ号

紗綾袴色衣

口号

八丈縞袴

八号

紗綾袴桐衣袴

二号

圓金大帶

亦号

錦大帶

第四号

内

イ号

白糸ヤスラミ袴

口号

白糸羅飛織袴

八号

白糸ムデ綾袴

二号

木綿桐衣袴

木綿廣袖下着

亦号

緞子馬掛

全九円

全九円

全九円
全八円四拾錢

全七円

全九円
全八円四拾錢

全九円

全五円
全五円五拾錢
全九円弐拾錢
全三円四拾錢

第五号

内

イ号

紺地細上布帷子

口号

晒廣袖下着

金九円

全三円六拾錢

八号 花縮緬桐衣

二号

木綿形付單小袖

亦号

緞子馬掛

全六円
全四円

全拾壹円

第六号

内

イ号

綸子袴

口号

花縮緬袴

八号

紗綾形付袴

二号

綸子袴桐衣

木号

白紗綾桐衣

八号

木綿縮裙

ト号

木綿袴

金拾九円
金拾六円
金拾八円

金拾六円

金拾八円

金三円六拾錢

金壹円六拾錢

全壹円貳拾錢

第八号 内

イ号

赤等帷子

口号

羅形付桐衣

八号

板占桐衣

二号

細上布裙

亦号

細上布桐衣袴

金八円

全四円五拾錢

全三円六拾錢

全式円

全三円貳拾五錢

金六円五錢

全六円

第九号 内

イ号

形付帷子

口号

白糸縞芭蕉小袖

親方男ノ部

第七号

内

イ号

手縞袴

口号

木綿形付袴小袖

金八円

全五円

第十号 内

イ号 天青色朝衣

口号 巴子色衣

八号 山東紬色衣

二号 紬色衣

木号 ハスモタラ大帶

八号 錦大帶

ト号 博多織細帶

第十一号 内

イ号 萌地京晒色衣

口号 白糸羅織帷子

八号 白細上布桐衣袴

二号 白細上布廣袖下着

金四円四拾錢

全六円五拾錢

全三円七拾錢

全式円四拾錢

金七円
全八円五拾錢
全九円

全四円
全四円

全八円
全九円

親雲上男ノ部

第十三号 内

イ号 白糸絹給色衣

口号 白糸縞給

八号 紺地單

二号 総錦大帶

木号 緞子大帶

金七円
全四円六拾錢

全五円五拾錢
全三円

第十四号 内

イ号 白糸花織色衣

口号 羅織帷子

金七円

全四円六拾錢

イ号 白糸花織給

同女ノ部

第十五号 内

イ号 白糸花織給

口号 木綿形付給

金五円

全五円貳拾錢

第十二号 内

イ号 カスリ紬給

口号 手縞給

金七円
全八円

同女ノ部

八号 縷子馬掛

全七円

第十六号

内

イ号 紺地帷子
口号 芭蕉紺地小袖

金五円

全三円

里之子筑登之男ノ部

第十七号

内

イ号 天青色朝衣
口号 木綿色衣
八号 木綿紺地袴
二号 桐板羅織帷子
末号 芭蕉紺地帷子
八号 小倉織細帶

金五円

全三円

金五円
全五円
金三円
金三円
金三円

金五円
全五円
金三円
金三円
金三円

第十八号

内

イ号 水色朝衣
口号 木綿祫色衣
八号 木綿馬掛
二号 木綿紺地袴
末号 色衣帷子
八号 紺地帷子
ト号 芭蕉帷子
チ号 阿南齋桐衣袴
リ号 紗綾大帶
又号 木綿大帶
ル号 木綿細帶

金武円拾錢
全壹円九拾錢
全武円八拾錢
全三円四拾錢
全壹円七拾錢
全壹円五拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全六拾錢
全四拾四錢

金壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢
全壹円四拾錢

第十九号

内

同女ノ部

イ号 手縞袴
口号 木綿形付袴
八号 木綿萌地桐衣

金三円六拾錢
全三円六拾錢
全壹円拾錢

平民男ノ部

二号

木綿縞小袖

全式円五拾錢

全壹円五拾錢

八号 全

全七円五拾錢

末号

赤苧帷子

全式円五拾錢

ヘ号

形付帷子

全式円五拾錢

ト号

紺地芭蕉小袖

全式円五拾錢

チ号

萌地桐衣

全式円五拾錢

リ号

芭蕉小袖

全式円五拾錢

ヌ号

芭蕉袴

全式円五拾錢

第一十号

一 衣服着用雛形

全六拾錢

全九拾錢

全壹円六拾錢

全壹円六拾錢

全九拾錢

全壹円五拾錢

イ号

内

内

第二号 全

イ号

内

内

第三号 全

イ号

内

内

第四号 全

イ号

内

内

第五号 全

イ号

内

内

第六号 全

イ号

内

内

第七号 全

イ号

内

内

第八号 全

イ号

内

内

第九号 全

第一号 内

本國固有織物ノ部

第十号 内

第一号 内

衣服着用雛形

第一号 内

内

第一号 内

第四号

内	イ号	口号	ハ号	二号	チ号	ト号	ハ号	二号	チ号	ト号	ハ号	二号	チ号	ト号
内	イ号	口号	ハ号	二号	チ号	ト号	ハ号	二号	チ号	ト号	ハ号	二号	チ号	ト号

練蕉布	全	羅織布	全	白糸羅トン織布	桐板布	蘆薈布	花藏織布	木綿布	金六円八拾錢	全六円八拾錢	全五円	全六円五拾錢	全五円式拾錢	全四円	全三円五拾錢	全四円	全四円式拾錢	全六円	金六円
練蕉布	全	羅織布	全	白糸羅トン織布	桐板布	蘆薈布	花藏織布	木綿布	金六円八拾錢	全六円八拾錢	全五円	全六円五拾錢	全五円式拾錢	全四円	全三円五拾錢	全四円	全四円式拾錢	全六円	金六円

金六円	金六円	金八円	金八円	金八円	金九円	全四円	全四円	全四円	全四円	全四円	全五円	全五円	全五円	全五円	全五円	全五円	全六円	金六円
金六円	金六円	金四円	金四円	金四円	金六円	全四円	全四円	全四円	全四円	全四円	全五円	全五円	全五円	全五円	全五円	全五円	全六円	金六円

ト号 木綿布
チ号 全

全四円五拾錢
全三円六拾錢

第六号

各種芭蕉布 拾弐反

金拾九円九拾錢
平均壹反ニ付壹円五拾三錢余

第七号

内

紺地カスリ布	金六円拾錢																	
紺地カスリ布	金六円拾錢																	

白地カスリ布	全三円式拾錢																	
白地カスリ布	全三円式拾錢																	

第八号

芭蕉経

全六拾錢

第九号

全續經

全七拾錢

第十号

唐草経

全壹円六拾錢

第十一号

紬経

全貳円

第十二号

木綿経

全四拾錢

第十三号

蘆薈経

全壹円拾錢

第十四号

綿子

全壹円四拾錢

第十五号

染料具 拾二品

全貳拾四錢壹リ

第三

等級ヲ示標章男子ノ部

壹個

赤地五色浮織冠 家共

全

紫地五色浮織冠

全

紫冠

家共

全

一全

全

赤八卷

全

青八卷

全

金簪

武本

全拾四円

全三円六拾八錢

全壹円拾三錢四厘
全拾六錢

全女子ノ部

第四

一 金簪	一 金簪	一 金簪
一 銀簪	一 銀簪	一 銀簪
一 鐮鉗簪	一 鐮鉗簪	一 鐮鉗簪
一 鱗甲簪	一 鱗甲簪	一 鱗甲簪
一 木簪	一 木簪	一 木簪
臨時着用ノ裝飾		
一 金地印籠	一 金地印籠	一 金地印籠
一 象牙印籠	一 象牙印籠	一 象牙印籠
一 巾着	一 巾着	一 巾着
一 花巾着	一 花巾着	一 花巾着
一 足袋 上串共	一 足袋 上串共	一 足袋 上串共
一 扇子	一 扇子	一 扇子
一 紗多糞粉入 キセル共	一 紗多糞粉入 キセル共	一 紗多糞粉入 キセル共
一 女寶藏	一 女寶藏	一 女寶藏
一 手拭	一 手拭	一 手拭
全 壱本	全 壱本	全 壱本
全 武足	全 武足	全 武足
全 金	全 金	全 金
全 全	全 全	全 全
全 全	全 全	全 全
金四円	金四円	金四円
全六円	全六円	全六円
全五拾錢	全五拾錢	全五拾錢
全七拾四錢	全七拾四錢	全七拾四錢
全六拾五錢	全六拾五錢	全六拾五錢
全四拾武錢	全四拾武錢	全四拾武錢
全五拾錢	全五拾錢	全五拾錢
全六 柄共 附屬品	全六 柄共 附屬品	全六 柄共 附屬品
一 竹櫛 大中小	一 竹櫛 大中小	一 竹櫛 大中小
一 木櫛	一 木櫛	一 木櫛
一 玉鏡	一 玉鏡	一 玉鏡
壹個 武個	全	全
全 武個	全 武個	全 武個
全六錢	全六錢	全六錢
全六錢	全六錢	全六錢
全三円六拾錢	全三円六拾錢	全三円六拾錢
全拾九錢	全拾九錢	全拾九錢
全拾四錢	全拾四錢	全拾四錢
金式拾武錢	金式拾武錢	金式拾武錢
全五錢五厘	全五錢五厘	全五錢五厘
半斤	半斤	半斤
全式拾武錢	全式拾武錢	全式拾武錢
全拾六錢	全拾六錢	全拾六錢
金式拾武錢	金式拾武錢	金式拾武錢
全七拾武錢	全七拾武錢	全七拾武錢
壹房	壹房	壹房
壹個	壹個	壹個
金壹円	金壹円	金壹円
全壹円	全壹円	全壹円
全四拾六錢	全四拾六錢	全四拾六錢
全五錢	全五錢	全五錢
全四錢四厘	全四錢四厘	全四錢四厘
全式錢	全式錢	全式錢
全式油	一 梅ノ油	一 梅ノ油
美艶香梅ノ露	一 髪附 美艶香梅ノ露	一 髪附 美艶香梅ノ露
人体ヲ清潔ニナス粧飾物	人体ヲ清潔ニナス粧飾物	人体ヲ清潔ニナス粧飾物

一 荊
一 アハシ

一 錄

全拾六錢

全拾錢

全拾式錢

一針 壱捕

金式拾錢

人体ノ局部ヲ變形シタル見本

一 女櫛箱
一 附属品
一 竹櫛
一 角櫛
一 垢取
一 簪差
一 鏡立
一 油次

全壹円七拾三錢

一繪図

全 全 全 全 全 全 全 全

全式拾五錢
全七拾錢
全六錢

住家模造雛形

第五

全四錢
全八拾四錢
全拾三錢

一寫真

拾枚

全五圓

全三個
壹個
全全全全全全全全

皮膚爪染料物

一 墨
一 凤仙花

壹丁 壱勿

全壹錢
全四拾錢

家具類

一 檯筭
一 戶棚 見本
一 双紙カイ

全全全全全壹個

全拾円四拾錢
全壹円九拾錢
全九円
全五拾錢
全壹円五拾錢

第六

全五圓

拾枚

一寫真

一 櫃
一 衣架

膚剖器機械

全五円五拾錢
全式拾四錢
全式拾四錢
全式錢六厘
全拾錢
全四錢六厘
全壹錢六厘
全三錢四厘
全七錢
全八錢
全三拾貳錢
全拾九錢
全六拾八錢
全三拾錢
全式拾八錢
全七拾八錢
全式拾八錢
全壹圓六拾錢九厘
全壹圓七拾六錢
全三拾五錢
全壹圓九拾錢

第八

農具

一男多葉粉盆	全式拾四錢
一女全	全八拾五錢
一高麗幾世留	金五厘
一針差	全拾錢
一風呂敷	全八拾錢

一釣瓶	一小刀
一蚊帳	一手桶
一白皮緒下駄	見本
一黑皮緒全	壹足
一バラ緒全	全
一足駄	全

一 壹個	全 全						
全式拾五錢	全三拾錢	全三拾錢	全三拾錢	全三拾錢	全三拾錢	全六拾六錢	全六拾六錢
全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全拾五錢	全拾五錢	全拾五錢
全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢	全式拾五錢
全三拾錢	壹本	壹本	壹本	壹本	壹足	壹足	壹足
全三拾錢	全	全	全	全	全	全	全

第七 獸獵器械

一槍
一山刀

壹本
壹個

全三拾錢
全式拾六錢

全式葉粉盆

高麗幾世留

針差

風呂敷

釣瓶

蚊帳

白皮緒下駄

黑皮緒全

バラ緒全

足駄

壹足

駄

足駄

駄

駄

駄

駄

駄

壹個

金五厘
金五厘
金五厘
金五厘
金五厘
金五厘
金五厘
金五厘

全式拾四錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢

全式拾四錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢
全式拾五錢

全拾五錢
全拾五錢
全拾五錢
全拾五錢
全拾五錢
全拾五錢
全拾五錢
全拾五錢

陶器

本國固有ノ技術ニ係ル物品

一木地挽機械	見本	壱通	金壱円七拾錢
一藍葛		貳拾貳斤	全壹円九拾八錢
一草履		五足	
一芭蕉紙		壹束	
一藁唐紙		壹帖	
一仙香		拾結	全三拾四錢
一久葉圍羽		三枚	全貳拾貳錢
一鳳櫃見本		壹個	
一カクラサン見本			全七錢貳厘
一今燒屋貫			全貳拾錢
一今サーサー			全七錢六厘
一荒マカイ			全七厘
一布織機械	見本		全壹錢
一木綿バタ	全	貳枚	全五拾貳錢
一糸繩機械	全	壹個	全拾五錢
		壹揃	全三拾三錢

圖面

一陶器製料	内土三品	拾品
一全製造機械	見本	壹個
		全八錢貳厘

全八錢貳厘
全貳拾錢

第一号

一大字見本及ヒ元質ノ見本略ス
漢字ヲ用ヒ通常大和文ヲ用フ

第二号

一本國字母 見本壹通

第三号

一詩 見本壹枚

第四号

一歌 見本壹枚

第五号

一諺語 壱通

第六号

一捺印 袋共壹個

全四拾貳錢

目錄外ノ部

第七号

一觀音像 壱個 (彫刻物 二個)

金五円

第八号

一掛章

全貳円

第九号

一繪畫 山水

金五円

第十号

一彩色 花鳥

全貳円

第十一号

一局棋

全貳円七拾五錢

第十一

一尺度

壹個

金五錢

一舛

三個

全八拾六錢三厘

一衡

壹個

金式拾四錢

一算盤

全

全三拾錢

第十二

樂器類

一坐樂 繪圖面

全

金五錢

一路次樂 全

壹個

全八拾六錢三厘

一琴並二笛 全

全

金式拾四錢

一三昧線

壹個

全三拾錢

一小弓

全

全三円五拾錢

一半笙 房共

壹丁

全貳円貳拾五錢

一大鼓 薦撥共

全

全貳円貳拾五錢

金五円

第十三

玩物

一 雜品

拾六個

金三円三拾九錢八厘

第十四

神官僧侶及ヒノロクモイ衣服着用雛形並神佛樂器

一 繪図面類 四拾枚 金三拾円〇五錢二厘
小計金千貳百六拾七円六拾貳錢（墨で消し線）

小計金四拾八円拾九錢 目錄他廿八点之代價也

此帳各部へ併込タレバ此ノ小計ハ無用

合計金千三百拾五圓八拾壹錢

神官ノ部

一 衣服着用雛形 図面
一 樂器 全

雜費

僧侶ノ部

一 金八拾錢

八卷ノ緒

一 衣服着用雛形 図面

衣類仕立及布洗濯并簪類製造研賃

一 樂器

居瓶并瓢ノ口

一 ノロクモイ 全

壺代及ヒ棕梠并藁巻賃
木綿真田代

一 全式拾錢 木札

一 全四拾錢 簪入箱

一 全拾錢 香入箱

一 全式拾錢 砂糖入樽

一 全式拾錢 画仙紙 一枚

一 全式円八拾五錢七厘 消耗費

小計金貳拾円〇拾九錢五厘

一 金式拾八円〇五錢 荷造費

内訣

金拾九円七拾三錢

金八円三拾武錢

荷箱五拾壹個
荷造式拾六個

一 金四拾九円六拾錢

諸雇給

内訣

金七円五拾錢

金三円七拾五錢

金三拾七円四拾錢

金九拾五錢

鑑定人給料
筆工 全
全弁當料

運送費

金七拾四円八拾錢

一 金壹円八拾式錢

荷物式拾六個
東京本石町ヨリ上野迄

甲

博物局 第七五号

九月廿一日上達

十月七日決判

獨逸公使□

九月廿五日

達 濟

明治十七年九月十九日

五等属野邨重次

庶務課

卿 史傳課

輔

書記官

博物局長

獨逸公使依頼ニ係ル琉球島物品採集整頓

二付同公使渡方之義御付伺

在本邦獨逸公使依頼ニ係ル琉球島人種學術上

關係ノ物品採集整頓ニ付外務省ヲ經テ同公使ヘ被相渡可然ニ付其旨該者へ御照会相成候處右物品採集之義者貴前同國代理公使フラン、ツエトウ井ツツより直ニ本省御へ依頼有之候義ニテ其事タル固より重大ノ件ニテ参考に付此件ニ限り直ニ農商務卿より該公使書□通相達度旨外務省御奏御用掛花房真三郎來談有之候尤獨乙公使館へ者右之手続ニ運フベク様同人より予メ談シ來候内ニ□問則來意ニヨリ左ニ獨逸公使ヘ御通書案取調此如相伺候也

獨逸公使御書翰案

一翰啓上致□陳候者琉球鳴之品物人種學上關係ノモノ貴國博物局中ニ御備相成度旨ヲ以テ千八百八十二年十一月五日付代理公使フラン、ツエトウ井ツツ氏より採集方御依頼ニ付其筋相命シ承相處漸ク此程採集相整別冊目録之通上野博物館へ到着同館樓上ノ一室ニ排列致シ置候間早々請取之者御差越相來度且右ニ係ル費用ハ別冊目録中ヘ記入候通合金千四百九拾圓貳拾七錢五厘ニ候間追々（消し）

御償還有之度候 敬具

年 月 日 農商務卿 西郷従道



獨逸國公使

グラーフ、フォン、デーンホフ閣下

獨逸

琉球島人種學上ノ物品採集之義ニ付独逸國
公使ヨリ挨拶之書翰
右供覽觀

甲

博物局第七五号

十月十四日

獨逸公使ヨリノ挨拶狀

明治十七年十月八日

(庶務課) 印五等屬野郵重次

史傳課 庶務課

卿

輔

書記官

博物局長

OK 341.

Sokot, am 8. October 1884.

Dear Excellencies, your honored Officers now
at. von. Hess ob. est, requested the Commanding
of our friendly interests Gegenpartie von dem
Lie. Kne. Japan für die Königlichen Dienste
in Berlin, so far as to establish the former
in ganz erhaben bewerbe, daß es
die erforderlichen Spenden gesammelt, und die
General. Direktion der Königlichen Dienste
und entsprechende Ernährung sind vor,
Japan sind eine Erfahrung der aufzuhören
Kosten zu erfordern, verfügt, nicht, dieser
Um.
Das Königliche Japanischen Ministerium
für Handel und Landwirtschaft des d. d.
Yours truly
Friedrich Schröder

Excellencies

(書簡表書)

農商務卿伯爵西郷従道

獨逸國特命全權公使

閣下 グラーフ、フォン、デンホップ

柏林博物館用

之為御蒐集被□

琉球嶋人種學上

物品之義ニ付先月

廿五日附第廿四号

書翰落手致被

見候

我博物館ノ為

如此貴重之物品

御蒐集被下候段

御手數（消し）深

謝候右之次第者

早速博物館長ヘモ

申通且費用等

辨償方之儀も

申通置候間左

様御承知相成度

此暖伺貴意候以上

敬具

*Erstlinge der neuzeitlichen gesetzgebenden
Kunst und für die vorzügliche Versorgung
der ethnologischen Abteilung des Kaiserlichen
Museum sind ausgesondert.
Ich sende Sie hiermit an, eine Gitterbox,
entweder die Versorgung unserer Ausstellung
oder Begeisterung zu verschaffen.*

F. K. M. A.

乙

博物局第五八号

局ヨリ御送付ニ及候間御了承有之度此段御回合
ニ及候也

明治十七年十一月

野村博物局長

十七年十二月八日
博物局達済

西村沖縄縣令殿

追而今般更正領收証ハ落掌致隨而御申

追送ノ物品本館へ

□求

明治十七年十一月十一日 御用掛 壇 忠雄

— 146 —
(55)

乙
博物局第五八号

博物局長殿

史傳課
庶務課

購求代償送付ノ儀ニ付沖縄縣江御回答案

御縣下人種學術上關係之物品採集洩之儀ヲ以て

桑布壹反全絆五拾目全皮五拾匁牛干五斤牛筋四

拾目杉原紙壹束百田紙壹束白耐壹斗密林耐壹

斗白耐壹舛御送付相成十月廿七日到着正ニ領收

候然ルニ右ノ内独逸國ノ分該公使ニ照會ニ及候最早

先般之物品ハ本國江送付済ニ相成旁都合モ有之趣

二付右物品ハ當局分ト共ニ購求致代償ハ本省会計

明治十七年十月四日

西村沖縄縣令

松博物局長 殿

領收證
㊭金參拾錢也 印

追テ先般御差廻相求候御局陳列

二係ル物品領收証別冊之通り更正

致候ニ付本文繰替費ト共ニ至急

御返却相求度此段添テ申進

候也

記

檢

一金八拾錢六厘也

物品購求費

内訳

㊭金七拾五錢六厘

白酌壹升代

㊭金五錢

右入壺壹個代

右正ニ領收候也

東村十四番地第二号

明治十七年十月三日 宮城 仁王

印

印

右正ニ領收候也

西村五番地

明治十七年十月三日

京都名産社支店

沖縄縣會計課

御中

証

一 ㊭金拾円八拾毫錢

物品購求費

内訳

㊭金三円貳拾五錢

桑布壹反代

㊭金三拾三錢

全經五拾目代

沖縄縣

會計課

御中

品目 東京博物局迄運賃 繩卷カメ那霸運賃	内訳		
	価格 金三拾錢	数量 壹個	小計金員 金三拾錢

但シ拾匁二六錢六厘

檢金拾七錢

牛皮五拾匁

金四拾錢

領收證

但シ拾匁二三錢四厘

檢金貳円三拾四錢

牛干五斤代

内訣

檢金四拾六錢八厘

但シ壹斤三四拾六錢八厘

牛筋四拾日代

但拾斤二付拾壹錢七厘?

檢金壹円〇五錢

杉原紙壹束代

檢金貳拾九錢四厘

百田紙壹束

檢金七円五拾五錢六厘

白耐壹斗代

檢金貳拾壹錢

全入壺壹個代

檢金貳円九拾三錢二厘

蜜林酒壹斗代

檢金貳拾壹錢

全入壺壹個代

右正ニ領收候也

東村十四番地第一号

明治十七年十月十一日 宮城 仁王印

印金四拾錢

内訣

領收證

明治十七年十月三日

沖繩縣開運會社 印

會計課御中

八重山島より	品目	価格	数量	小計金員
沖繩縣	壹印	金貳拾錢	貳個印	金四拾錢

八重山島ヨリ	品目	数量	価額	小計金員
沖繩縣	白木箱	貳個	貳拾錢	金四拾錢

沖繩縣

會計課御中

右正ニ領收仕候也

右正ニ領收候也

沖縄縣開運會社 印

西村五番地

明治十七年十月三日 京都名產社支店 印

十七年十月三日

沖縄縣

會計課御中

沖縄縣

會計課

御中

領收證

㊀一 金參拾円九拾錢也 ㊀

内訳

目録

桑布 宮古島産

湿氣ヲ扱フモノニテ中症其他濕病者之レヲ着服ニ

用フ

品目	価格	数量	小計金員
御用品入曲木桶及作 同那霸より 東京博物局迄運賃 繩巻カメ那霸より 東京博物局迄運賃	金貳拾五錢	貳個 ㊀	金五拾錢
金壹円五錢	金六拾五錢	貳個 ㊀	金港円三拾錢
貳個 ㊀			
金貳円拾錢			

一一一
 全經
 全皮
 全上
 八重山島
 牛干
 鮑ニテ削リ醤油ヲ加ヘテ食ヒ又ハ煎テ料理ノ

味ヲ謂フ

牛筋

煮テ料理ニ用フ

杉原紙

全上

百田紙
白酌
蜜林酌
メ九品

全上 全上 全上 全上